

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第38集

い わ くら じょう い せ き
岩 倉 城 遺 跡

1992

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター



岩倉城遺跡周辺空中写真(1990年1月23日撮影)



岩倉城遺跡周辺空中写真(昭和21年米軍撮影)

序

名鉄犬山線岩倉駅の南東400mに岩倉古城址碑が建っております。市街地の中にあつてかつての面影を辿ることはできません。しかし、この城は今を去ること500年の昔、80年間にわたって清洲城にいた織田氏と尾張を分割統治していた有力な城でありまして、永禄2年（1559）織田信長に滅ぼされて以来、その姿は幻のままでありました。

このたび本丸跡を東西に通りぬけるように愛知県土木部によって県道萩原・多気線の建設が計画されるに至り、岩倉城関係の埋蔵文化財の調査が必要となりました。（財）愛知県埋蔵文化財センターでは、県教育委員会を通じ、県土木部より委託を受け、昭和62年度から平成2年度にかけて発掘調査を実施して参りました。

もとより県道建設の事前調査でありますので、広い城郭のごく一部を調査したに過ぎませんが、幅20mをこえる大規模な内堀を始め、外堀を発見したばかりか、五条川の東250mまでに3重の堀が巡ることを確認し、予想をはるかに上回る規模の城であることがわかりました。本書は、こうした成果をまとめたものであり、歴史研究の資料として活用されると共に、埋蔵文化財への理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、関係各機関および関係者からの御指導と御配慮を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成4年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
理事長 高木 鐘三

例 言

- 1 本書は、愛知県岩倉市下本町から大市場町にかけて所在する岩倉城遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は県道萩原・多気線建設に伴う事前調査で、県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた（財）愛知県埋蔵文化財センターが昭和62年度～平成2年度に実施した。調査面積は、総計10,470㎡。
- 3 調査担当者は下記の通りである。
昭和62年度…平田睦美（主事、現松蔭高校）、松原隆治（主事）
昭和63年度…平田睦美（主査）、松原隆治、服部信博（主事）
平成元年度…山仲廣司（課長補佐、現西春町立五条小学校）、服部信博、金子健一（嘱託員）
平成2年度…日比 宰（主査、現稲沢市立稲沢東小学校）、小塚俊夫（主事、現七宝町立七宝中学）、
服部信博
- 4 調査区の座標は、国土座標第Ⅶ座標系に準拠する。
- 5 調査にあたっては、次の各関係機関のご協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県一宮土木事務所、岩倉市教育委員会
- 6 本書の執筆分担は、以下の通りであり、文責については各文末に記した。なお編集は松原が担当した。
Ⅰ、Ⅱ－1・6・7、Ⅲ－5・6、Ⅴ…松原隆治（調査研究員）
Ⅱ－2～5、Ⅲ－1～4、Ⅴ …服部信博（調査研究員）
Ⅲ－3 SZ1301…赤塚次郎（調査研究員）
Ⅳ－1・4…森 勇一（課長補佐）
Ⅳ－2 …永草康次（調査研究補助員）
Ⅳ－3 …パリノ・サーヴェイ株式会社
- 7 本書の執筆にあたっては以下の各氏のご指導・ご協力を得た。
赤羽一郎・浅野清春・足立順司・井上喜久男・岩中淳之・岩野見司・内堀信雄・江崎 武
小野正敏・加納俊介・柴垣勇夫・滝 喜義・千田嘉博・土本典生・土山公仁・檜崎彰一
服部英雄・日野幸治・藤澤良祐
- 8 調査記録及び遺物は、（財）愛知県埋蔵文化財センターが保管する。

目 次

I 調査の概要

1 遺跡の立地と沿革	1
2 調査に至る経緯	5
3 調査の工程	5
4 調査成果の概要	6

II 遺構の概要

1 基本層序	8
2 I期の遺構	10
3 II期の遺構	14
4 III期の遺構	21
5 IV期の遺構	31
6 V期の遺構	34
7 VI期の遺構	37

III 遺物の概要

1 I期の遺物	46
2 II期の遺物	51
3 III期の遺物	76
4 IV期の遺物	84
5 V期の遺物	85
6 VI期の遺物	86

IV 自然科学的分析

1 珪藻分析による縄文時代晩期頃の古環境	116
2 岩倉城遺跡出土駿河系土器の胎土分析	118
3 岩倉城遺跡から出土した木製品の樹種	119
4 岩倉城遺跡より発見された地震痕について	127

V まとめ

付表

1 遺構表	132
2 遺物表	134

図版目次

図版 1	遺構図(1)	図版20	VI期の遺構(3)
図版 2	遺構図(2)	図版21	VI期の遺構(4)
図版 3	I期の遺構	図版22	VI期の遺構(5)
図版 4	II期の遺構、遺物出土状態(1)	図版23	VI期の遺物出土状態(1)
図版 5	II期の遺構、遺物出土状態(2)	図版24	VI期の遺物出土状態(2)
図版 6	II期の遺構、遺物出土状態(3)	図版25	VI期の遺物出土状態(3)
図版 7	II期の遺物出土状態	図版26	II期の遺物(1)
図版 8	III期の遺構、遺物出土状態(1)	図版27	II期の遺物(2)
図版 9	III期の遺構、遺物出土状態(2)	図版28	II期の遺物(3)
図版10	III期の遺構、遺物出土状態(3)	図版29	III期の遺物(1)
図版11	III期の遺構(4)	図版30	III期の遺物(2)
図版12	III期の遺構(5)	図版31	V期の遺物、VI期の遺物(1)
図版13	III期の遺構、遺物出土状態(6)	図版32	VI期の遺物(2)
図版14	IV期の遺構、遺物出土状態	図版33	VI期の遺物(3)
図版15	V期の遺構(1)	図版34	VI期の遺物(4)
図版16	V期の遺構(2)	図版35	VI期の遺物(5)
図版17	V期の遺構(3)	図版36	VI期の遺物(6)
図版18	VI期の遺構(1)	図版37	岩倉城跡関係図
図版19	VI期の遺構(2)		

挿図目次

第 1 図	遺跡の位置……………1	第13図	SB1209・1210実測図……………18
第 2 図	尾張の主要な城跡……………1	第14図	SX1201遺物出土位置図……………19
第 3 図	岩倉城遺跡と周辺の遺跡……………2	第15図	SZ1201実測図……………20
第 4 図	調査区位置図……………4	第16図	III期主要遺構配置図……………21
第 5 図	岩倉城遺跡断面模式図(1)……………8	第17図	SZ1301実測図……………22
第 6 図	岩倉城遺跡断面模式図(2)……………9	第18図	SZ1304実測図……………22
第 7 図	I期縄文晩期遺構配置図……………10	第19図	SZ13022、1303実測図……………23
第 8 図	SB1002実測図……………11	第20図	集石墓群層位模式図……………24
第 9 図	I期弥生中期の遺構配置図……………12	第21図	集石墓群主体部配置図……………25
第10図	II期主要遺構配置図(1)……………14	第22図	集石墓群の築造段階……………27
第11図	II期主要遺構配置図(2)……………15	第23図	集石墓群主体部実測図……………29
第12図	SB1201～1208実測図……………16	第24図	集石墓群遺構全体図……………30

第25図	Ⅳ期主要遺構配置図	31	第61図	SX1201出土遺物	61
第26図	SX1501実測図	32	第62図	SK1204出土遺物	63
第27図	SX1501位置図	32	第63図	SZ1201出土遺物	64
第28図	五条川西岸Ⅴ期遺構位置図	34	第64図	A地区包含層出土遺物	68
第29図	五条川東岸Ⅴ期遺構位置図	35	第65図	B地区包含層出土遺物(1)	69
第30図	SE04実測図	35	第66図	B地区包含層出土遺物(2)	70
第31図	五条川東岸Ⅴ期主要遺構位置図	36	第67図	B地区包含層出土遺物(3)	71
第32図	五条川西岸堀位置図	36	第68図	B地区包含層出土遺物(4)	72
第33図	五条川東岸堀位置図	37	第69図	B地区包含層出土遺物(5)	73
第34図	SD01断面図	39	第70図	B地区包含層出土遺物(6)	74
第35図	SD02断面図	39	第71図	B、C地区包含層出土遺物	75
第36図	断面図実測位置図(1)	39	第72図	SZ1301出土遺物(1)	76
第37図	SD03断面図	40	第73図	SZ1301出土遺物(2)	77
第38図	SD04断面図	40	第74図	SZ1301出土遺物(3)	78
第39図	土橋断面図	40	第75図	SX1308出土遺物	79
第40図	断面図実測位置図(2)	40	第76図	SZ1302出土遺物	80
第41図	SD06断面図	42	第77図	SZ1303・1304・包含層出土遺物	82
第42図	断面図実測位置図(3)	42	第78図	89Eb・F区包含層出土遺物	83
第43図	SD08断面図	43	第79図	Ⅳ期の遺物	84
第44図	SD07断面図	43	第80図	器種分類(Ⅵ期の遺物－1)	85
第45図	断面図実測位置図(4)	44	第81図	器種分類(Ⅵ期の遺物－2)	86
第46図	SD09断面図	45	第82図	器種分類(Ⅵ期の遺物－3)	87
第47図	SD10断面図	45	第83図	器種分類(Ⅵ期の遺物－4)	88
第48図	90A区、B区Ⅵ期遺構位置図	45	第84図	Ⅴ期の遺物(1)	91
第49図	Ⅰ期縄文晩期の遺物	47	第85図	Ⅴ期の遺物(2)	92
第50図	Ⅰ期弥生中期の遺物(1)	49	第86図	Ⅵ期の遺物(1)	93
第51図	Ⅰ期弥生中期の遺物(2)	50	第87図	Ⅵ期の遺物(2)	94
第52図	器種分類図(1)	51	第88図	Ⅵ期の遺物(3)	95
第53図	器種分類図(2)	52	第89図	Ⅵ期の遺物(4)	96
第54図	器種分類図(3)	53	第90図	Ⅵ期の遺物(5)	97
第55図	SB1201出土遺物	55	第91図	Ⅵ期の遺物(6)	98
第56図	SB1204出土遺物(1)	56	第92図	Ⅵ期の遺物(7)	99
第57図	SB1204出土遺物(2)	57	第93図	Ⅵ期の遺物(8)	100
第58図	SB1206出土遺物	58	第94図	Ⅵ期の遺物(9)	101
第59図	Ⅱ期出土遺物	59	第95図	Ⅵ期の遺物(10)	102
第60図	SD1201出土遺物	60	第96図	Ⅵ期の遺物(11)	103

第97図 VI期の遺物(12).....	104	第105図 木製品・石製品	115
第98図 呪術関係木製品.....	108	第106図 土壌サンプル採取位置図	116
第99図 木製品(1).....	109	第107図 岩倉城遺跡産珪藻顕微鏡写真	117
第100図 木製品(2)	110	第108図 主要造岩鉱物三角ダイヤグラム	118
第101図 木製品(3)	111	第109図 材の顕微鏡写真(1)	124
第102図 木製品(4)	112	第110図 材の顕微鏡写真(2)	125
第103図 木製品(5)	113	第111図 材の顕微鏡写真(3)	126
第104図 木製品(6)	114	第112図 SD08断面の断層スケッチ	129

表目次

第1表 調査の工程.....	6	第3表 木製品の樹種.....	123
第2表 珪藻出現数.....	116	第4表 材の顕微鏡写真のネガ説明.....	128

〈調査協力者〉

発掘調査

寺沢なつ江（発掘調査補助員）	浅野弘一	斉木 健
佐々美子 野口めぐみ 浅田佐智子	浅田たま	浅田照子
浅田文子 井上千代 岩崎美枝子	川松幸子	木村誠子
小林しげ子 小林俊子 佐藤トモ	長戸貞子	野田みき子
服部貞子 原田孝子 平野あつ子	福岡澄江	船橋諄子
星野初恵 真野幸子 真野秀子	真野美代子	宮田あさ
森 千代子 余呉留美子 大野和子	河野正一	佐藤ふき子
杉浦利子 田中温子 中山道子	堀尾美恵	三輪千秋
山内四女 横井正一 横井ハツエ	吉川みや子	安藤民子
伊賀 定 伊藤香代 大岩涼子	小川福代	加藤真弓
木村末子 酒向洋子 田岡百合江	富田尚弘	長谷川玲子
堀尾光代 武藤千代子 村瀬なつ子	山川美智子	山内きみえ
山内 尚 山内ゆき子 山口久光	国立智美	大矢 頭

整理作業

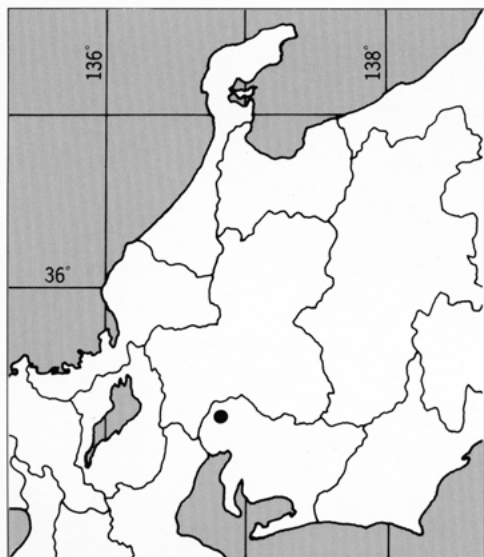
岡田智子（調査研究補助員）	加藤徳子	多田富代
玉作美智子 服部智子 山口妙子	加藤明美	鈴木登貴子
竹川裕見子 渡辺たかみ 山川和子	牛田長子	

I 調査の概要

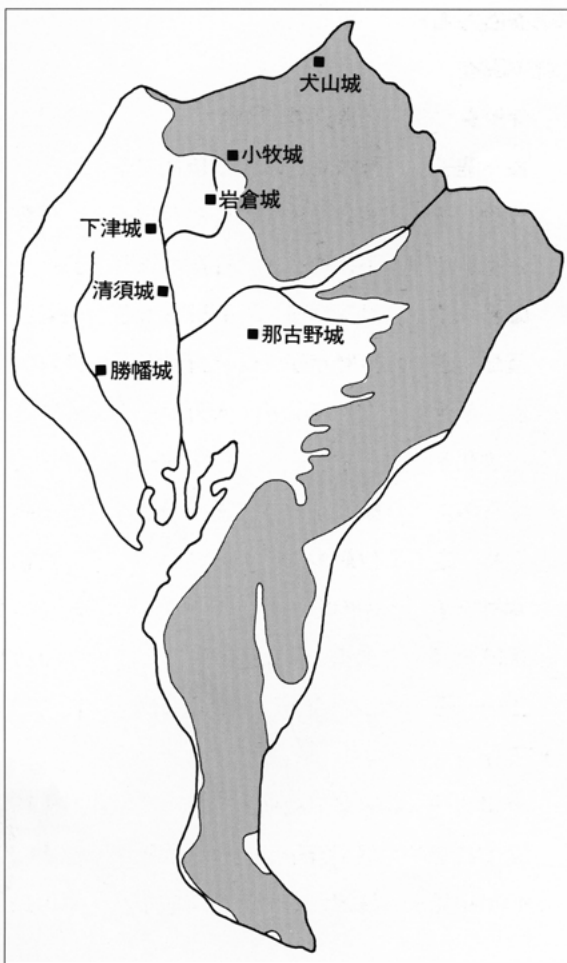
1 遺跡の立地と沿革

位 置 岩倉城跡（岩倉市指定史跡。記念物番号1105。東経136°52'50"、北緯35°16'20"）は、愛知県岩倉市下本町に所在し、南流する五条川の右岸に発達した標高8～10mの自然堤防上に立地する。現在、字城跡の本丸跡と伝承される地点に石碑が建てられている。城が立地した自然堤防にはノンベ遺跡、大地遺跡、薬師堂廃寺など縄文時代から中世にかけての多くの遺跡が立地している。五条川東岸の自然堤防上には、真光寺遺跡、曾野遺跡など弥生時代の遺跡が多い。

歴 史 ここでは文献資料によって岩倉城が存在した時代と岩倉城の姿について触れておきたい。室町幕府8代将軍足利義政が政治を顧みなかったことに端を発した応仁の乱によって、室町幕府の権威は大きく失墜し、戦国時代に突入した。越前国守護であった斯波氏が15世紀始め尾張の国の守護になったのにしたがって、家臣であった織田氏は尾張の下津城（稲

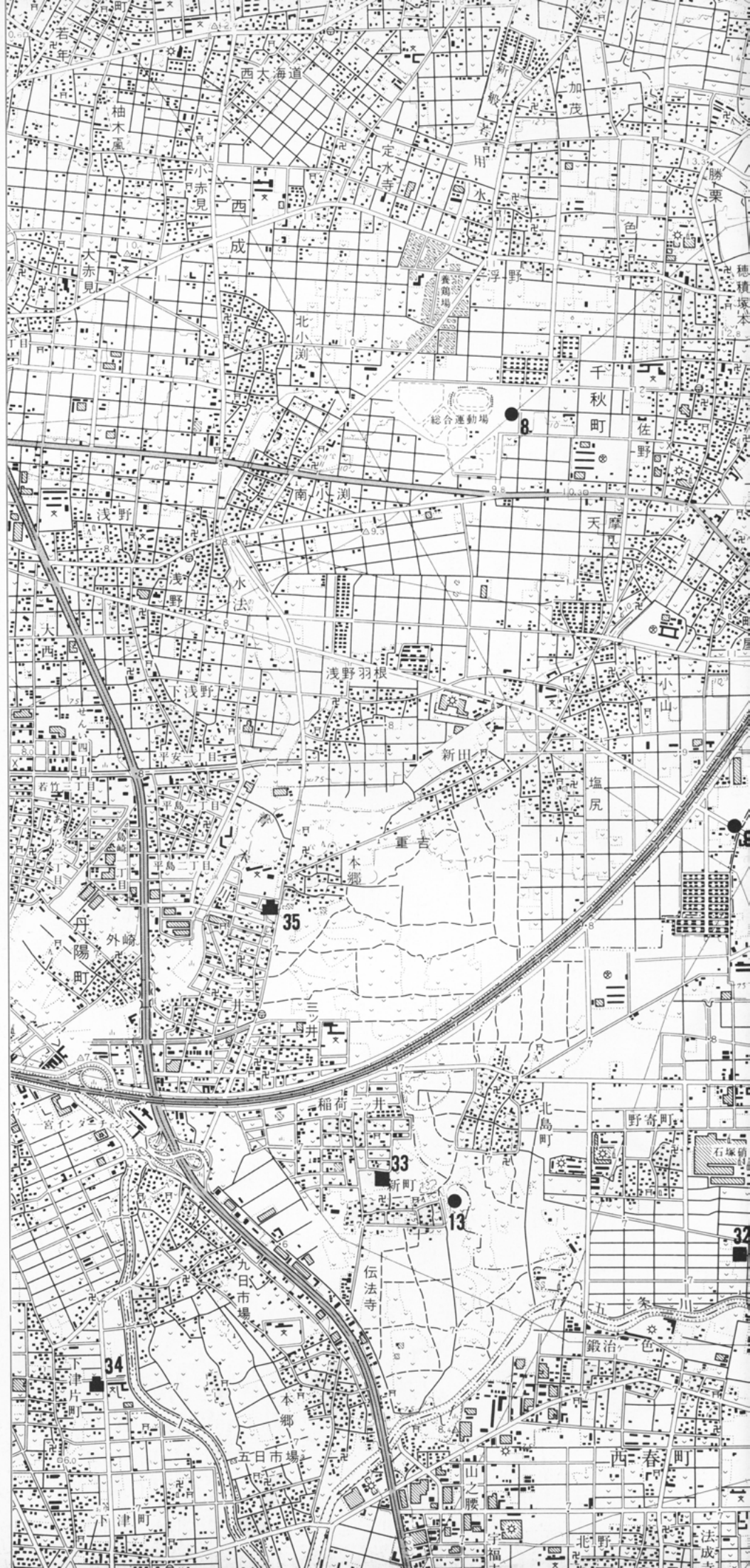


第1図 遺跡の位置



第2図 尾張の主要な城跡

- 1 岩倉城遺跡
- 2 織田井戸遺跡
- 3 総濠遺跡
- 4 北替地遺跡
- 5 八剣遺跡
- 6 ノンベ遺跡
- 7 西町畑遺跡
- 8 佐野遺跡
- 9 蕪池遺跡
- 10 大地遺跡
- 11 東町畑遺跡
- 12 曾野遺跡
- 13 元屋敷遺跡
- 14 宇都宮神社古墳
- 15 甲屋敷古墳
- 16 浄音寺古墳
- 17 道神塚古墳
- 18 富士塚古墳
- 19 神福神社古墳
- 20 曾本二子山古墳
- 21 七面山古墳
- 22 新溝古墳・
新溝神社銅鐸出土地
- 23 西北出遺跡
- 24 神宮寺古墳
- 25 西出古墳
- 26 高畑古墳
- 27 小森遺跡
- 28 石塚遺跡
- 29 長福寺廃寺
- 30 弥勒寺廃寺
- 31 御土井廃寺
- 32 薬師堂廃寺
- 33 伝法寺廃寺
- 34 下津城跡
- 35 重吉城跡
- 36 小折城跡
- 37 井上城跡
- 38 小牧山城跡



第3図 岩倉城遺跡と周辺の遺跡

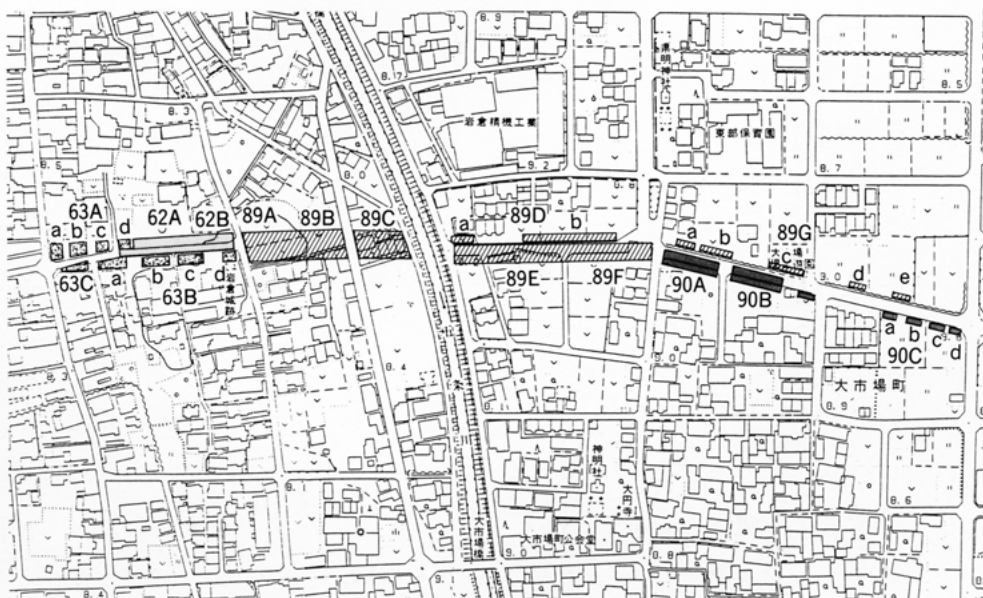
(この図は、国土地理院発行
1/25,000の地形図を使用した。)



沢市下津町)において、管領の斯波氏にかわって守護代として尾張を統治していた。応仁の乱では斯波氏の跡継ぎ問題も絡み、斯波氏が二手に別れて争ったため、その家臣である織田氏も別れて戦った。下津城には織田敏広がいたが、1476年、清洲城主の織田敏定に攻められて焼失した。両者の戦いはその後も続いたが、1479年和議が成立し、織田敏広は岩倉を本拠地として葉栗・丹羽・中島・春日井の尾張上四郡を治め、清洲の織田敏定が海西・愛智の二郡を治めるという分割統治の時代になった。岩倉城の築城年代は記録に残っていないが、和議の頃には城があったことはまず誤り無いであろう。織田敏広の後、城主は寛
 1559年落城 広・敏信・信安・信賢と変り、1559年織田信長に攻め滅ばされた。これによって信長は尾張統一を成し遂げ、翌年の桶狭間の合戦を経て、天下統一へ乗り出すことになる。下津城は岩倉城の西南西4.5km、清洲城は南南西7km、小牧城は北東4kmの位置に所在する。

岩倉城の姿については明確にはわかっていなかった。ただ、『信長公記』には周辺に城下町が形成されていたことが記されており、『岩倉市史』には『前野家文書』による岩倉城についての具体的記述の一部が掲載され、簡単な縄張り図も付け加えられていた。発掘調査『武功夜話』の直前には『前野家文書』の現代語訳した『武功夜話』が出版されるにおよび、厳密な資料の検討も行われておらず記述の信頼性に欠けるという指摘もあるものの、ある意味では発掘調査は、『武功夜話』の記述…城は五条川から水を引き入れた二重の堀に囲まれ、追手門前には高い土塁が築かれた堅固な守りの構造であり、城の内部は広大で、本丸・二の丸・馬場などがあり、望楼を備えた館を中心として17棟もの建物が配置されていた…を検証することになった。

※『武功夜話』…吉田蒼生雄訳、新人物往来社、昭和62年。



第4図 調査区位置図

2 調査に至る経過

愛知県土木部一宮土木事務所では名鉄犬山線と岩倉市を通過する自動車とによる交通渋滞解消のため、一宮市と豊山町を結ぶ県道萩原・多気線建設を計画した。しかし、この予定ルートは岩倉城本丸推定地を東西に抜けるため、工事に先立ち、その取扱いについて県土木事務所と県教育委員会、岩倉市教育委員会との間で協議がもたれた。教育委員会では、本丸跡との言い伝えの真偽を確認し、その範囲を特定するためにも、事前の試掘調査が不可欠であると考え、県教育委員会の指導の下、市教育委員会が昭和51年に4か所で試掘坑を設定し、調査を行った。その結果、弥生時代から江戸時代に掛けての遺物が出土し、複合遺跡であることが推定されるにいたった。

その後、県道建設に伴う用地買収が遅々として進まなかったが、昭和60年代に入ると著しい進展が見られ、発掘調査が急務になった。昭和62年7月には県教育委員会と市教育委員会それに（財）愛知県埋蔵文化財センターによって遺跡の西側範囲を確定するために試掘調査を実施した。（財）愛知県埋蔵文化財センターによる発掘調査は昭和63年1月から開始した。なお、市教育委員会は昭和62年10月に石碑のすぐ北側地点で30㎡の調査を実施した。土師質皿が多数出土し、下層では弥生時代の竪穴住居跡の一部も確認した。

3 調査の工程

当初計画された五条川の西の下本町地内は、仮設道路を作り生活道路を確保する必要から調査区を細分せねばならず、さらには水道管の埋設位置の情報がまったく無いことや太いガス管があることと合わせかなりの困難がともなった。

昭和63年6月には、五条川左岸の大市場町地内においても試掘調査を実施し、遺跡の範囲が五条川東岸にも広がることを確認した。最終的には平成3年3月までに合計10,470㎡の発掘調査を完了した。

発掘調査 調査は、各区ともバックホウによる表土掘削から開始したが、62A・B区の防火水槽跡や道路建設に先立つ転居家屋の廃材投棄坑など現代の攪乱がひどく、遺構の遺存状態はかなり悪かった。しかし大規模な溝（堀）が確認でき城の縄張りを考える有力な手がかりを捉えることができた。なお内堀・外堀ともに明治時代にかなり大規模に埋められ、水田化したことを知ることができた。

89A・B区より東は総じて遺存状態は良好であった。

かつての試掘調査の成果により、遺跡が複合遺跡であることが予想できていたので、基本的にはほとんどの調査区で二面調査を実施した。

記録の作成 遺構の実測は上面・下面共に、国土座標による基準杭を設定し、上面（戦国期）のみヘリコプターによる空中写真測量を実施し、1/50の基本平面図を作成した。ただし89C・89F区はクレーンによる写真測量になった。必要に応じて1/20で土層断面図、

1/10で遺物出土状態図を作成した。下面は、1/20で実測した。

整理作業 出土遺物の整理は、現地での調査と並行して洗浄・出土地点の注記などの基礎的整理作業を実施した。また昭和62～平成2年度の『年報』や『埋蔵文化財情報』に、調査の概要や研究成果を報告すると共に、報告書作成のための整理作業を実施した。

成果の公表 周辺住民や市民を対象に62B区で昭和63年3月5日、89A B区で平成2年1月20日、現地説明会を実施し、それぞれ300名、350名の参加があった。また岩倉市教育委員会の依頼で平成3年2月23日に発掘調査成果報告会と遺物展示会を岩倉市立図書館で開催し、200名の参加者があった。さらに1989年～1991年のそれぞれ1月1日号（No.427、451、475）の岩倉市広報に発掘調査の概要を公表した。

4 発掘調査の成果の概要

発掘調査の結果、本丸跡に建つ石碑の北側から西は道路建設工事に伴う建物の転居による攪乱が激しかったが、それ以外はおおむね遺構の残り具合は良好であった。

検出した遺構は、共伴した遺物の年代観から、Ⅰ期（縄文時代晩期から弥生時代中期）、Ⅱ期（弥生時代後期から古墳時代前期）、Ⅲ期（古墳時代後期）、Ⅳ期（奈良時代から平安時代）、Ⅴ期（鎌倉時代から室町時代）、Ⅵ期（戦国時代）に区分される。

Ⅰ期は縄文時代晩期と弥生時代中期に細分でき、縄文時代晩期の遺構は、五条川東岸の

年度	調査区	面積	月												
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
昭和62年度	62 A	760㎡													
	62 B														
昭和63年度	63 A	470㎡													
	63 B														
	63 C														
平成元年度	89 A	5240㎡													
	89 B														
	89 C														
	89 D														
	89 E														
	89 F														
	89 G														
平成 2 年度	90 A	3000㎡													
	90 B														
	90 C														

第1表 調査の工程

90B区で検出した3棟の竪穴住居跡と土坑である。おもな出土遺物は縄文土器である。弥生時代中期の遺構は五条川東岸の89G区から90C区に掛けて出土した竪穴住居や溝、土坑であり、中期中葉の土器が見つかった。

Ⅱ期は五条川西岸に居住し、東岸に墓を営んだ時代である。西岸の竪穴住居からは弥生時代後期の土器が出土した。五条川の東の岸辺では祭祀跡を推測させる土器の集積が確認された。

Ⅲ期には五条川両岸で墓が築かれた。西岸では一辺25m以上の方墳が1基、東岸では3基の方墳が確認できた。おもな遺物としては円筒埴輪などがある。

Ⅳ期の遺構は比較的散在しており、奈良時代と平安時代末期の溝や土坑があった。

Ⅴ期の遺構には鎌倉時代の溝、井戸などがある。特に89下区のS E04はかなり遺存状態が良く、また多数の山茶碗も出土した。

Ⅵ期の遺構には堀、溝、建物、土坑、柱穴などがある。概して堀の中からは遺物の出土は少なかったが、石碑そばの62A B、63B、89A B区からは人々の居住域近くである事を物語るように、特に区画溝からの土師質皿や陶器、木製品が多かった。

当初は石碑のある五条川右岸のみに岩倉城が埋没していると推定していたが、調査の進展に伴ない岩倉城が五条川左岸にも広がり、予想を越える規模の城で、尾張を分割統治していた人物が住むにふさわしいことが明らかになった。

さらに下層の遺構も豊富で、古くから五条川の自然堤防上に連綿と人々が住んでいたことがわかり、五条川流域では遺跡分布が知られないところにおいても、注意を払う必要があることを認識させた。

(松原隆治)

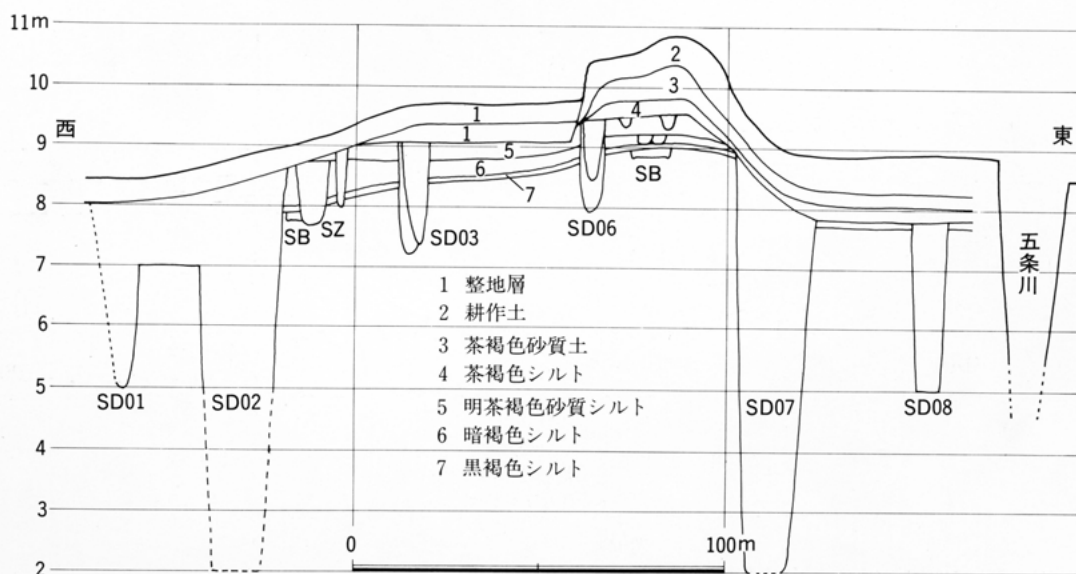
II 遺構

1 層序

基本層序 発掘調査地点の基本層序は、上から、表土（道路の整地層もしくは耕作土：Ⅰ層）、褐色砂質土（Ⅱ層）と続き、この下面が戦国時代の遺構検出面となる。検出面は、五条川右岸の89A・B区の最高所で標高9.5mである以外は、おおむね標高9mである。さらに茶褐色シルト（Ⅲ層：中世）、淡褐色砂質シルト（Ⅳ層：古墳時代）、褐色砂質シルト（Ⅴ層：弥生時代）と推移し、この下に部分的ではあるが、灰褐色砂質シルト層（Ⅵ層：無遺物層）を挟み、黒灰色砂質シルト（Ⅶ層：縄文時代晩期）があり、基盤層の青灰色砂層に達する。

旧五条川 北東部分では、現在は五条川がほぼ真直ぐに南流するが、これは昭和10年代の河川改修工事によるもの。それ以前は地図でも明らかなように大きく西へ弧状に蛇行しており、明治

堤 塘 17年の地籍図によると弧状に張り出した部分の南に「堤塘」（堤防）と記されている。また89A・B区のすぐ北にあった竹藪を撤去する際に試掘を実施し、内堀SD07が緩く西へ曲がる様相を呈することを確認した。したがって戦国時代には五条川は城の北東部で西へ弧

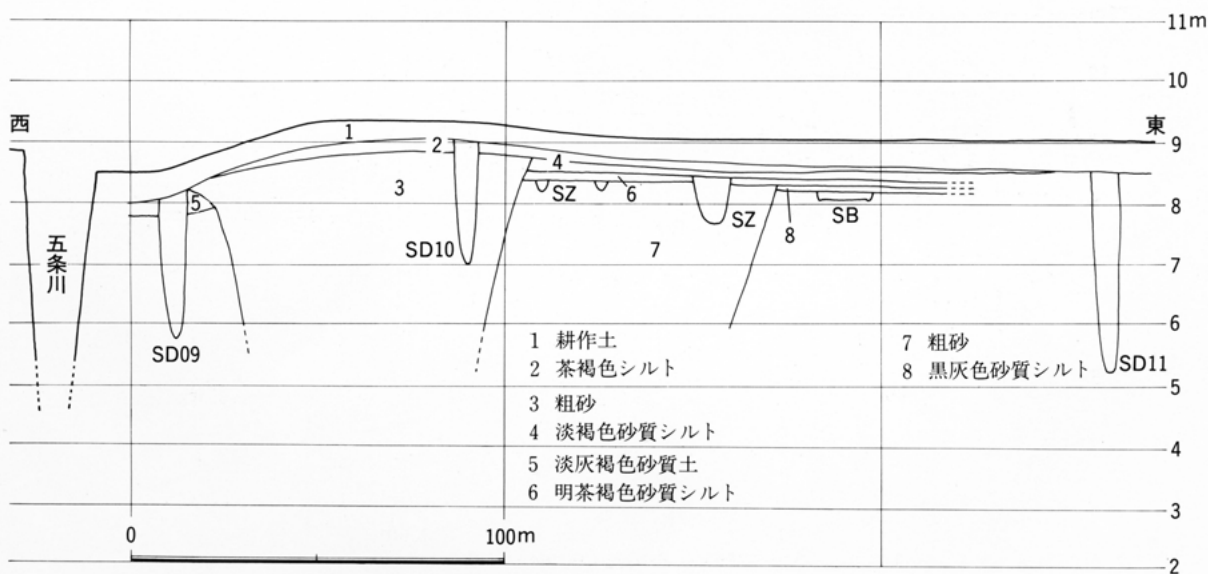


第5図 岩倉城遺跡断面模式図(五条川右岸)

状に曲がり、城はその地形的制約を受けて築かれたと推定できる。

なお古墳時代以前の地層については五条川の東と西で大きく異なる。西では、古墳時代の遺構とわずかな弥生時代の遺構とはほぼ同じ標高で検出でき、その下は、含まれる有機物（植物が腐食した泥炭）の多少により灰色～黒色を呈す、水平に堆積したシルト層が続く。一方、五条川東では89E区の西端に古墳時代の遺構があり、このすぐ東側に流水の証拠である粗砂層が厚く堆積し、89F区東端で検出した方形周溝墓のそばまで広がっていた。約80mの幅を持つ粗砂の範囲はかつての五条川の痕跡であり、古墳時代以前の遺物や遺構がまったく見られないことから、古墳時代以前という年代が推定できよう。さらに時代を遡ると、縄文時代晩期の竪穴住居跡を検出した90B区の西まで同様な粗砂層が認められたことから、縄文時代晩期以前には90A区付近まで五条川が大きく蛇行していたことが明らかである。

(松原隆治)



第6図 岩倉城遺跡断面模式図(五条川左岸)

2 I 期

(1) 縄文晩期

概 観 縄文晩期の遺構・遺物が検出されたのは、90B区を中心とした極一部の範囲であり、遺跡全体への広がりとは認められない。それは、90B区の西側に設定した90A区および、東側に設定した90C区においては縄文晩期の遺物を含む包含層が見られなかった事実からも裏付けられる。南北方向への広がりとは調査区の関係上、不明な部分が多いが、東西幅約50～60m程度の小規模な集落が想定できよう。

検出された遺構は、竪穴住居3棟、土坑8基である。

竪穴住居 SB1001

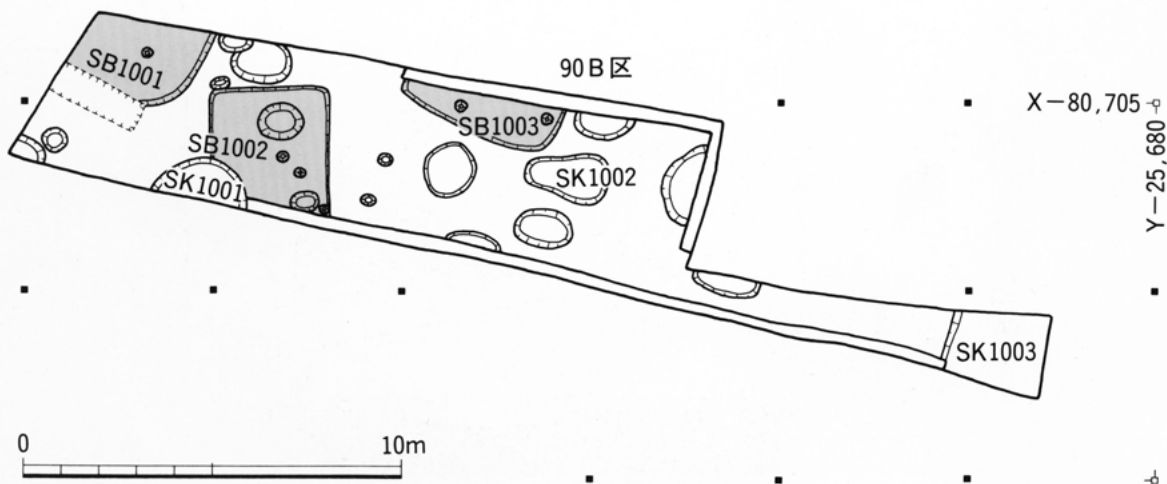
90B区の西端で検出したものであり、僅かに方形プランと考えられる住居跡の東コーナーの一部の一部を検出できたにすぎず、規模・内部構造等不明な部分が多い。検出面より10cm程度の深さを有する。内部には黒灰色砂質シルトが堆積しており、床面直上で炭化物の薄層が認められた。

SB1002(第8図)

90B区のほぼ中央で検出したものであり、遺構の南辺部分の一部を調査区外に残すが、東西3.1m・南北約4mを測る。検出面からの深さは僅か数cm程度である。平面形態はやや南北方向にのびる方形プランであり、内部構造として多数の柱穴を検出したが、その組み合わせは判然としない。SB1001と同様に内部には黒灰色砂質シルトが堆積しており、床面直上付近には炭化物の薄層が認められた。

SB1003

90B区のほぼ中央で検出した。遺構の大半を調査区外に残し、全形は不明であるが、東



第7図 I 期 縄文晩期遺構配置図(1:20)

西4.3m、検出面から10cm程度の深さを測る。内部で柱穴を2ヶ所検出した。遺構の埋土は炭化物を含む黒灰色砂質シルトが堆積しており、遺物としては外面ケズリ調整の深鉢、突帯紋土器等が出土している。

土 坑 SK1001

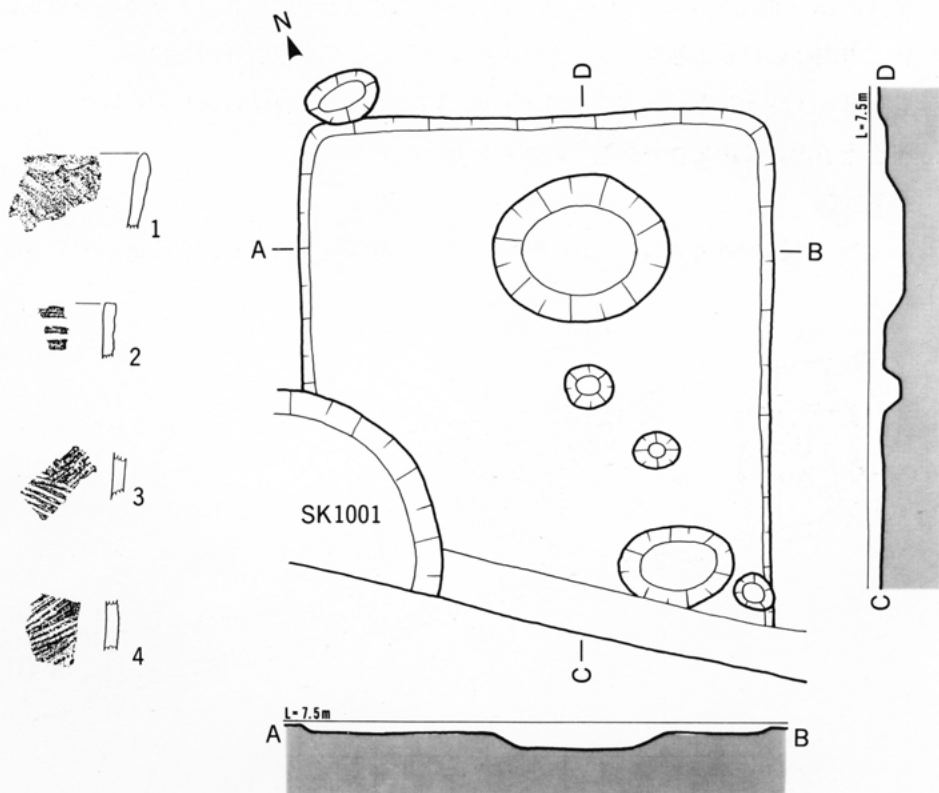
90B区のはほぼ中央で検出。遺構の半分以上を調査区外に置くが、径2.5m程度のほぼ円形状のプランを呈すると考えられる。検出面からの深さは15cm程度である。SB1002と切り合いが認められた（SB1002→SK1001）。遺構の埋土は、淡黒灰色砂質シルトが堆積していた。

SK1002

90B区のはほぼ中央で検出。SB1003に近接して掘削される。長軸2.5m・短軸1.3mを測る楕円状のプランを呈し、深さは10cm程度であり、黒灰色砂質シルトが内部に堆積していた。外面ケズリ調整、条痕調整の土器片が若干出土している。

SK1003

90B区の東端で検出したもので、遺構の大半を調査区外に残すため、全体の形状・規模等は不明であるが、遺構の掘り形はほぼ直線的に延び、また、埋土に炭化物を多量に含む点より住居跡の可能性も考えられる。



第8図 SB1002実測図（1：50）

(2) 弥生中期

概 観 弥生時代中期の遺構・遺物は、概ね五条川左岸の89G・90A区から90C区にかけて検出されており、縄文晩期の遺構と同様に遺跡全体への広がりとは認められない。調査区の南方には、弥生時代前期から後期にかけて存続し、とりわけ中期中葉段階（貝田町式期）にその主体をおくと考えられる曽野遺跡があり、今回の調査で確認された遺構・遺物との関連が考えられる。

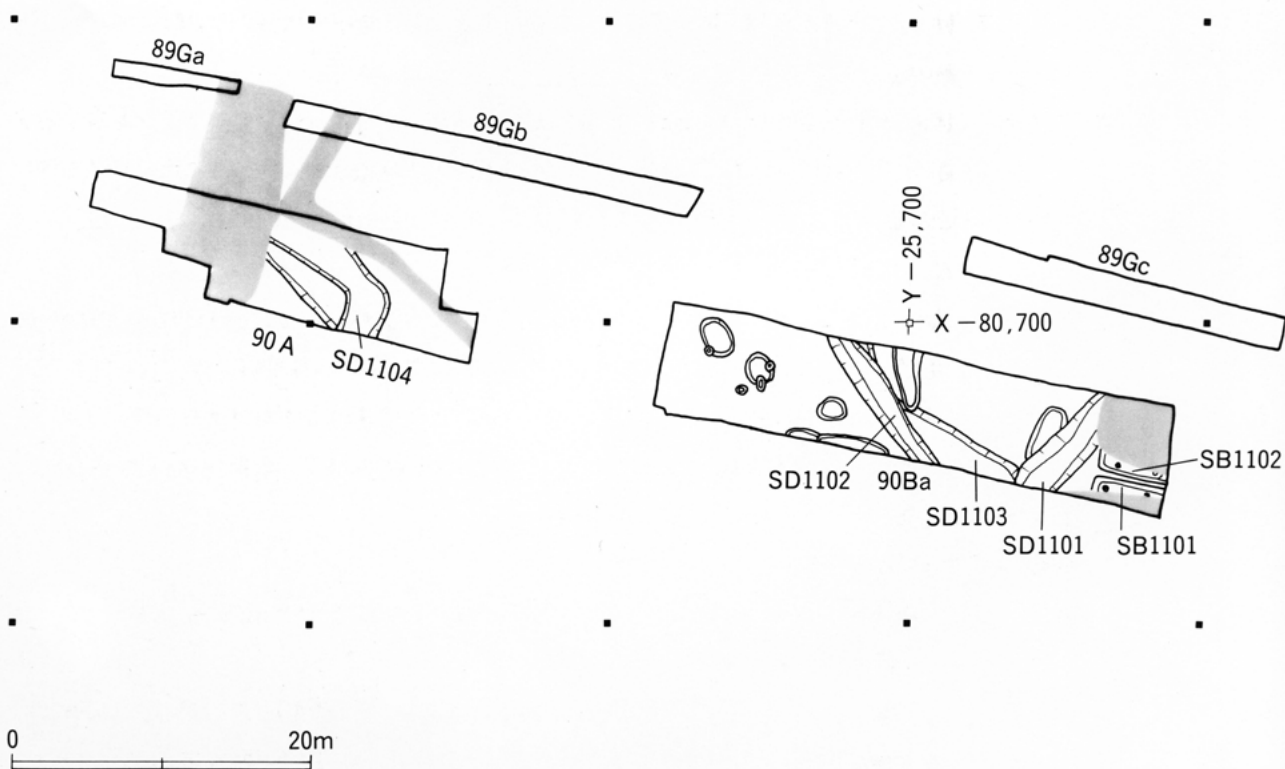
検出された遺構は、竪穴住居2棟、溝6条、土坑8基である。以下、主要な遺構について記していきたい。

竪穴住居 SB1101

90B区東端で検出。遺構の大半は戦国期の溝SD09に切られ、全体の形状・規模等不明な部分が多い。僅かに方形プランと考えられる住居跡の北辺部分を確認できたにすぎないが、内部の状況を知る要素として壁溝および柱穴を2ヶ所検出することができた。

SB1102

90B区東端で検出。SB1101に近接して掘削される。SB1101と同様に残存状態は悪く、方形プランと考えられる住居跡の南辺部分を検出できたにすぎないが、壁溝および主柱穴を2ヶ所確認することができた。遺物としては、貝田町式新期に属する土器片が少量出土している。



第9図 I期弥生中期の遺構(1:500)

溝

S D 1101

90B区東で検出した。幅2.8m・深さ40cmを測り、断面は緩やかなU字形を呈する。遺構は、竪穴住居に近接して掘削されており、概ねN-40°-Eの傾きをもってほぼ直線的にのびる。溝内の埋土は淡褐色シルトが堆積しており貝田町式古～新期の遺物が若干出土した。

S D 1102

90B区中央で検出した。幅2.0m・深さ30cmを測るが、遺構の大部分はS Z 1304周溝および大規模な廃材投棄坑により削平され、残存状況は頗る悪い。遺構は概ねN-35°-Wの傾きをもって直線的に走る。断面は緩やかなU字形を呈し、暗褐色シルトが堆積する。遺物としては貝田町式期の土器片が少量出土している。

S D 1103

90B区の中央で検出したものであり、S D 1102と一部重複する（S D 1103→S D 1102）。幅2.5m・深さ40cmを測る。断面はU字形を呈し、淡褐色中粒砂が堆積する。遺構は緩やかに円弧を描きながら概ねN-25°-Wの傾きをもって走る。

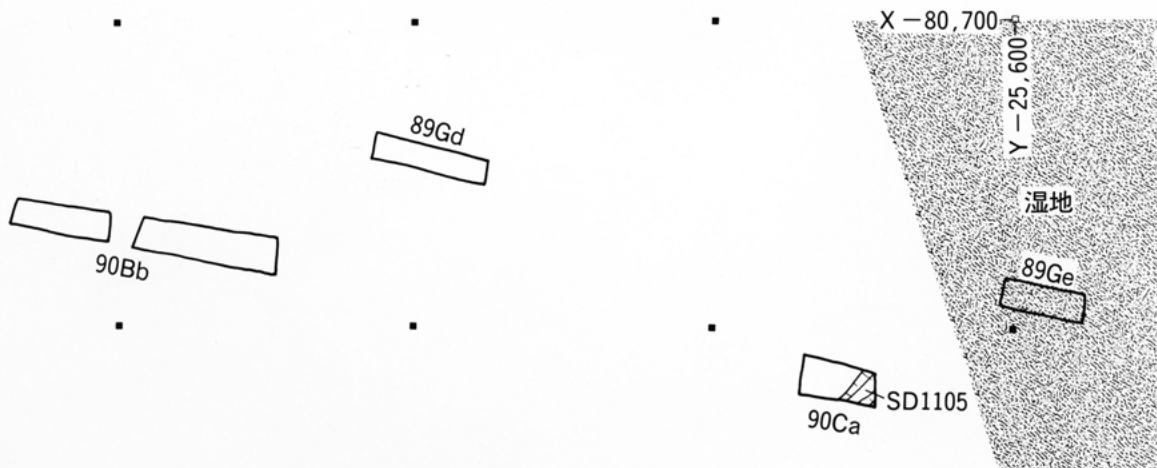
S D 1104

90A区の中央～東で検出したものであり、遺構の大部分は、S Z 1302・1303周溝に切られる。幅2.3m・深さ30cmを測り、断面は緩やかなU字形を呈し、調査区内でL字に屈曲し、調査区外に続く。

S D 1105

90C a区で検出。狭小な調査区東隅で遺構の一部が確認されたのみであり、遺構の形状・規模等は不明であるが、貝田町式期の遺物が比較的まとまって出土した。

土 坑 土坑は90B区のS D 1002以西で8基ほど検出した。いずれも楕円状のプランを有するタイプであり、規模的にも長軸幅が1mほどのものが多いが、遺物の出土に乏しく性格等は不明である。



3 II期

概 観 I期段階は遺跡の東端の一部分に遺構・遺物が検出され遺跡全体への広がりとは認められなかったが、II期段階（弥生時代後期から古墳時代前期）に至ってはじめて遺跡全体への安定したヒトの定着がみられるようになる。それは五条川右岸の自然堤防上に居住域を置き、左岸の微高地上に墓域を設定した集落の出現であり、竪穴住居11棟（岩倉市教育委員会調査1棟含む）、方形周溝墓1基、集石遺構2基、土坑3基、溝1条、土器集積1基を検出している。

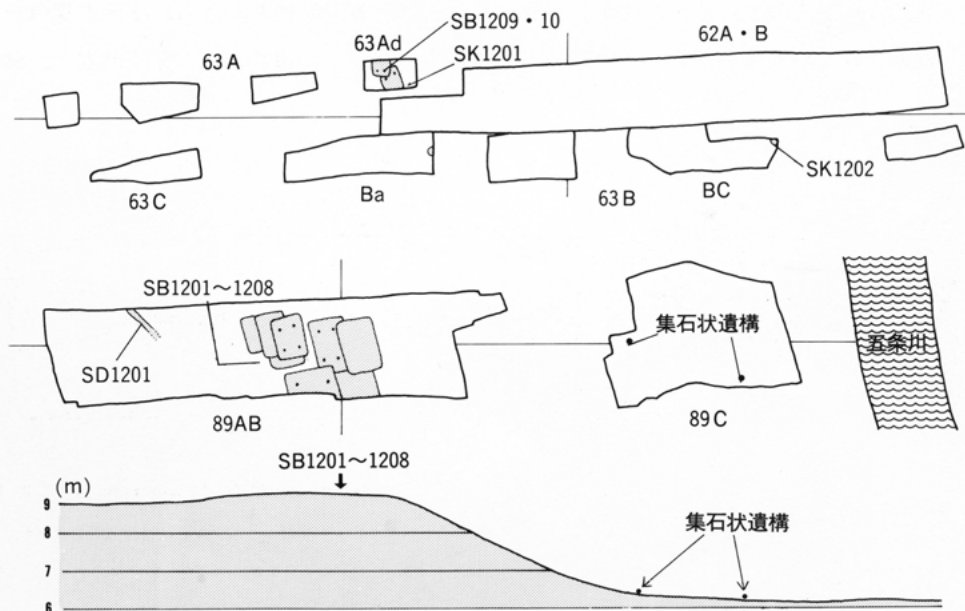
発掘調査は、遺跡の東西を横断する形で調査区を設定したため、遺跡の広がり、構造等を把握する上で良好であったと言え、概ね次の3地区に分類して遺構を捉えることができる。

A地区…63C区から89A・B区に至る地区であり、五条川右岸の標高8～9m前後の自然堤防上。竪穴住居、土坑等を検出しており、居住域に相当すると考えられる。

B地区…89A・B区東端から89D a・E a区に至る地区である。五条川右岸の自然堤防から89E a区東で検出した旧河道へと大きく傾斜していく変換地点であり、標高は6m前後、東西幅100m程の平坦部分からなる。集石遺構、土器集積遺構等を検出している。

C地区…89F区以东の標高8～8.5m程の五条川左岸の微高地上。方形周溝墓を1基検出しており墓域に相当すると考えられる。

以下、この3地区に分けて主要な遺構の説明をしていきたい。



第10図 II期主要遺構配置図(1) (1:1000)

(1) A地区

竪穴住居 S B1201

89A・B区中央で検出した。遺構の南半分を調査区外に残すため全体の形状は不明であるが、一辺5.6m、深さ30cm程度の方形住居である。S B1202・S B1204と重複関係を持つ(S B1202・1204→1201)。内部の状況を知る要素として周溝、柱穴3ヶ所を検出したが、とりわけ周溝は北辺中央部で途切れており、戸口等の存在を予想させる。遺物としては廻間Ⅰ式2段階に相当する土器が若干出土している。

S B1204

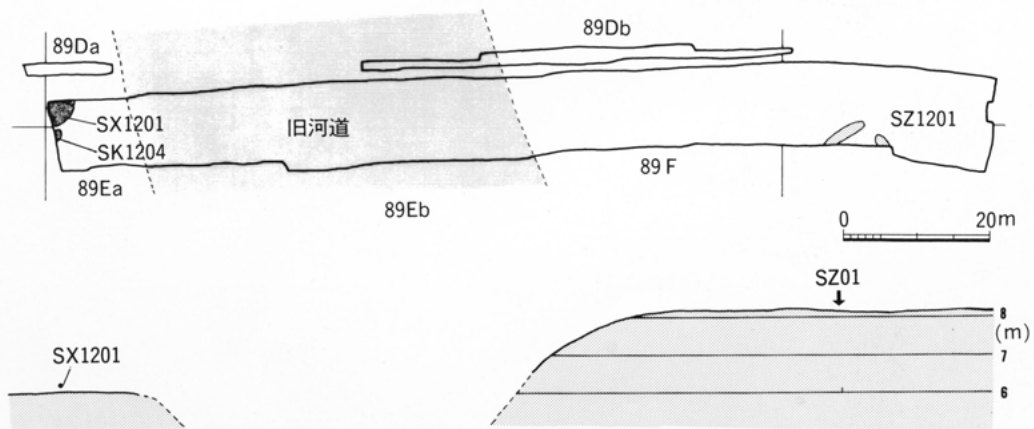
90A・B区中央で検出した。遺構の東半分をS B1203およびⅥ期のS D07によって削平されているため、全体の形状は不明であるが、一辺7m前後、深さ30cmの比較的床面積の広い方形住居である。S B1201・1202・1203と重複関係を有する(S B1202・1204→1201・1203)。内部は幅20cm・深さ5cm程度の壁溝がめぐり、柱穴も5ヶ所確認できたが、その組み合わせは判然としない。また、遺構の中央付近には焼土の痕跡が一部みられた。廻間Ⅰ式0段階に位置付けられる遺物が一括して出土した。

S B1206

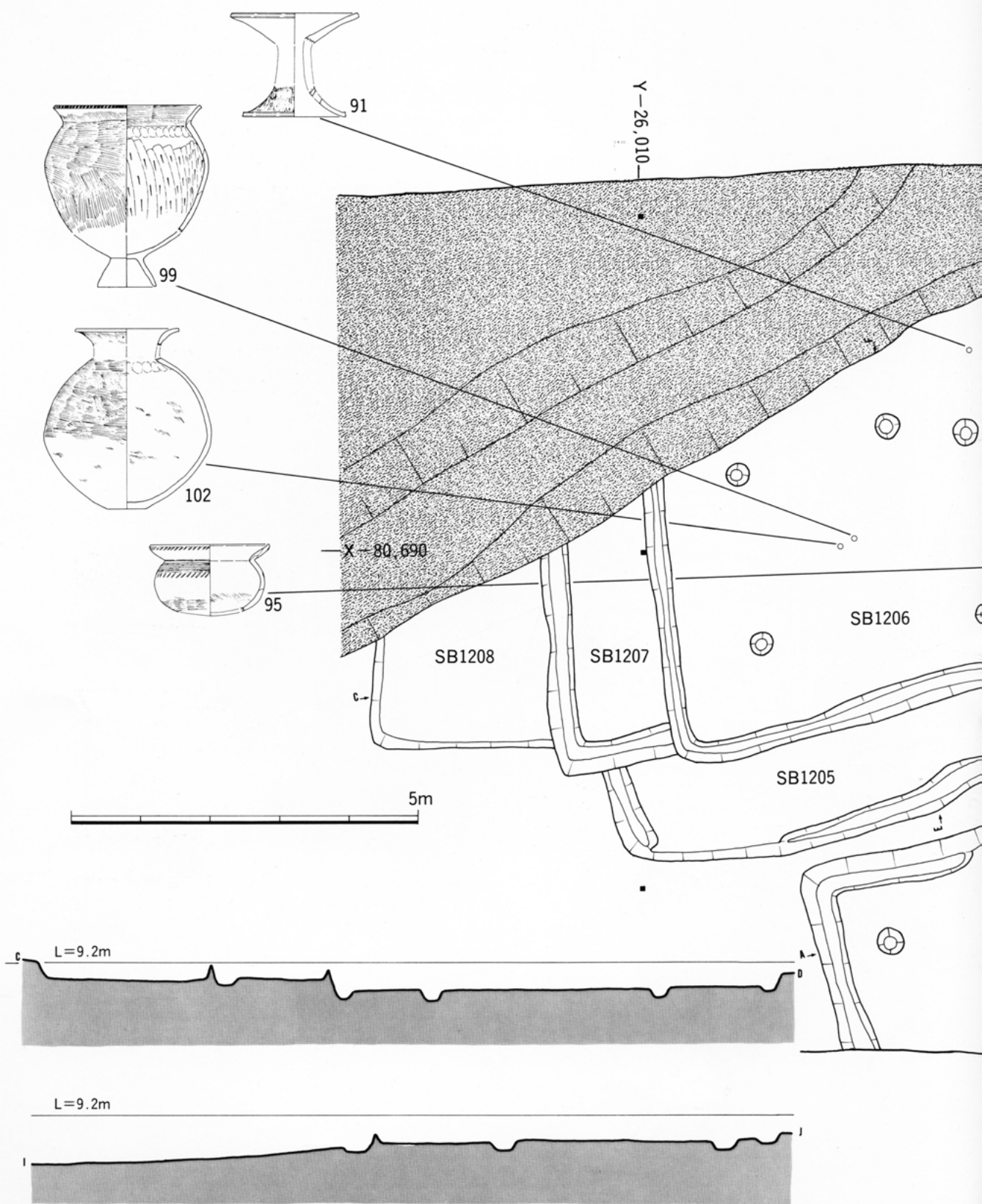
89A・B区中央で検出した、遺構の北辺部分を中世のS D17に切られるが、一辺6.5m前後、深さ15cm程度の方形プランを呈する住居である。S B1205・1207と重複関係を持つ(S B1205→1207→1207)。内部には東辺の一部を欠損するが、幅20cm・深さ5cm程度の壁溝がめぐる。また、は主柱穴の可能性が考えられるピットを検出している。遺物としては山中式5段階に比定される遺物が一括して出土した。

S B1209

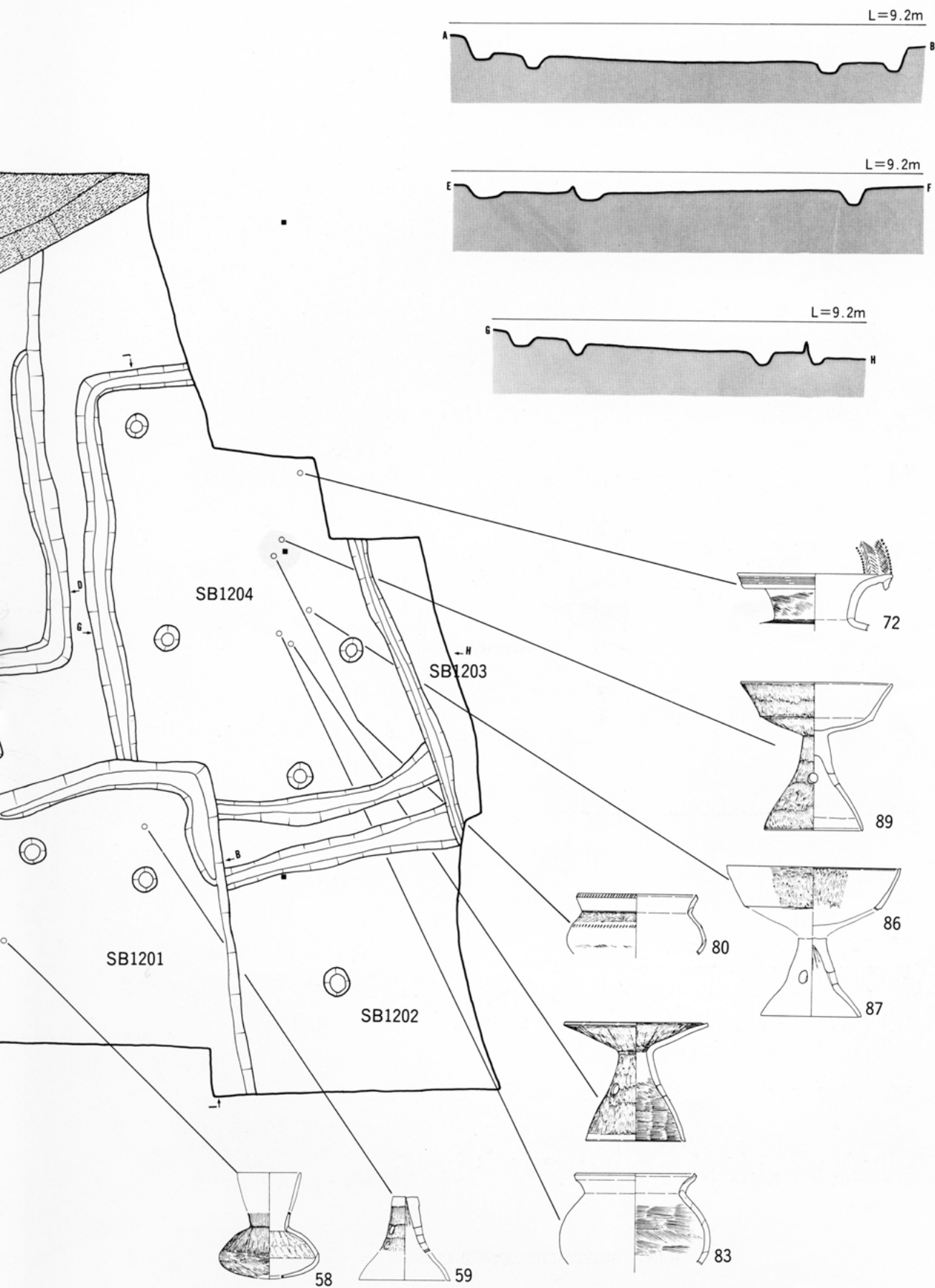
63A d区で検出。遺構の大半を調査区外に残し、方形住居と考えられる南東隅の一部を検出できたにすぎず全形、規模等は不明である。幅40cm・深さ5cmの壁溝が走り、柱穴も



第11図 Ⅱ期主要遺構配置図(2) (1:1000)



第12図 SB1201～SB1208実測図(1:80)



1ヶ所確認できた。山中式後期の遺物とともに壁溝内より叩きを施した甕が出土している。

S B1210

63A d 区で検出。遺構の大半はS Z1301周溝に切られ、痕跡程度の残存状況であるが、一辺3.5mを測る方形住居である。S B1209と重複関係を持つ(S B1210→1209)。内部には壁溝が走り、ピット状の落ち込みも1ヶ所確認している。

溝

S D1201

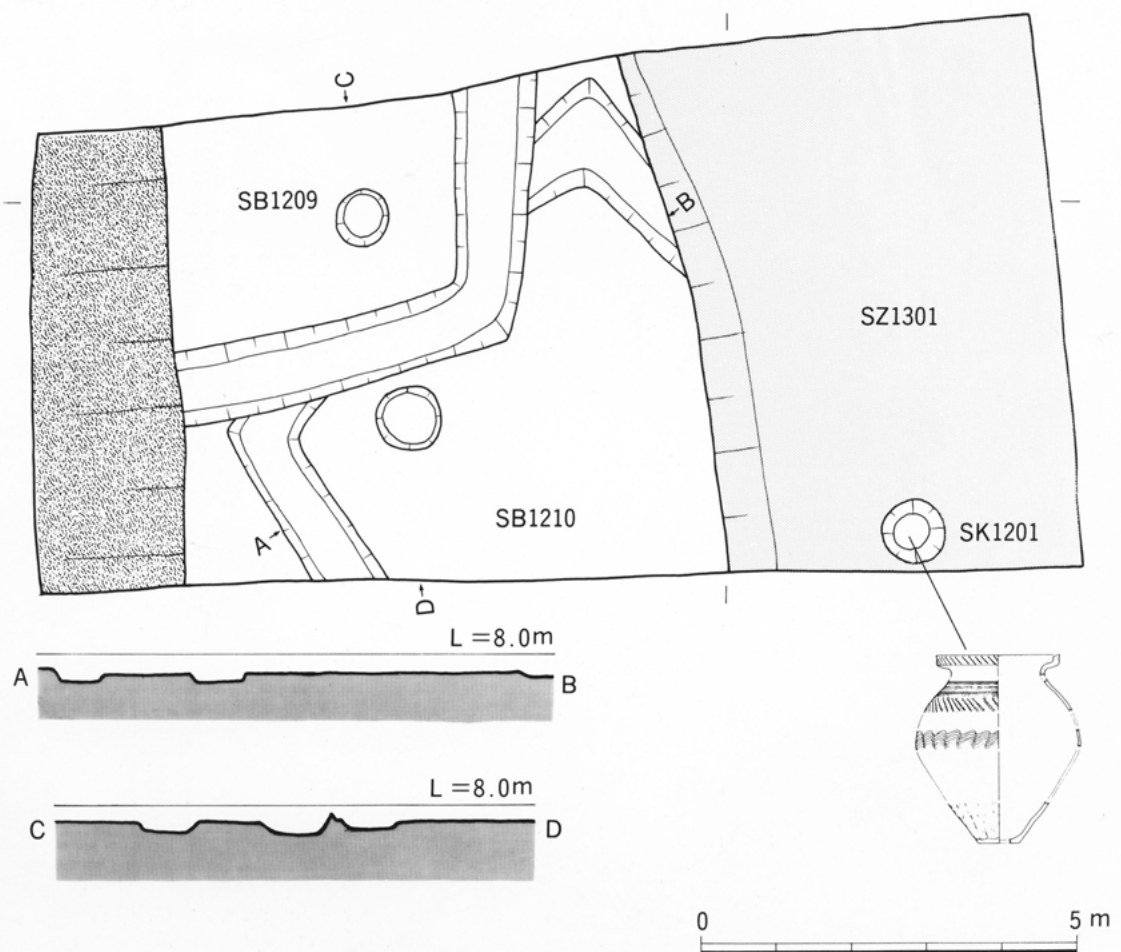
89A・B区中央で検出した。幅0.8m・深さ15cmを測り、N-50°-Wの傾きをもち、ほぼ直線的に走る。遺構の南端付近は中世のS D17に切られ不明であるが、大きく東に屈曲するものと考えられる。遺構内より、廻間I式前半に比定される壺が出土している。

土 坑 S K1201

63A d 区で検出。径40cm程度のピット状の小規模な土坑であるが、内部より、山中式後期に相当すると考えられる近江系受け口甕が1個体押し潰れた状態で出土した。

S K1202

63B c 区で検出した。遺構の大半を調査区外に残すため規模、形状等は不明な部分が多



第13図 SB1209・SB1210実測図 (1:50)

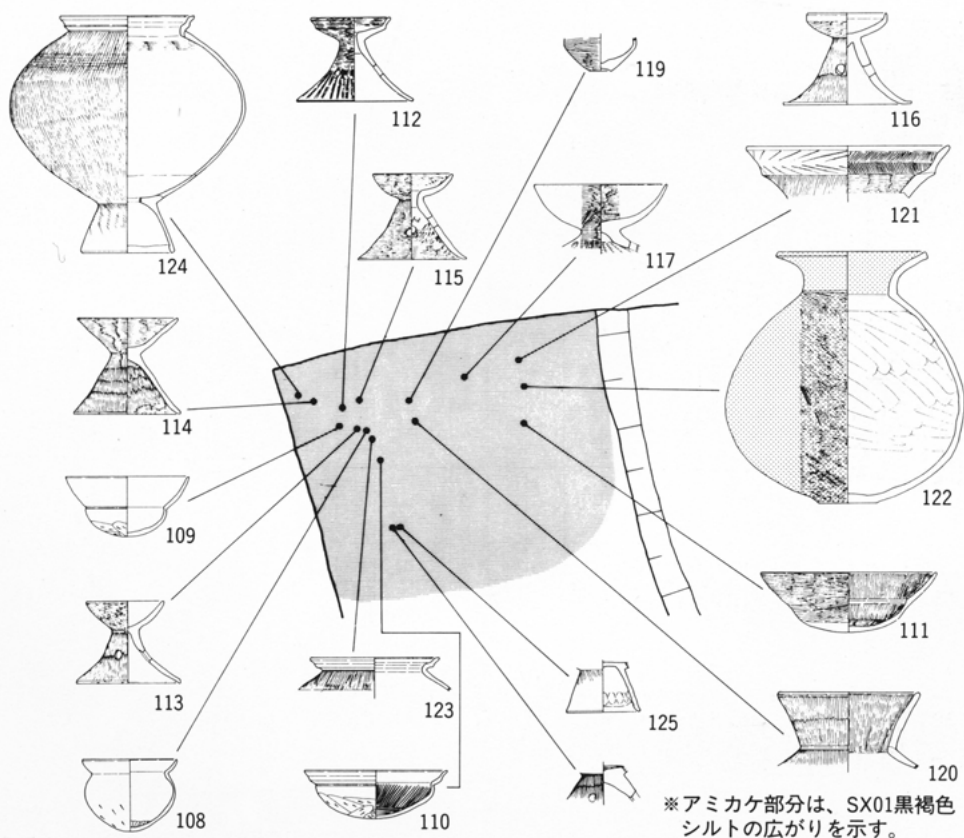
いが、内部より、山中式後期のブランデーグラス型の高杯が1個体出土している。

(2) B地区

集石状 89C区で2基検出した。検出地点の標高は6m前後であり、隣接する89A・B区で竖穴
遺構 住居が確認された地点との比高差は、約3mを測る。集石遺構は、拳大から人頭大の河原
石を帯状(SX1202)または楕円状(SX1203)に集積したものであり、性格等不明な部
分が多いが、若干の出土遺物および集石遺構を覆う暗褐色シルト層からは、竖穴住居とほ
ぼ同時期(山中式後期~廻間I式期)の遺物が出土しており、それらに関連した遺構であ
ることは明白である。また、集石の石材は、濃飛流紋岩が大半であり、これらは、遺跡の
周辺では採取できないものである。遺構の性格とあわせ、何故これらの石材を入手する必
要があったのか、類例の乏しい現在では判然としない。今後の課題である。

土器集積 SX1201

遺構 89Eaで検出した。検出地点の標高は、89C区で確認した集石遺構と同様に6m前後で
ある。また、遺構から東へ10m程で旧河道へ落ち込んでいくという極めて不安定な地点に
立地している。この土器集積に伴う明確な掘り込み等は確認されず、一辺4~5m前後の



第14図 SX1201遺物出土位置図 (1:100)

自然に形成された窪地状の落ち込みに、多量の炭化物を含んだ黒褐色シルトが、あたかも充填したごとく堆積していた。この黒褐色シルト内より、壺・S字甕・小形器台・小形丸底土器等廻間Ⅲ式3段階に比定される土器群が一括して、人為的に置かれた状況で出土した。

土 坑 SK1204

89E a 区で検出。SX1201に近接して掘削される。遺構の大半が調査区外となり、全体の形状は不明であるが、径約1.5mを測る円形の土坑である。掘り形はほぼ垂直に掘り込まれており井戸状遺構の可能性も考えられるが、0.7m程掘り下げたところで湧水が激しくなり、壁面が崩壊したため途中で掘削を中断せざるをえなかった。土坑内部より、高杯・S字甕・有段鉢等廻間Ⅲ式4段階に比定される遺物が出土した。

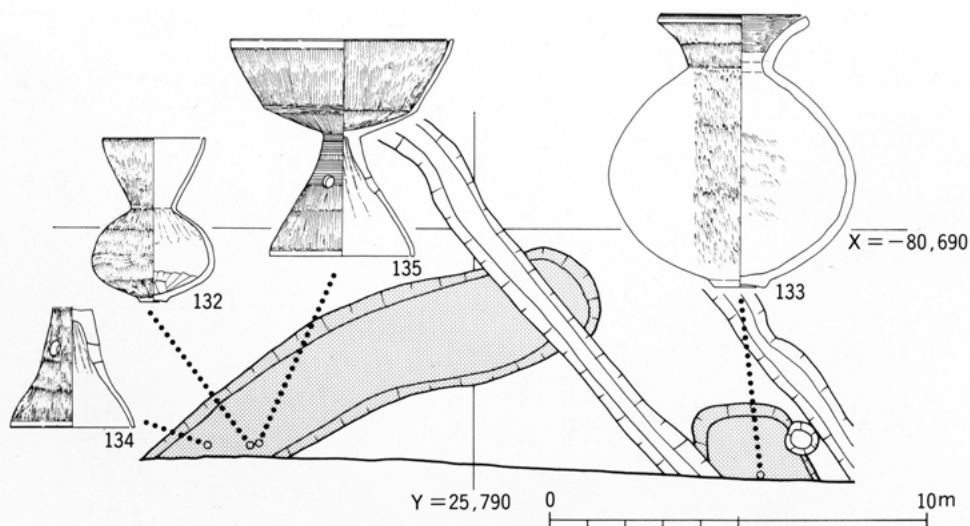
旧 河 道 NR1201

遺跡が五条川に接して営まれているため、調査区の各地で旧河道の痕跡を確認している。89E a 区で確認したNR1201の対岸は89F区内にあり、幅約50mを測る。時期に関しては出土遺物が少なく決め手にはかけるが、若干の土器、遺構等の関係より弥生時代後期以降と考えられる。

(3) C地区

方 形 SZ1201

周 溝 墓 89F区東端の標高8m程の微高地上で検出した。遺構の大半が調査区外となり、僅かに周溝の一部が調査できたにすぎない。周溝は幅1.5m・深さ60cm程度の規模であり、平面形態は不明な部分が多いが、北西隅に陸橋部を有するタイプの可能性が考えられる。遺物としては廻間Ⅰ式1段階に位置付けられる高杯・壺等が若干出土している。



第15図 SZ1201実測図(1:100)

4 III期の遺構

概 観 III期の遺構は、五条川の両岸にわたって遺構の広がりが見られる。しかしながら、II期段階で確認された竪穴住居のようなヒトの生活の痕跡を示すような遺構は検出されず、古墳・集石墓群といった“墓”に限定されるという状況がみられた。つまり、岩倉城遺跡におけるIII期段階は広く墓域として展開していたと理解できる。

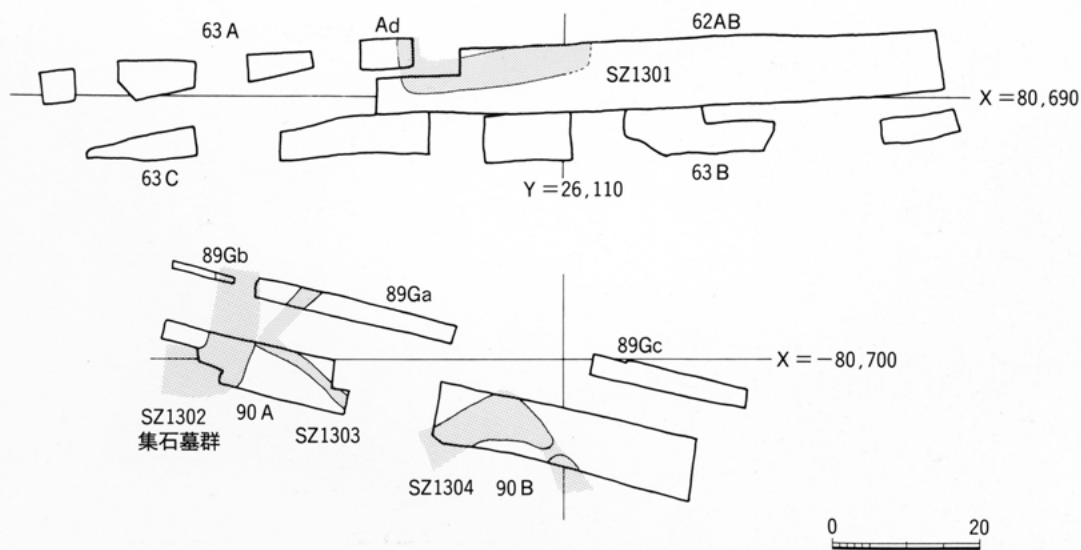
五条川の右岸で方墳1基、左岸において方墳3基・集石墓群（8基）を検出した。

古 墳 SZ1301

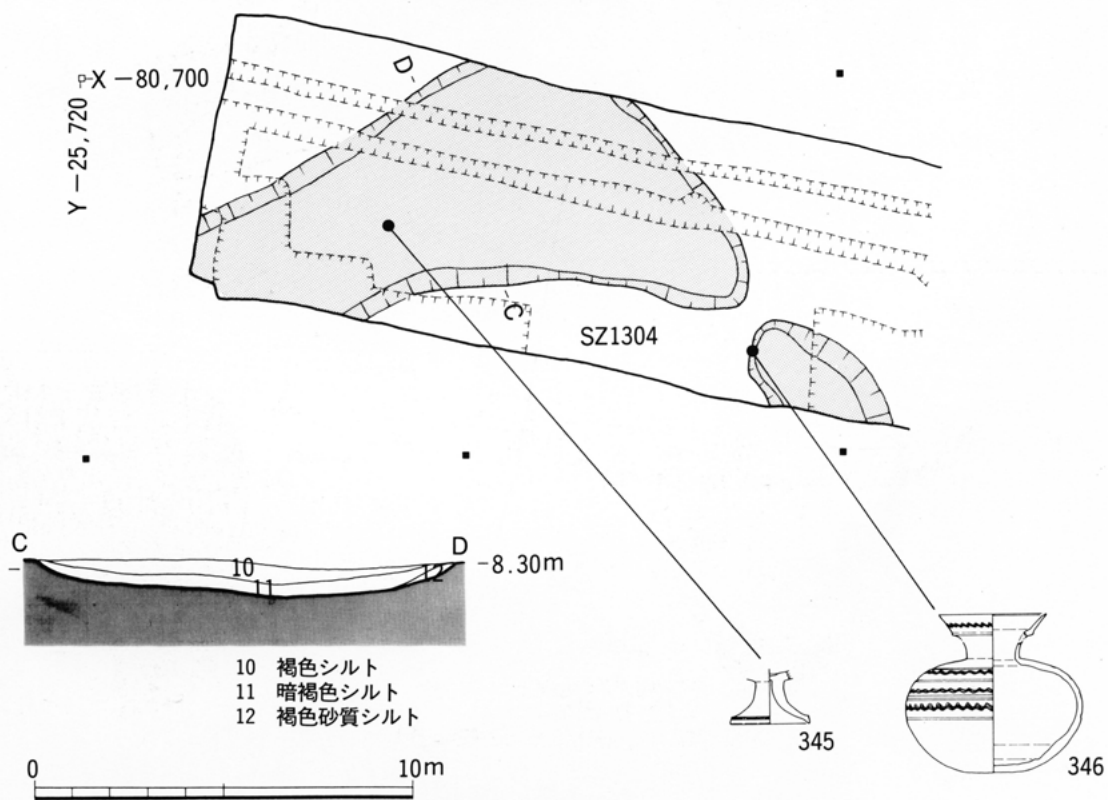
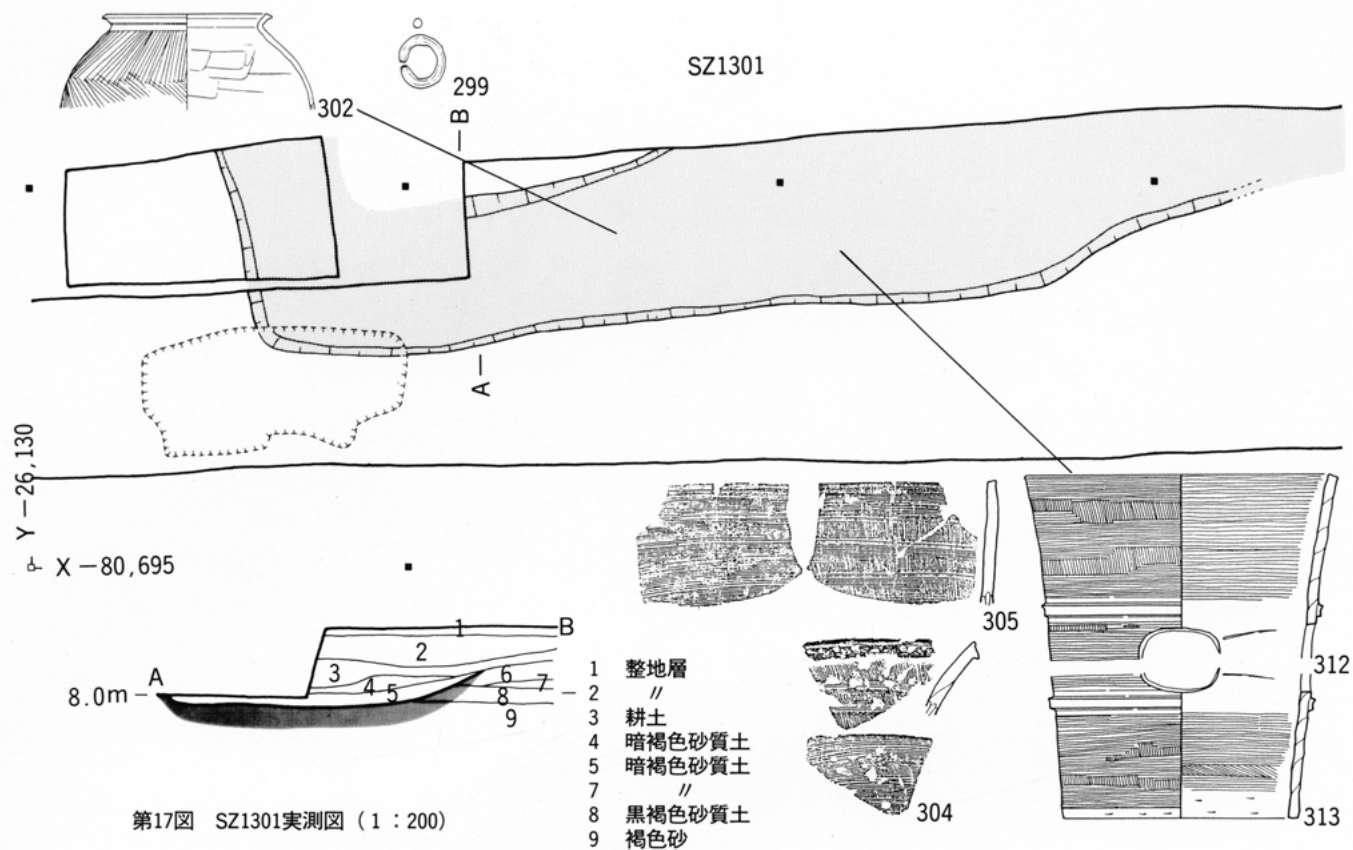
62B・63A d区で検出した。遺構の大部分は、調査区北方に残し、僅かに周溝の一部を約25mにわたって確認できたにすぎない。周溝は62B区内をほぼN-80°-Eの傾きをもってほぼ直線的に走り、62B区西でコーナー部となる。一辺26m程度の方墳と考えられよう。周溝の上部は攪乱および戦国期の遺構により削平され、残存状況は不良である。とりわけ東部分に関しては、遺構面まで攪乱がおよび完全に破壊されつくしていた。検出面より、周溝幅4m・深さ15cm程度を測り、上層より、暗褐色砂質土・黒褐色粘質土が堆積する。黒褐色粘質土内より、金環および尾張地方埴輪編年III-2期段階の円筒埴輪が転落した状態で出土した。

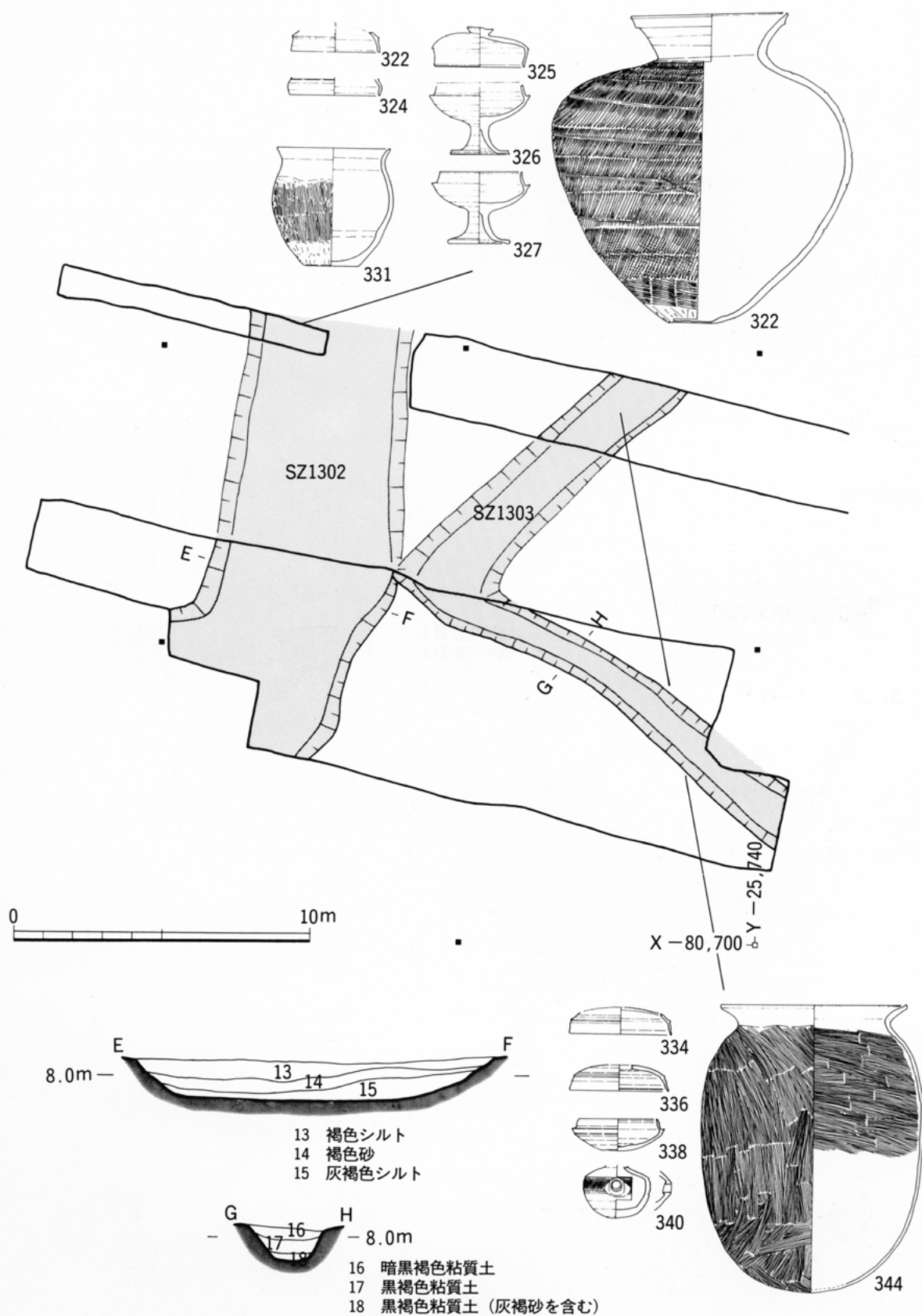
SZ1302

89Ga・90A区で検出。遺構の大半は調査区外となり、周溝の一部を確認できたにすぎない。周溝はほぼ南北方向に直線的に走り、90A区南で屈曲して西側に延びる（この延長状には生活道路を挟んで89F区があるが、89F区東端部分は攪乱により大きく削平されており、周溝の痕跡すら確認することはできなかった）。一辺17m程度の方墳と推定される。検出面で、周溝幅6m・深さ60cmを測り、埋土は上層より褐色シルト、褐色砂、灰褐色シ



第16図 III期主要遺構配置図（1：1000）





第19図 SZ1302、1303遺物出土位置図 (1 : 200)

ルトの順に堆積している。遺物としては、褐色砂層中より、6世紀前半代に比定される須恵器等が転落した状態で出土した。最上層において7世紀中葉前後の築造と考えられる集石墓群が8基確認された点が注目される。

S Z 1303

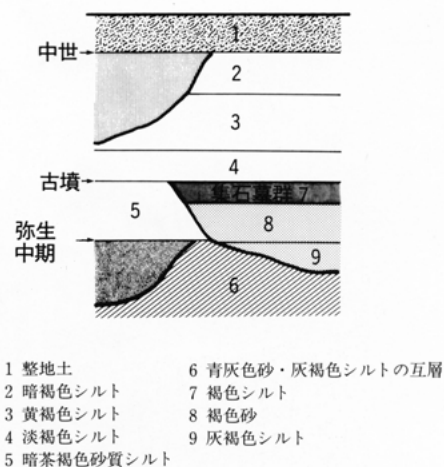
89G b・90A区で検出。遺構の大部分を欠くが、一辺13m程度の小規模な方墳と考えられる。89G b区で西側周溝の一部、90A区で南側周溝の一部を確認し、南側周溝に関しては、S Z 1302との切り合い関係が認められる（S Z 1302→1303）。周溝幅は1.2～2.0m、深さ60cmを測り、西周溝はやや広くなる。埋土は黒褐色粘質土であり、下層になるにつれ灰褐色砂を含む量が多くなる。遺物としては、7世紀を相前後する時期（下限は東山50号窯式を下る事はない）と考えられる須恵器および土師器長胴甕が出土している。

S Z 1304

90B区で検出。遺構の大部分は調査区南方に残し、僅かに北東コーナー部分を調査できたにすぎない。N-60°-Eの傾きをもちほぼ直線的に走る西側の周溝は広く、幅5.5m、深さ20cm測り、コーナー部分で北側周溝に接続する形で大きく張り出す。しかし、北側周溝とは完全には接続せず、ブリッジ状に掘り残しの部分が認められる。北側の周溝の大部分は攪乱により破壊されており、判然とはしないが、幅2.5m、深さ20cmを測る。埋土としては黒褐色シルトが堆積しており、埴輪片および東山111号窯式に伴行すると考えられる初期須恵器が出土している。

集石墓群 89G a・90A区で検出したS Z 1302周溝の最上層において、木曾川水系で産出する濃飛流紋岩を多量に利用し、長方形の埋葬施設を構築した特異な遺構を8基集中的に検出した。今、これら一群の遺構を「集石墓群」として総合する。

時期 遺構の所属時期について層位と出土遺物・他の遺構との関係性から考えてみたい。まず、層位より考えてみる。第20図に90A区の層位模式図を示した。図に明らかなように古墳時代の遺構が掘削されるのは第5層からであり、その上位にある第4層は古墳時代の遺物を若干含む遺物包含層となる。さらにその上位の第3層は遺物を含まない無遺物層である。集石墓群が構築されるのは第5層から掘削されたS Z 1302周溝の最上層である第7層中であり、無遺物層の第3層、および第4層にバックされた状態となっている。層位的には古墳時代の所産であることは明らかである。



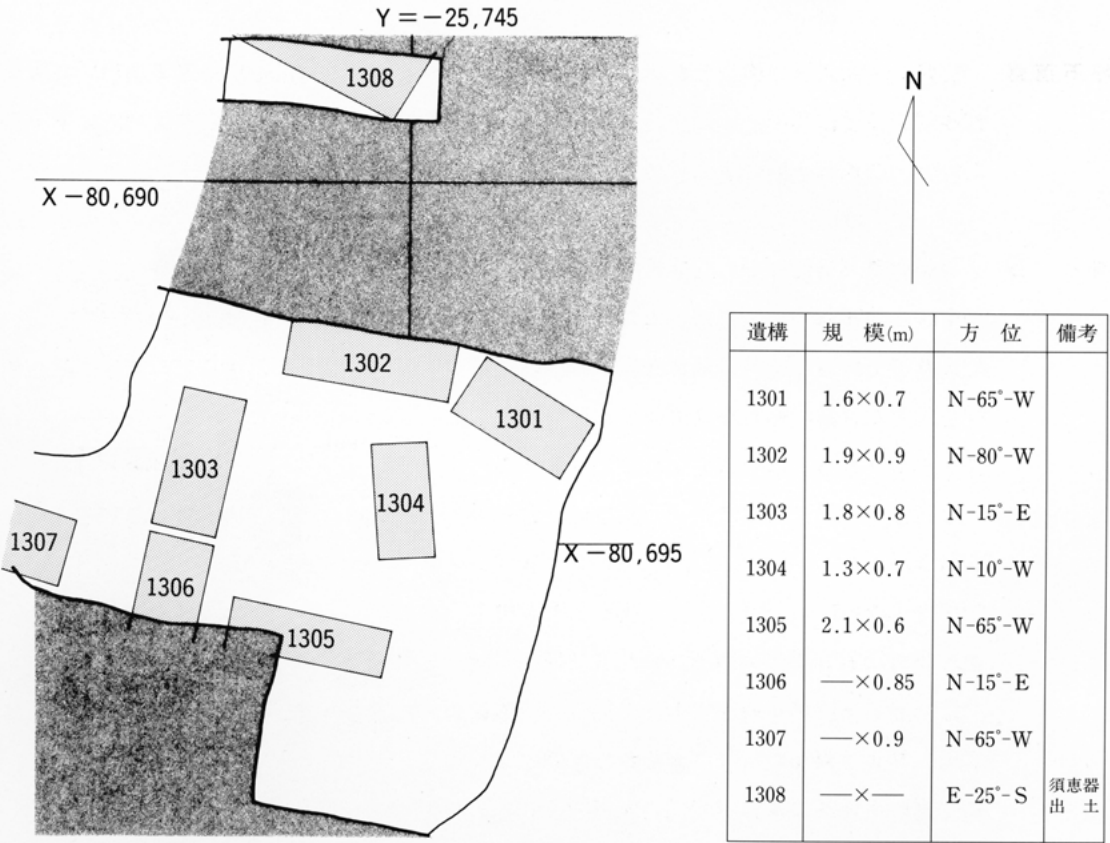
第20図 集石墓群層位模式図

次に、出土遺物・他の遺構との関連性より考えてみる。まず、集石墓群下の第20図第8層中より、6世紀前半代の遺物が出土しており、6世紀の前半を遡る可能性は考えられない。さらにS Z 1302周溝は7世紀を相前後する時期と考えられるS Z 1303周溝によって切られており、7世紀初頭を遡る可能性も低いと推察される。さらに、集石墓群内のS X 1308より、7世紀中葉に比定される須恵器提瓶が出土している点よりみるならば、概ね7世紀中葉を相前後とした時期、いわゆる古墳時代終末期に築造された遺構ということができよう。

特 色 この特異な遺構群の特色をまとめて記してみたい。以下の4つの大きな特色がみられる。

第一に、古墳の周溝という極めて特異な場所を選び（『特異な場所へ設置』）、群集して構築している（『群集性』）。検出された8基の遺構群は、幅6.0mを測るS Z 1302の周溝内を目一杯利用して構築されており、周溝からはみ出したり、周溝外に築造されることはない。また、群集する点よりみれば、明らかにある特別な空間を意識し設定していると考えられる。さらに、それらは東西方向・南北方向という方位がある程度意識されて配置されている（『方向性』）。

第二に、遺構の規模と形状であるが、規模的には長辺1.5～2.0m・短辺0.7～1.0mといづれも小規模である。また、遺構の形状には一定の規則性が認められる。遺構の形状はすべて長方形に人頭大の石をほぼ直線状に配置し、その内部は拳大の石をほぼフラットに



第21図 集石墓群主体部配置図（1：100）

主体部規模一覧

敷き詰めている点は共通するが、細部において若干の相違がみられ、大きく以下の2つのタイプに分類することができる。

・第Ⅰタイプ…周囲に人頭大の濃飛流紋岩を配置し、その内部に拳大の濃飛流紋岩を中心とした河原石を敷き詰めたもの。さらに内部の状況より2つに分けることができる。

Ⅰ a…内部を区画しないもの。S X1303・1304・1307・1308が該当する。

Ⅰ b…内部をさらに人頭大の河原石で区画するもの。S X1302・1306がある。

・第Ⅱタイプ…若干の窪地上の地形を利用して、人頭大の濃飛流紋岩をアットランダムに数段にわたって積み上げ、内部は拳大の濃飛流紋岩を中心とした河原石を敷き詰めているもの。S X1301・1305の2基が相当する。

第三に、集石に利用された石材は、先にも記したが木曾川水系で産出する濃飛流紋岩を利用している点である。これらの遺構に使用された石材は遺跡周辺で採取することは不可能なものであり、遺構構築のための目的意識を持った一定の労働力が必要であったと考えられる（『目的意識をもった労働力』）。

第四に、遺構が築造された周辺の環境であるが、発掘調査により確認された5世紀中葉以降の古墳時代の以降は、すべて墓に限定できる状態であり、住居跡のような生活の痕跡を示す遺構は検出されていない。また、遺跡の南方には、現在は消滅したが須恵器等を出土した古墳の存在が数基程度明らかとなっており、遺跡の周辺は古墳時代を通して墓域として機能していた可能性が強い（『環境』）。

以上の諸点をその特色として上げることができる。これらから導きだされる遺構の性格は、まず、第二の特色としてあげた規模・形状よりみるならば、単葬の棺を安置するための埋葬施設の可能性であり、それは、他の特色として指摘した『特異な場所への設置』『群集性』『方向性』『目的意識をもった労働力』『環境』等からも裏付けることができる。

これらの特異な集石遺構群は古墳時代終末期（7世紀中葉を相前後した時期）に築造された“墓”と想定できよう。

墓の構造 集石墓の構造について考えてみたい。以下の4つの段階を経て、構築されたと考えられる。

第1段階…墓の設定場所の決定

一定の規範の方位にあわせて、拳大の河原石を一定レベルでフラットに敷き詰め、棺の安置場所を決定する。

第2段階…棺の設置

棺自体は発掘調査で確認することはできなかったが、遺構の規模・形状よりみ
るならば単葬の棺であったと推定される。

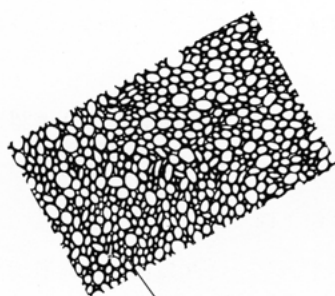
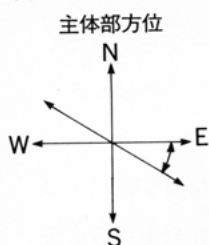
第3段階…周囲の区画の決定

棺の設置以後、棺の周囲に1段ないしは数団にわたって人頭大の河原石をほぼ
直線状に配置し、墓の区画を決定する。

第4段階…上部構造の構築

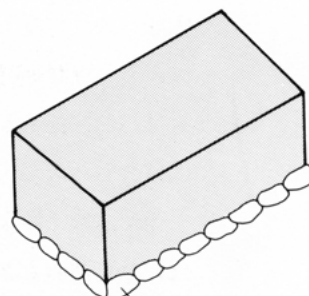
発掘調査では、上部構造を示す施設は確認できなかったが、検出時点において
多量の河原石が盛り上がった状態で出土しており、おそらく、棺を河原石ないし
は土で覆ったものと推定される。

〔第1段階〕 墓の設定場所の決定



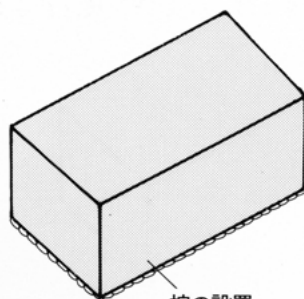
偏平な河原石を
敷き詰める

〔第3段階〕 周囲の区画の決定



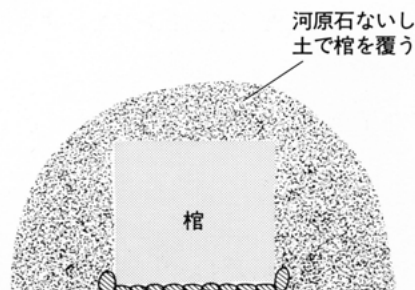
人頭大の河原石で
区画する

〔第2段階〕 棺の設置



棺の設置

〔第4段階〕 上部構造の構築



河原石ないし
土で棺を覆う

第22図 集石墓群の築造段階

以下、保存状況の良好なものについて報告する。

S X1301

S Z1302の周溝の東端にS X1302と近接して築造されている。遺構の東・南側は、水道管理設に伴う攪乱により欠損するが、北・西側の遺存状況は比較的良好である。遺構は、若干の窪地状の地形を利用して、人頭大の濃飛流紋岩をアットランダムに数段にわたって積み上げ主体部を構築したものであり、床面は拳大の濃飛流紋岩を敷き詰めたものである。規模は、長辺1.6m・短辺0.7m程度と考えられ、主軸はN-65°-Wに傾く。S X1305もほぼ同様な構造を持つ。

S X1302

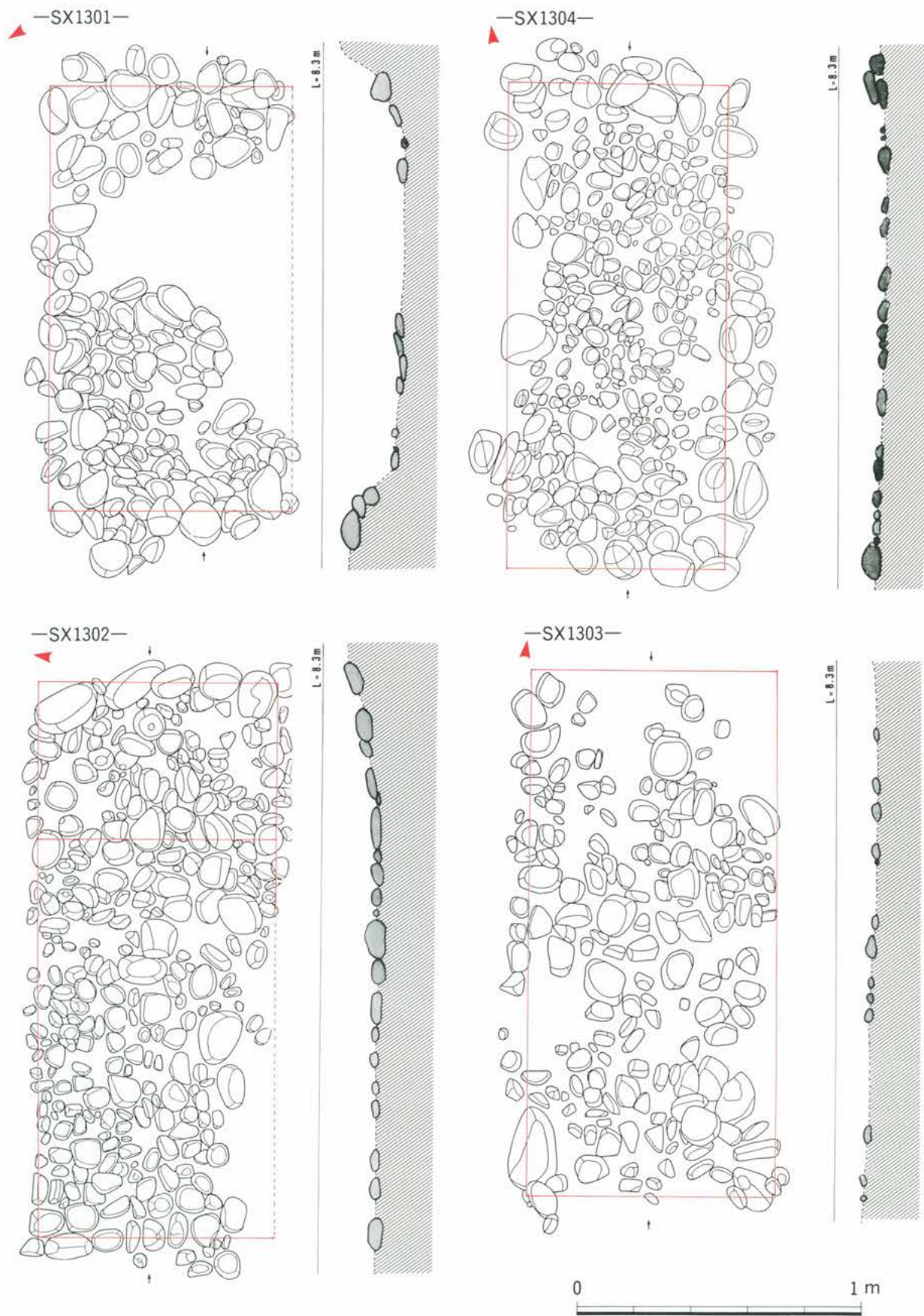
S Z1302周溝のほぼ中央付近に構築されている。遺構の南部分は水道管理設に伴う攪乱により破壊され残存しないが、概ね長辺1.9m・短辺0.9m程度の規模を有すると考えられる。遺構の構造は周囲に人頭大の濃飛流紋岩を配置し、内部に拳大の河原石を敷き詰めたものであるが、注目すべきは、内部東側0.5mをさらに人頭大の河原石で区画している点であり、S X1306も残存状況は不良ながら同様の構造を持つものと考えられる。主軸はほぼ東西方向を示す。

S X1304

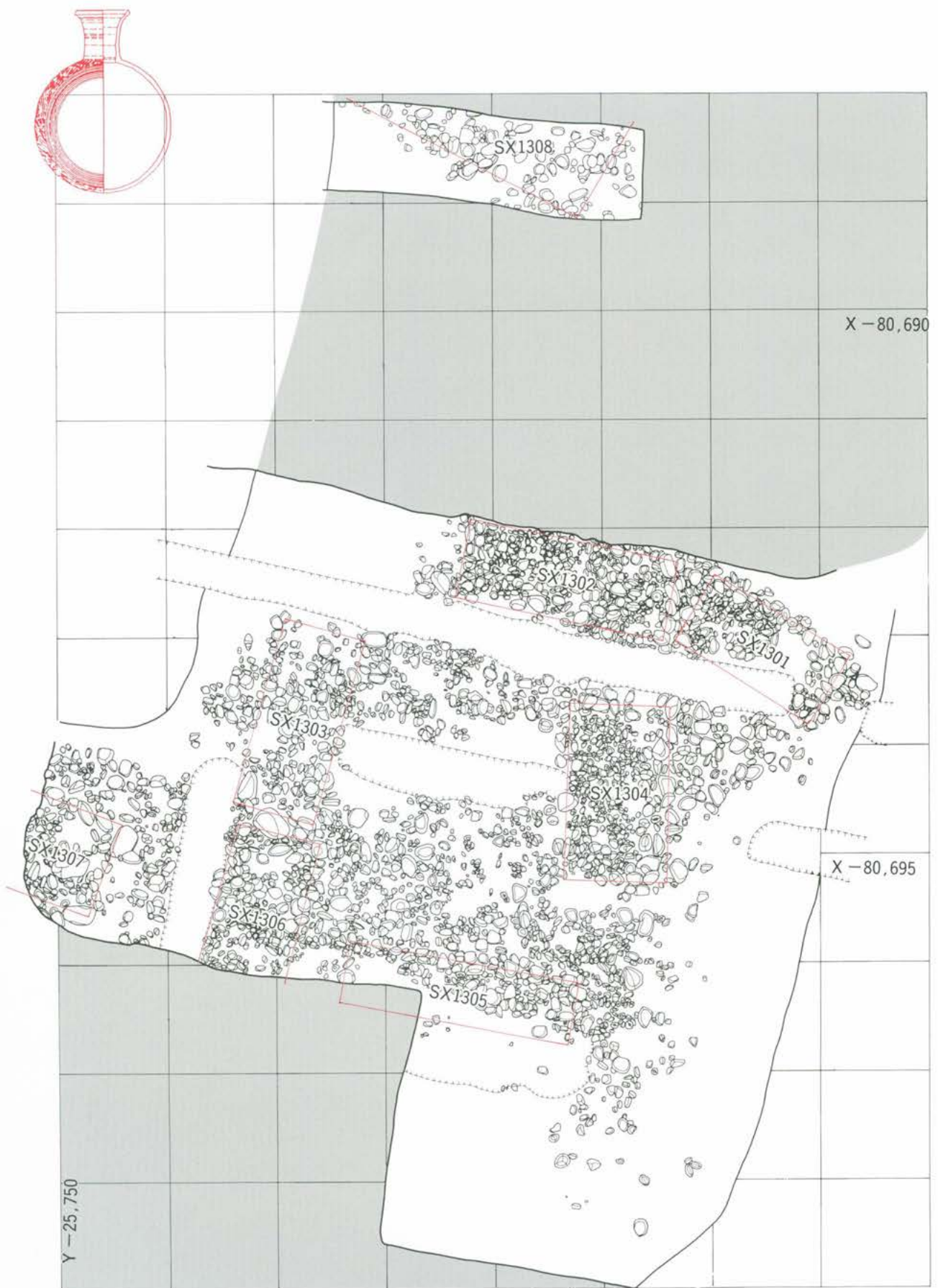
S Z1302周溝のほぼ中央付近に構築されている。今回の調査中最も保存状況が良好なものであるが、規模的には比較的小規模な部類に属す。長辺1.3m・短辺0.7mを測り、主軸はほぼ南北方向を向く。遺構の構造は周囲に人頭大の濃飛流紋岩を配置し、内部に拳大の河原石を敷き詰めたものである。保存状況は不良であるが、S X1303・1307・1308も同様の構造と考えられる。

S X1308

S Z1302周溝のほぼ西端付近で検出したものである。遺構の残存状況は不良であるが、主軸はN-65°-Wに傾き、S X1304と同様の構造を持つものと考えられる。注目すべきは今回の調査中唯一遺物が出土した点であり、集石内より、体部の一部を欠損するが、概ね完形に復元できるI-17号窯（古）段階の提瓶が押し潰れた状態で出土した。



第23図 集石墓群主体部実測図（1：20）



第24図 集石墓群遺構全体図 (1 : 50)

5 IV期の遺構

概 観 IV期の遺構・遺物は五条川の両岸で確認することができた。しかし、遺構は散在的な分布を示し、遺物量も決して多いとはいえない。大きく奈良時代のものと平安時代末期のものにわけることができる。

溝 S D1401

63B c 区で検出。幅1.7m・深さ30cmを測る。断面は緩やかなU字形を呈し、ほぼ南北方向に向かって走る。遺構は、北側に関しては、その延長が検出されておらず調査区を出たところで終束する可能性が高い。溝内の埋土は、暗褐色砂質土が堆積しており、上層より、O-10号ないしはIG-78号窯式に相当すると思われる須恵器杯身が出土している。

S D1501・1502

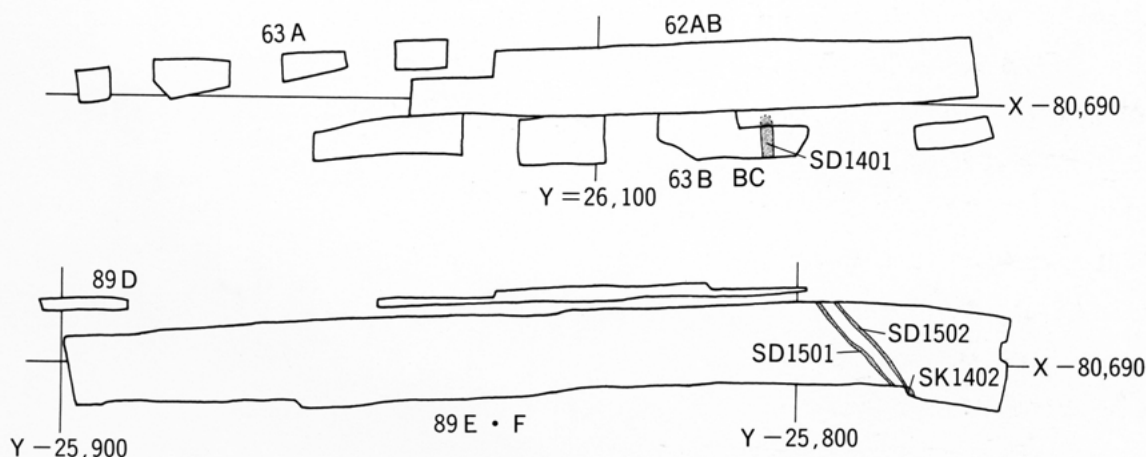
89F区東で検出。S D1501・1502ともに幅0.5m・深さ20cmを測り、約1.5mの間隔をもってN-40°-Wの方向に走り、「道」の可能性が考えられる。遺物としては少量であるが、H-72号窯式に併行する灰釉陶器が出土している。

土 坑 S K1401

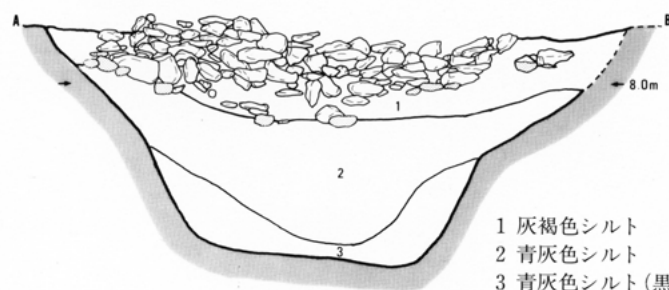
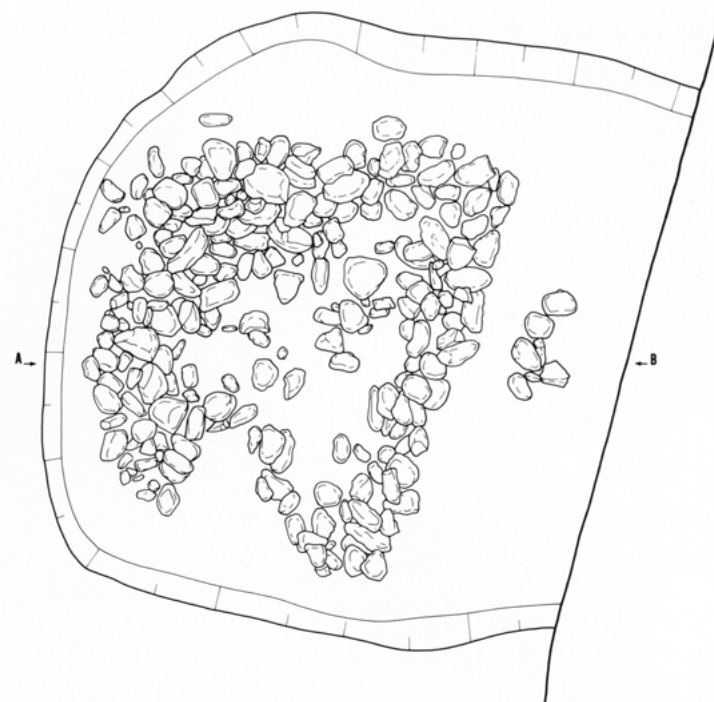
89F東で検出。遺構の大半を調査区外に残すため全体の形状・規模は不明であるが、径1.5m・深さ70cm程度の円形プランを呈する土坑と考えられる。遺構の埋土は淡青灰色砂質シルトが堆積しており、IG-78号窯式に相当すると思われる須恵器が出土している。

集石遺構 S X1501

90B区で検出した性格不明の遺構である。遺構の北側の一部は調査区外となるが、概ね4×4.5m、深さ1.3mを測るやや大型の長方形の土坑である。断面は2段掘りとなっている。埋土の状況は、第26図に示した通りであるが、下層より黒色粘質土を含む青灰色シルト、青灰色シルトの順に堆積しており、常時湿った環境にあったと推定され「井戸」の

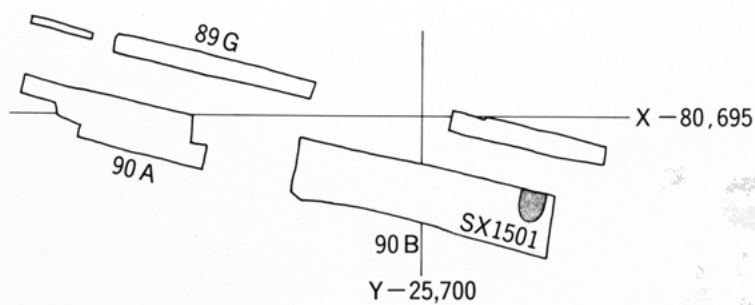


第25図 IV期主要遺構配置図 (1:1000)



- 1 灰褐色シルト
- 2 青灰色シルト
- 3 青灰色シルト(黒色粘質土ブロックまじり)

第26図 SX1501実測図 (1 : 50)



第27図 SX1501位置図

可能性も考えられる。

この土坑の最上層において人頭大の河原石を人為的に3.5m×3.1mの規模で方形に集積した石組みを検出した。石組みは基本的には1段であり中央部分がやや窪み、周囲が若干レベル的に高くなるという皿状の形状を示している。また、集積に用いられた石材は90%以上が濃飛流紋岩で占められている。

井戸状の土坑と集石遺構の関係は、井戸状の土坑が廃絶したのち集石遺構が築かれたものであり、土坑廃絶に伴う儀礼的な施設の可能性も考えられるが、類例の乏しい現段階では、その性格は不明と言わざるをえない。

集石内より、玉縁状の口縁を持つ灰釉陶器最末段階（百代寺窯式）の椀が出土している。

（服部信博）

6 V期の遺構

概要

中世の遺構は五条川の両岸に展開しているが、右岸では明瞭な遺構は少なかった。遺構には建物・溝・井戸などがある。

掘立柱建物 S B01

62B区で検出した掘立柱建物である。東西4間、南北3間。方向はN78°Eで、柱穴は平面形が円形で、検出面からの深さは30cmほどである。太さ約10cmの断面円形の柱の痕跡が残り、底には太さ20cm、長さ30cmの丸太を縦に半割し、平らな割れ口を上に向け、礎板とし、その安定のため拳大の礫を2～3個下に置いているものがある。遺物がほとんど無くわずかに山茶碗の小片が出土したのみで時期決定の根拠にやや欠けるが、層位的にはⅥ期の堀を検出した面より下層であることから、中世と推定した。

S B02

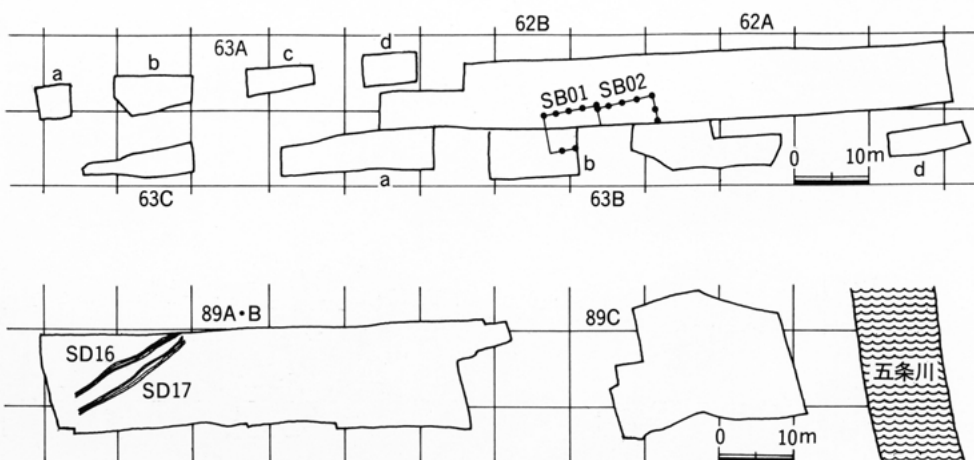
これも62B区で検出した掘立柱建物。東西4間、南北3間以上。この建物の柱の建て方もS B01同様、丸太材を半割した礎板に太さ15～20cmの細い柱を立てるもの。やはり遺物は山茶碗の破片しか出土せず、S B01同様、中世の遺構であろう。柱の東西方向の並びはN76°E。

井戸 S E03

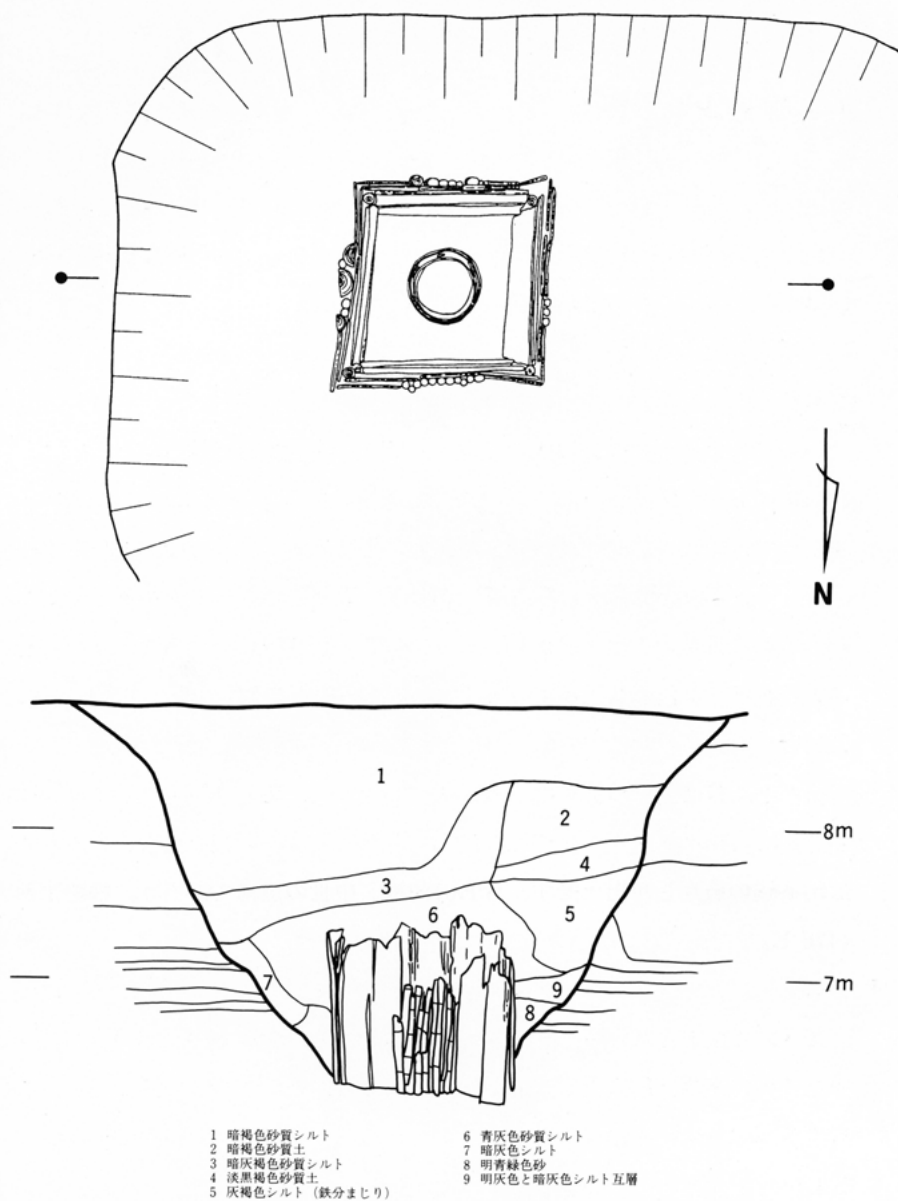
89F区で検出した井戸。検出面での掘形の直径は1.6m、井戸の底まで2m。井戸枠は曲物を使用。遺物は何も出土しなかったが、S E04との切り合い関係から、こちらがやや先行する。

S E04

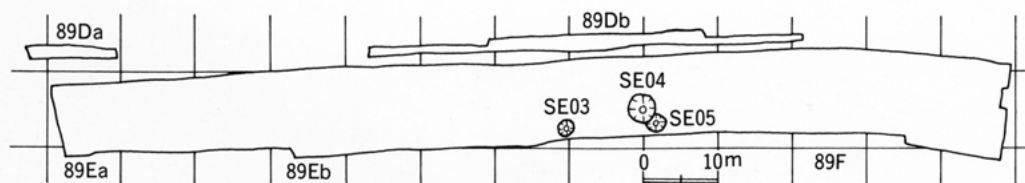
同じく89F区において検出した井戸。掘形は検出面で直径3.7m、検出面から井戸の底まで2.5mを測る。井戸の構造は次ぎの通り。曲物の外に太い丸太を4本立てる。先が二股に



第28図 五条川西岸Ⅴ期遺構位置図 (1/1000)



第30図 SE04平面図及び断面図



第29図 五条川東岸V期遺構位置図 (1/1000)

なった丸太を4本、柱と組み合わせて四角に組む。横たえた4本の丸太の上に切り欠きをつくった厚さ4cm、幅30cmほどの板8枚を組み合わせて1.1m四方の井戸枠を組んでいる。各辺の中央付近には板の外側に竹もしくは細い丸太を10本ほど立て並べてある。内側には直径50cmの曲物が2段重なって残っていた。掘形の埋土、井戸枠内、曲物内部から13世紀後半頃に比定できる灰釉系陶器が出土した。

S E05

同じく89F区で検出した井戸。検出面での掘形は、直径1.7m、深さ1.0m。14世紀前半の灰釉系陶器が出土した。

溝

S D16

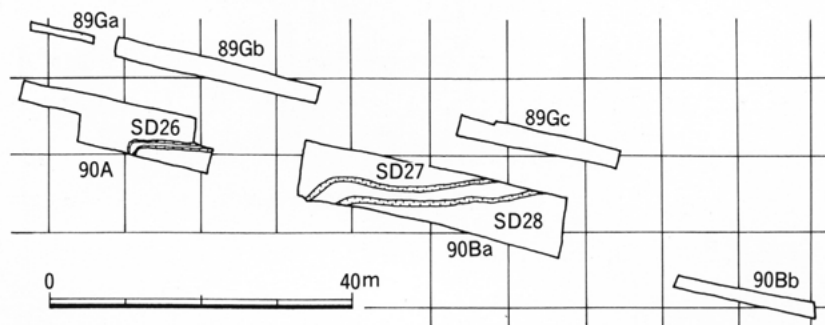
89A・B区の下層で検出した溝。幅0.5~1.8m、深さ約0.3m。東西方向に走り、およそN60°E。わずかに灰釉系陶器の小片が出土。

S D17

89A・B区の下層でS D16と並んで検出した溝。規模、方向共にS D16とほぼ同じ。戦国時代の遺構面より下で検出し、戦国時代の遺物をまったく含まず、灰釉系陶器の小片が出土。

S D26

90A区で検出した溝。幅1~1.8m、深さ1.1m、東西に走るが、西端で南に折れ曲る。灰釉系陶器、古瀬戸、常滑窯産の甕などが出土した。



第31図 五条川東岸V期の主要遺構



第32図 五条川西岸堀位置図

7 VI期の遺構

概要

五条川をはさんで東西約250mの位置で大規模な溝が見つかり、この範囲でVI期の遺構が確認できた。五条川西岸には岩倉城の主要部分が存在したと考えられ、東西120mの本丸は内部が溝で区画され、周囲は大規模な二重堀で囲まれていた。主殿があったと推定される本丸から西側は現代の攪乱や耕作などでかなり削平を受けており遺構の残存状態は悪かったが、東半分は表面が畑として耕作されていただけのため遺構の遺存状態はかなり良好であった。土坑やピットが多数検出された。

五条川の東岸250mの位置の溝は総堀と推定され外堀とほぼ同じ規模の溝で、五条川との間に同規模の溝がさらに2条確認され、ここにも岩倉城に付随する何等かの軍事施設や城下町が存在したものと想像される。

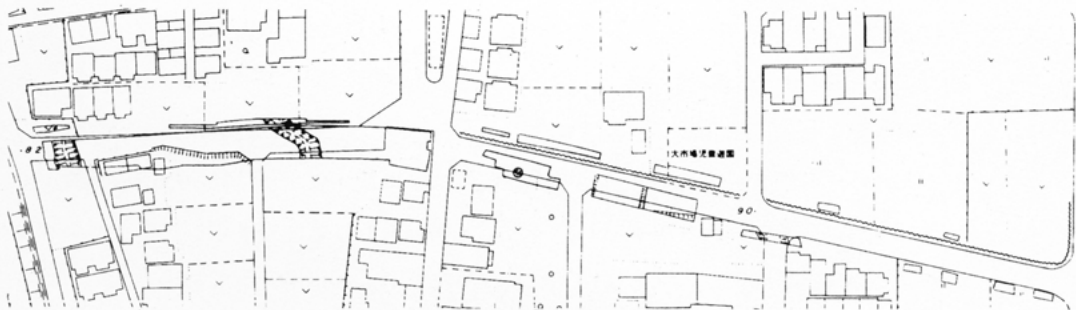
おもな遺構には、上述の堀に推定される大規模な溝7条、本丸内の区画溝4条を始め多数の溝、土坑、ピットなどがある。

外堀 SD01

63A a、63C区で検出した。63A a区はすべてが堀の中であり、堀の両端は確認できなかった。厚さ50cmの現代の整地層の下に廃材などがあり、堀の底は地表下3m（標高5.5m）で確認。63C区では現在の地表から1.5m下に約40°で傾斜する堀の東側法面を検出した。さらに2m下で底に達した。西側法面は調査区外になり、確認できなかった。地籍図と照合してみると堀の西側は、調査区の西を走る街道になることが容易に推定できることから、堀は街道と同じくN30°Wの方向に延び、幅約10m、深さ2mの箱堀と考えられる。底は平坦ではなくかなり起伏している。この堀の埋土は灰色粘質土であり、滞水性を示している。遺物は少なく、細片ばかりであるが、窖窯末期から大窯Ⅱ期までの瀬戸・美濃製の陶器が出土している。他に漆碗、木彫地藏菩薩像が出土。

内堀 SD02

62B、63A c、63A d、63B a区で検出した。63A d、62B、63B a区で堀の東側の肩を標高約8.5mで検出。西へ約35°の傾斜で下がるのが確認できた。方向はSD01に平行



第33図 五条川東岸堀位置図

し、N30°W。63A c区はすべて堀の中で、地表下2 mで明治時代の一括遺物を確認した。さらに下の灰色粘質土から土鍋や羽釜や同心円の圏線が内面にある灯明皿などが出土した。いずれも大窯期の遺物である。調査時期に雨天が多く、また調査区が狭いため周囲を急傾斜にしすぎたこともあり、周囲の壁が崩壊し、北側の民家にまで影響を及びそうであったため、底を確認することも土層図を描くこともできずに埋め戻さざるを得なかった。63B a区も調査区の幅が狭く、雨天が多いこともあり、安全確保のためやはり底を確認することなく埋め戻さざるを得なかった。この調査区の西端で、底と西側法面を確認するためパワーショベルで部分的に掘削したが、地表下4.5mまで下げても堀の底に達せず、西側法面も確認できなかった。なお63A b区では地表下1.5mで黒褐色(2.5Y3/2)粘質土が確認され、それより下は有機物の量の多少によって色の濃淡はあるものの水平な自然堆積を示していた。いずれからも遺物は出土しなかったし、遺構も何等確認できなかった。この場所はS D01と02に挟まれた場所で幅約15mで南北にのびる帯曲輪のような場所であったと考えられる。したがってS D02の推定規模は、幅約23m、深さは3 m以上になる。遺物はS D01同様大窯I・II期が中心で、堀は16世紀前半と考えられる。

区画溝 S D03

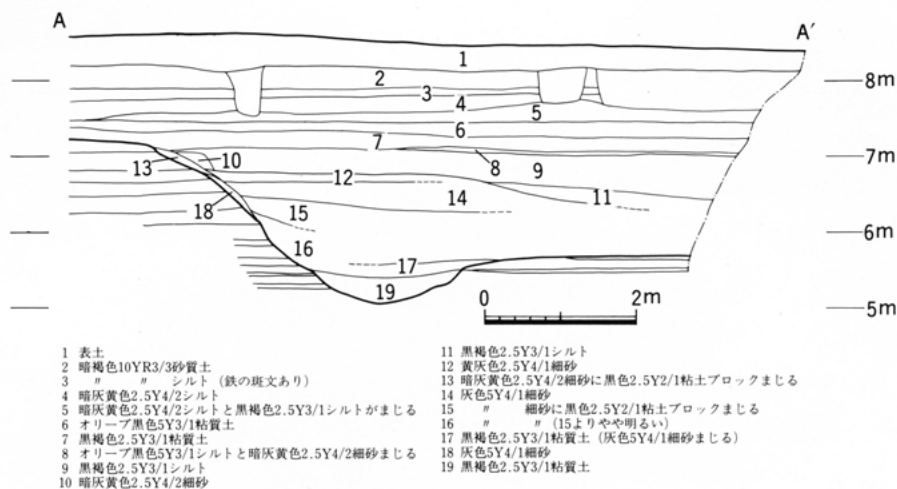
62A、62B、63B c区で現在の地表から約0.5m下、標高9.2mで検出。溝の規模は、およそ幅5 m、深さ2 m。方向はS D01、02にほぼ平行しN30°W。埋没後、幅5 m、深さ1.5mで東へ1 mずれた位置に掘り直されている。最初の溝をS D03下層、掘り直し後の溝をS D03上層とする。下層は滞水性を示す灰色粘質土が埋土で少量の土師質皿、青磁のほか木製品が出土した。上層も埋土は灰色粘質土であるが、下層との境には西側から土師質皿の細片がわずかに混じる粗い砂が大量に落ち込んでおり、両者を区分する目安になった。上層の埋土中の遺物には、弥生時代後期の土器、円筒埴輪、古瀬戸、灰釉系陶器などもわずかに混じるが、大量の遺物のほとんどは土師質皿と木製品が占め、大窯I・II期の瀬戸・美濃製の陶器、常滑製の甕、青磁・白磁・染付が少量加わる。竹箕や茶笥も出土。

S D04

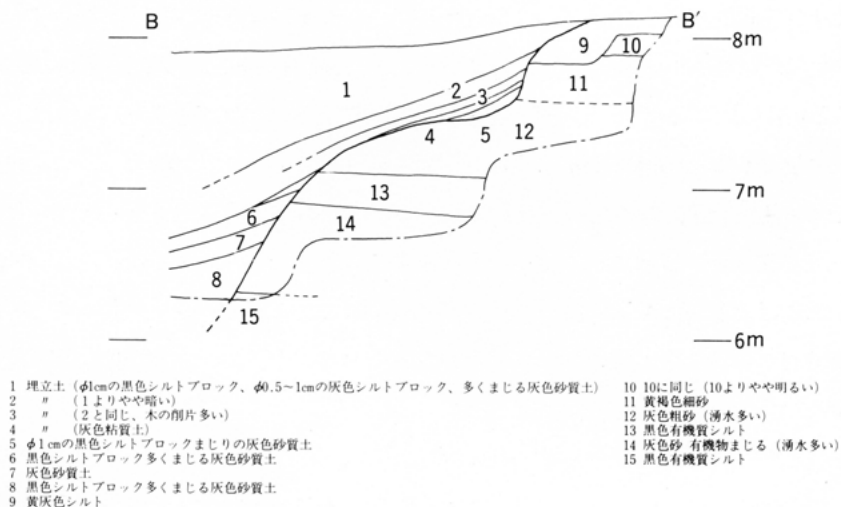
62A区で標高8.9mで検出。S D03と直交する。調査時の所見によればS D03上層に切られることからS D03下層と同時期に存在したと推定。幅2.7m。深さ0.9m。長さ13m。土師器の皿や瀬戸・美濃の陶器、青磁のほか、埋土は下半分が灰色粘質土で滞水性を示すため、竹籠や下駄などの木製品も遺存していた。

S D05

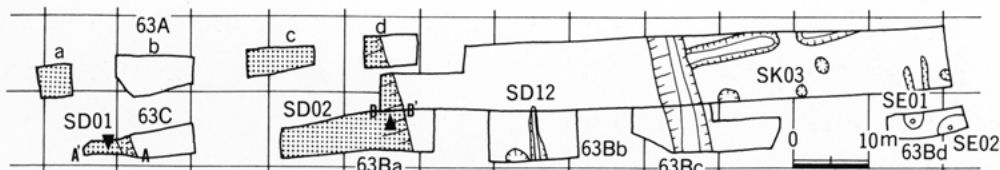
62A区でS D04の東の延長上で検出。北側が調査区外になるために幅は不明だが、S D04と同規模らしく、幅3 m、深さ1 mほどと推定。残念ながら、防火水槽の掘削によってその大部分が破壊されており、確認できた長さは8 mにすぎない。埋土は灰色粘質土で、かなり集中して土師器皿が出土した。瀬戸・美濃の陶器は少ない。箸、折敷などの木製品が多い。なお、S D04との間には掘り残しがあり、ここが土橋として利用されていたものと考えられ、上面は標高9 m、堅くしまっており、土橋の推定復元幅は2 m。



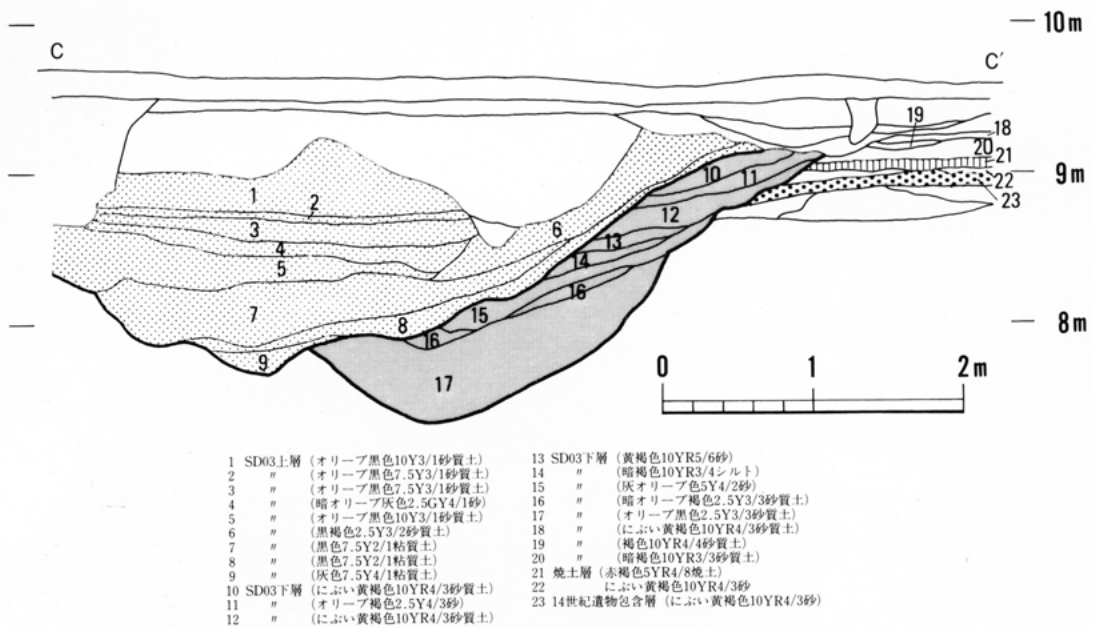
第34図 SD01断面図



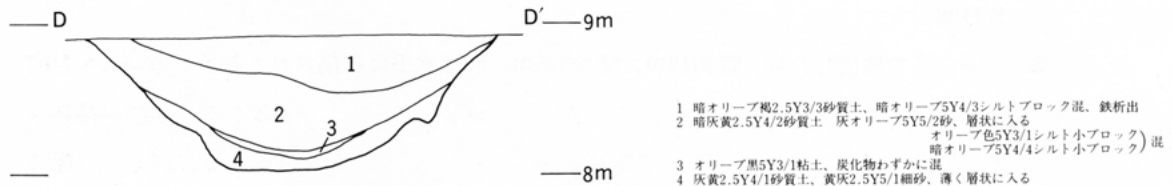
第35図 SD02断面図



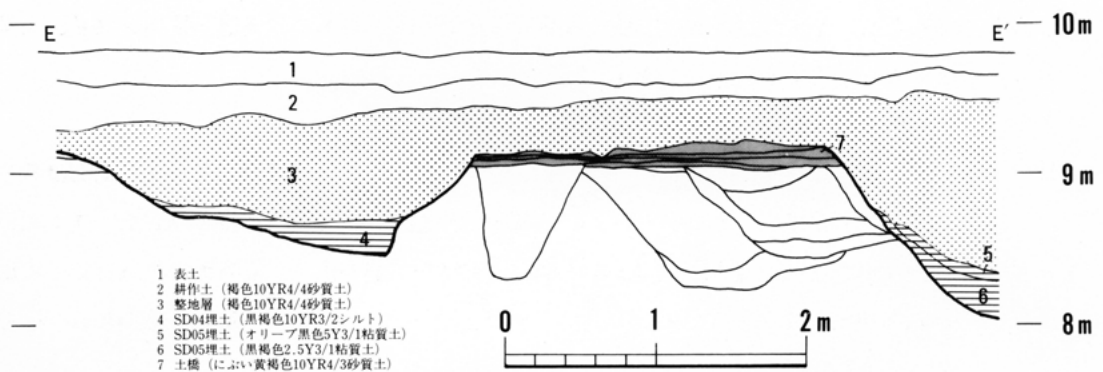
第36図 断面図実測位置図



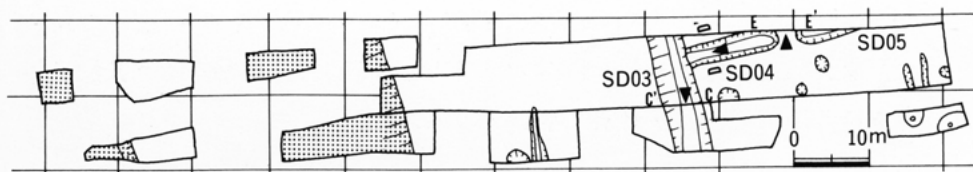
第37図 SD03断面図



第38図 SD04断面図



第39図 土橋断面図



第40図 断面図測図位置図

S D06

89A区西端で検出した溝。方向はS D01～03と平行しN30°Wに延びる。幅3 m、深さ1.7 m。いったん埋没後、やや東側へずれて掘り返されている。新しい溝の埋土は暗褐色～暗青灰色シルトで、大量の土師質皿や瀬戸・美濃の陶器が出土した。古い溝の埋土は灰色粘質土で滞水性を示し、下駄や箸などの木製品が多量に出土した。規模や掘り返しのある点、遺物の多さなど、この溝はS D03と類似点が多く、溝の規模から堀といい得るものの、防

区画溝 御というより本丸内を区画する機能を持つ溝と考えられる。

S D07

89B区で検出した幅20 m、深さ7 mの堀である。方向はやはりS D01～03とほぼ同じ。

内堀 西側は約30～55°、東側は約50°で法面が傾斜しており、湧水のため全部を確認できなかったが底はほぼ水平になる箱堀と推定できる。埋土は暗青灰色シルトで、滞水性を示し、最下層から大窯Ⅰ・Ⅱ期の瀬戸・美濃製陶器が僅かに出土した。規模からS D02に匹敵し、時期的にも矛盾せず、両者が本丸を取り囲む内堀と推定できよう。なお調査区外になるが廃土置き場の関係から堀の北側20 m付近を調査することができ、この辺りでSD07が緩く西へ曲がることを確認した。

S D08

外堀 89C区で検出した堀。幅約12 m、深さ3.5 m。底は水平に掘削された箱堀。方向はS D07に平行する。埋土の最下層は黒褐色シルトで、滞水性を示す。遺物は少ないものの播鉢、天目茶碗、四耳壺などの瀬戸・美濃製陶器が出土した。大部分が大窯Ⅰ期に属し、Ⅱ期に属するものはほとんど無い。調査区の南壁においてこの堀の断面部分で小規模な断層を確認できた(Ⅳ-4、P127参照)。層位から天正地震に際して発生した断層の痕跡の可能性が考えられる。なおS D08とすぐ西のS D07との間は約20 mあり、遺構が検出されず、土塁などの存在の可能性が高いが確認できなかった。

S D09

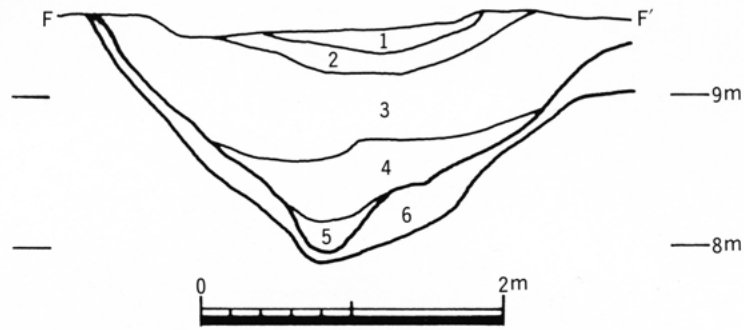
五条川の東約20 m、89D a、E a区で検出した。幅8～9 m、深さ2.5 m、断面は緩やかなV字形の薬研堀。S D01～03、07、08に平行する。埋土は暗灰褐色砂質土シルトで、滞水性は示さない。遺物は、大窯Ⅰ期の瀬戸・美濃の陶器が出土。五条川に接近していることから当初堀を検出することをまったく予期しなかったが、規模、遺物の時期から、堀と認めざるを得ない。

S D10

89D b、89F区、S D09の東約70 mで検出。幅8～9 m、深さ2.5～3 m、断面は緩やかなV字形である。今まで述べた堀とは異なり、N50°WからN5°Wへと途中で大きく屈曲する。埋土は暗茶褐色砂質シルトで、この事からS D10は空堀であった可能性が高い。やはり瀬戸・美濃の大窯Ⅰ・Ⅱ期の遺物が出土した。

S D11

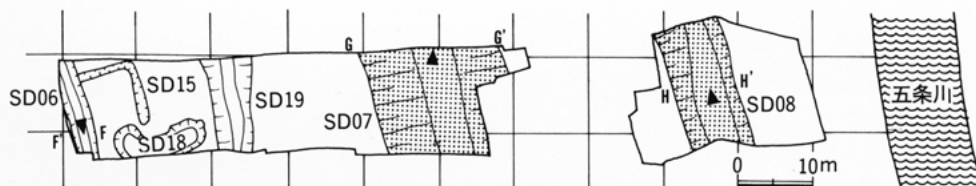
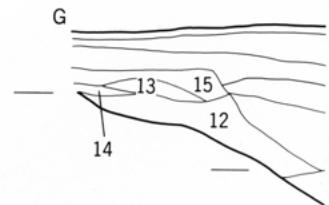
S D10よりさらに東150 mの位置、90B b区で検出した。中央を生活道路のため掘り残さ



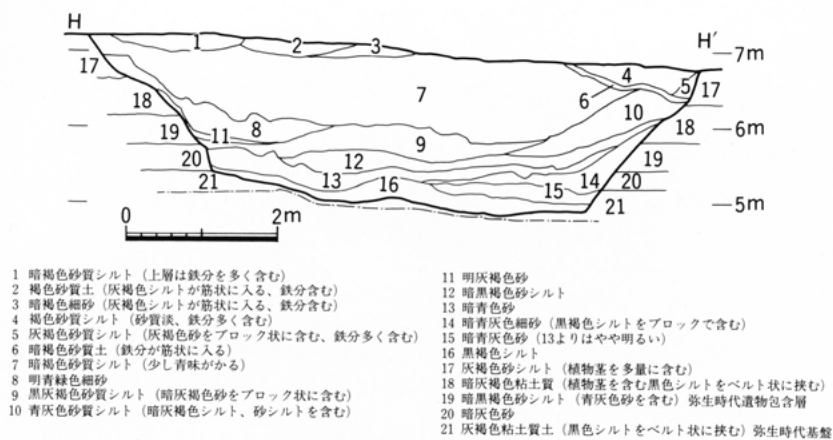
- 1 褐色砂質シルト（黄褐色砂ブロック）
- 2 暗褐色砂質シルト（炭化物、土師皿若干）
- 3 暗褐色シルト（炭化物、土師皿多量、灰褐色シルトブロックまじり）
- 4 暗青灰色シルト炭化物、土師皿木製品若干）
- 5 淡青灰色砂と灰褐色シルトの互層
- 6 灰褐色シルトと黄褐色砂の互層

第41図 SD06断面図

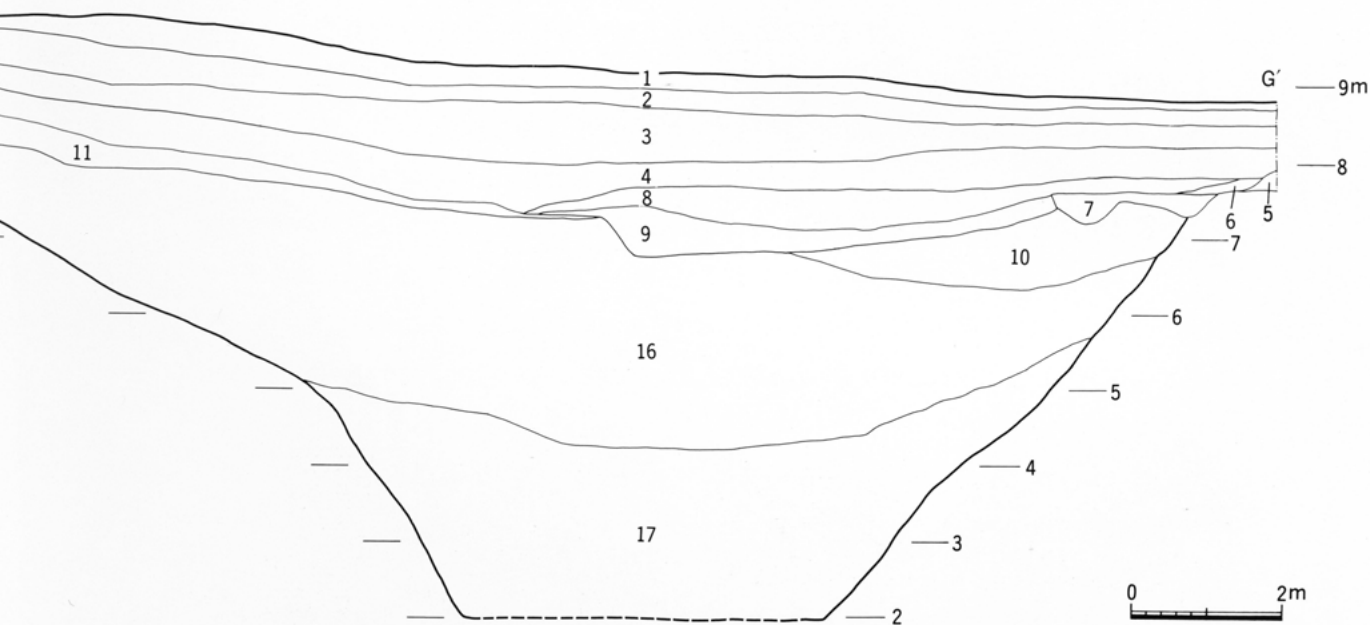
- 1 盛土
 - 2 耕作土
 - 3 褐色砂質土
 - 4 褐色砂質シルト
 - 5 茶褐色砂質シルト
 - 6 黄褐色砂質土
 - 7 暗褐色シルト
 - 8 茶褐色・灰褐色砂の互層
 - 9 淡青灰色砂
 - 10 暗灰褐色シルト（青灰色砂と黒褐色シルトブロックまじり）
 - 11 淡青灰色砂質シルト（暗茶灰色・黒色シルトブロックまじり）
 - 12 黄褐色砂（茶褐色・灰褐色シルトブロックまじり）
 - 13 黄褐色砂
 - 14 茶褐色シルト・灰褐色砂・暗茶褐色砂の互層
 - 15 灰白色シルト（黒褐色・灰白色シルトブロックまじり）
 - 16 暗青灰色シルト（黒褐色シルト能ブロックまじり）
 - 17 暗灰褐色砂・暗褐色シルトの互層
- 上層はシルト砂ブロック含む
下層はシルト層が厚く黒褐色シルトブロックまじり



第42図 断面図実測位置図



第43図 SD08断面図



第44図 SD07断面図

ざるを得なかったが、東と西の法面を確認できた。幅10m、深さ3m、断面箱形の堀。埋土からの遺物は極めて少ないが、大窯Ⅰ期の瀬戸・美濃の天目茶碗などが出土した。この溝を境として、東側からはまったく戦国期の遺構・遺物が見られず、岩倉城の東限を示す堀といえる。

S D12

63B b区で検出した溝。南北に堀とほぼ平行して伸びる。幅2m、深さ1m、長さ8m、南端2mより北は最近の耕作によってかなり深く削平をうけている。茶臼のほかには僅かに戦国期の陶磁器が出土した。

S D15

89A・B区で検出した溝。S D06から東に9m延び、ほぼ直角に南に曲がり、8m延びて終わる。

S D16

89A・B区でS D06とS D07の中間で検出した溝。幅5m、深さ0.4m。

S D18

89A・B区でS D06が南へ曲がった突き当たりで検出。東西12m、南北4m。

S D20

89E区で検出した溝。幅2.5m、深さ0.8mで少し湾曲するが、S D09とS D10を結ぶ。

S D21

89E区で検出した南北に伸びる溝。幅1.5～2m、深さ1m。S D10に切られる。

井戸 S E01

五条川の西、記念碑のすぐ北側の63A d区で確認した井戸である。検出面は標高8.2mと高いが、湧水などの影響で調査が徹底的には実施できなかった。掘形直径2mで、直径0.5～0.8mの竹のタガのみが上下5段残っていた。結桶の井戸を廃棄するに際して、側板を再利用するべく抜き去ったため、タガがそのまま地中に取り残されたもの。掘形の埋土から大窯期の天目茶碗の破片が出土したのでⅥ期の遺構と断定した。

S E02

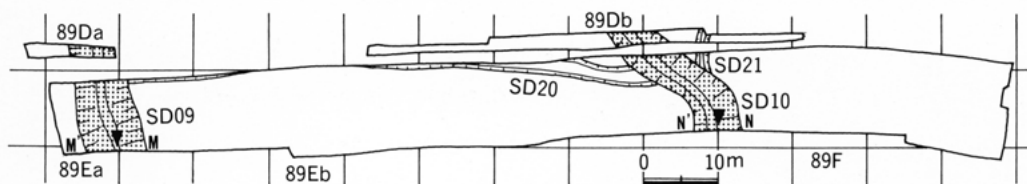
63A a区のS E01の東で確認。掘形はかなり漠然として捉えがたかった。竹のタガと木製の楔のみが残存。この井戸も本来は結桶を内部に持つもので、井戸の廃絶時に桶を抜き取ったものである。遺物はほとんど何も出土せず、また底まで調査することができなかった。検出面がS E01と同じであり、井戸の構造も同じであることからほぼ同時期の遺構と推定。

S E06

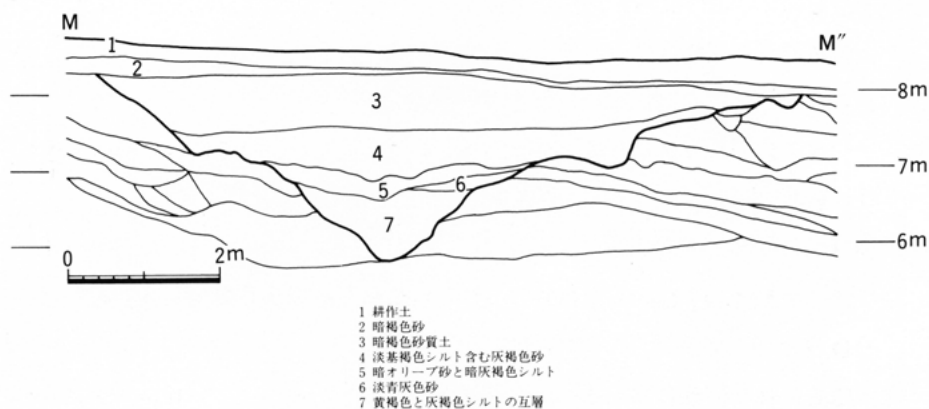
90A区で検出した結桶を用いた井戸。掘形の直径2m、桶の直径0.5m。深さ2m。桶の残存状況はかなり良好。

廃棄土坑 S K03

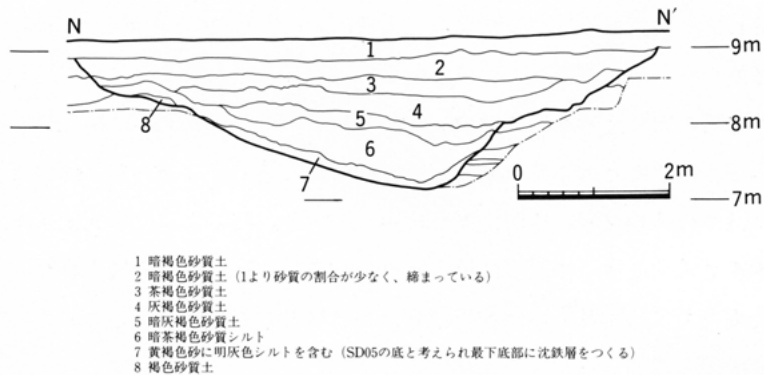
62A区で検出した廃棄土坑。長径2m、短径1.5m、深さ0.75m。土師器皿を大量に出土。他に瀬戸・美濃窯産の天目茶碗の細片1点と香炉1点を出土した。(松原隆治)



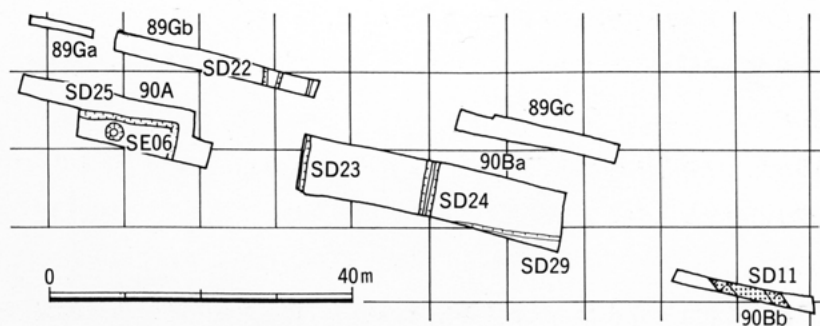
第45図 断面図実測位置図



第46図 SD09断面図



第47図 SD10断面図



第48図 90A区、B区VI期遺構位置図

III 遺物

1 I 期の出土遺物

(1) 縄文晩期の遺物

縄文晩期の遺物は細片が多く、全体の形状の判明する資料は少ない。以下、遺構より出土した資料を中心に説明していきたい。

竪穴住居（第49図1～8）

S B 1102 いずれも細片であり、器形等不明な部分が多い。口縁部の状況が判明する資料として、1・2がある。1は、器面を貝殻ケズリによって調整する粗製土器であり、端部は丸く収める。2の口縁端部は平坦に仕上げられ、口縁直下には幅広の浅い沈線が2条認められる。他は体部の細片であり、3・4は条痕調整を施す。

S B 1003 量的には、最も多く出土したが、他の遺構出土資料と同様に細片が多い。口縁部の状況はある程度推定できる資料として、5・6がある。5は口縁直下に突帯を巡らす。6は、口縁端部を丸く収める粗製土器である。体部の調整は、ケズりおよび条痕による調整がみられる。9・10・11は、器面を板状工具によってケズりあげたものであり、9・10は砂粒の動きが顕著である。8・12は貝殻を使用して器面を調整したものであり、12の内外面ともに条痕の痕跡が残る。7は、器面に2状の平行沈線と縄文を施したものであり、他地域との関連が考えられる資料である。

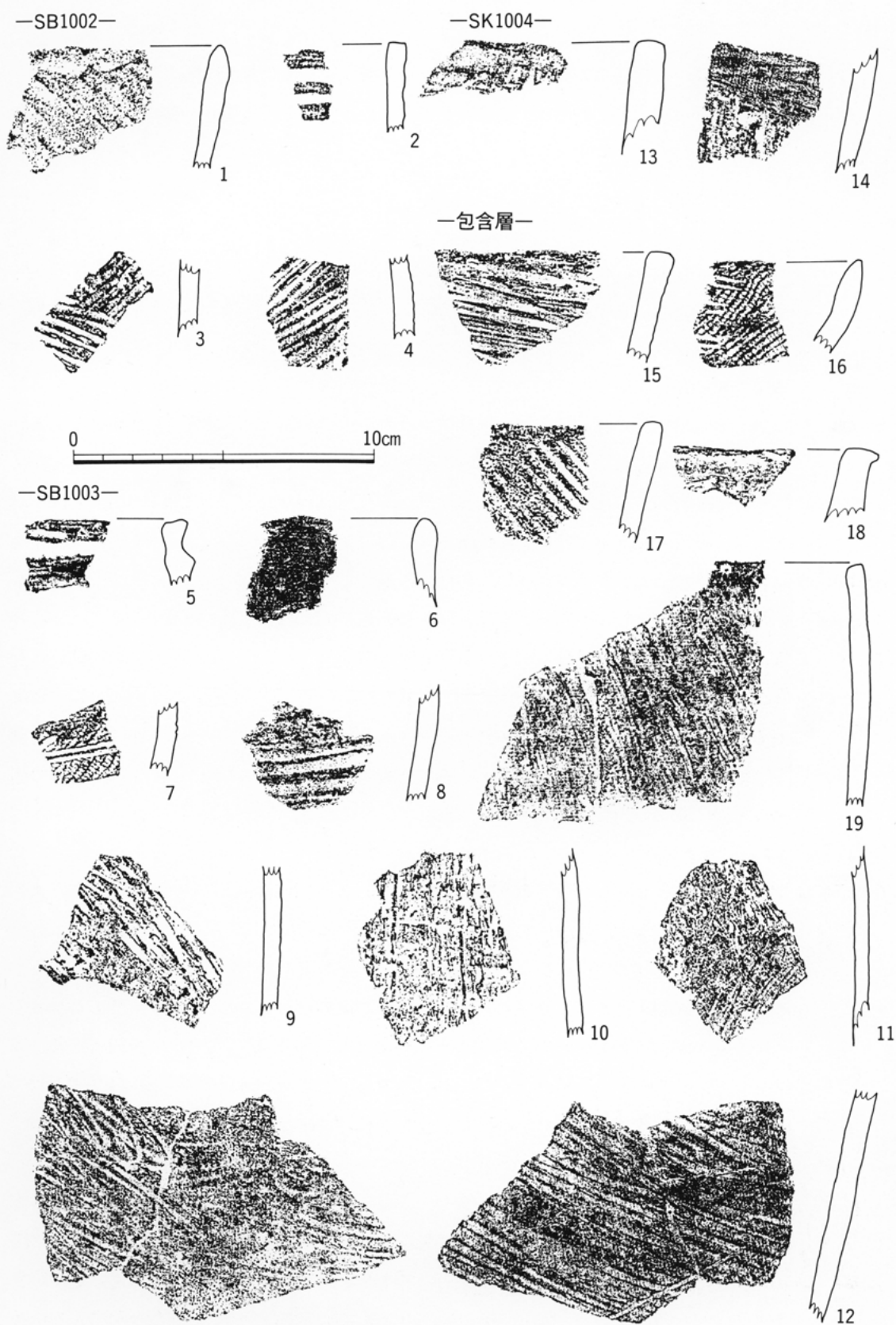
土坑（第49図13～14）

S K 1004 13は口縁端部を面取りし、平坦に収める粗製土器の口縁部片であり、14は器面を板状工具によりケズり上げた体部片である。

包含層出土遺物（第49図15～19）

15は、貝殻条痕が施される粗製土器であり、口縁端部は面取りされ平坦に収められる。17も同様に器面には条痕が施され、口縁端部は平坦である。18・19は器面を板状工具によりケズり上げたものであり、18の口縁端部は、面取りに伴う粘土のはみ出しが認められる。19の器面には砂粒の動きが顕著に残る。また、16は器面に縄文を残しており、他地域との関連が考えられる資料である。

以上、紹介してきた資料は、大半の資料が文様等を施さない粗製土器であり、時期決定を行ううえにおいて決め手となる要素に欠ける。しかし、わずか1点ではあるが突帯を施す資料がみられること、粗製土器の口縁端部は面取りされた平坦な形状を示すものが多くみられることなどより、縄文晩期終末期に位置付けることができるであろう。



第49図 I 期縄文晩期の遺物 (1:2)

(2) 弥生中期

弥生中期の遺物の遺物は、細片が多く全形を窺うことのできる資料は少ないが、概ね中期中葉・貝田町式期を主体とする遺物と考えられ、その様相は南方に隣接する曽野遺跡のあり方と酷似している。

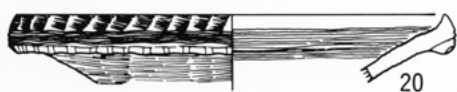
溝（第50図 20～40）

- S D 1101 壺と深鉢がある。20は条痕を器面に施した壺の口縁部片であり、口縁部はやや受け口状となる。21・22は貝田町式期の細頸壺であり、22は円形浮文が残る。23・24は壺の体部片であり、23は羽状のへら描き文を、24には貝殻刺突が認められる。15は口縁内面に刺突を残す条痕の深鉢である。
- S D 1102 26は、口縁内面に刺突と波状文を施す条痕の深鉢であり、27・28は壺の体部片である。28は櫛描き横線文帯びをはさみ、無文帯が残るので細頸壺と思われる。
- S D 1103 わずか1点のみの出土であるが、29は貝田町式期の太頸壺であり、頸部は長く直立気味に立ち上がり、へら描き沈線文を6条施している。内面は横位のハケメを残し、頸部から体部への変換点には指圧痕が明瞭に確認できる。
- S D 1104 この遺構も遺物の出土量は少なく、30の細頸壺の口縁部片と31の壺底部片をわずかに確認できたにすぎない。
- S D 1105 32～39は壺の体部片、40は条痕を羽状に施した深鉢？の体部片、41～43は甕の口縁部および底部片である。32は太頸壺の体部片と考えられ、横線文およびへらの刺突を器面に施している。35・36は単斜方向の縄文を施したものであり、当地方の中期の土器にまみられるものである。37・38は細頸壺の体部片であり、37は突帯上に刻みを残している。

包含層（第51図）

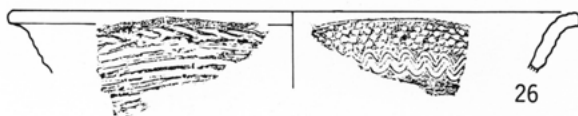
土器と石器がある。まず土器であるが、44～53は壺、54～56は深鉢口縁部片である。44は広口壺の口縁部片であり、口縁端部上位に刻みを施している。45・46はへら描き文が認められるものであり、45は1条の沈線を介して、その上下に斜格子文が施されている。47は太頸壺の頸部片であり、多条の櫛描き横線文が認められる。48は器面上に2段にわたって単斜方向の縄文が施されるものである。49は、太頸壺の頸部片であり、尾張地方北東部にその分布が顕著にみられるものである。施文は、沈線文が最初であり、以下、縦位の刻み、複合鋸歯文の順となる。50～53は、櫛描き横線文帯と無文帯が交互に配されており、細頸壺の体部片である。54・55は、口縁内面に刺突を施した条痕の深鉢であり、56も同様のものであるが、刺突下に波状文を施しており、春日井市勝川遺跡出土資料中に類例が認められる。石器には、57の磨製石斧がある。部分的に敲打痕を残すが、全体によく研磨されており、上部は部分的に破損しており、装着痕の可能性が考えられる。また、図示はしなかったが、他に、ガラス質石英安山岩（下呂石）の剥片が少量出土している。

—SD1101—

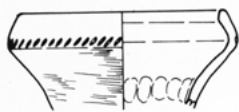


20

—SD1102—



26



21



22



27



28

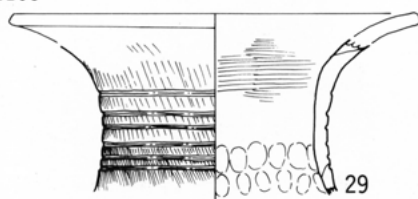


23



24

—SD1103—



29



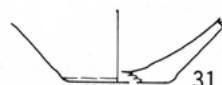
25



—SD1104—



30

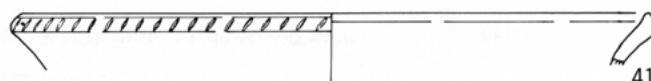


31

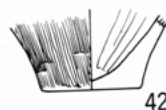
—SD1105—



32



41



42



43



33



34



35



36



37



38



39

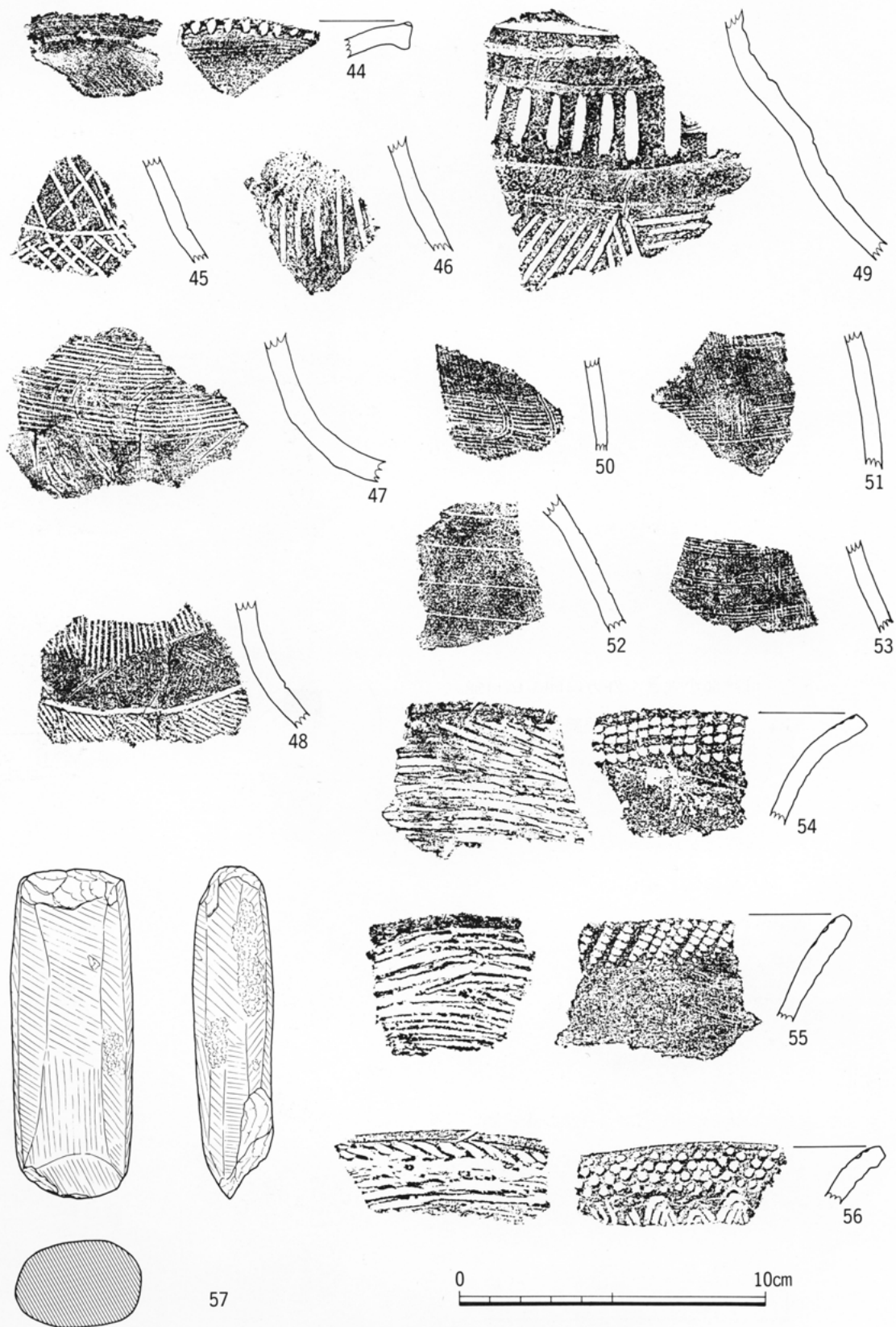


40



第50図 I期弥生中期の遺物 (1:2、実測図は1:4)

—包含層—



第51図 I期弥生中期の遺物 (1:2)

2 II期の出土遺物

今回の岩倉城遺跡の発掘調査は、五条川の両岸に発達する自然堤防帯を貫く形で実施されたため、遺構の項でも述べたように、居住域が展開する地域、旧河道へ落ち込んでいく変換点で確認された特異な遺構群、墓域の展開する地区といったように明瞭にII期の集落の様相をつかむデータを得ることができた。当然、それらにともなう良好な遺物も多数出土しており、以下、遺構出土の遺物を中心に記述していく。

II期の遺物を以下の通りに分類する。

[分類]

壺A

(広口加飾壺)

垂下・拡張口縁部に擬凹線を配し、各部に赤彩を施したいわゆるパレス・スタイルの壺を総称する。

A 1 口縁内面に段を有さないもの

A 2 口縁内面に明瞭な段を有するもの

壺B

(広口壺)

口縁部が大きく外方に開く広口壺。

B 1 口縁部が外反し頸部が長いもの。

B 2 口頸部が外傾し直線的にのびるもの。

壺C

(長頸壺)

口頸部が内湾気味に立ち上がる中・小型の長頸壺である。

壺D

(短頸壺)

口頸部が短く立ち上がり、口縁端部が微妙に外反する、いわゆるヒサゴ壺を総称する。

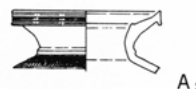
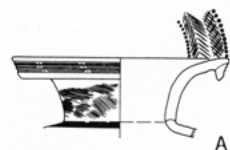
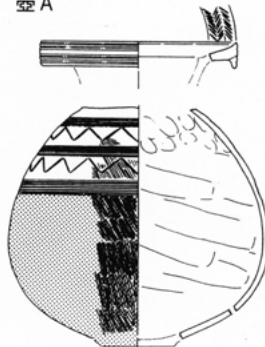
壺E

口縁部が二重口縁的な形態を示し、羽状の櫛刺突を施すいわゆる柳ヶ坪タイプの壺

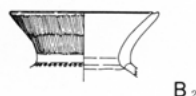
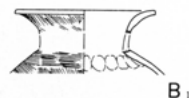
壺F

二重口縁壺

壺A



壺B



壺C



壺D



壺E



壺F



第52図 器種分類図(1)

甕A (くの字甕)
口頸部が「くの字」状に屈曲するくの字甕を一括する。

甕B (受け口甕)
口縁部が鋭く屈曲し、端部に明瞭な面を有し、底部は平底となる受け口甕。

甕C (受け口状口縁台付き甕)
口縁部が屈曲して立ち上がり、台部を有する受け口状口縁台付き甕。

C1 口縁部は鋭く屈曲するが、その形状は摘み上げ状である。

C2 口縁部は短く屈曲し、端部に明瞭な面をもつもの。

C3 口縁部が内湾気味に立ち上がるものの。

甕D (S字状口縁台付き甕)
D1 押し引き刺突をもち、口縁中段以上はほぼ垂直に立ち上がるもの。(A群)

D2 口縁部上段・下段の発達。上段のヨコ方向への突出が顕著となる。(B類)

D3 口縁部の屈曲が外方へ大きく拡張するもの。(C類)

D4 口縁端部に明瞭な肥厚した面をもつもの。(D類)

甕E 器面にタタキをほどこすもの。

鉢A 口縁部は受け口状となり、口径と体部最大径がほぼ等しいもの。

鉢B 口縁部は受け口状となり、口径が体部最大径を凌駕するもの。

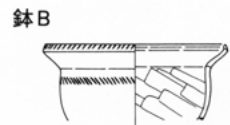
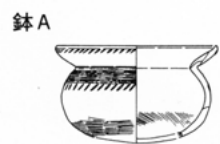
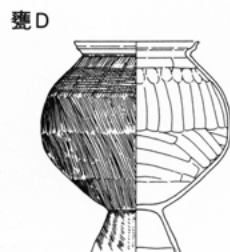
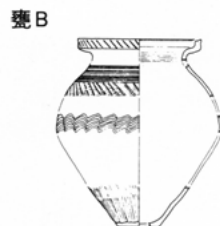
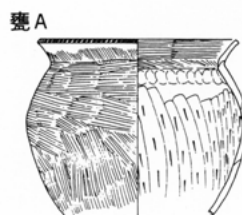
小形鉢

A 短く外傾する口縁をもつもの。

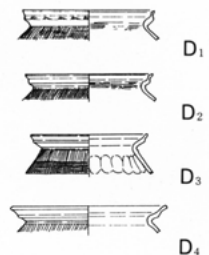
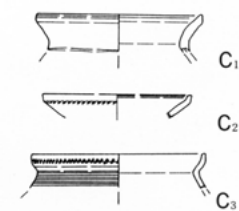
B いわゆる小形丸底土器。

C 口頸部がやや内湾気味に外方にのび、大きく開いた口縁部をもつもの。

D 畿内系の有段鉢。



小形鉢



第53図 器種分類図(2)

高杯 A

杯部が浅く外反し、外反する脚部を有するもの。

高杯



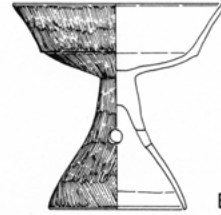
A



D

高杯 B

B 1 口径と稜径の差が少なく、杯部は比較的浅い。脚部は比較的長脚となる。

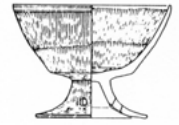


B₁

B 2 杯部・脚部ともに内湾化が顕著となり、杯部は深くなる傾向が認められるもの。



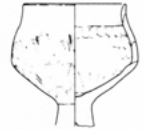
B₂



E

高杯 C

脚部は円錐状に外反し、杯部は浅く、大きく外傾するもの。



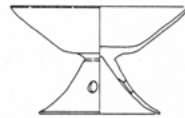
F

高杯 D

半球状の杯部をもつ高杯。

高杯 E

脚部が短く外反・屈折する有稜高杯。



C

高杯 F

ワイングラス形高杯。

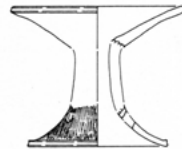
小形高杯



高杯 G

裾部で屈曲する脚部を有する畿内型高杯。

器台



A₁

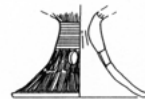
小形高杯

半球状の杯部を持ち、脚部が大きく外方にのびるもの。

器台 A

外反する脚部を有するもの。

A 1 脚部が長いもの。



A₂

A 2 脚部が短いもの。

小形器台



A

器台 B

円錐状の内湾脚をもつもの。



B

小形器台

A 外反する脚部に、皿状の受部をもつもの。



B

B 山陰系の鼓形器台に類似するもの。

第54図 器種分類図(3)

A地区遺構出土遺物

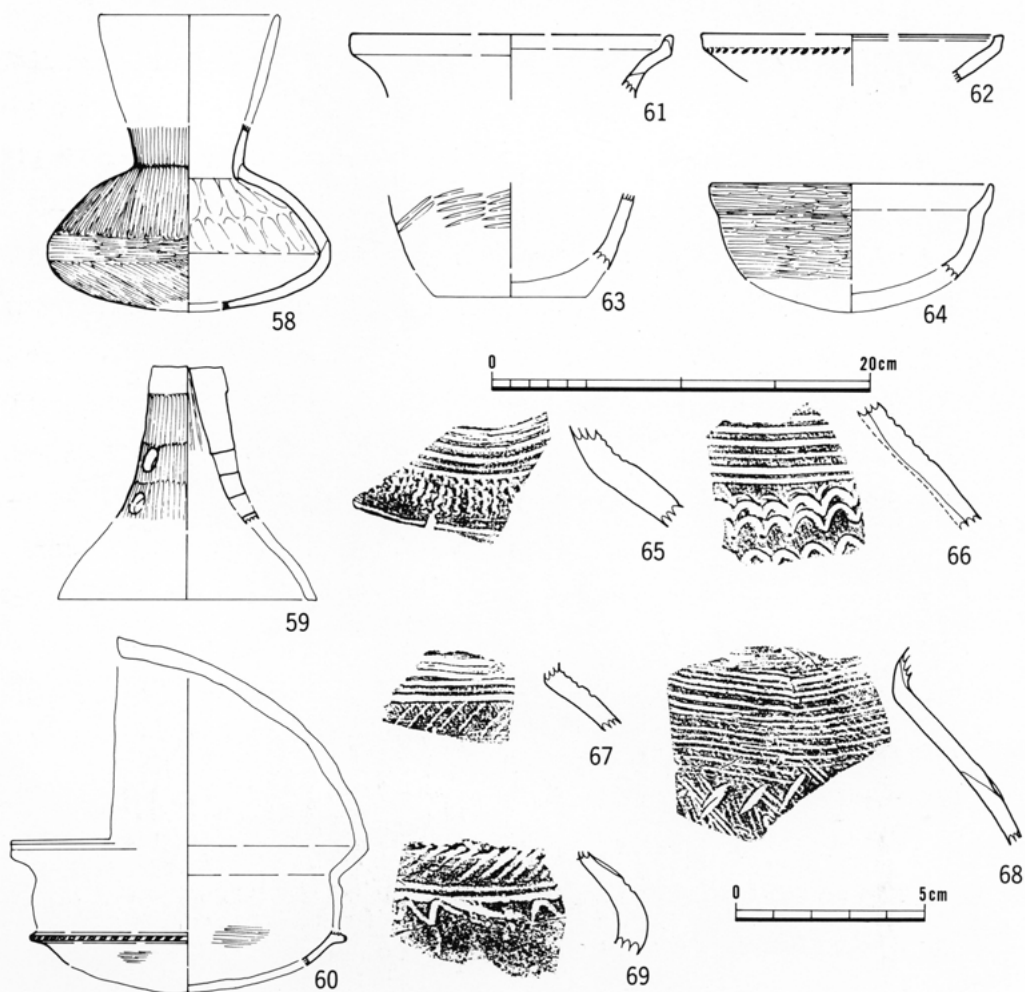
竪穴住居（第55図～第59図）

S B 1201 S B 1201より出土した土器は、壺、甕、高杯、鉢がある。しかし、全体の形状を窺うことのできる資料は極めて少ない。

壺…58は口径部の大半を欠損するが、長頸壺（壺C）であり、体部は偏平で最大径は中位に持つ。外面はヘラミガキ、内面はナデ、指押さえて仕上げる。65・66は壺Bの体部片であり、直線文下に貝殻刺突・ヘラ描き波状文を施す。

甕…細片のみであり、鉢との区別が困難であるが、63を除きすべて受け口状の口縁を持つ台付き甕である。61・62は鋭く屈曲し、立ち上がりの短い口縁部片であり、端部には明瞭な面を持つ（甕C 2）。67・68は体部上半の破片であり横線文下部にヘラ、ハケメ原体による刺突を加える。63は外面にタタキを施す平底の甕Dである。

高杯…59は、杯部を欠損するが、内湾気味に下方に広がる脚部片である。2段にわたって、



第55図 SB1201出土遺物（1：4、拓図は1：2）

穿孔する（高杯B 2）。

鉢…64は、浅い体部に、口縁内面を強くナデ上げることによって、短く内湾気味に立ち上がる口縁部を作り出している。69は、受け口系口縁をもつと考えられる鉢であり、ヘラによる刺突、横線、波状文を施している。60は手焙形土器である。細片であり、全体の形状は不明であるが、鉢部を巡る突帯部分と考えられ、突帯上には刻みを施す。

S B 1204 S B 1204からは、比較的良好な遺物がまとまって検出された。大きく壺、甕、高杯、器台、鉢がある。

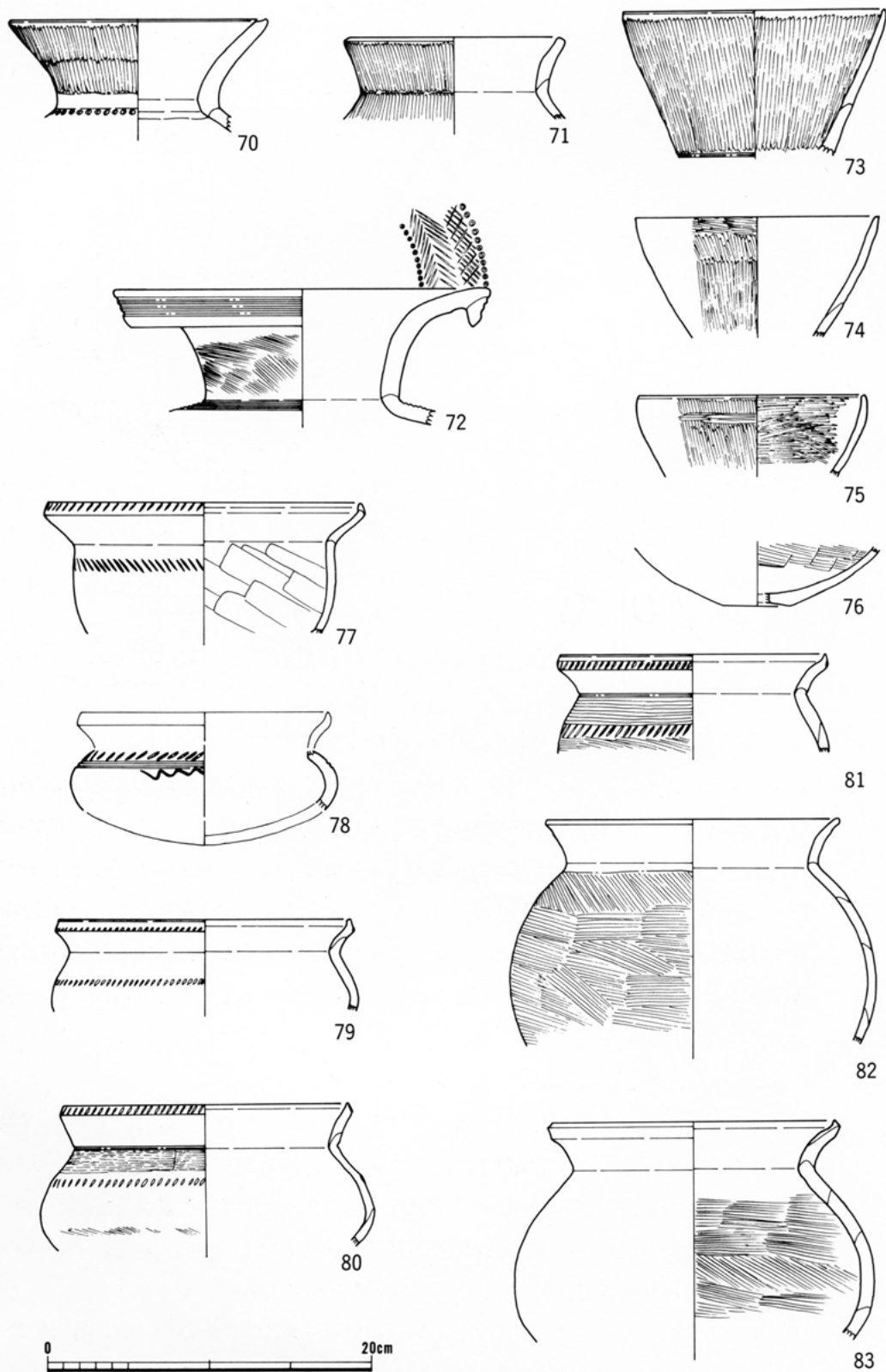
壺…70は、外方へ直線的に広がる口頸部片であり、頸部に円形の刺突を施す。71は、短く外反する口頸部を持ち、外面はヘラミガキによって調整される。72は加飾性豊かな壺A 1の口頸部片である。拡張・垂下した口唇部には擬凹線を施し、口縁内面には、ヘラ・竹管による装飾を加える。わずかに残る体部には直線文が確認できる。73～76は、長頸壺の口頸部片であり、緩やかに内湾しながら大きく外方へ開く（壺C）。ヘラミガキまたはナデによって調整される。

甕…口縁部が受け口状となる甕Bと「くの字」状に屈曲する甕Aとの2つのタイプに分けられる。81は、台部を欠損するが当地域に一般的にみられるものである。口縁部を摘み上げ鋭く屈曲させることによって受け口状の口縁をつくりだしている。口縁下部と体部横線文下に刺突を施す。83は81と同様に受け口状の口縁を呈するが、在地の土器には系譜の置けない異質なものである。体部は球形状となり、器壁は厚く、外面はナデにより仕上げられており、鉢の可能性も考えられる。82は、体部から口縁部にかけて単純につの字状に屈曲するもので、体部外面をハケメ、内面をナデによって調整する。

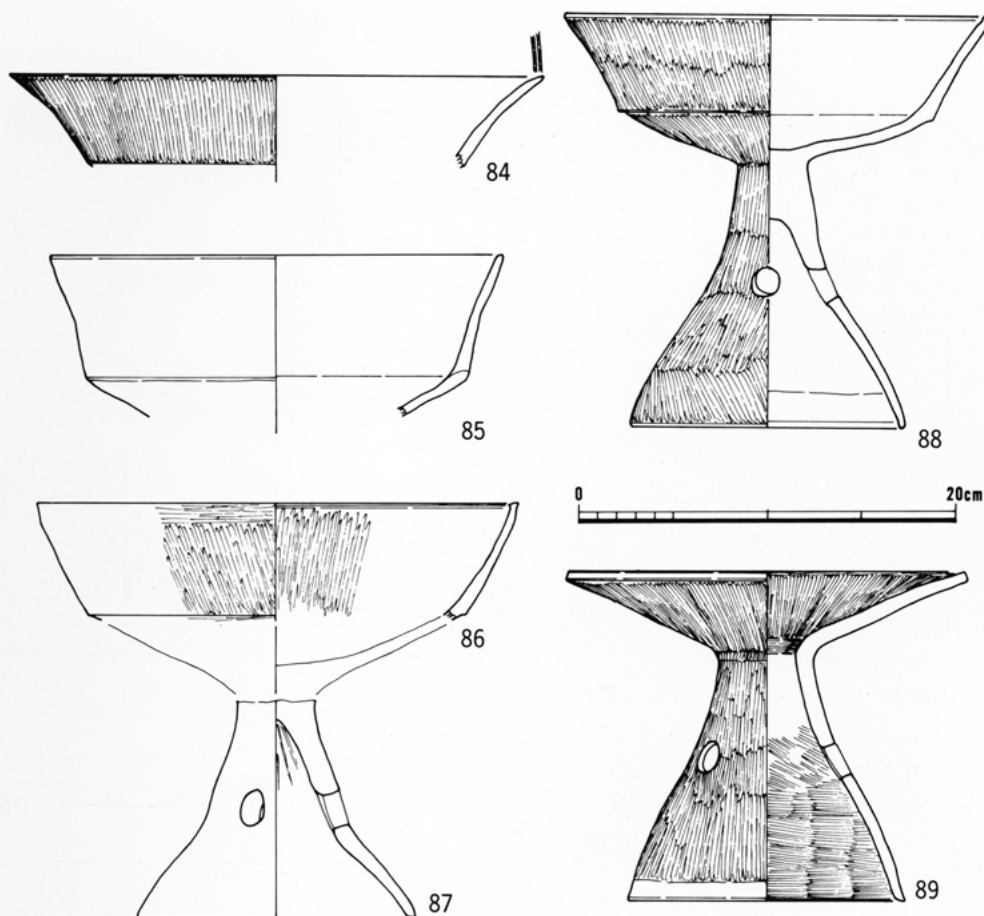
高杯…杯部の形状から、杯部が浅く強く外反しながら立ち上がる高杯Aと杯部がやや深くなり、内湾気味または緩やかに外反しながら立ち上がる高杯B 1とに分類することができる。84は山中式土器に通有見られる杯部が浅く、杯部上半が外反するものであり、口唇部に2条の沈線を施す。外面は縦位のヘラミガキ、内面はナデ調整によって調整する。88は、唯一全形を窺うことができる資料である。杯部下半で明瞭な段を持ち、上半部は緩やかに外反しながら立ち上がる。脚部は長く、円柱から円錐状に大きく開く。外面は縦位のヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。85は杯部のみの残存するが、88と同様に杯部中位下半で段を持ち、上半部は緩やかに外反しながら立ち上がる。内外面ともにナデ調整。86と87は同一個体と考えられる。杯部は中位で段を持ち、上半部は緩やかに内湾気味に立ち上がる。内外面ともにヘラミガキ調整される。脚部は内湾しながら円錐状に広がる。

器台…89は、脚部から鋭く屈曲し大きく外方へ広がる受部を持つ。脚部は高杯と同様に長く、受部との接合部より内湾気味に円錐状に開く。外面および受部内面はヘラミガキによって調整されるが、脚部裾部は強くヨコナデが施され、微妙に外反を示す細部湾曲調整が認められる。脚部内面にはハケメを残す（器台B）。

鉢…すべて受け口状の口縁を呈するものである。体部が口径より大きく張り出す鉢Aと逆に口径が体部径を凌駕する鉢Bの2つのタイプがみられる。79・80は、鋭く屈曲する口縁



第56図 SB1204出土遺物 (1:4)



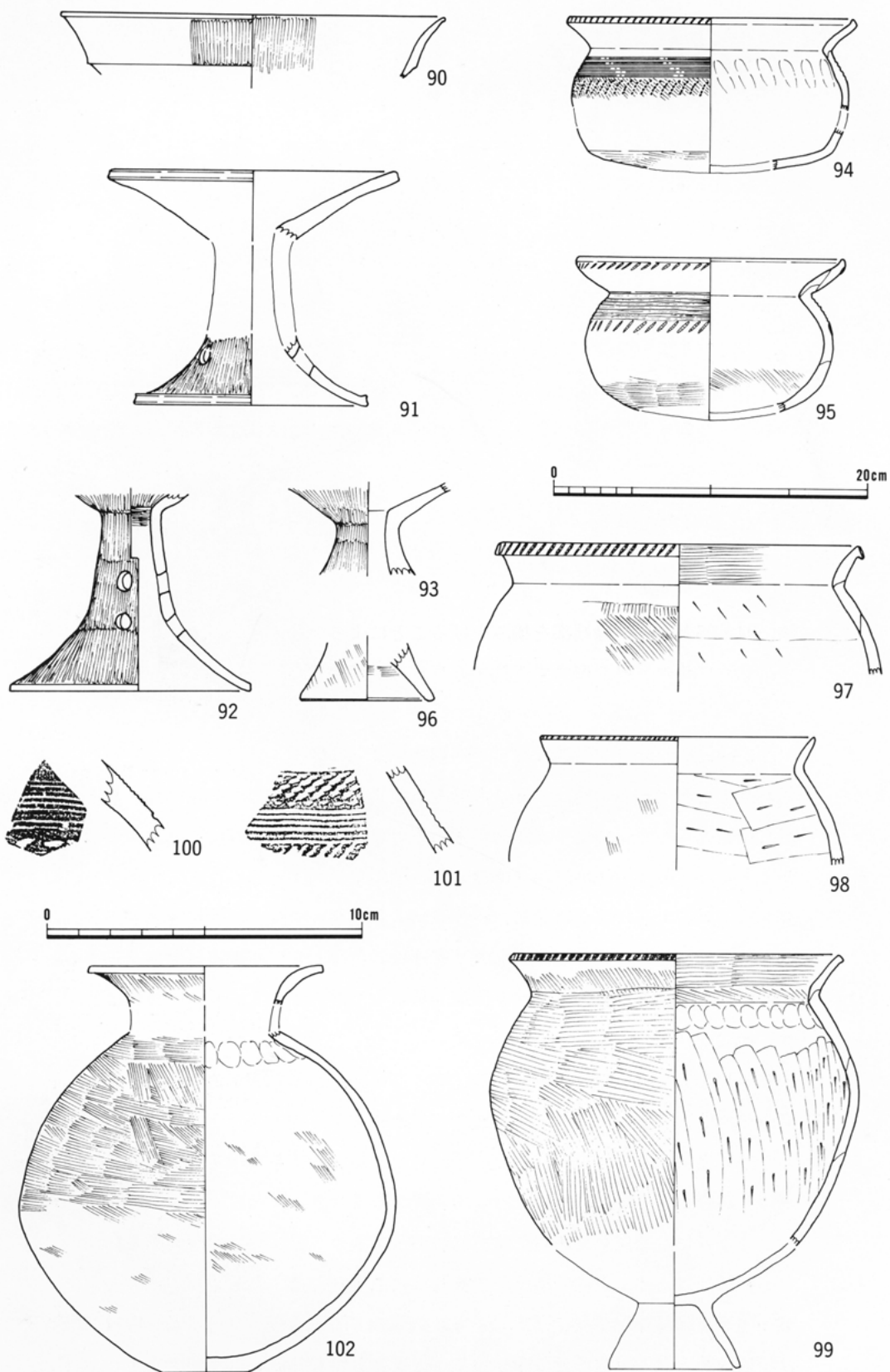
第57図 SB1204出土遺物 (1:4)

部を有するが、その手法はいずれも摘み上げ状である。体部から口縁部にかけての外反は緩く、体部もやや偏平化する傾向が窺える。また、体部の文様は、ヘラによる刺突を施すのに対し、この種の土器に特徴的な体部上半部の横線文はみられず、ナデまたは板ナデ調整されている。78は体部片であり、ヘラによる刺突・横線・波状文を施す。77は頸部から強く外反させた口縁部を鋭く屈曲させ受け口状口縁とし、端部には刺突を加える。体部は張りを持たず、上半部にはハケメ原体を利用した刺突が加えられる。外面はナデ、内面は板ナデにより調整する。

S B1206 S B1206より出土した土器は、壺、甕、高杯、器台、鉢がある。

壺… 102は、頸部を欠損するが、ほぼ完形に復元することのできた壺B 1である。頸部からはほぼ直立気味に立ち上がり、緩やかに外反する口縁部を有すると考えられ、口縁端部は平坦で明瞭な面を持つ。内面はヨコナデ調整が施され、外面はハケメを残すが、下半部はナデによって打ち消している。体部は球形状であり、最大径は中位にある。100・101は壺Bの体部片であり、直線文やヘラ、櫛等による刺突が施される。

甕…すべて体部から単純に「くの字」状に屈曲する甕Aのみであるが、口縁部の形状は微妙な違いをみせる。97は体部から緩やかに屈曲し、口縁端部は平坦で垂下し、ハケメ原体による刺突が加えられる。体部外面はハケメ、内面はヘラケズリ調整が施される。98の口



第58図 SB1206出土遺物 (1:4)

縁端部は、面を持たず丸く収めるもので剥落が著しく調整は不明瞭な部分もあるが、口縁内外面はともにヨコナデ、体部外面はハケメ、内面はヘラケズリが施される。99は台部を欠損するが、ほぼ全形を窺うことのできる資料である。口縁は大きく外傾し、端部には明瞭な面を持ち、ハケ原体による刺突が加えられる。体部はやや楕円状であり、横位または縦位の粗いハケが施されている。口縁内面には横位のハケ、体部はヘラケズリによって調整される。96は「ハの字」状に開く台部片である。

高杯…90は山中式土器に通有みられる高杯Aである。浅い杯部の上半部片であり、中位で段を持ち、口縁は外反しながら立ち上がる。内外面ともに縦位のヘラミガキによって仕上げている。

器台…全形を窺うことのできる資料は少ないが、いずれも同様の形態を示すと考えられる。

91は脚部上半部を欠損する。受部は脚部より鋭く屈曲し、端部は平坦で面を持つ。内外面ともにナデ調整される。脚部は外反しながら円錐状に開き、端部は平坦に仕上げられる。

外面にはヘラミガキが施される。92は脚部のみ残存する。外反しながら大きくラッパ状に開き、端部は面を持つ。透孔は2段3方に穿つ。外面は縦ヘラミガキ、内面はナデによって調整される。

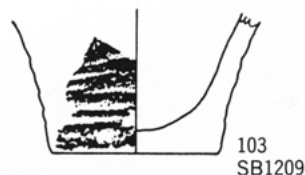
93は、受・脚部の屈曲部片である。

鉢…94・95ともに口縁端部を摘み上げることによって、受け口状の口縁を形成する鉢であり、この種の鉢に特徴的な、体部上半部の櫛描き横線文、口縁部分と横線文下の刺突が明瞭に認められる。94は体部から強く屈曲する口縁を有するもので、体部中位に最大径を置き、下部で鋭く屈曲して底部にいたる。95も同様に体部から強く屈曲する口縁部を持つが、体部は球形状を呈する。調整は、いずれもナデが基本であり、体部下半にはハケメを残す。

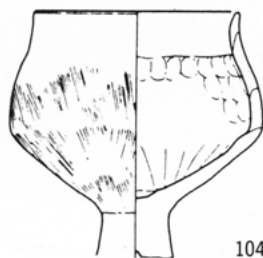
S B 1209 S B 1209出土土器は、細片が多く、図示しえたのは、第59図103のみである。103は器面上にタタキを施す甕Eであり、底径は4.6cmを測るのみで、小形品である。山中式後期に属すると考えられる土器細片とともに出土した。

土坑（第59図）

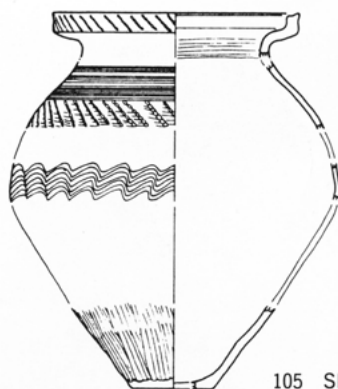
S K 1201 S K 1201は、ピット状の小土坑であり、内部より第59図105が押し潰れた状態で単体で出土した。105は、口縁部を鋭く屈曲させ、受け口状にした甕Bであり、端部は平坦に収め、ハケ状工具を利用した刺



103
SB1209



104
SK1202

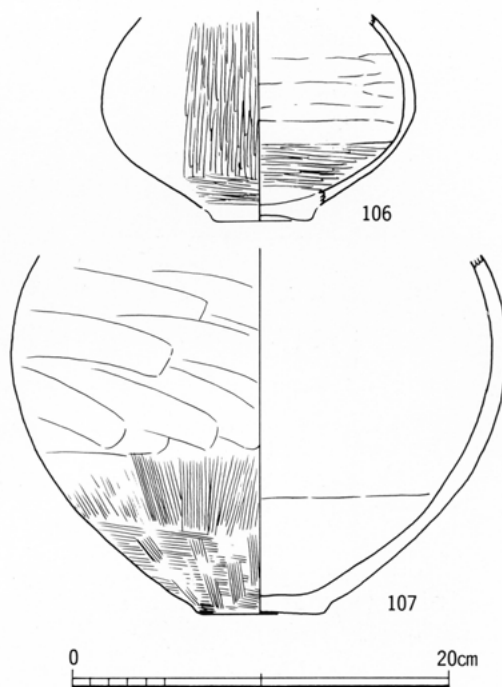


105 SK1201

第59図 II期出土遺物（1：4，103は1：2）

突列を施している。体部の形状は、最大径が体部中位上半にあり、やや肩が下がった形態となる。底部は平底である。体部上半部には櫛描き横線文、口縁部と同様の工具を利用した刺突列、波状文等加飾性豊かな文様を描いている。体部下半部はヘラミガキで調整している。

S K1202 S K1202からは、第59図104のワイングラス形高杯（高杯F）が単体で出土した。104は脚部の大半を欠損するが、杯部は完形に近く残存する。杯部の形状は、脚部より緩やかに屈曲しながら口縁部に至り、口縁直下でわずかに外反するこの種の土器に特徴的な形状を示している。外面はハケメ調整の痕跡をよく残しており、また、内面には指圧痕が明瞭に確認できる。杯部はかなり深くなっており、山中式後期に位置付けられよう。



第60図 SD1201出土遺物 (1:4)

溝 (第60図)

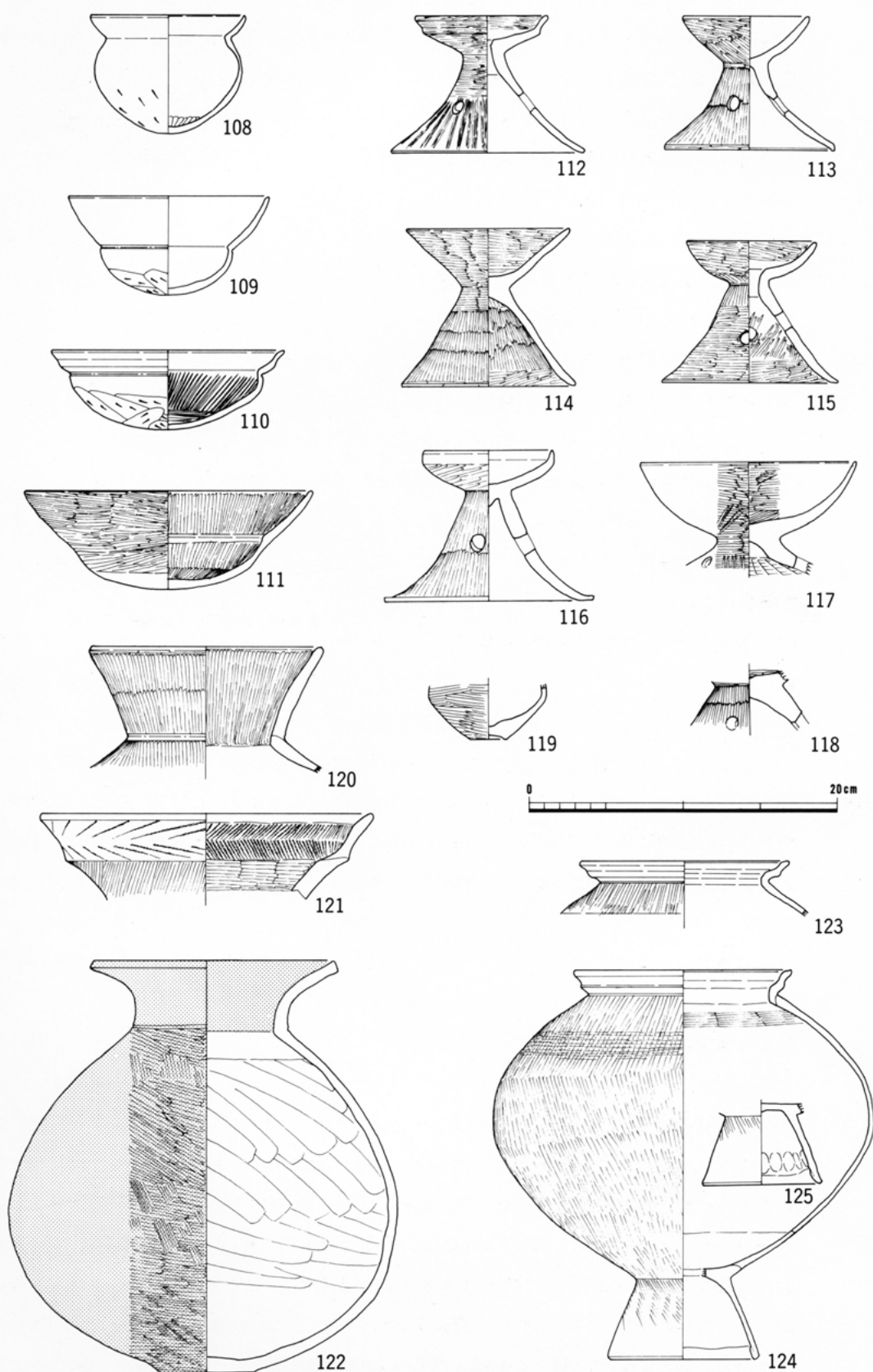
S D1201 S D1201からは、第60図106・107の壺が2点出土した。106は、長頸壺（壺C）の体部片であり、ほぼ中位に最大径をもつ。107は体部上半以上を欠損するが、壺Bと考えられる。体部下半はハケメを明瞭に残すが、中位以上は板状工具を利用してナデ調整を施している。

B地区遺構出土遺物

土器集積 (第61図)

S X1201 総数18点の遺物が、人為的に据え置かれた状態で出土した。祭祀的色彩の強い遺物とされる小形丸底土器、小形器台、小形鉢等は、一定の範囲内よりまとまって出土しており注目される。出土遺物は、大きく壺、甕、高杯、器台、鉢がある。

壺…119のようなミニチュア品もみられるが、大きく壺B・Eとに分けられる。121は、いわゆる柳ヶ坪型壺（壺E）の口頸部片である。口頸部なかほどで、屈曲、外反し有段口縁となる。口縁内外面に櫛歯刺突の列点文を羽状に施し、この種の土器に特徴的な文様をつくりだしている。122は、体部から強く外反する口頸部を有する壺B1である。体部最大径は下半部にあり、やや下ぶくれ状の形態となる。頸部と体部の境界には1状の沈線を巡ら



第61図 SX1201出土遺物 (1:4)

し画する。外面は横ナデ、ヘラミガキ調整、体部内面は板ナデ調整で仕上げる。胎土はよく精選されており、外面および口縁内面には赤彩を塗布し器面を飾る。120は、壺B2である。体部は欠損するが、やや外傾し直線的にのびる口頸部を有する。体部と頸部の境界には1条の沈線を巡らす。内外面ともに縦位のヘラミガキ調整を施す。

甕…すべて、口縁部がS字状に屈曲するいわゆるS字甕である(甕D)。S字甕分類の指標となる口縁部の形状は、123・124ともに口縁中段以上は上外方へ大きく拡大し、端部が肥厚するもので、口縁部、体部との屈曲部には明瞭な沈線が巡る。これらはS字甕C類の特徴をよく示しているといえよう。ただ全体的に器壁が厚化し、体部最大径も下方に移る傾向が認められ、より新しい様相が窺える。124は全形を窺うことのできる資料であり、全体的に器壁は厚化し、体部最大径は中位にある。外面の調整は粗いハケメを3～4回に分割し、右下から左下に引き上げた後、口縁部との屈曲部から左下に引き下ろして羽状にし、体部上半部には横位のハケメを施す。内面は、ナデにより平滑に仕上げ、台部の端部は折り返す。125は台部のみであり、124と同様に端部折り返して調える。

高杯…117は、半球状の碗形を呈する杯部に、大半は欠損するが、裾部径が杯部口径を凌駕するほど大きく開いた脚部を有する小形高杯である。杯部は内外面ともに丁寧なヘラミガキが加えられる。118は、脚部の一部のみの残存であり、概ね117と同様の形状を呈するものと考えられる。

器台…5点出土した。いずれも口径・器高が8～10cm程度の小形器台である。114を除き、緩やかに外反しながら裾が大きく開く脚部を有する(小形器台A)。受部の形状はバラエティーに富む。112は、脚部より鋭く屈曲する皿状の受部を持つもので、脚部から受部にかけて貫通孔を残す。113・115は、半球状の浅い受部を持つものであり、115は貫通孔を有する。116は、畿内系と考えられる資料であり、やや丸みを帯びた受部に、摘みあげた口縁部を持つ。114は、直線的に外方にのびる受部および脚部を有するもの(小形器台B)で、山陰系鼓形器台の影響を感じさせるが、脚部がやや長脚の傾向を示す。いずれも外面の調整はヘラミガキ、内面はナデまたはヘラミガキを施す。胎土は精選されており、焼成も良好である。黄白色を呈するものが多いが、116のみ赤褐色の色調を示す。

鉢…4点出土し、すべて丸底状の底部を持つ。小形器台と組み合わせて使用されたものと考えられる。108は、丸みを帯びた体部に、内湾気味に外方へ開く短かめの口縁を有する小形鉢Aである。109は、いわゆる小形丸底土器・埴などと称されるもの(小形鉢B)で、扁平な球状の体部に、口径が大きく、内湾気味に外方へ広がる口縁部をもつ。口縁部と体部の境界には、1条の沈線を配し画する。体部下半はヘラケズリ、その他はナデにより薄く平滑に仕上げている。110は、畿内系の有段鉢(小形鉢D)であり、浅い碗状の体部に2段に屈曲する独特な口縁部を有する。体部下半はヘラケズリ、内面には暗文風の細いヘラミガキが施される。111は、浅い偏平球の体部に大きく直線的に外方に広がる口縁部を持つ(小形鉢C)。内面中位で稜をつくり、口縁と体部を画する。外面は、底部付近を除き横方向のヘラミガキ、内面は縦位のヘラミガキを施す。これらは、いずれもよく精選された胎土を使用して

おり、焼成も良好である。色調は、110が赤褐色を呈する以外、黄褐色、黄白色を示す。

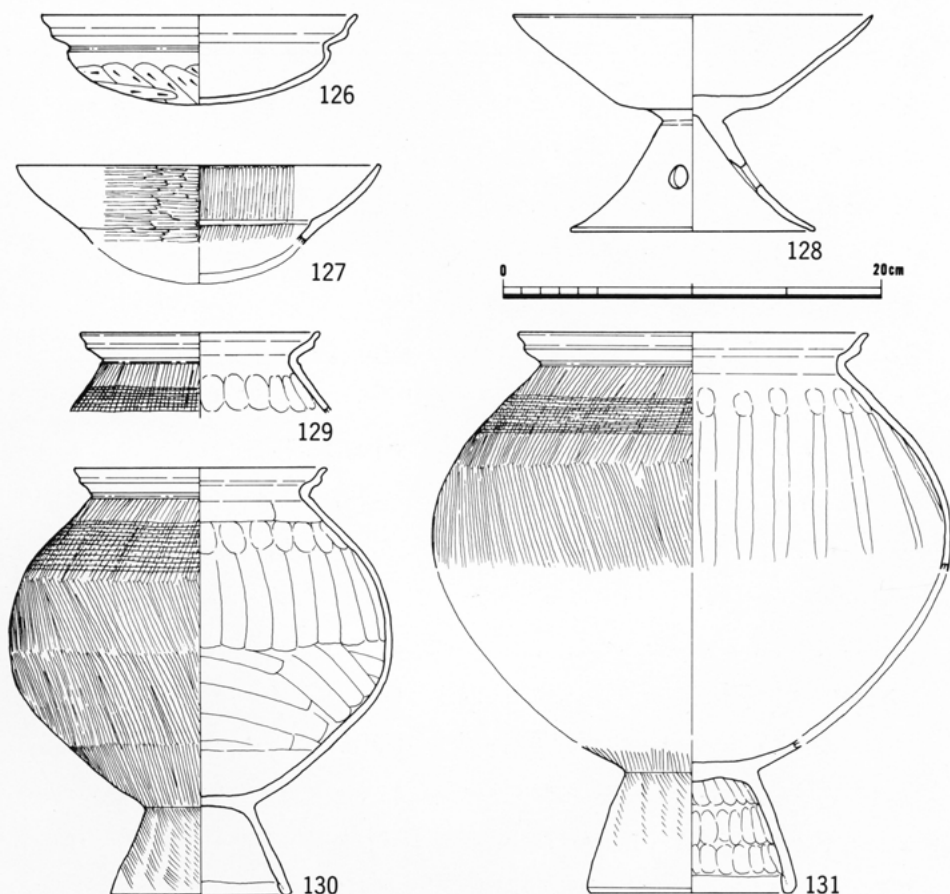
土坑（第62図）

SK1204 SK1204より出土した土器は、大きく甕、高杯、鉢がある。

甕…3点出土したが、いずれもS字甕である（甕D）。いずれも口縁部中段以上が上外方へ拡大し、端部は肥厚する口縁を持つ。また、体部と口縁部の境界には沈線を配しており、全体的に器壁の厚化が認められる等より、SX1201出土資料と同様にC類新段階に位置付けられる。130は、全形を窺うことができ、体部最大径は中位にある。外面は粗いハケメを羽状に配した後、上半部に横位のハケメを施す。内面は板状工具によるナデ調整で平滑に仕上げる。131は、体部下半を欠損するが、やや大形のS字甕である。

高杯…128は、やや短かめの外面する脚部に、外傾しながら直線的にのびる浅い杯部を有するもので、内外面ともにナデ調整。高杯C。

鉢…126は、畿内系の有段鉢。碗形の浅い体部に、2段に屈曲し外反する独特な口縁部を有する（小形鉢D）。体部下半は、ヘラケズリ調整。127は、体部を欠損するが、大きく外方に広がる口縁部を持つ小形鉢C。内外面ともにヘラミガキ調整。



第62図 SK1204出土遺物（1：4）

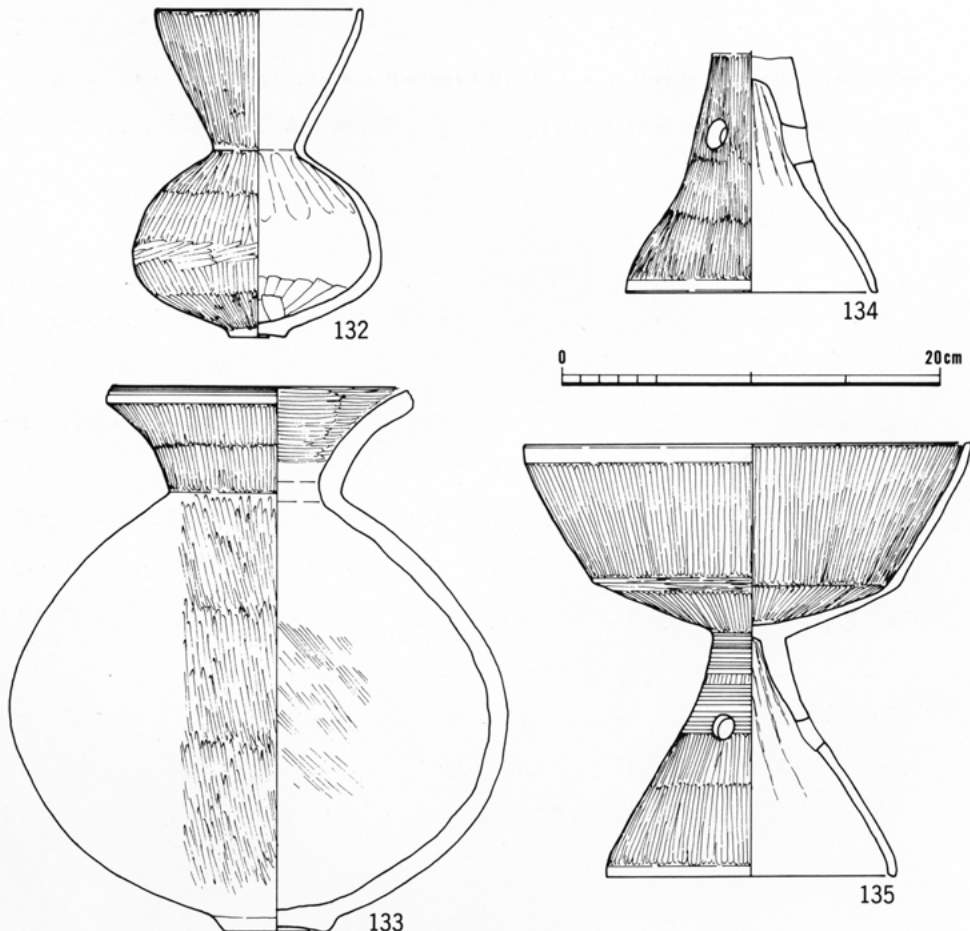
C地区遺構出土遺物

方形周溝墓（第63図）

S Z 1201 S Z 1201出土土器には、壺、高杯がある。

壺…132は、長頸壺（壺C）であり、口頸部は、大きく外方に開き、口縁部付近で緩やかに内湾する。体部は最大径が中位より下方に移り、やや下ぶくれ状の形態を示す。底部は上げ底である。外面はヘラミガキ、内面はナデ、指圧痕、板ナデ等によって調整される。133は、壺B 2であり、口頸部は体部より強く屈曲する。口縁端部はやや肥厚し、面を持ち凹線が巡る。内外面ともにヘラミガキで調整される。体部の形状は、最大径を中位に持ち、ほぼ球形状を呈する。外面は縦位のヘラミガキ、内面はハケメが残る。

高杯…135は、全形を窺うことができる。杯部は下半で明瞭な段を残し、内湾気味に外方へ広がる。脚部は円錐状に大きく開き、横線文が2段にわたって施される（高杯B 2）。外面および杯部内面はヘラミガキによって調整される。134は、脚部のみであるが、135と同様の形態を呈すると考えられる。いずれも口縁部と脚部裾部付近はヨコナデが施され、わずかに外反させる細部湾曲調整や内湾脚調整技法が明瞭に確認できる。



第63図 SZ1201出土遺物（1：4）

包含層出土遺物（第64図～第71図）

(1) A地区（第64図）

出土状況 A地区は、五条川右岸の微高地状にあたり、多数の竪穴住居跡を検出し、居住域にと相当する地点である。包含層より出土した遺物も、それらの遺構とはほぼ同時期と考えられる山中式後期から廻間Ⅰ式前半期に比定される遺物が出土した。

出土遺物 甕… 147～149は、口頸部が「くの字」に屈曲する甕Aであり、すべて口縁端部には刺突を施す。147は、台部を欠損するが、概ね全形を窺うことができる。体部から口縁にかけての屈曲は緩やかであり、口縁端部には刺突を施す。体部はやや長胴化しておりハケメ調整が施される。内面はケズリ調整。150・151は受け口状口縁を有するもので、口縁端部は摘み上げ状に仕上げる甕C 1。153～156は台部片である。

鉢…152は受け口状口縁を有する鉢Bで、口径が体部径を凌駕するものである。

高杯…高杯は、大きくA・B 1・B 2・Fの4タイプに分類することができる。136は、杯部が浅く外反する高杯Aであり、内外面ともに縦位のヘラミガキが施される。143の脚部片は136と同様の杯部を持つものと考えられる。137は、杯部がやや深化する傾向がみられ高杯B 1に相当するものである。146は、内湾した長脚の高杯であり高杯B 2。138・139は山中式段階に通有みられるワイングラス型の高杯Fであり、139は赤彩が施される。

器台…全形が判明する資料はみられない。すべて外反する脚部を有する器台Aである。

(2) B地区（第65図～第71図）

出土状況 遺構の項目でも述べたがB地区は、自然堤防から旧河道へと落ち込んでいく変換地点に位置し、89C区で検出された集石遺構や89E a区で確認された祭祀的色彩の強い遺物を出土した土器集積といった特殊な遺構がみられる空間である。遺物の出土量も他の調査区に比して遥かに多い。また、完形に近く復元できるものも多々みられ、そういった遺物の出土状況は、遺構に伴ってはいないが、廃棄されたというよりは、据え置かれた状態で出土する場合がみられた（201、235、261等）。特殊な遺構の存在、遺物の出土状況、旧河道への変換点への立地等、B地区は日常的というよりは、非日常的な空間として利用されていた可能性が考えられる。

出土遺物は、多岐にわたり、山中式後期から廻間Ⅰ～Ⅲ式に比定されるものが中心であり、若干、松河戸式段階まで下る遺物もみられる。

以下、大きく89C区の集石遺構を中心とした地点と89D a・E a区を中心とした地点とにわけて述べていきたい。

①89C区包含層出土遺物（第65図～第66図）

89C区を中心とした地点からは、山中式後期～廻間Ⅰ式前半期の遺物が多量に出土している。

出土遺物 壺…157・158は、垂下・拡張口縁部をもつ加飾性豊かな壺A1である。口縁内面は、まだ段を有さず、ヘラ描きの羽状文が施される。164・165は、長頸壺であり、163は、口縁端部をヨコナデし、微妙に外反させた壺D。他はすべて体部片であり、最大径はほぼ中位にある。161は壺の蓋か。

甕…くの字甕（甕A）、受け口系甕（甕C）があるが、S字甕（甕D）は1点もみられない。166～172はくの字甕であり、すべて口縁端部に刻みを施すものである。168は、台部を欠損するが、概ね全形を窺うことができる資料であり、体部内面はヘラケズリ調整が施される。173～176は受け口状の口縁を有するものであり、173は、口縁部が内湾気味に立ち上がる甕C3であり、174・175は口縁端部を摘み上げ状に整形する甕C1である。

高杯…183・184は杯部が浅く、口縁部が外反する高杯Aである。いずれも内外面ヘラミガキで調整する。185は、半球状の杯部をもつ高杯Dであり、口縁端部はヨコナデを施し微妙に外反させている。187は口縁端部に沈線を巡らすものであり、沈線の多条化はまだみられない。189は、全形を窺うことのできる資料であり、口径と稜径との差が少なく、杯部の深化もそれほど進んではいない高杯B1である。脚部は長く、円柱状から円錐状に大きく開く。186は脚部が内湾気味に開き高杯B2と考えられる。

器台…190は受部のみの残存。192～196は脚部片であり、192はやや長脚となる器台A1。193～196は短く外反する脚部を有する器台A2である。

その他…178～182はミニチュア品である。

②89D a・E a区包含層出土遺物（第67図～第71図）

89D a・E a区からは、廻間Ⅰ～Ⅲ式を中心として、山中式後期、松河戸式段階の遺物がみられた。

出土遺物 壺…197～202は、長頸壺であり、いずれも大きく外方に広がる口縁部を有する壺Cである。198～200は精選された胎土を用いた精製土器であり、櫛刺突の鋸歯文、横線文等を組み合わせた文様構成をもつ。201・202は全形を窺うことができる資料であり、いずれも長く外方に広がる口縁部を有し、体部最大径も下方に移る。204は、頸部の一部のみしか残存せず判然とはしないが、二重口縁壺（壺F）と考えられる。205～208は、口縁部が、二重口縁的な形状を示し、羽状の櫛刺突を施す柳ヶ坪タイプの壺Eである。211～213は、いわゆるパレス・スタイルの壺A2であり、212の体部には櫛刺突の鋸歯文、横線文が施され、体部

最大径も下方にあり下ぶくれ状となる。

甕…すべてS字甕であり(甕D)、89C区でみられた様相とは全く異なる。218～221は、押し引き刺突をもったA類(D1)。222～233は口縁部上段・下段が発達し、上段のヨコ方向への突出が顕著となるB類(D2)である。234～256は口縁部の屈曲が外方へ大きく拡張するC類(D3)に比定できる資料であり、257～262は口縁端部に明瞭な面をもつD類(D4)である。

鉢…286～293はすべて小形鉢である。286・287は口縁部が短く外傾する口縁部をもつもの、288・289はいわゆる小形丸底土器(小形鉢B)であり、288は289に比べ大きく外方に開く口縁部をもつ。290・291は、口頸部が直線的に外方にのび、大きく口縁部が開くものであり、内面に稜をつくり体部との境界にする独特な形状を示す。292は口縁部を複雑に屈曲させた畿内系の有段鉢(小形鉢D)。293は口頸部がやや内湾気味に外方に大きく広がる浅鉢(小形鉢C)である。

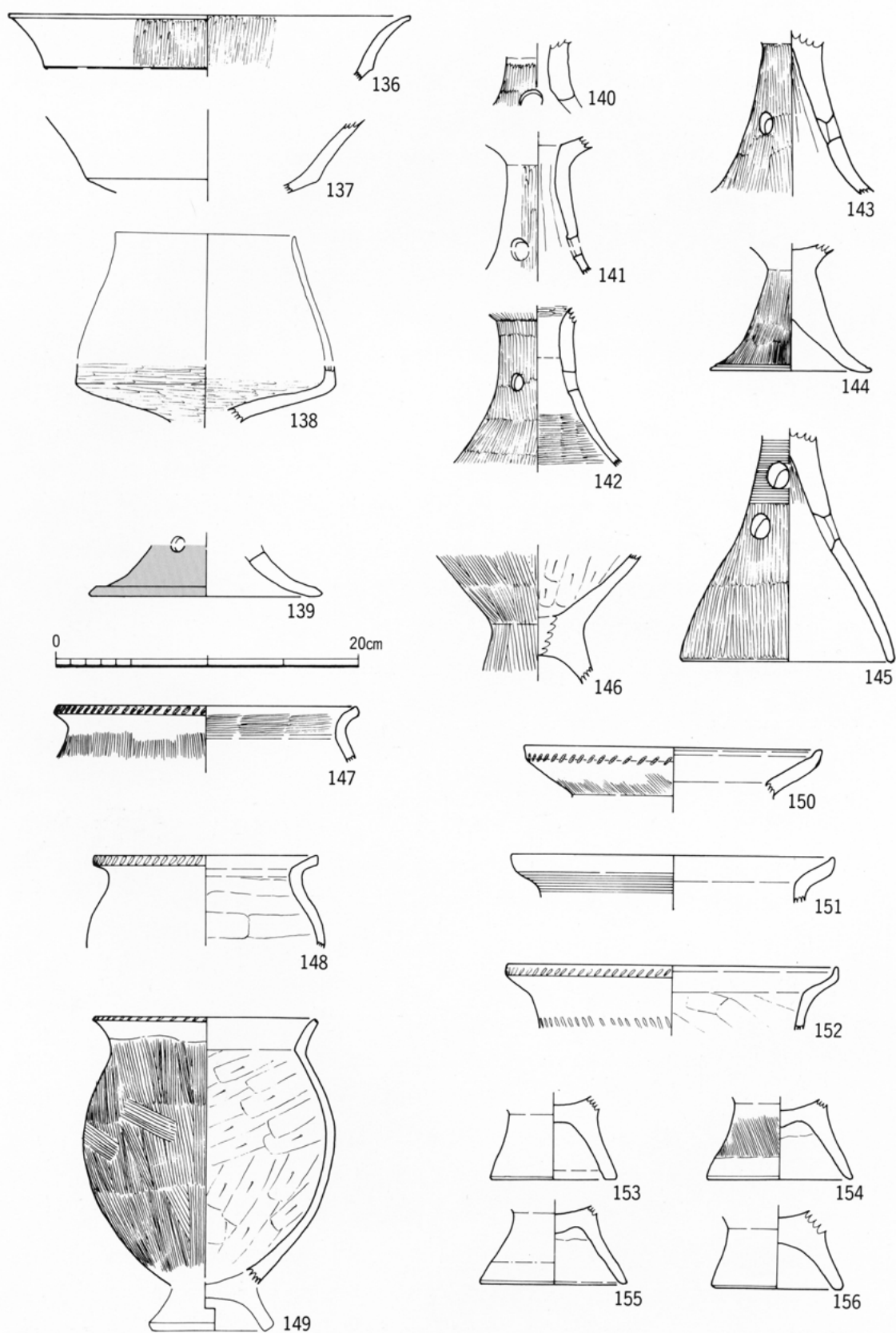
高杯…268は、短く外反する脚部を有する有稜高杯Eであり、後の小形高杯の祖形と考えられる資料である、266・267・269・271・275・277は杯部が深く、内湾する脚部をもつ高杯B2である。272・273は杯部内面に沈線を施したものであり、273は外反する短い脚部をもつ。274は半球状の杯部をもった小形高杯であり、278・279は松河戸式期よりみられる、脚裾部で屈曲する畿内型高杯Gである。

器台…280は、外反する脚部を有するもの。281～285は小形器台であり、281は山陰系の鼓形器台(小型器台B)。283は半球状の受部片。284～285は受部を欠くが緩やかに外反する脚部片である。

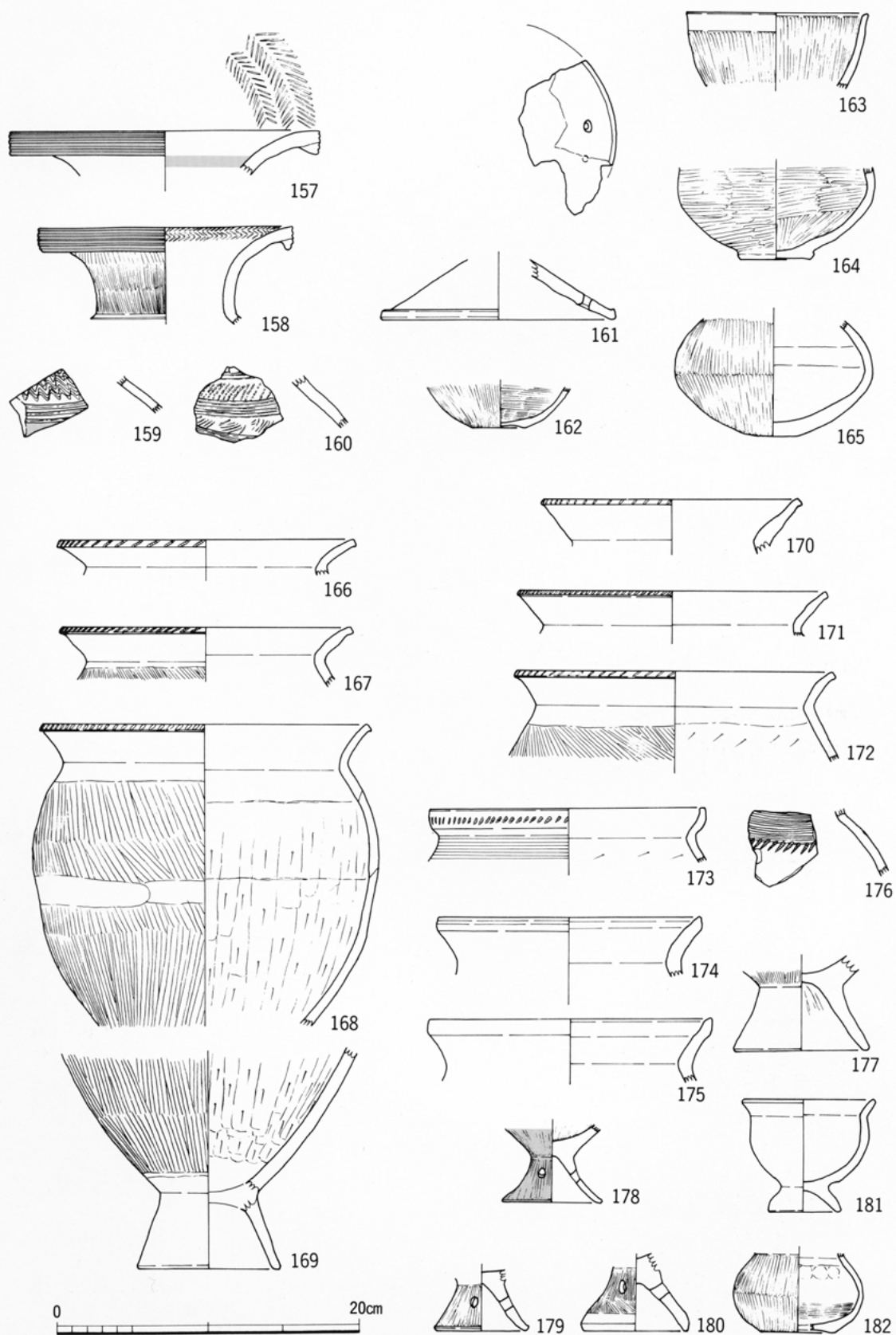
その他…294は、駿河系土器の可能性が考えられるもので、壺の口頸部から体部片である。器面上には、単斜方向の縄文(原体LR)を2列、その下部にはS字状の結節文を配し、頸部には2個一対の円形浮文を施す独特な文様構成をもつ。包含層出土のため厳密な時期比定は困難であるが、概ね廻間I～II式の範疇で捉えられるであろう。

(3) C地区(第71図)

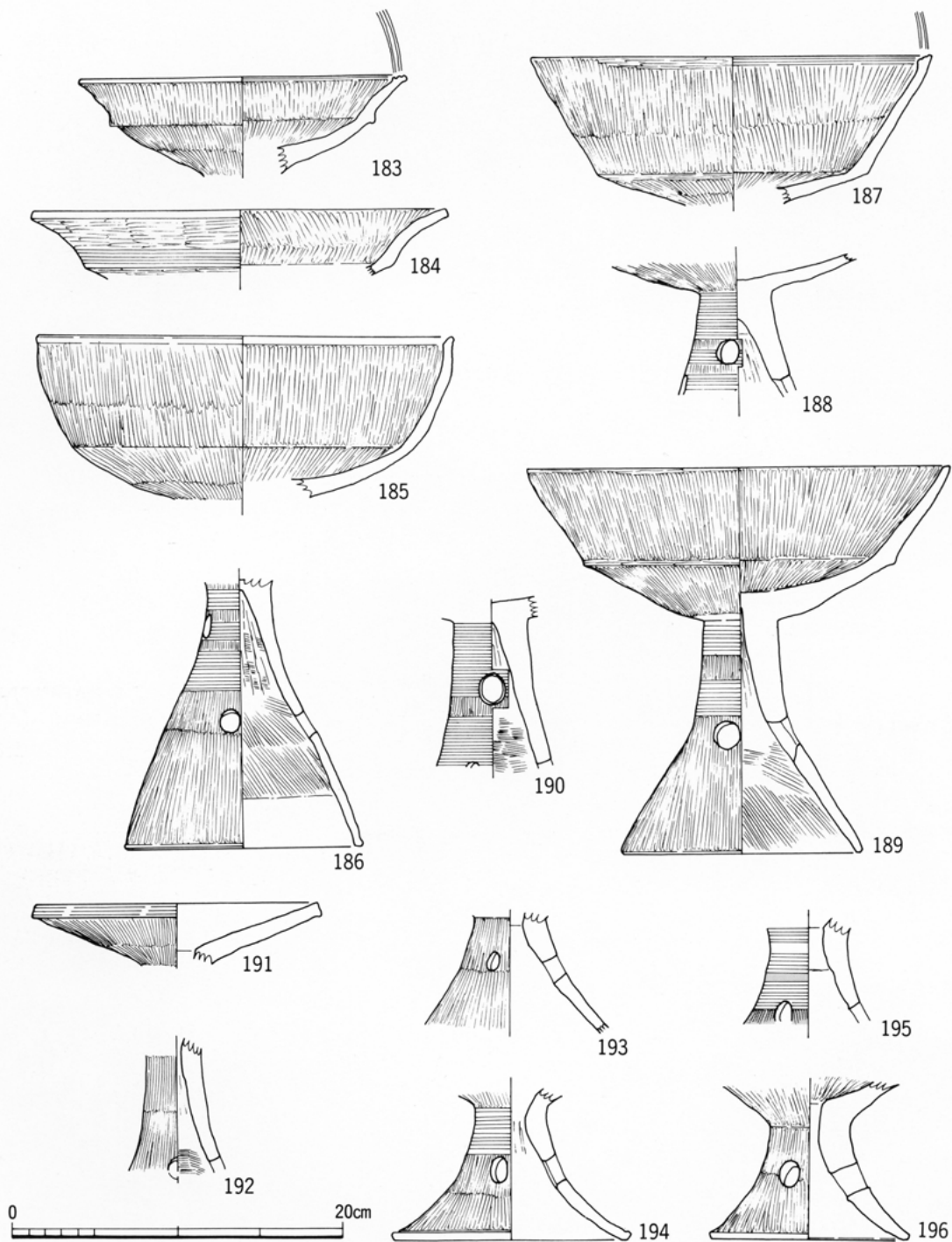
出土遺物 C地区の包含層出土遺物は少なく第71図295～298がみられたにすぎない。295は、口縁部および体部下半を欠損するが、体部最大径が50cm近くを測る大形の壺形土器である。体部上半部には、簾状文・波状文・櫛描き横線文等が施され、簾状文など古い要素もみられるが、山中式段階に比定されると考えられる。296はいわゆるパレス・スタイルの壺体部である。体部最大径は下半部にあり、下ぶくれ状の形状を呈する。体部上半部には櫛刺突による羽状文、横線文が施される。297・298は高杯であり、298は半球状の杯部をもつ高杯D。298は杯部を欠損するが、外反する脚部を有する高杯Aである。脚裾部には赤彩の痕跡が残る。(服部信博)



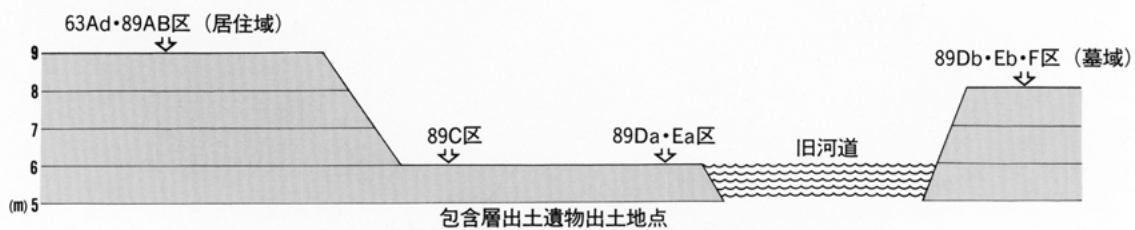
第64图 A地区(63Ad、89AB区)包含层出土遗物 (1:4)

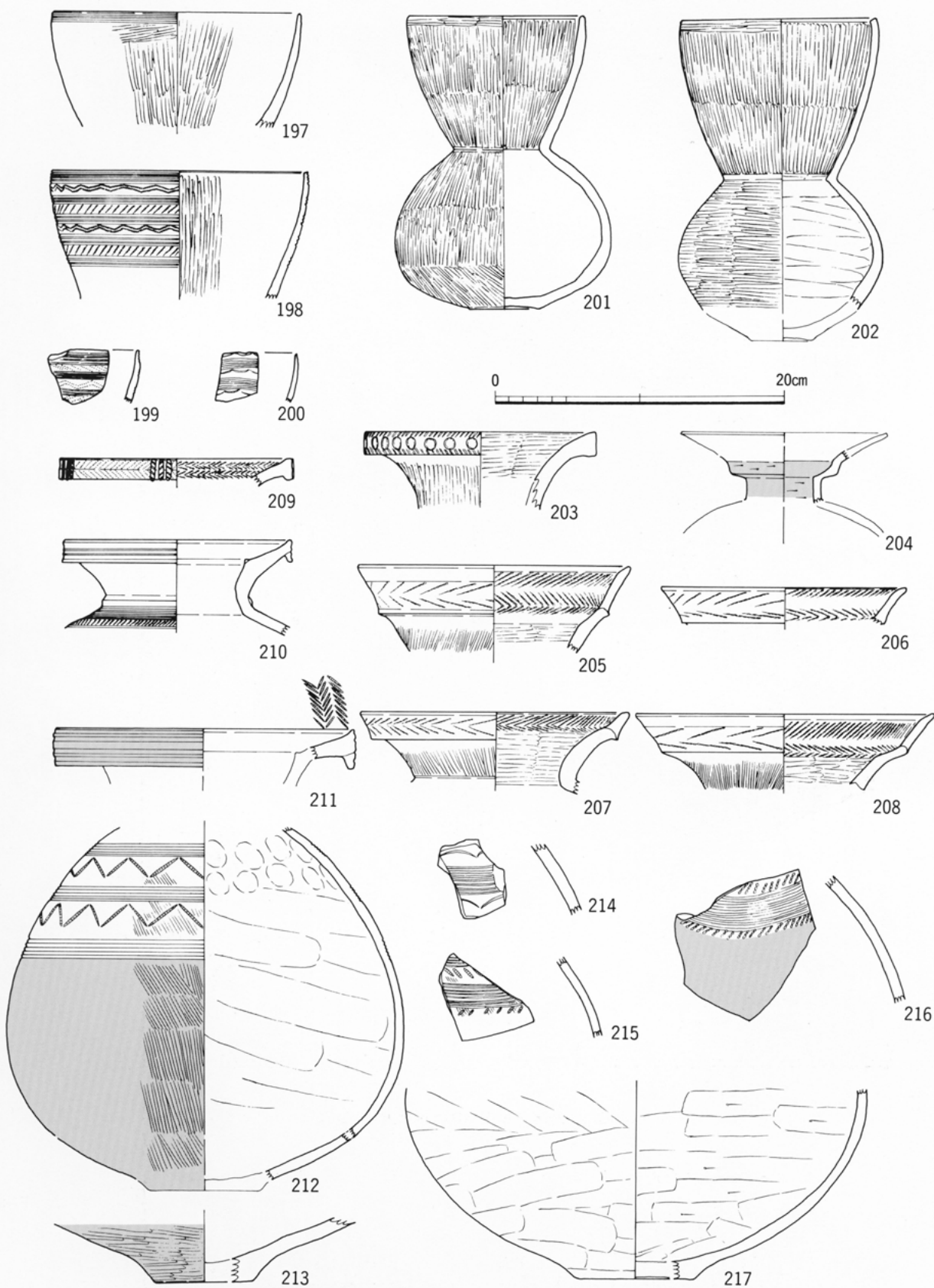


第65图 B地区(89C区)包含层出土遗物 (1:4)

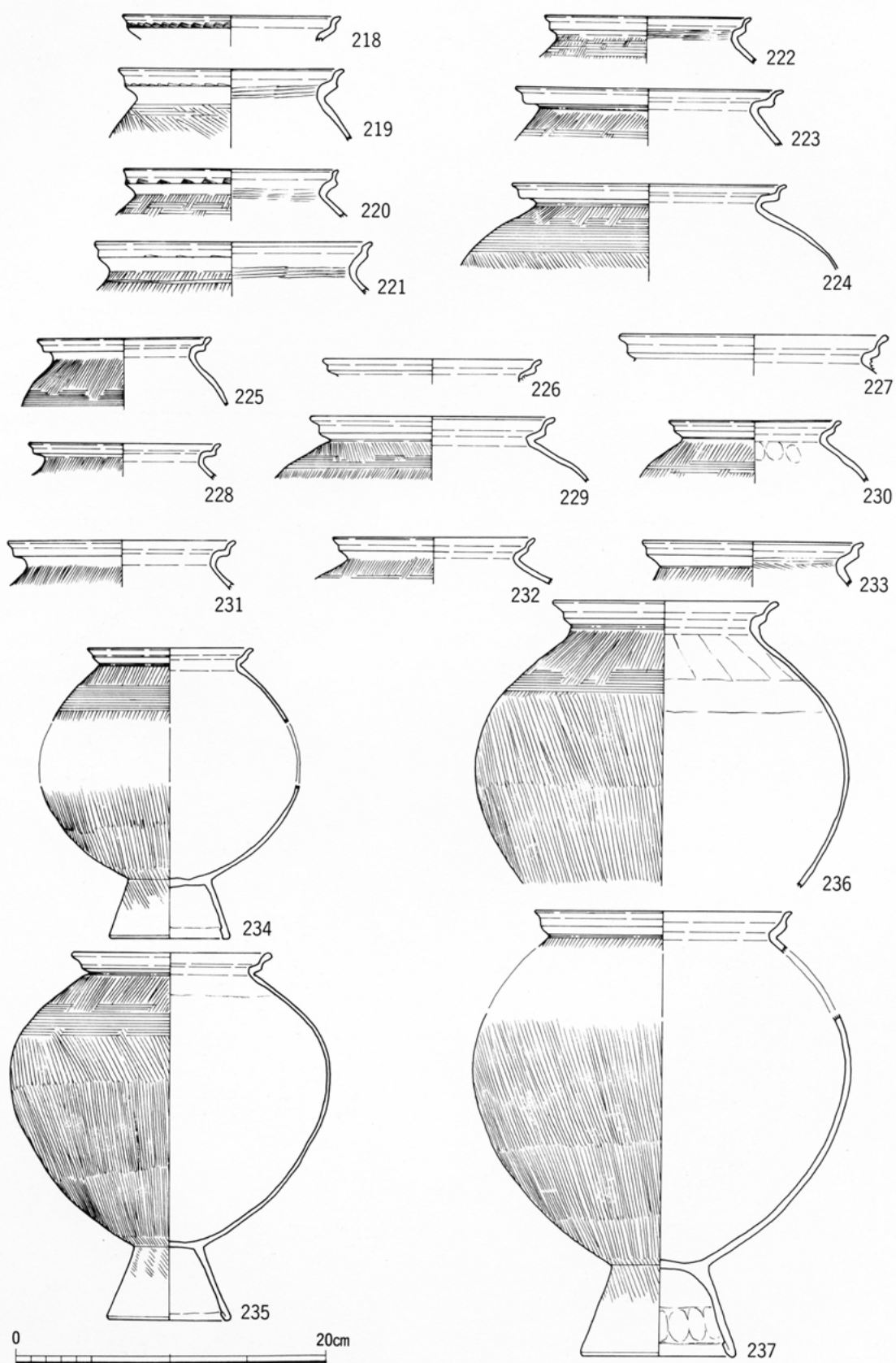


第66图 B地区(89C区)包含层出土遗物 (1:4)

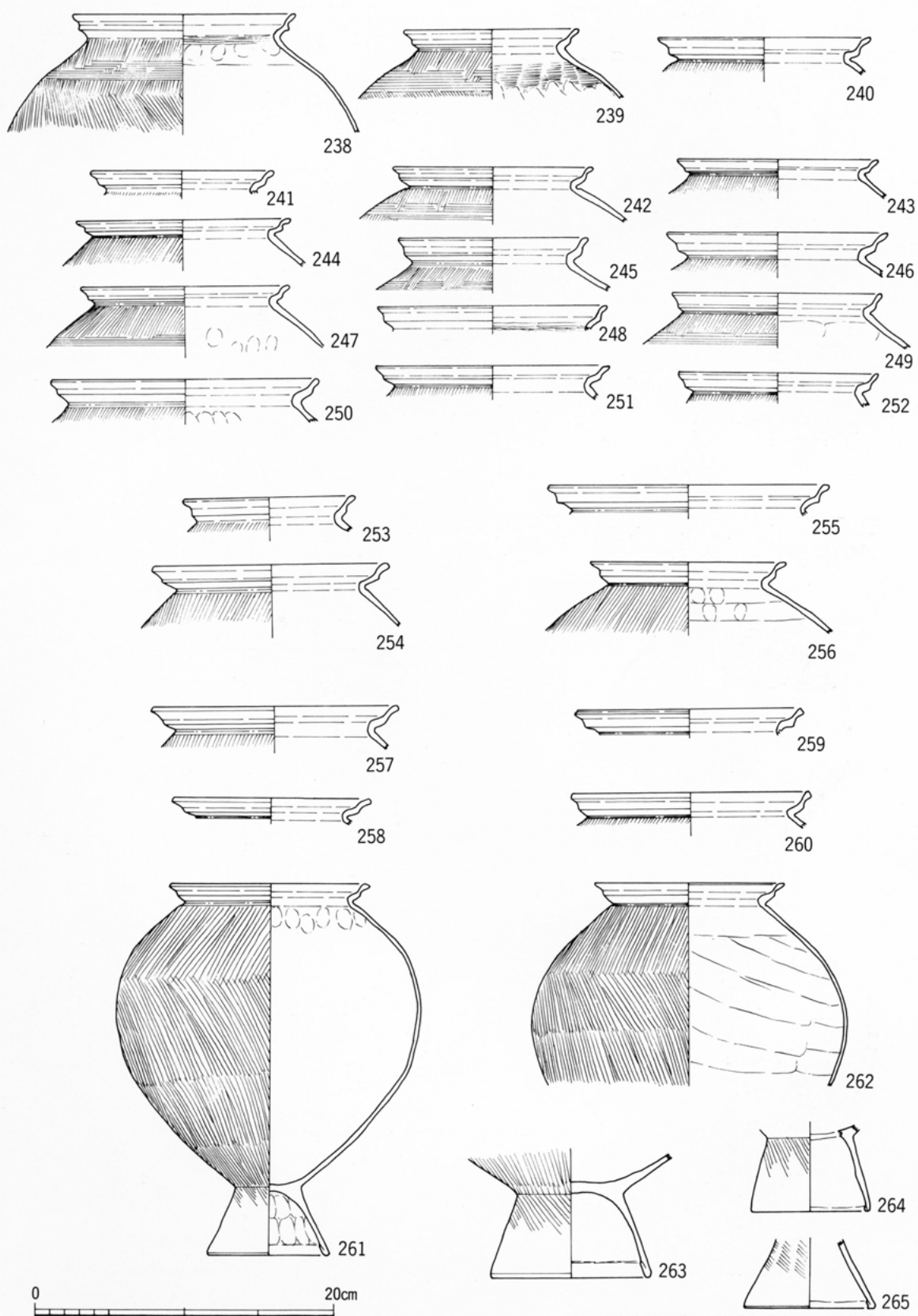




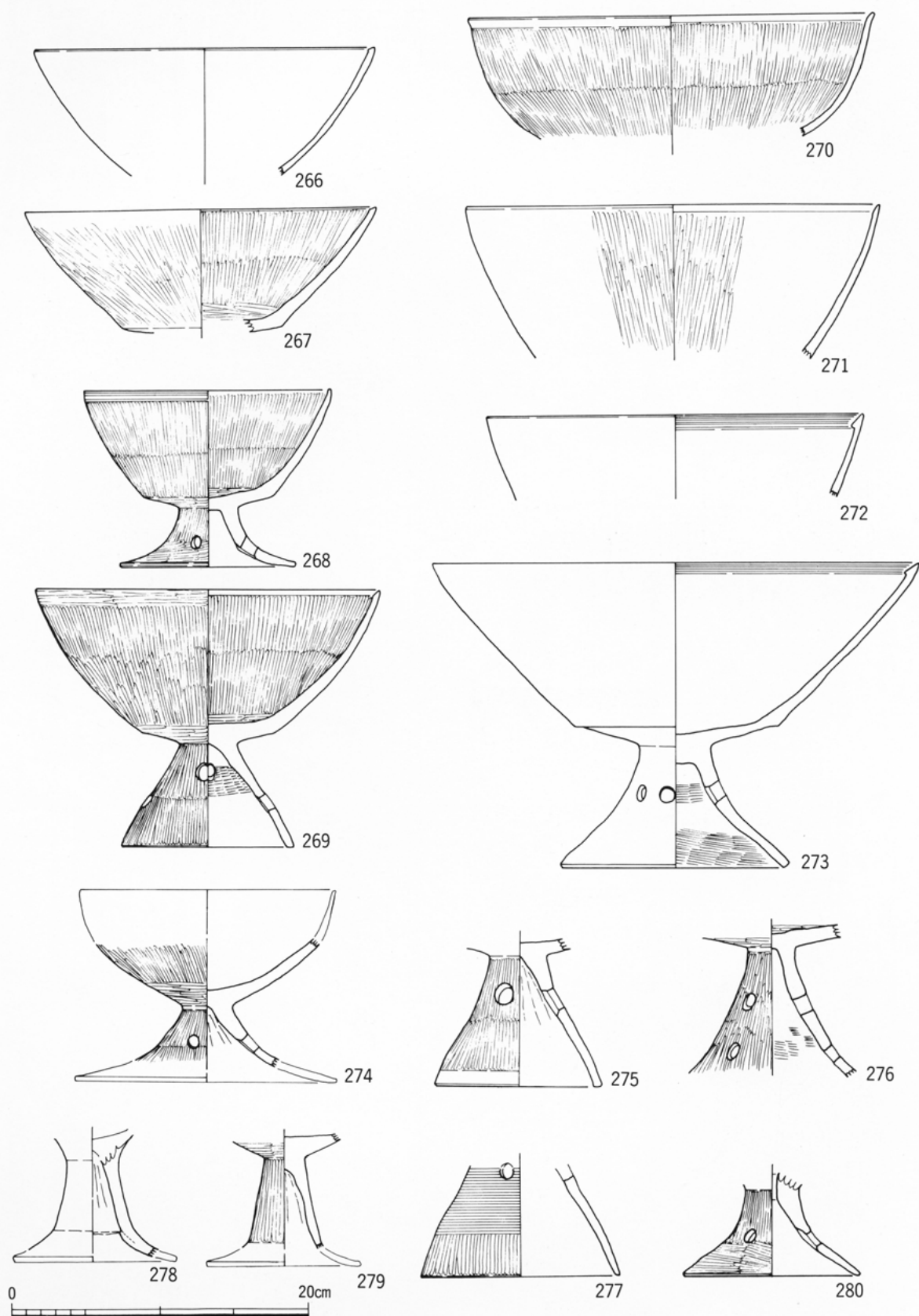
第67图 B地区(89Da·Ea区)包含层出土遗物 (1 : 4)



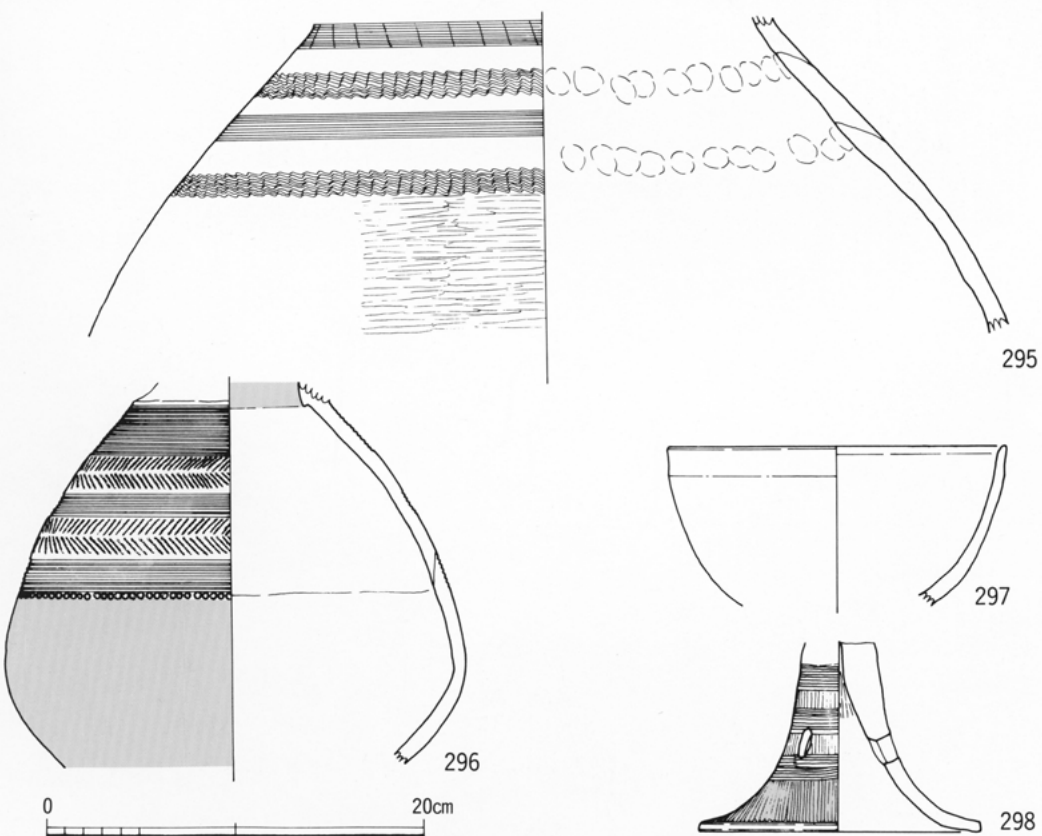
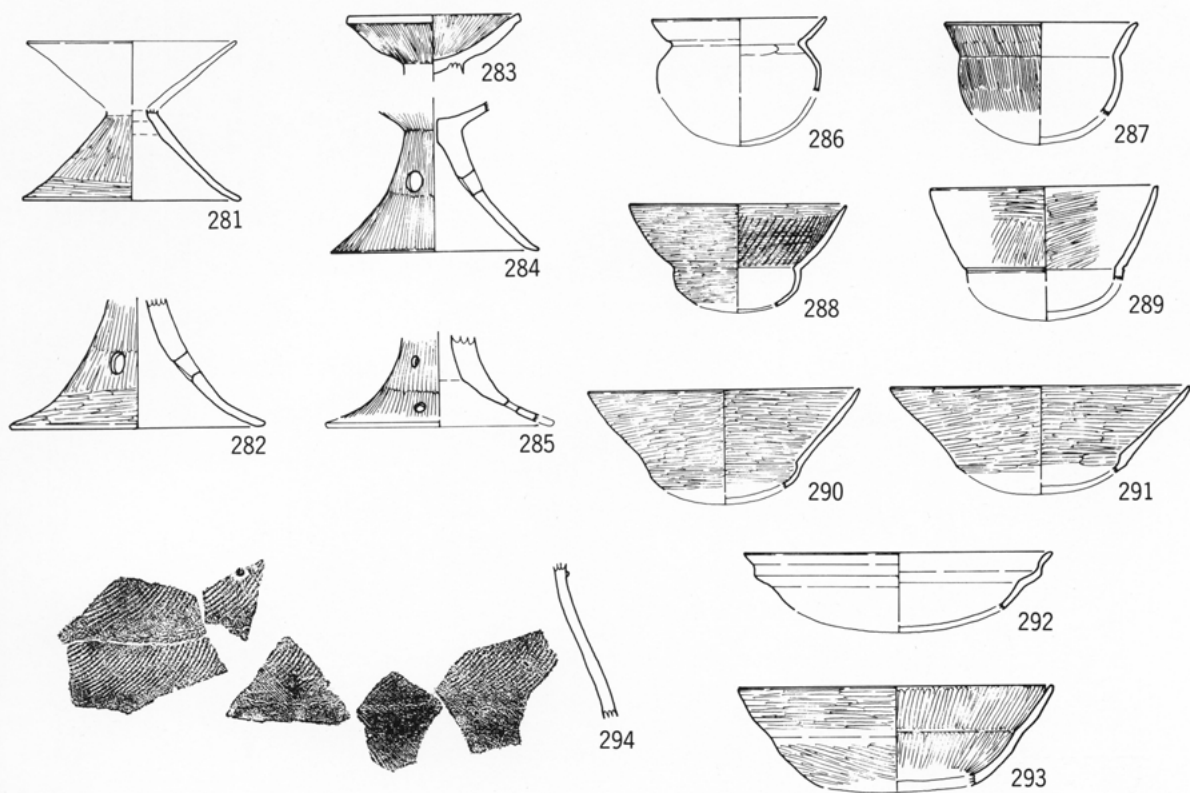
第68图 B地区(89Da·Ea区)包含层出土遗物 (1:4)



第69图 B地区(89Da·Ea区)包含層出土遺物 (1 : 4)



第70图 B地区(89Da·Ea区)包含層出土遺物 (1 : 4)



第71图 B地区(89Da•Ea区)、C地区(89Db•Eb•F区)包含層出土遺物 (1:4)

3 III期の出土遺物

古墳・集石墓群（第25図～第82図）

S Z 1301 埴輪…図版303～317は円筒埴輪で、318・319は形象埴輪の一部と考えられる。円筒型埴輪は全て「尾張型」円筒埴輪であり、全形を復原できる資料は認められないものの、2凸帯3段の通有の形態を推定できる。312・313から推測すると口径36cm・底径25.5cm・器高33cmで、基底から第1段・2段・3段の長さは、それぞれ11.5cm・8cm・14cmを測る。形態の特色は口縁部に向かって比較的直線的に立ち上がり、第3段つまり最上段が最も大きく、中間である第2段が狭く、透孔は大きく2方向に穿つ。こうした凸帯分割法による独特な形は、尾張型埴輪の小型品に普遍的に認められるものである。

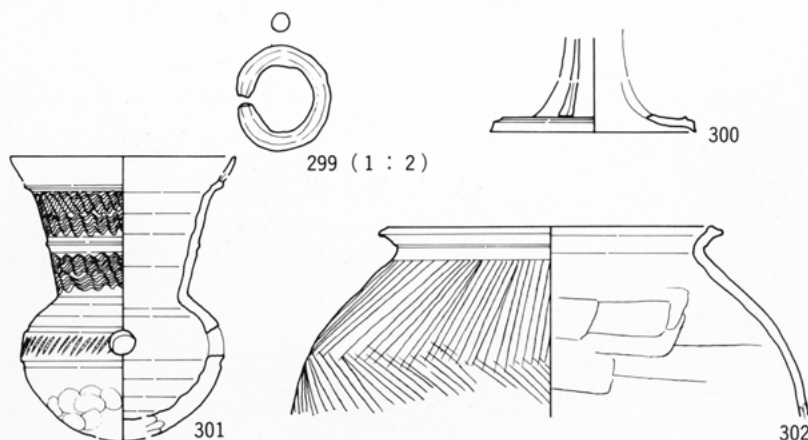
外面調整はタテハケのちヨコハケを全器壁面に施す。内面調整は最終的にはヨコ方向の動作により全器壁面を調整するものであり、その動作はヨコハケあるいはヨコ指ナデの2者が認められる。なおヨコハケの前にナナメハケを成形段階に用いる資料が、310・313・315に認められる。底部調整は内外底面に回転ケズリが施される資料が多い。

底部設定技法として味美技法がみられる。313・314・315・316には味美技法による底部設定と、その後の道具離脱をともなう「段」が認められる（底部設定A1）。

凸帯は突出高と側面長比が1：2となり、鋭利なヨコナデ調整。その他311は、窖窯焼成の硬質埴輪で、色調は灰色を呈する。透孔は、楕円形状に大きく穿孔し、またその向かって右側にヘラ記号が認められる。

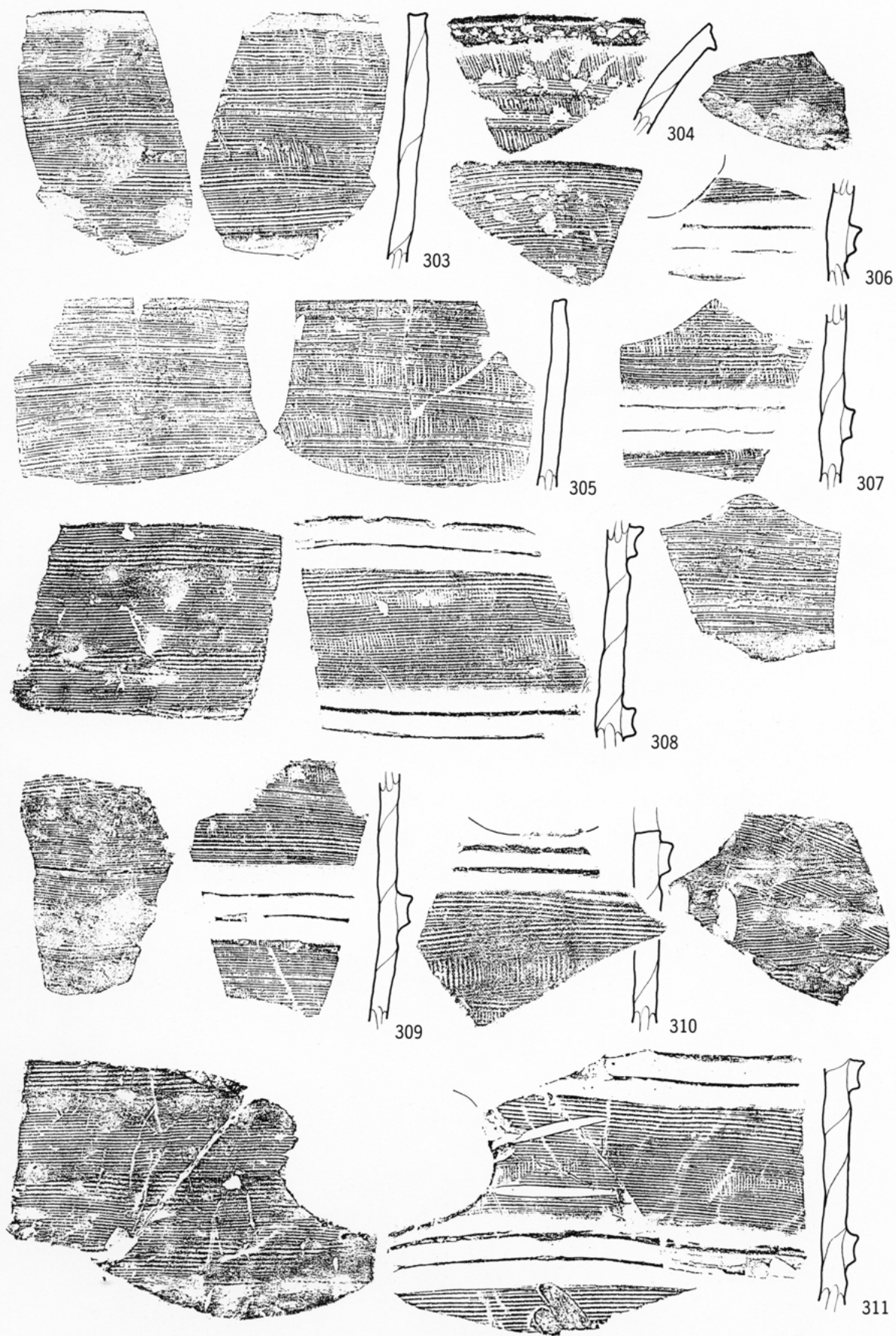
以上の円筒埴輪の特色は、尾張型埴輪の分類においても古い様相を呈する資料であり、具体的には内面調整におけるヨコ方向の調整にほとんど省略がみられず、味美技法が明確化し、基底外面にズレがみられない。凸帯は1：2で鋭利、底部調整は回転ヨコケズリを幅広く施すなどから尾張地域における埴輪編年Ⅲ-2期に中心をおく資料と考えておきたい（5世紀後葉）。

なお304は朝顔型埴輪の口縁部で、図化していないのが花状部等の破片も確認できる。

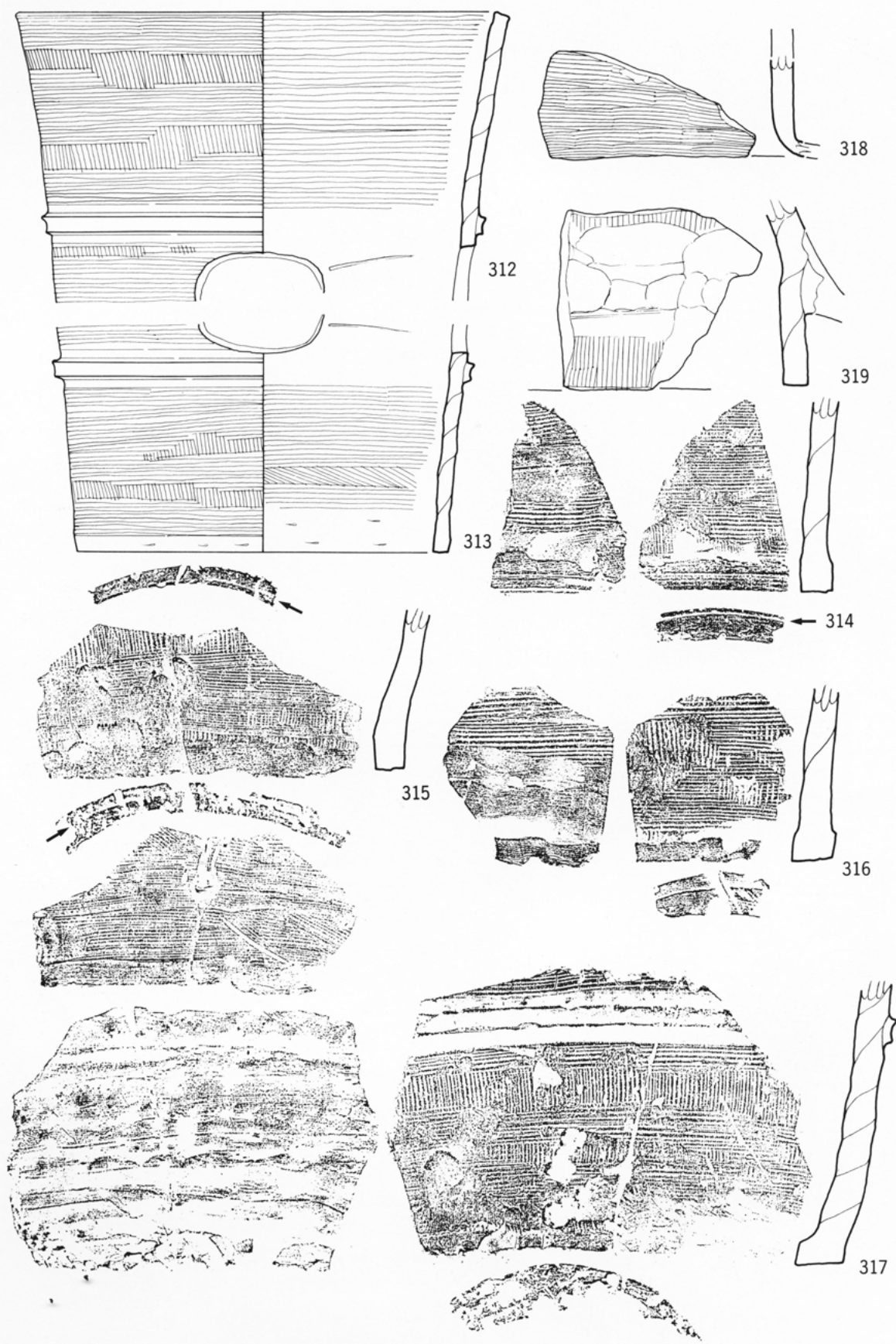


第72図 SZ1301出土遺物（1：4）

その他、周溝内より、陶邑編年MT-15号窯併行の須恵器（301）、高杯脚部片（300）、宇田型甕1段階に比定される（302）、および金属製品として、金メッキが施された耳飾り・金環（299）等が出土している。（赤塚次郎）



第73図 SZ1301出土遺物 (1:3)



第74図 SZ1301出土遺物 (1:3、実測図は1:4)

S Z 1302 第76図に図示した遺物が一括して周溝内より出土した。遺構の項でも述べたが、周溝最上層には、7世紀中葉を相前後した時期に集石墓群が築造される。出土遺物は周溝最下層に貼りついた状態では検出しておらず、すべて墳丘上から転落した状態で第19図14層より出土した。

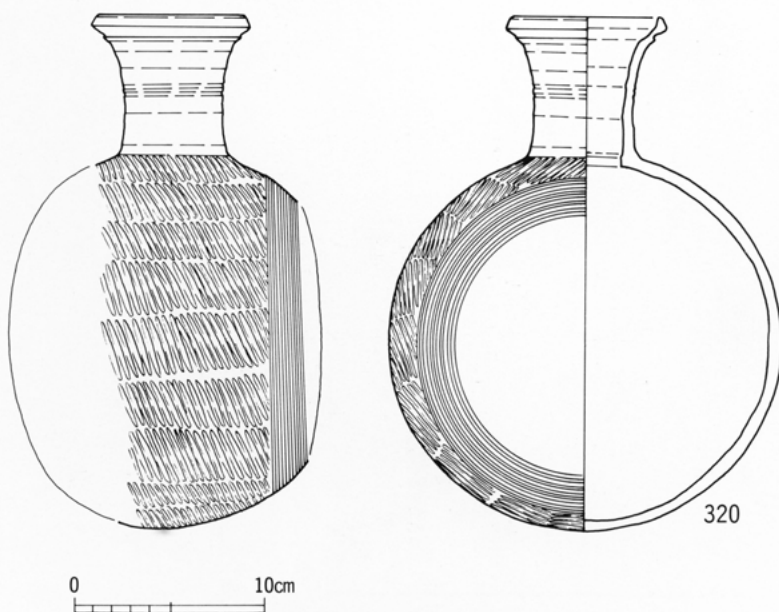
出土遺物としては須恵器・土師器がある。

須恵器…321・322・324は杯蓋であり、いずれも天井部は欠損し、口縁部と画する稜の張り出しは短く鋭さに欠ける。324は内彎する口縁部を有する。323は杯身であり底部を欠損する。口縁部の立ち上がりは、やや内傾し受部は上外方へのび、端部は丸く収めている。325は有蓋高杯とセットをなす蓋であり、口縁はほぼ垂直にのび、稜の張り出しは短く丸い。天井部には、自然釉がかかり偏平なつまみがつく。326～329は高杯であり、326・327は全形を窺うことのできる資料である。脚部に比して杯部は比較的大きく一見バランスが悪い。杯部は、ほぼ323と同様の形状を呈し、底部下1/3にヘラケズリ調整が確認できる。脚部は短く外反する。328は短脚1段透孔をもつものである。332は、大形の甕であり、底部は焼成後穿孔される。口縁部は大きく外方にのび、体部には6条の沈線とタタキを施し、中央には×印が刻まれている。

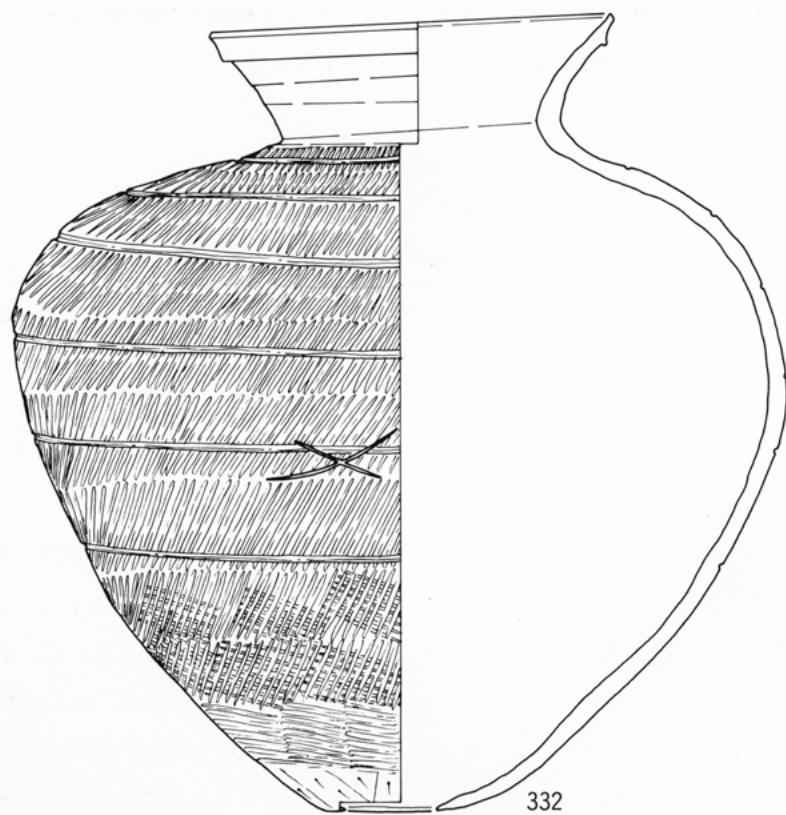
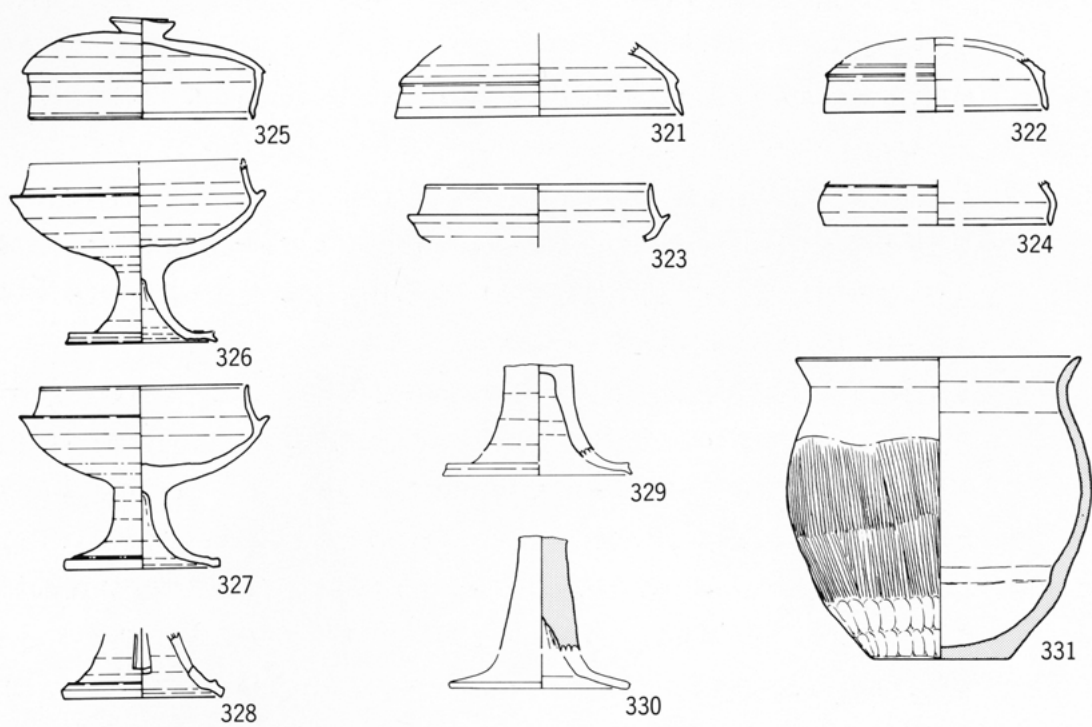
土師器…331は平底の甕である。短く外反する口縁部と、内湾しながら底部にいたる形状を呈し、体部にはハケメ、指圧痕が残り、体部上半から口縁部はナデ調整が施される。335は脚裾部で屈曲する高杯である。

集石墓群 第75図320は、集石墓群を構成する主体部の一つであるS X 1308より出土した須恵器提瓶である。体部中央部分の大半を欠損するが、概ね口縁部から底部に至るまでその形状を窺うことができる。口頸部はほぼ直立気味に立ち上がり、口縁下部で緩やかに外反する。口

頸部中央には不明瞭ながら2条の凹線が巡る。体部は偏半球状の形態を呈し、同心円状のカキメ調整、及びタタキが施されている。口頸部は内外面ともにナデによって調整される。また、口頸部との体部の接合痕も明瞭に確認することができる。胎土は精選され緻密であり、灰白色の色調を呈する。時期的には口頸部の形状等よりI-17号窯古段階に併行するものと考えられ、7世紀中葉に比定できよう。



第75図 SX1308出土遺物 (1 : 4)



第76図 SZ1302出土遺物 (1 : 4)

S Z 1303 S Z 1303からは、第77図333～344が、周溝内より、転落した状態で出土した。須恵器と土師器がある。

須恵器…334～336は、天井部を欠損するが杯蓋であり、いずれも稜を有するがその張り出しは短い。口縁端部は丸く収めるが、226は明瞭な段をもつ。337～339は、杯身であり、口縁部はいずれも内傾しながら立ち上がる。受部は上外方にのび、端部は丸く収める。体部下半にはヘラケズリが施され、やや丸みを持った底部となる。340は甕の体部片であり、穿孔部は突出した形状を呈する。これらの資料はやや時期幅をもつと考えられ、概ねH—44～H—50号窯式に相当すると考えられる。

土師器…341は宇田型甕、342～344は、いわゆる長胴甕である。344は全形を窺うことのできる資料である。口縁部は、短く外傾し、端部は平坦で面を持つ。ヨコナデにより調整される。体部は長くのび、底部は丸底である。体部外面の調整はタテハケが主体であり、内面の上位にはヨコハケの痕跡が確認できるが、下半部は器面があれ、不鮮明となっている。

S Z 1304 S Z 1304からは、第77図345・346が出土した。また図示はしていないが円筒埴輪の細片も出土している。345は、短く外反する高杯脚部片であり、裾部には明瞭な面をもち、1条の沈線が巡る。346は、口頸部の一部を欠損するがほぼ全形が判明する資料であり、口頸部に比して体部は大形、偏平球状の形状を呈する。口縁部には波状文、体部には4列の沈線文帯と3列の波状文帯を交互に配する。胎土はよく精選され緻密であり、灰白色の色調を呈する。東山111号窯に併行する時期に相当すると考えられる。

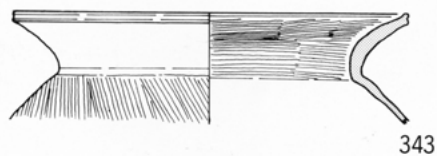
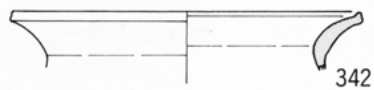
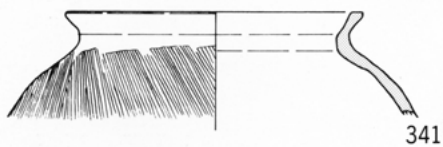
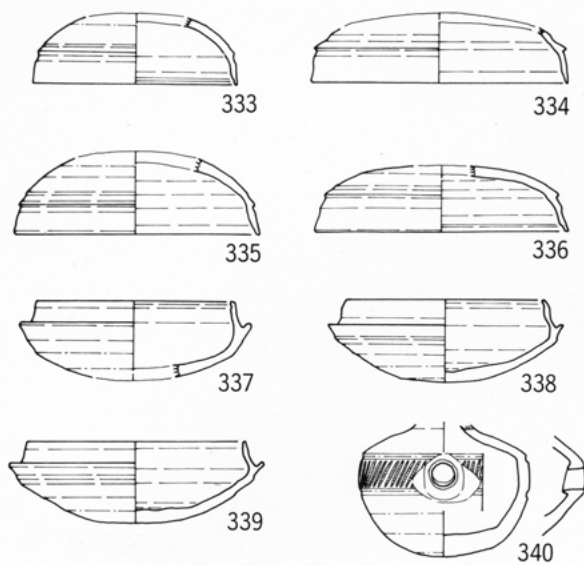
包含層出土遺物（第77図～第78図）

図示した遺物は、すべて五条川左岸に設定した89E b・F区から出土したものである。第77図 347～348は宇田型甕であり、349は全形を窺うことができる。349は、短く外傾する口縁部をもち、端部は平坦で面を持つ。体部は卵状に長くのび、体部下半は下から上へのハケ、上位は上から下へのハケ調整を行い、部分的に斜めの方向のハケメが認められる。台部は短くハの字状に開く。

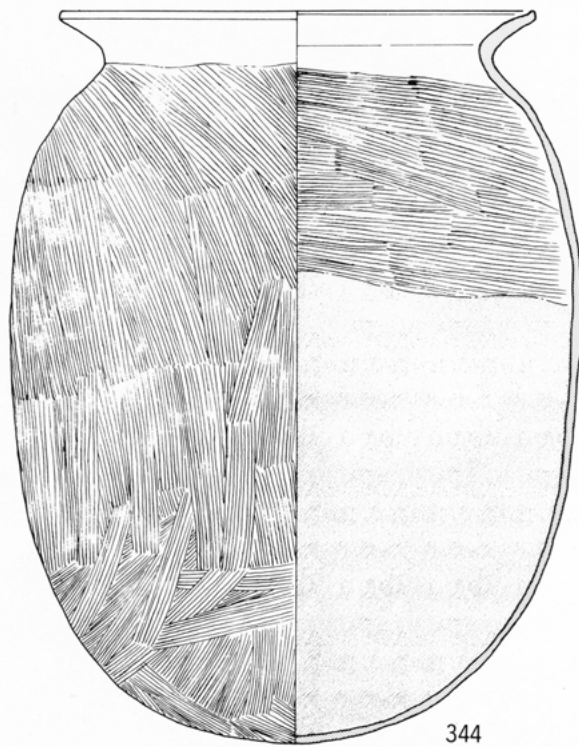
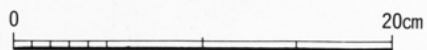
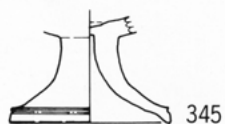
350～357は須恵器杯蓋片であり、350～354は、器高が高く、口縁内面には明瞭な眼をもつもので、概ねH—11号窯式に併行する資料と考えられ、359の杯身をほぼ同様の時期に相当する資料と考えられる。355～357は、偏平な器形となり、明瞭な稜をもつ。H—61～H—44号窯式に比定されよう。358は摘みのつく蓋である。361は直口壺、362は体部片である。363～365は、短脚1段透孔をもった高杯脚部片、367は器面に波状文を施す器台片か。368は、把手のついた甗片であり、体部中央に2条の沈線とタタキを施す。また、366は、壺等の体部片であり、器面上にヘラ描き文様を描き、初期須恵器の可能性が考えられる。369～371は土師器長胴甕の口頸部片であり、いずれも端部は平坦で面をもつ。

372・373は、石製紡錘車であり、373は側面および下面に斜格子文で充填した鋸歯文が描かれている。

—SZ1303—

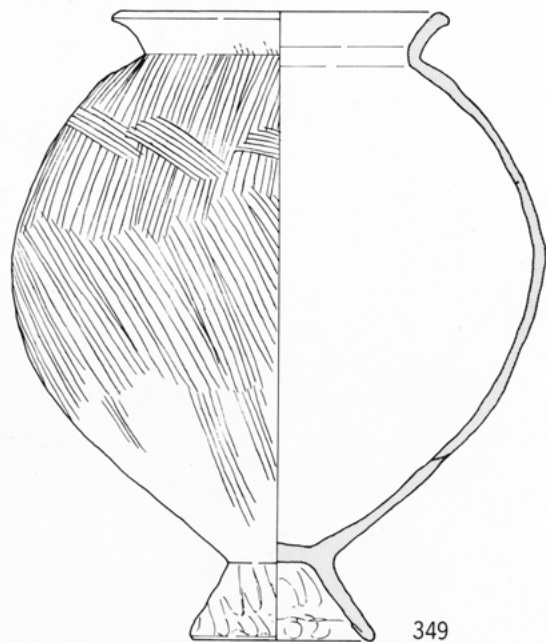
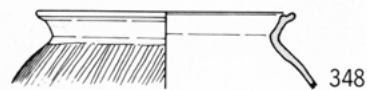
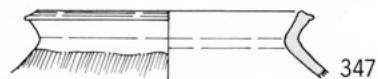


—SZ1304—

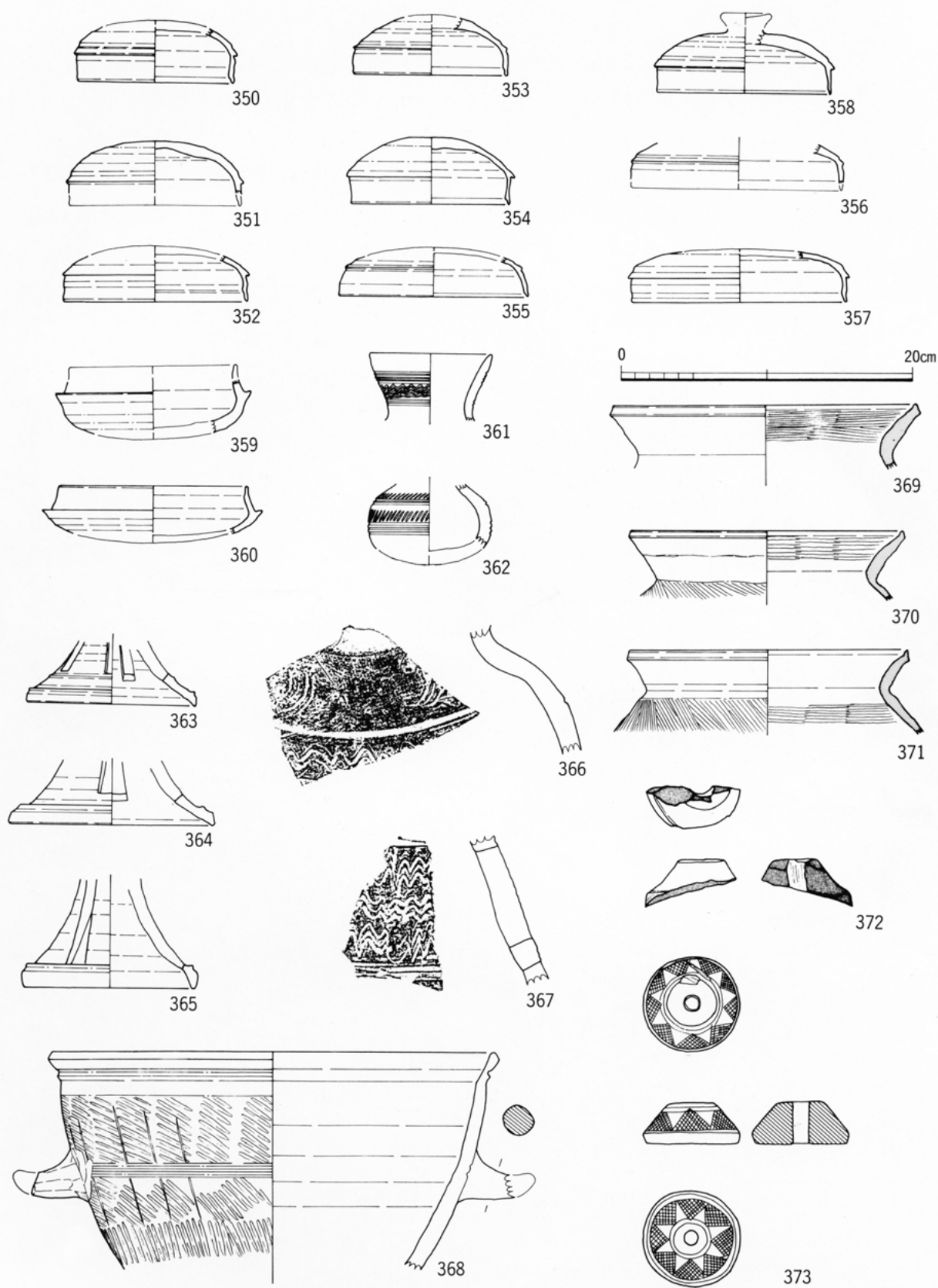


※トーンは器壁の荒を示す。

—包含層—



第77図 SZ1303・1304・包含層出土遺物 (1 : 4)

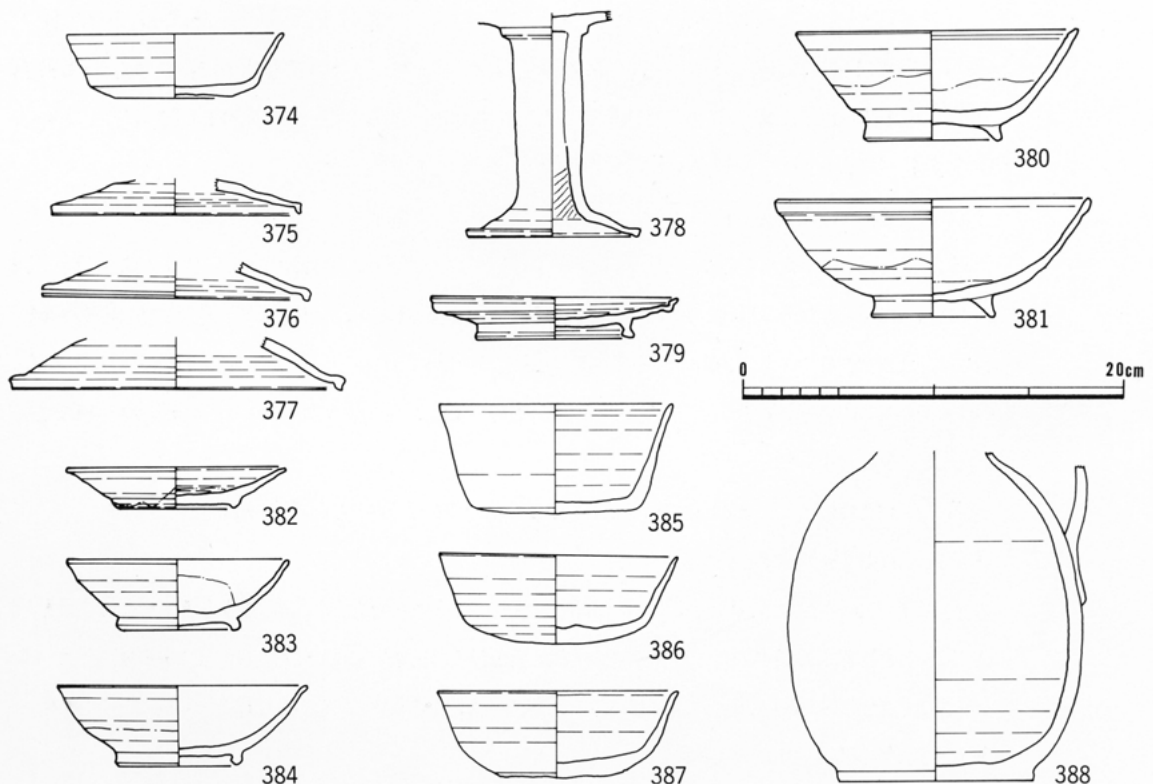


第78図 89Eb・F区包含層出土遺物(1:4, 拓図・石製品は1:2)

4 IV期の出土遺物

IV期の遺物は、ほぼ各調査区で確認することができたが、それに伴う遺構は少なく、また、遺物の出土量も少なかった。以下、遺構出土と包含層出土資料とに分け、説明していきたい。

- S D1401 374は、須恵器の杯身であり、O-10号なしのIG-78号窯式に比定できよう。
- S K1401 比較的まとまった遺物が検出されており、375～377は蓋、378は高杯脚部、379は高台のついた盤である。すべて9世紀第1四半期に相当し、IG-78号窯式に比定できよう。
- S D1501 382・383の2点が出土している。いずれも11世紀前葉に比定でき、H-72号窯式に併行すると考えられる。
- S X1501 性格不明の集石内より検出したものであり、380・381ともにやや深めの体部をもった碗である。381の口縁部は、肥厚し玉縁状となる。百代寺窯式に比定できよう。
- 包含層 384～388は、包含層出土である。384は、O-53号窯式と考えられる灰釉陶器。385～387は、I-41～C-2号窯式に相当する須恵器杯身。388は、K-90号窯式に比定することができようか。
- (服部信博)



第79図 IV期の出土遺物 (1:4)

5 V期の遺物

V期の遺物は、五条川右岸では遺構に伴うものは少なく、左岸の溝や井戸からの出土が多い。遺物としては、灰釉系陶器、いわゆる山茶碗・小皿が多く、他に古瀬戸・常滑・土師質のいわゆる伊勢型鍋などの出土が見られる。

器種分類 まず、灰釉系陶器のみ器種分類をしておく。

碗A 無釉の碗。灰釉系陶器の碗、山茶碗。

A 1 器壁は厚く、表面はザラザラした荒

肌手。杳殻痕が残る高台がある。

A 2 器壁は薄く、表面は滑らかな均質手。

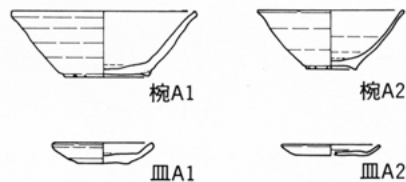
杳殻痕が残る高台である。

皿A 無釉の皿。灰釉系陶器の皿、小皿。

A 1 器壁は厚く、表面はザラザラした荒

肌手。

A 2 器壁は薄く、表面は滑らかな均質手。



第80図 器種分類(V期の遺物)

S E 04 (第84図、389～402)

碗A 1、皿A 1、土師器鍋が井戸の埋土や井戸枠付近から出土した。碗には397や398のように底裏や見込みに、墨書が認められるものが含まれる。401は全体の作りは他の山茶碗と同じであるが、口縁の一部をつまみだし、片口碗となっている。402は土師質鍋で、いわゆる伊勢型鍋。口縁部の形態から新田分類の5類に相当する。

S D 26 (第89図、403～412)

碗A 1・A 2、皿A 2、古瀬戸壺、常滑窯の甕、土師質鍋が出土した。403は皿A 2。404～408は皿A 1。408は褐色である以上は、厚手の山茶碗に類似するが、高い台を持つ。409・410は灰釉の古瀬戸で、409は水注、410は壺の口縁部であろう。411は常滑窯産の甕である。412は内・外面に指押さえの後が残る土師質鍋。口縁部の形からこれも伊勢型鍋である。

S E 03 (第15図、413～416)

碗A 2が出土した。413～416はいずれも美濃窯産で明和1号窯式に相当する。

S D 26 (第85図、417～423)

碗A 2、皿A 1・A 2、緑釉皿、古瀬戸壺、常滑甕が出土した。417と420は皿A 2と碗A 2。418と421は皿A 1と碗A 1である。419は口縁部のみに灰釉を施した緑釉皿。

422は灰釉の古瀬戸の壺。423は常滑窯産甕で口縁部の形状から14世紀後半頃に比定される。

S E 06 (第85図、424～429)

碗A 2、皿A 2、古瀬戸の壺が出土した。424～428の皿・碗はいずれも均質手で、碗は杳殻痕の残る高台がつく。429は古瀬戸の壺。鉄釉が掛かるが焼成は良くない。

6 VI期の遺物

VI期の遺物としては、調査区全域から土器・陶磁器が出土し、溝の中からは木製品も大量に見つかった。記述に当たっては、材質別にまとめるが、土器・陶磁器については一括して述べる。遺物は遺構に伴って出土したものを中心に概観する。なお瓦はまったく出土しなかった。金属製品も腐食してほとんど形をとどめない銭貨があったほかは出土を見なかった。

(1) 土器・陶磁器

土器には、土師質土器と瓦器があり、陶磁器には中国産などの輸入陶磁器と国産の陶器がある。器種は碗、皿、鉢、壺、甕、鍋に大別できる。説明を簡略化し、重複を避けるため次に器種分類をしておく。

器種分類 碗B 高台があり、口縁部にくびれがある施

釉の碗。いわゆる天目茶碗。

B 1 体部外面下半部に鉄錆釉の化粧掛

けを施した碗。

B 2 高台裏が内反りになっている碗。

B 3 体部外面下半部に鉄錆釉の化粧掛

けを施さない碗。

碗C 高台があり、口縁部にくびれがない施

釉の碗。

C 1 体部が丸みを帯びた碗。丸碗。

C 2 体部が丸ノミで蓮弁を現した碗。

C 3 体部が丸みを帯びているが偏平な

碗。平碗。

C 4 体部が直線的に開く偏平な碗。

C 5 腰部が折れる碗。

碗D 高台が横に広く作られる碗。

D 1 底部が台状に広く作られる碗。

D 2 台部の中間が鐏状に広がる碗。

皿B 口縁部だけに施釉した縁釉皿。

皿C 内面は全面に施釉した皿。

C 1 付高台で口縁部が外反するもの。

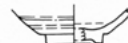
いわゆる端反り皿。



碗B1



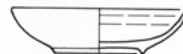
碗B2



碗B3



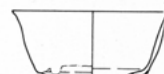
碗C1



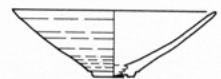
碗C3



碗C2



碗C5



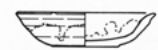
碗C4



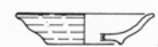
碗D1



碗D2



皿B



皿C1

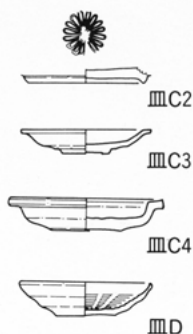
第81図 器種分類(VI期の遺物-1)

C 2 付高台で、見込み部に花文の印を押すもの。

C 3 削り込み高台いわゆる碁笥底で、口縁部が外反するもの。

C 4 口縁部が外へ折れ曲がり、端部が短く立ち上がるいわゆる折縁皿。

皿D 内面に同心円の圈線の入った皿。



土師質皿

皿A 手づくねの皿。非ロクロ成形。

A 1 体部外面は指押さえて調整。

A 2 体部外面を1段に横ナデする。体部は摘み上げるように作る。口径は約6.5cm。

皿B ロクロ成型の皿。底部に糸切痕が残る。大量生産のためか規格品が多い。

B 1 口径が約8cm

2 口径が約9.5cm

3 口径が約11cm

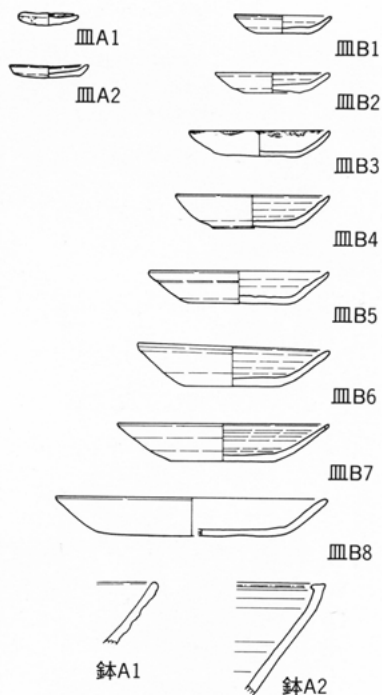
4 口径が約12.5cm

5 口径が約14cm

6 口径が約15.5cm

7 口径が約17cm

8 口径が約21.5cm



鉢A 体部が逆ハの字状に開く施釉の鉢。

A 1 口縁部が直線的に伸びる鉢。

A 2 口縁部内側に端部が小さく突出。

A 3 口縁部内側に段か突帯が付くもの。

鉢B 体部が直立するもの。

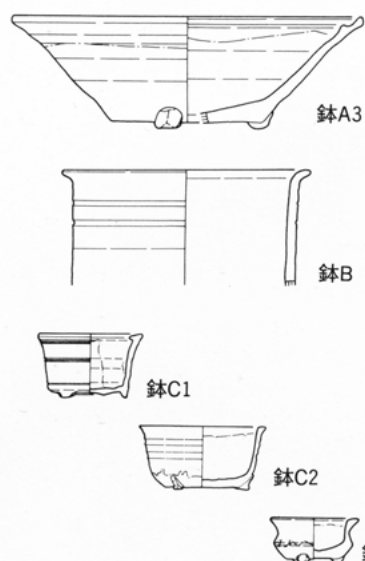
鉢C 小型で体部が直立するもの。香炉。

C 1 口縁部が外側へ小さく突出する。

C 2 口縁部が内側へ折れ曲がるもの。

鉢D 体部が逆ハの字状に開き、内面に摺目をもついわゆる擂鉢。

D 1 口縁部が内側へ折れ曲がり、やや



第82図 器種分類(VI期の遺物-2)

口径に比べ器高の高いもの。

D 2 口縁部が内側へ折れ曲がり、体部
は外反気味に大きく開くもの。

D 3 口縁端部が内外面に僅かに突出。

D 4 口縁部に縁帯があるもの。

壺A 高台をもち、肩に耳が付くもの。

B やや頸部が長く、耳が付かないもの。

C 肩がほとんど張らないもの。

D 体部に注口を持つ水滴。

E 口縁部が僅かに立ち上がる肩衝茶入れ。

瓶

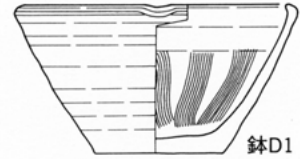
甕

土師質鍋

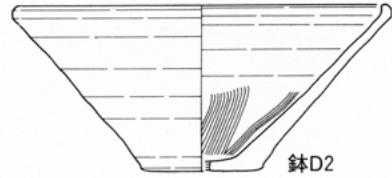
鍋A 口縁部近い内面に耳を持つ鍋。内耳鍋。

B 齔のある鍋。いわゆる羽釜。

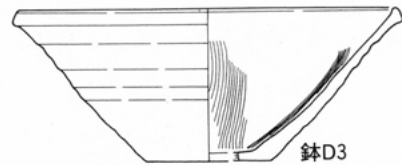
C 胴部に齔、肩に耳が付く茶釜型羽釜。



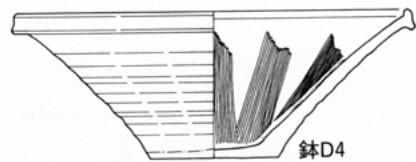
鉢D1



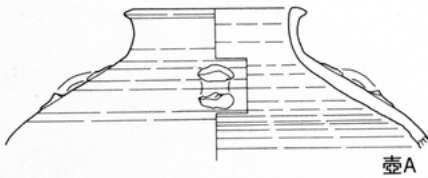
鉢D2



鉢D3



鉢D4



壺A



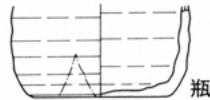
壺D



壺E



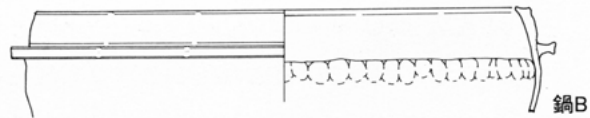
壺B



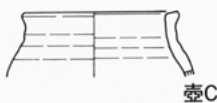
瓶



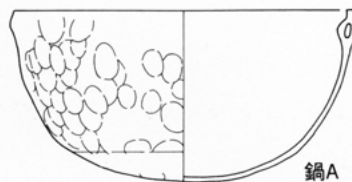
甕



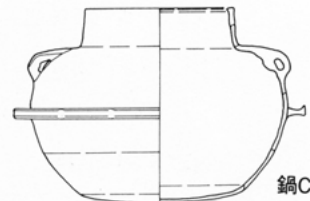
鍋B



壺C



鍋A



鍋C

第83図 器種分類(VI期の遺物-3)

SX01 (第86図、430～454)

62B区と63Bc区で検出した焼土面の広がりからの出土遺物。幅8m、長さ3.2mの範囲で焼土と炭化物に混ざって検出された。壁土の焼けた固まりもかなり含まれることから、建物が焼け落ちた痕跡と考えられる。碗B、土師質皿B3、B7、鉢D1、D3、D4、瓶のほか、胎土から信楽窯産と推定される壺が出土している。この他に注目すべきものとして貿易陶磁がある。実測図を描けないような細片を含めても土師質皿29点、天目茶碗3点、播鉢3点、鉢6点、壺8点、その他25点の合計74点。これに対して、貿易陶磁は青花31点、白磁7点、青磁25点、合計63点を数える。439～443は青花皿。碁笥底で、見込みには2条の界線があり、その内側に花文が描かれる。小野分類の皿C群に属する。447・445・447はもう少し大ぶりで、端反り口縁部の内外面に界線が在り、外面には花文がえがかれている。446は碗で端反り口縁部の内外面に界線があり、外面には花文が認められる。小野分類の碗B群に属す。450は灰色の胎土で、陶器と磁器の間のような焼きである。口縁部は外方へ開く。端部は角にへう切りされ、厚く釉がかかり、細かい貫入が入る。朝鮮半島からの輸入品である。452は壺の蓋で、上面には鐏文が施される。453は碗で、外面には刻線蓮弁文がある。454・455は鉢の一部で、いずれも見込みに花文が線刻される。455は、高台裏は蛇の目に釉が掛かる。

SD01 (第87図、455～463)

灰色粘質土から、土師器皿A2、B2、B4、皿B、D、碗A1、B1が出土。455は指押さえの跡が明瞭に残る。457は底裏に墨書あり、底径から推測すると土師質皿B4か。462は灰釉が掛かった丸碗。463は腰部に鉄錆釉が掛かる。大窯Ⅰ期。

SD02 (第87図、464～469)

灰色粘質土の同じレベルで出土。輸入磁器碗が1点出土。他に皿D、鉢D4、鍋B、Cが出土。466は外面に芭蕉文が描かれる。鍋はいずれも鏝より下部に厚く煤が付着。

SD03 (第88図～第90図、470～552)

遺物は非常に多く、一括投棄されたことが明瞭な土師質皿は200点以上もまとまっていた。土師質皿A1、B3～7、碗B1、C2、C3、C5、壺B～D、鉢B～D、鉢A2、A3、C2、D2、D3、鍋A、C、土鈴、輸入磁器が出土。535、536は灰釉が掛かり、青磁碗を模倣して外面には蓮弁文を丸ノミで削って表現している。543は焼成が不良な黄褐色の青磁碗である。544は厚手の青磁の鉢で、鮮やかな青色の釉の下には線刻した花文が見られる。547は窖窯の製品で口縁は欠損しているが鉢A3であろう。底裏には「やうしやうとのの者可」と墨書が残る。

SD04 (第91図、556・557)

遺物は少なかった。556は土師器皿B4。557は青緑色の釉が厚く掛かった酒会壺。

SD05 (第91図、558～566)

土師質皿A1、B1、B5、皿C、鉢A3、C2、壺Dの他に青花碗、青磁鉢が出土。563は灰釉の香炉で、内面は口縁部のみ、外面は腰まで施釉される。粗雑な作りの足が付く。565

は口縁部は無いが灰釉の皿で、疊付き以外は施釉され削り込み高台である。566は青花碗で外面に花文が描かれている。557は青磁の鉢で内側口縁部直下に浅い沈線が1条線刻されている。

SK03 (第91図、568～586)

土師質皿A1、B1～8のほかには天目茶碗口縁部の細片と鉢C3が各1点出土したのみである。土師質皿は最高8枚程重なって出土。土師質皿をまとめて捨てた廃棄土田坑観がある。油煙がついて黒く汚れた皿はB2に多く認められ、規格品の皿を特定の目的で使用していた可能性がある。

SD06 (第92図・第93図、587～632)

土師質皿A1、B1～6、碗B1、B3、C1、C2、皿B、青磁の碗、皿が出土している。土師質皿は4か所集中して見つかり、そのまともいごとに残存状況の良いものを図示した。619～621は天目茶碗で大窯I期のもの。622は腰から下は鉄錆釉の化粧掛けは行われず、輪高台の削り込みも著しい。大窯III期に比定。これが、掘り直された溝の最下層から炭化物の細かな粒や焼土と共に出土したことから、岩倉城落城年代である永禄2(1559)年には大窯III期の製品が市場に出回っていたことの根拠になるとの推定がされている。

626は碗C2。灰釉の丸碗で、丸ノミで蓮弁が表現されている。627は口縁部内側に線刻がみられる青磁の皿。628の青磁の碗である。629は窖窯期の灰釉鉢である。634は擂鉢と同じ薄い照りのある錆釉がかかる。円形浮文が2個と菊花文が押印される。全形は不明。

SD07 (第93図、635～639)

遺物は少なく僅かに土師質皿B1、B2、皿C3、D、青磁碗が出土した。

SD19 (第94図、640～645)

碗B1、C4、鉢D2、D4、壺Aが出土。

SD15 (第94図、646～649)

鉢D1のほかには瓦質の高い台が付いた壺647や丁寧な作りで立派な脚が付いた長方形の瓦質火鉢649が出土。

SD08 (第95図、650～670)

土師質皿A1、B1、皿C2、C4、D、碗B1、B2、碗D1、壺D1、壺A、C、鉢D2、瓶、そのほか白磁皿、青花碗・皿が主に青灰色シルト層から出土した。

SD09 (第96図、679～681)

皿C1、瓶、青磁680が出土した。

SD10 (第96図、682～689)

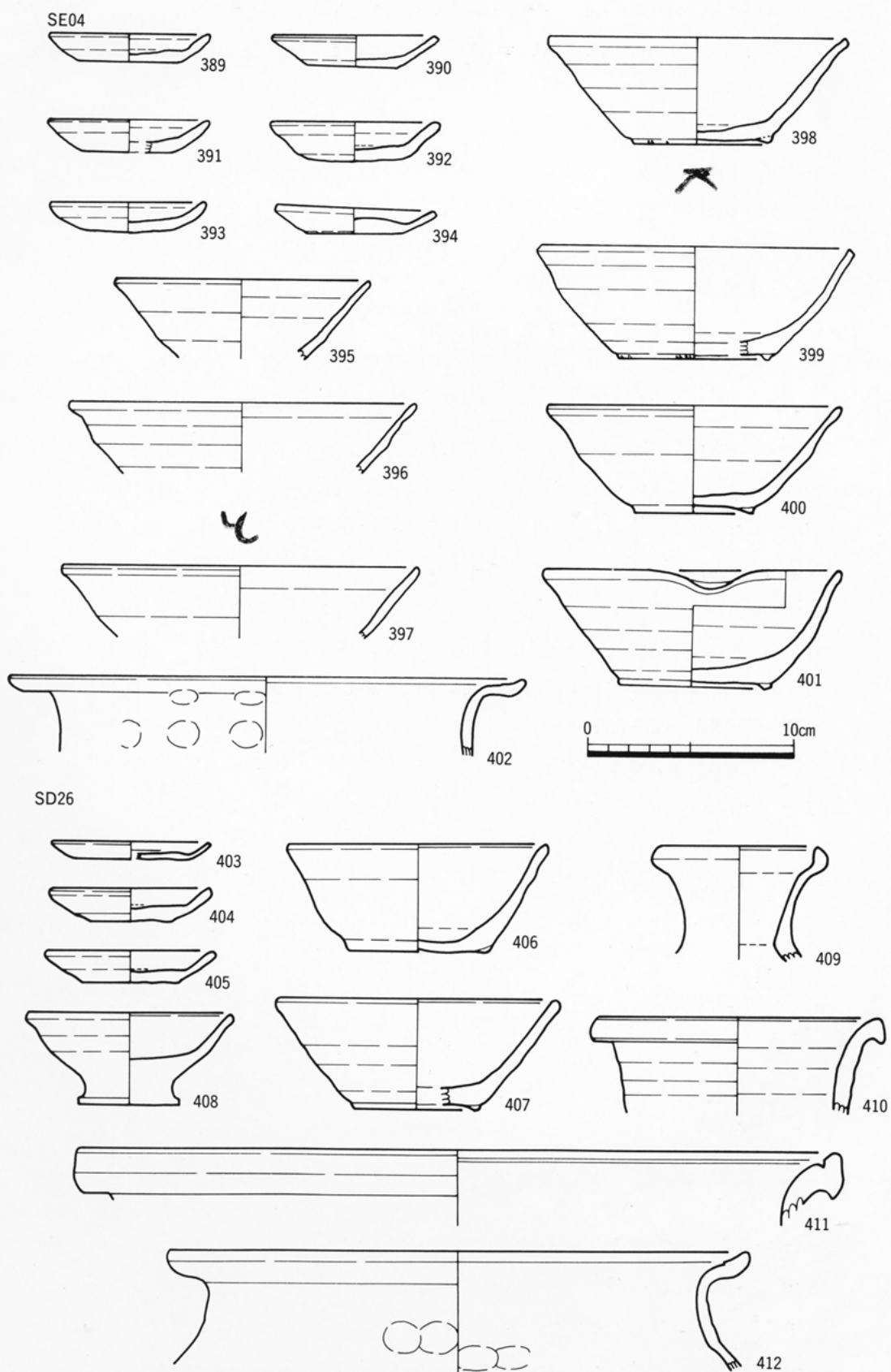
碗B1、D2、皿B、壺E、鉢D3、常滑窯産の甕が出土。

SD20 (第97図、690～693)

土師質皿A1、B4、碗B1、土師質鍋Aが出土。

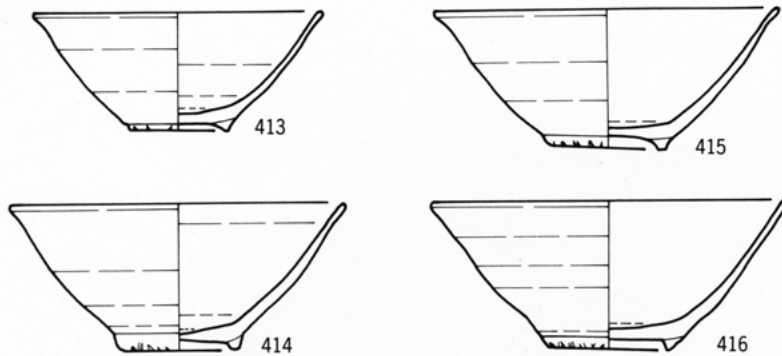
SD21 (第97図、694～703)

土師器皿A1、B2、碗B3、鉢B、D2、壺C、甕が出土。

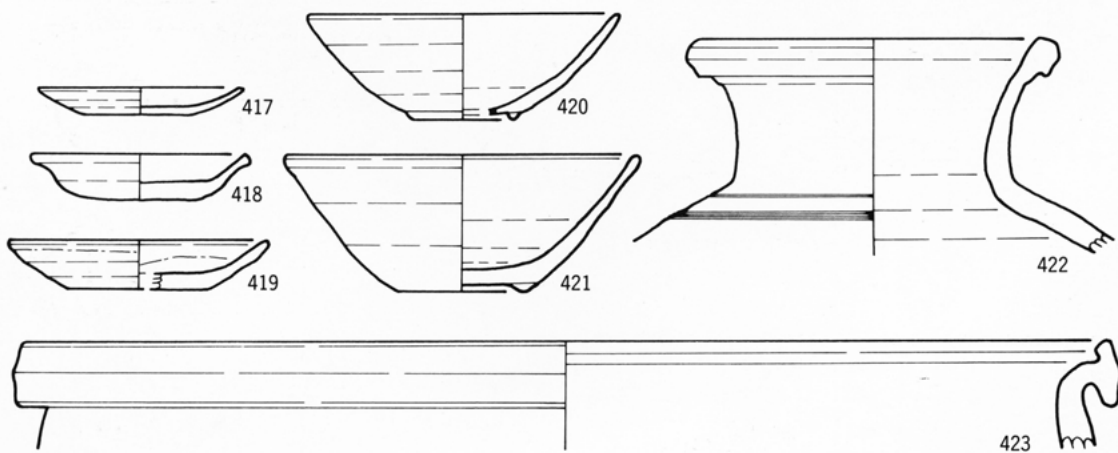


第84図 V期の遺物(1)

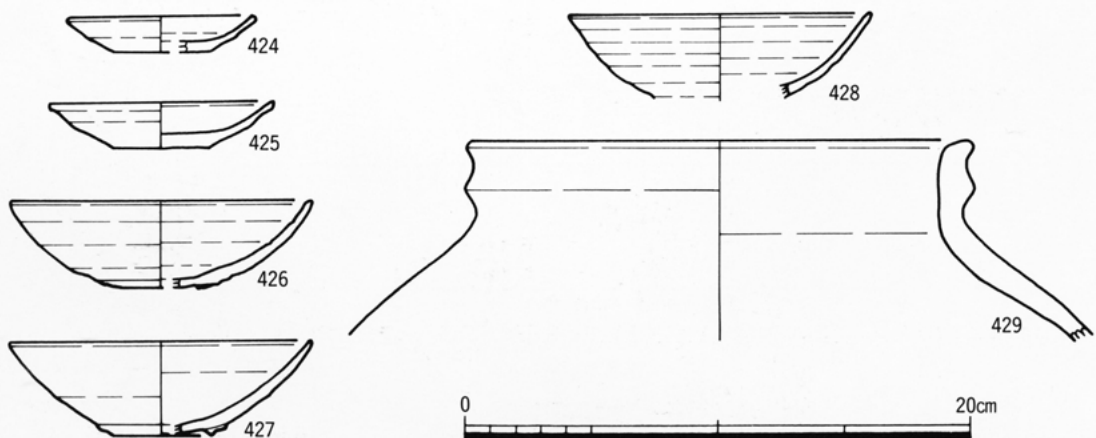
SE03



SD25

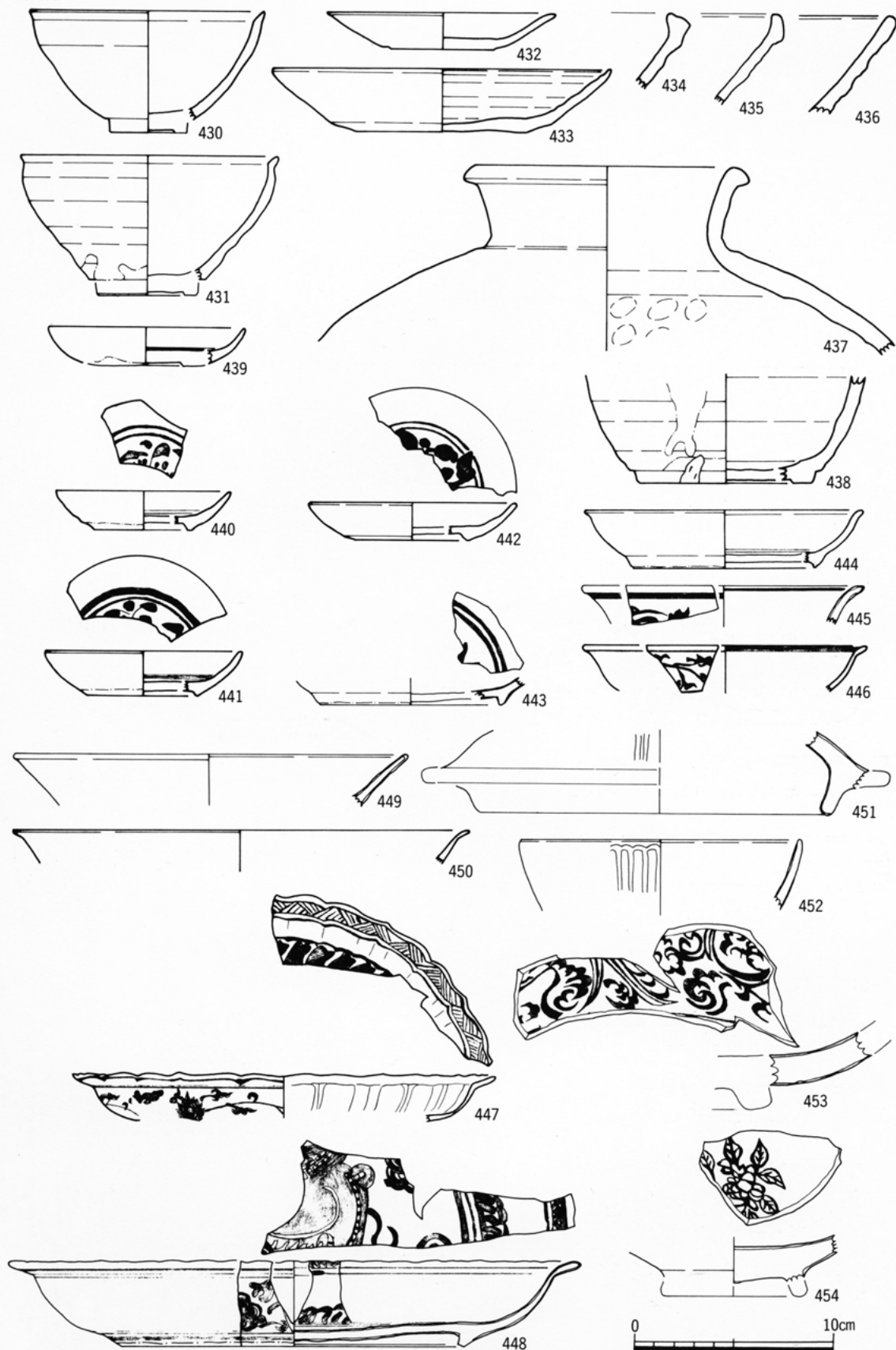


SE06



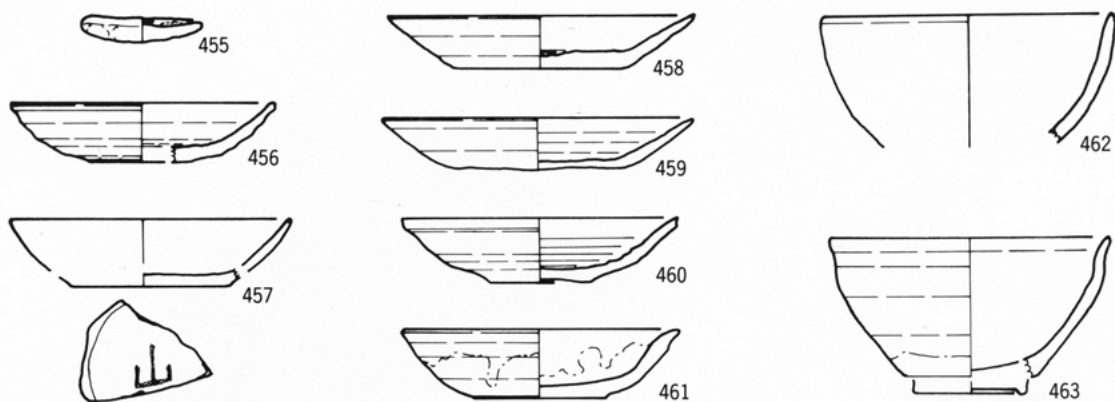
第85図 V期の遺物(2)

SX01

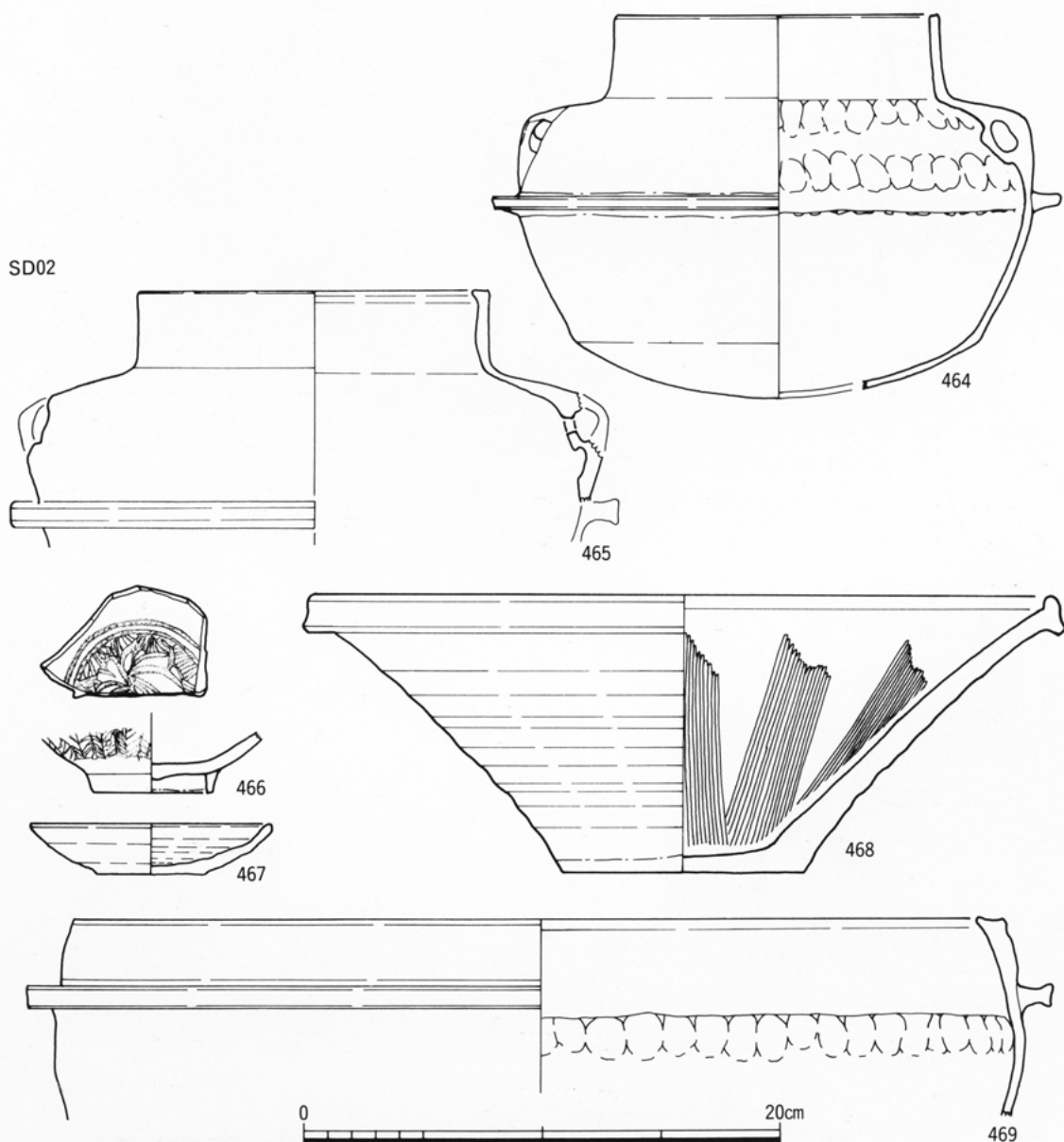


第86図 VI期の遺物(1)

SD01

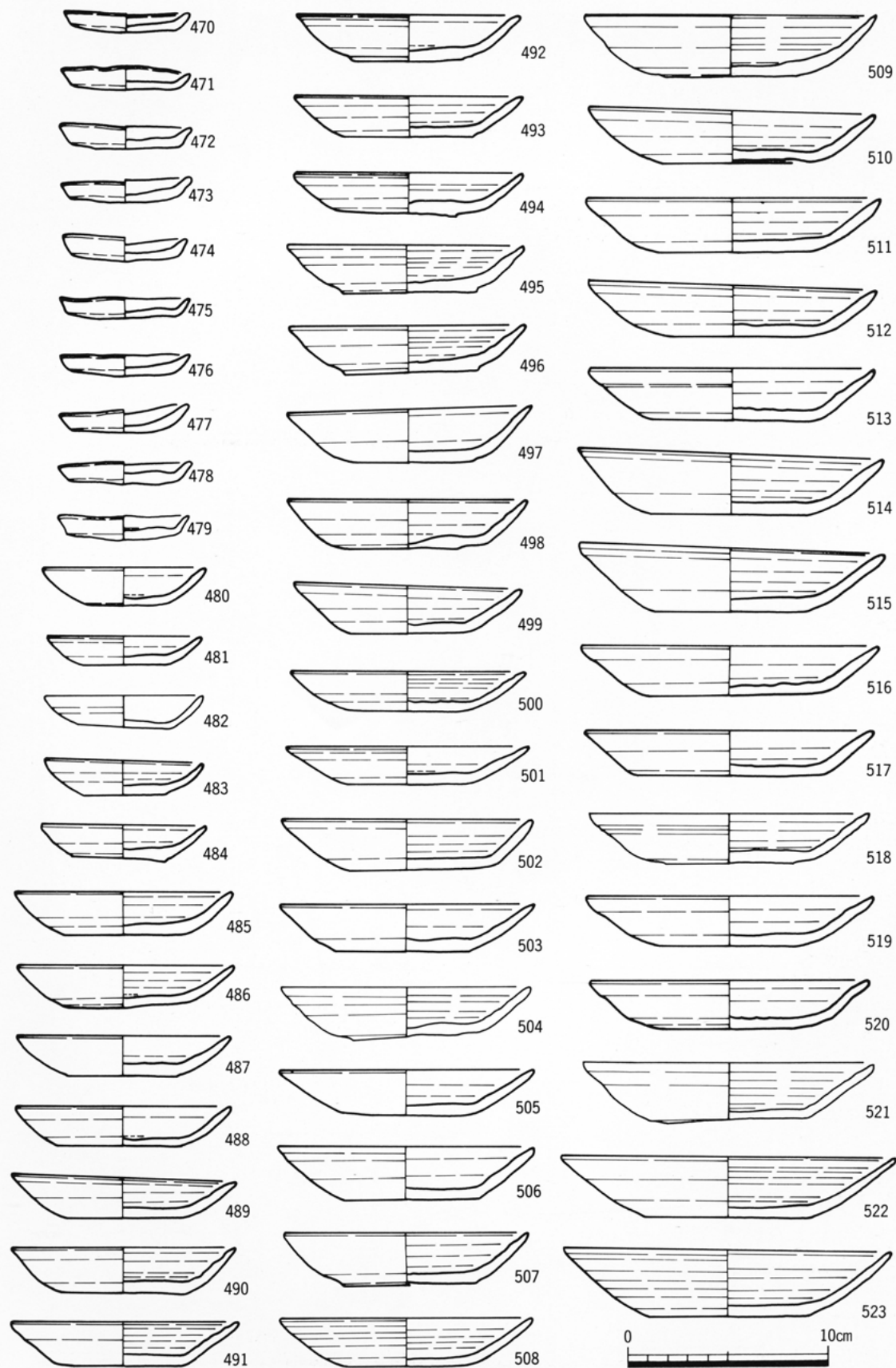


SD02



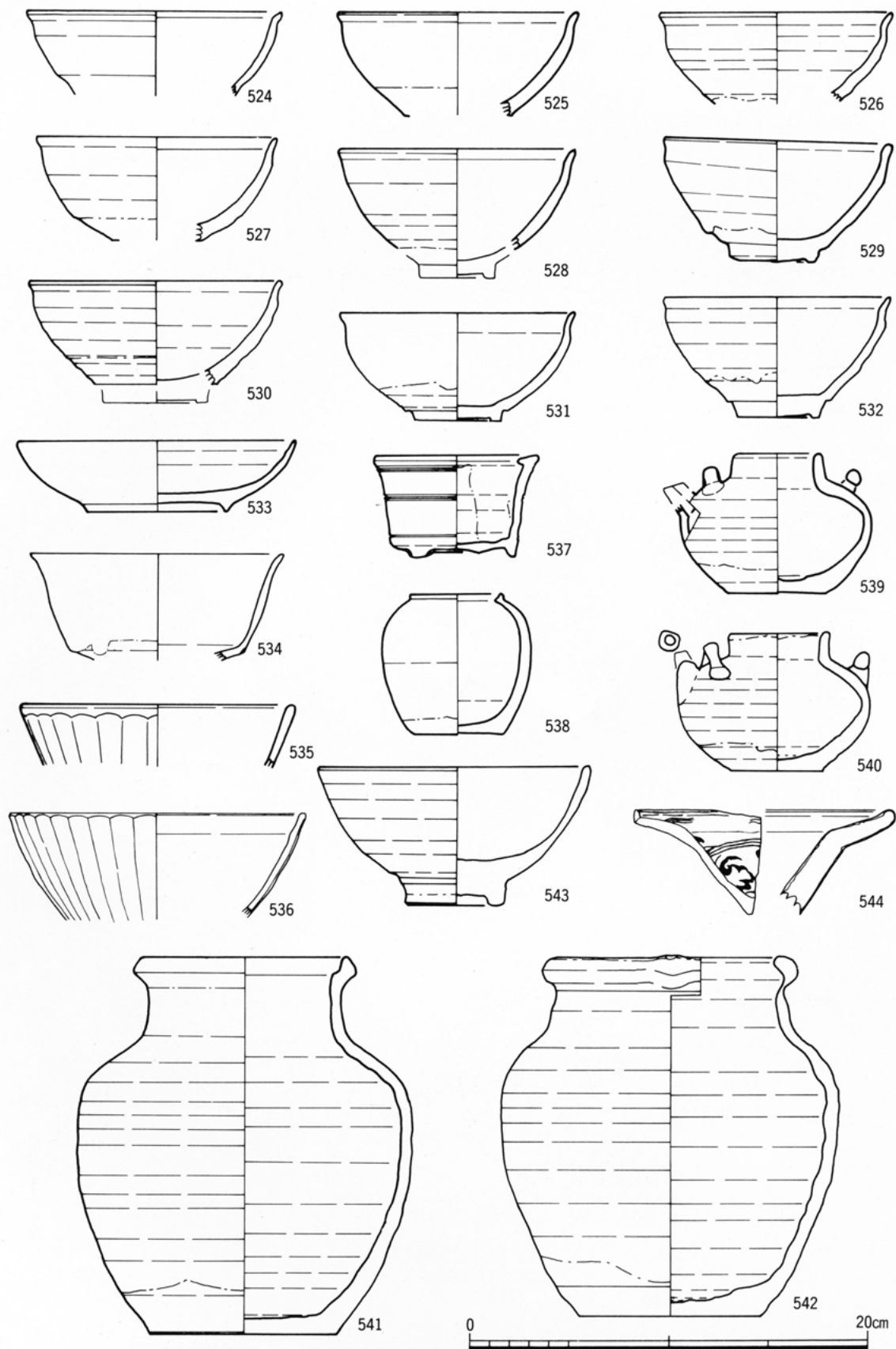
第87図 VI期の遺物(2)

SD03(1)



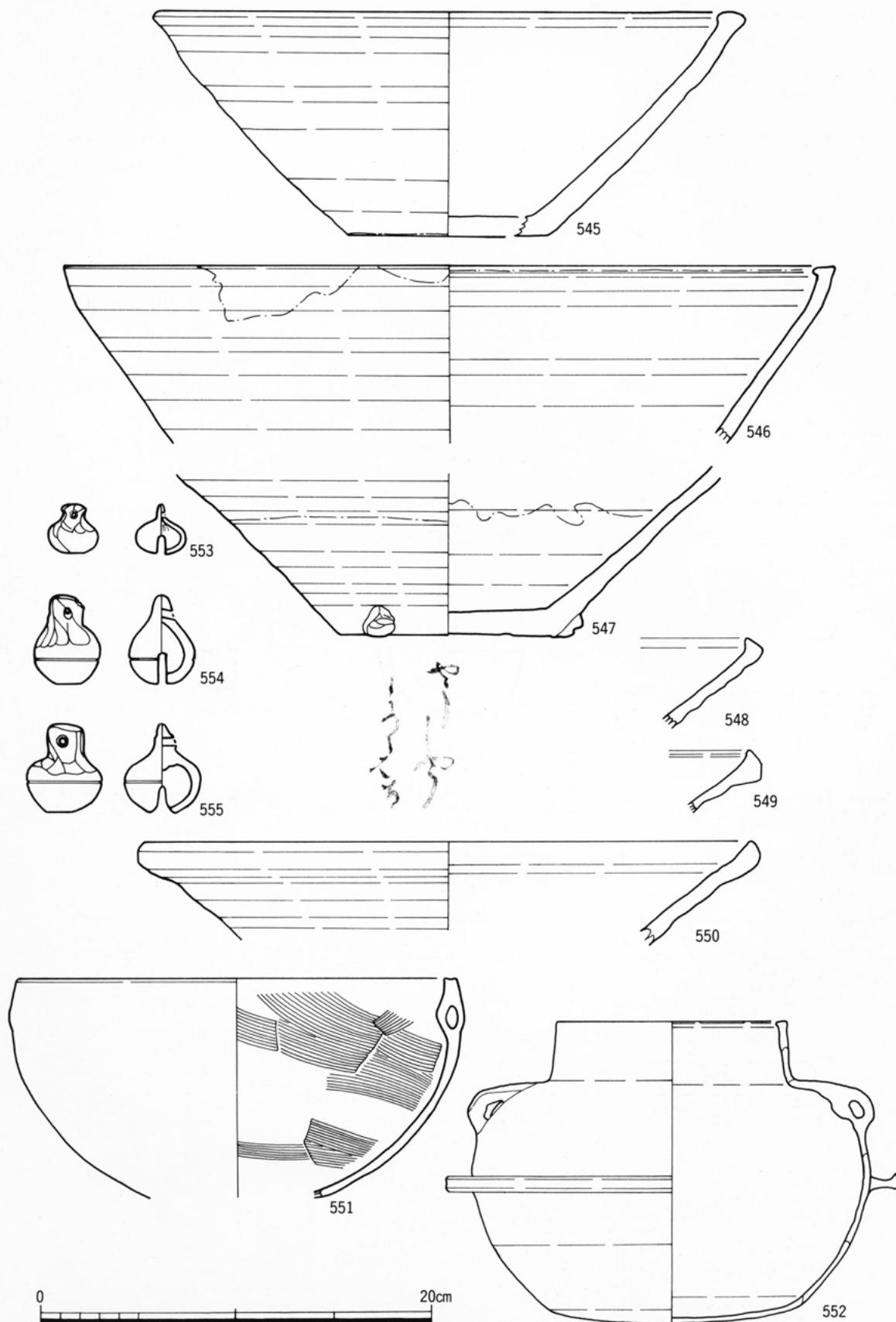
第88図 VI期の遺物(3)

SD03(2)



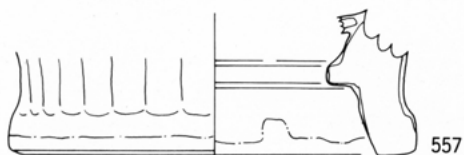
第89図 VI期の遺物(4)

SD03(3)

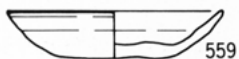
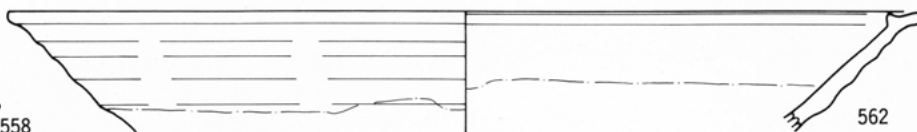


第90図 VI期の遺馬(5)

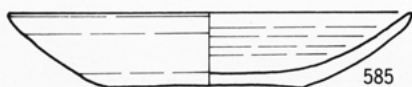
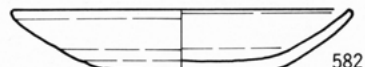
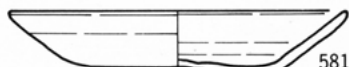
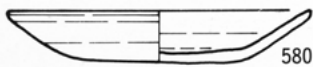
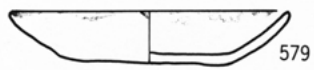
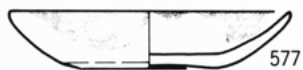
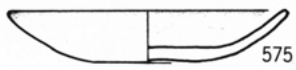
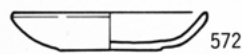
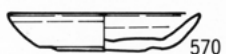
SD04



SD05

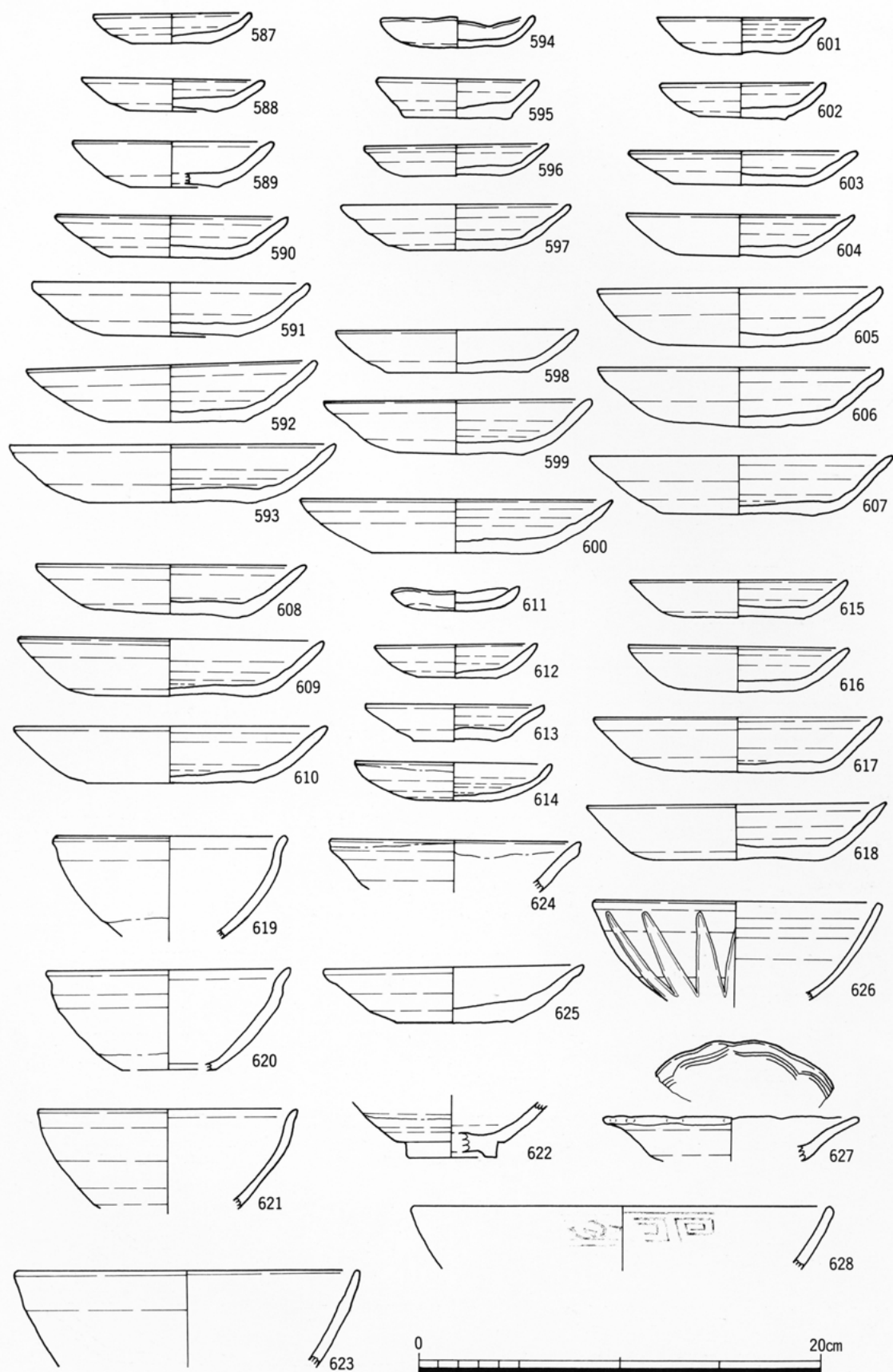


SK03



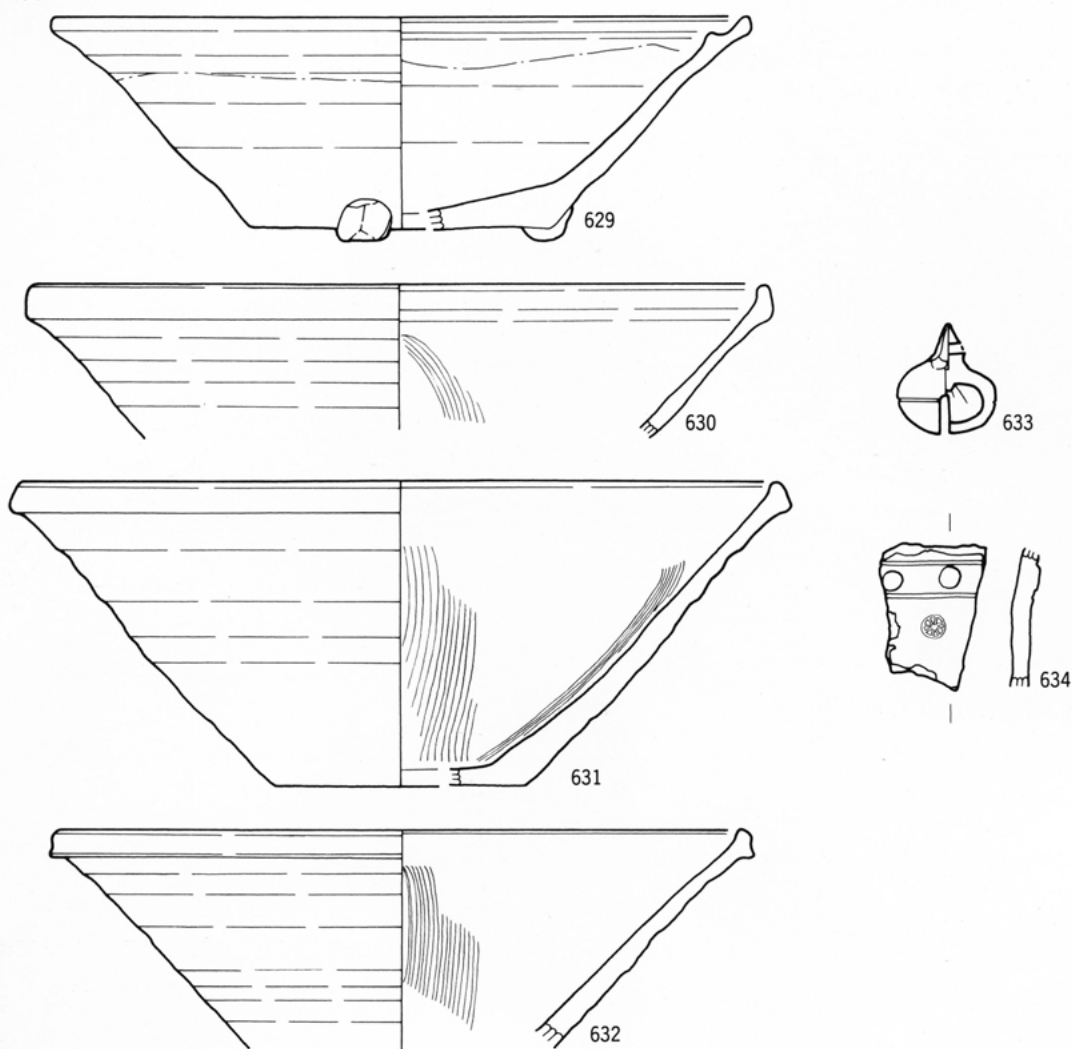
第91図 VI期の遺物(6)

SD06(1)

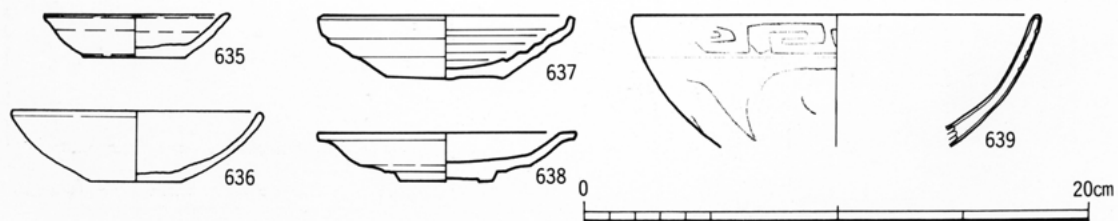


第92図 VI期の遺物(7)

SD06(2)

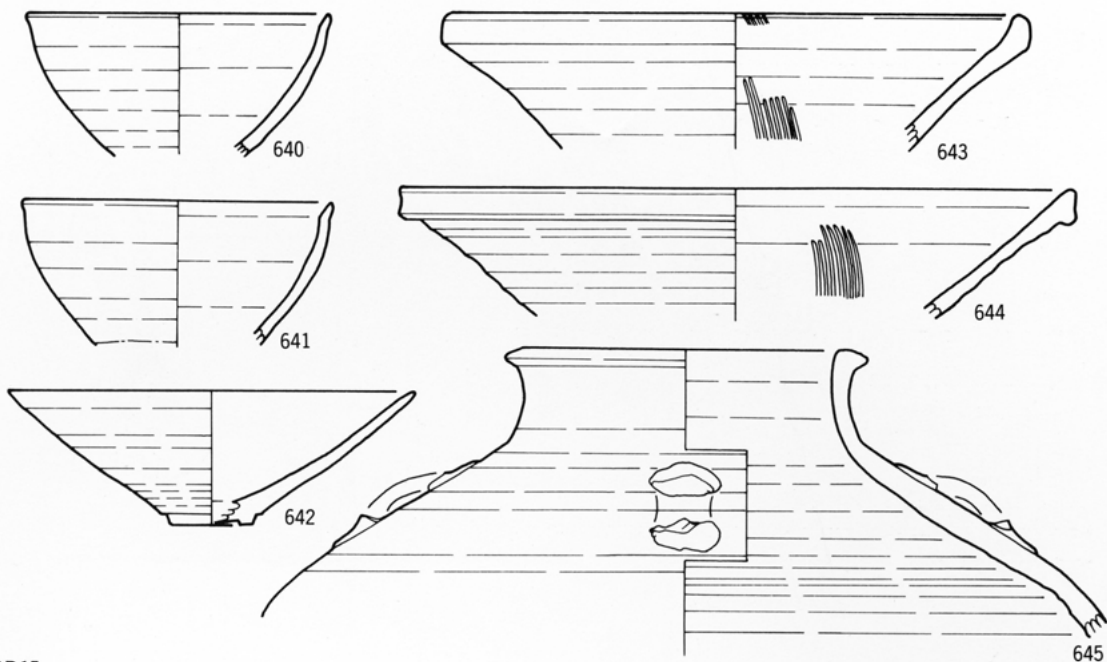


SD07

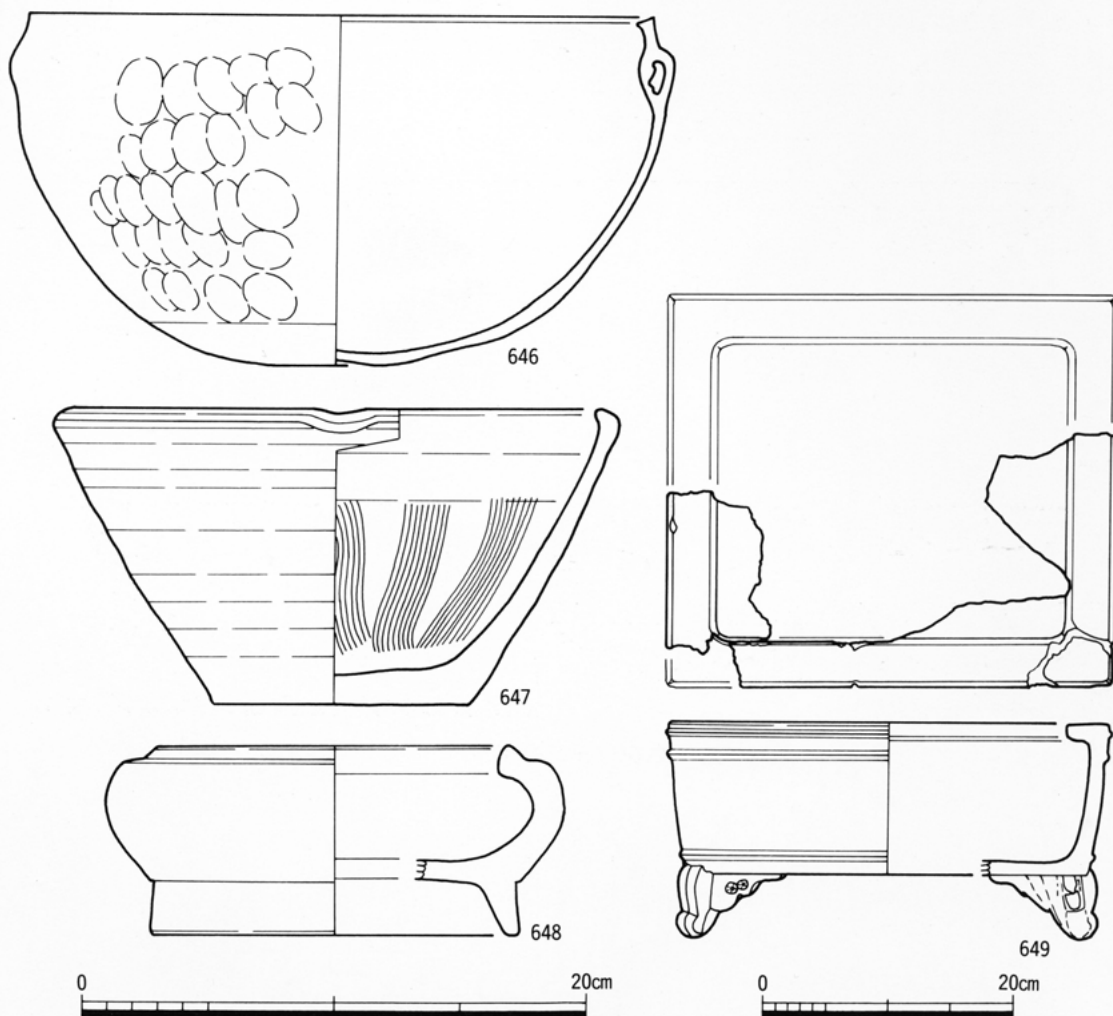


第93図 VI期の遺物(8)

SD19

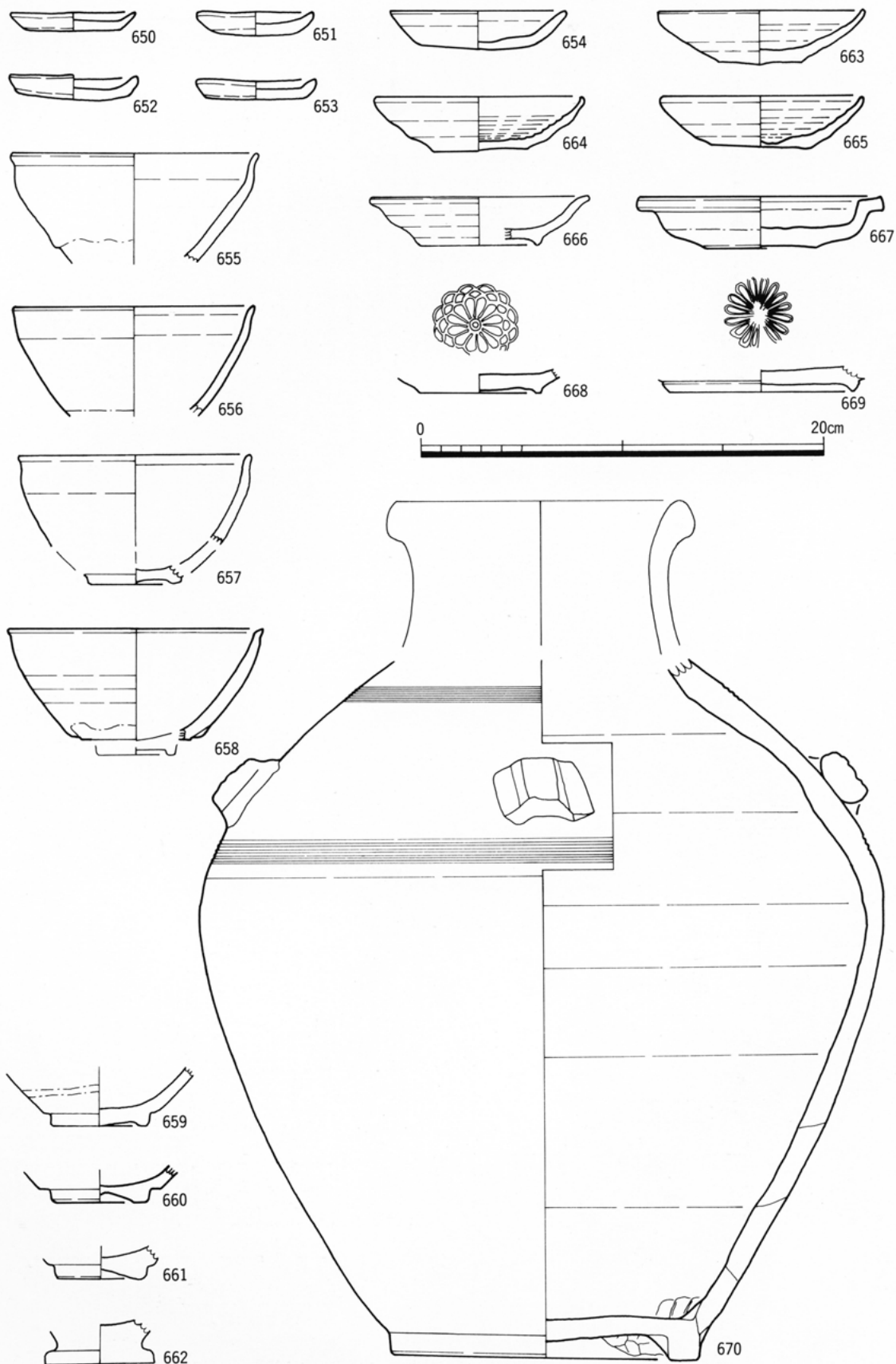


SD15



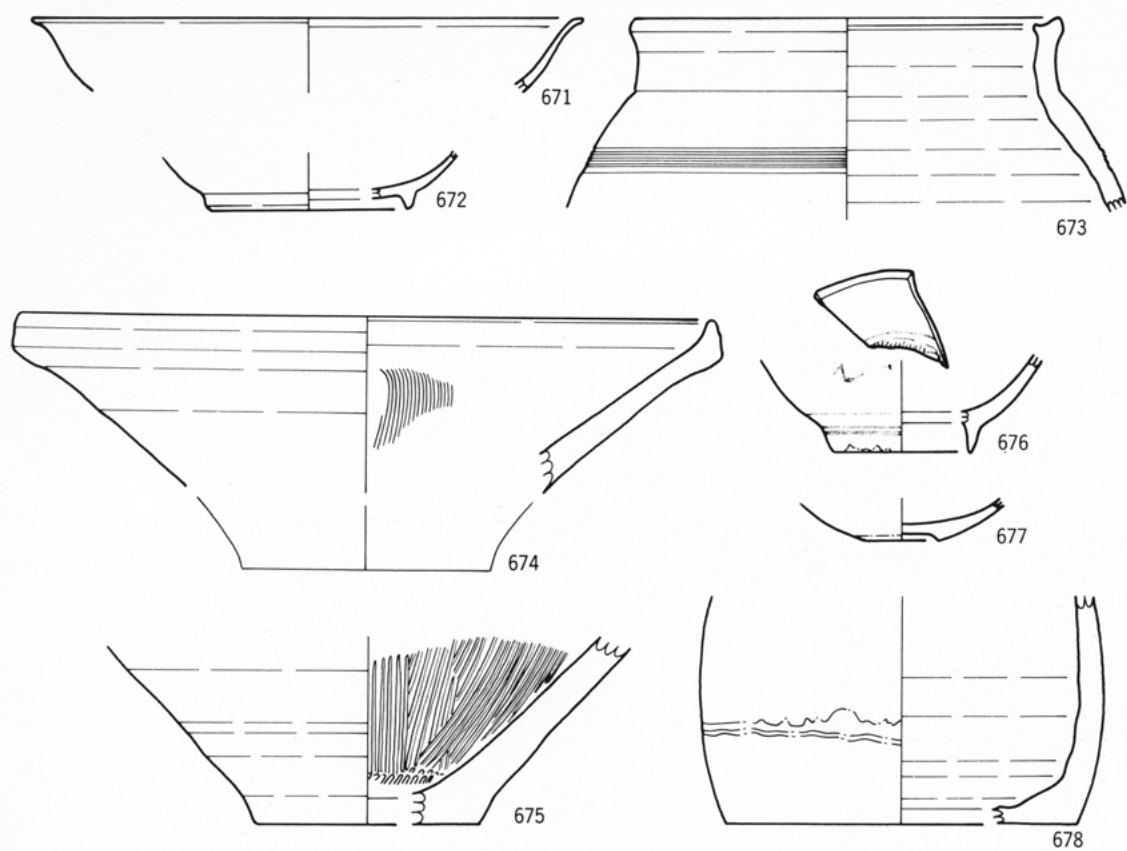
第94図 VI期の遺物(9)

SD08(1)



第95図 VI期の遺物(10)

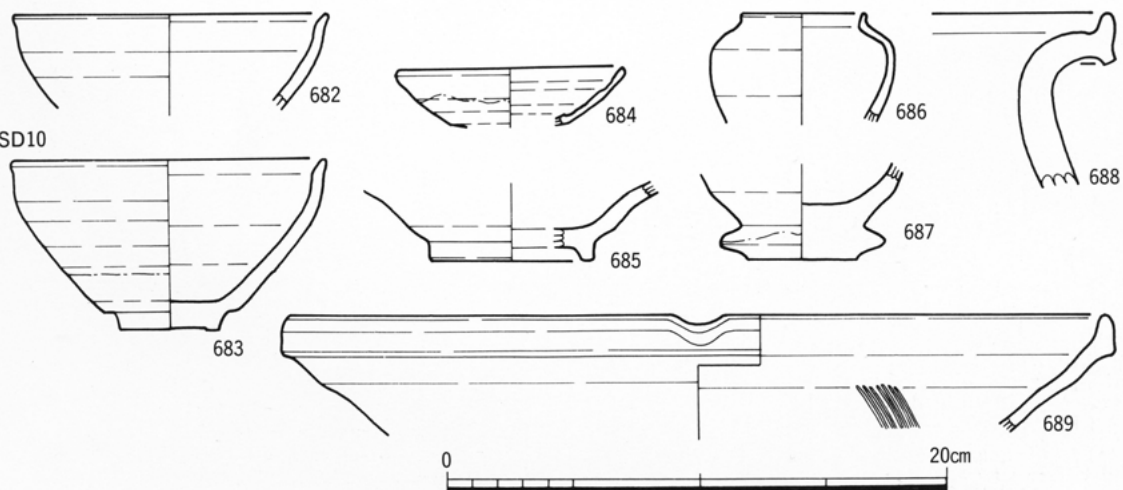
SD08(2)



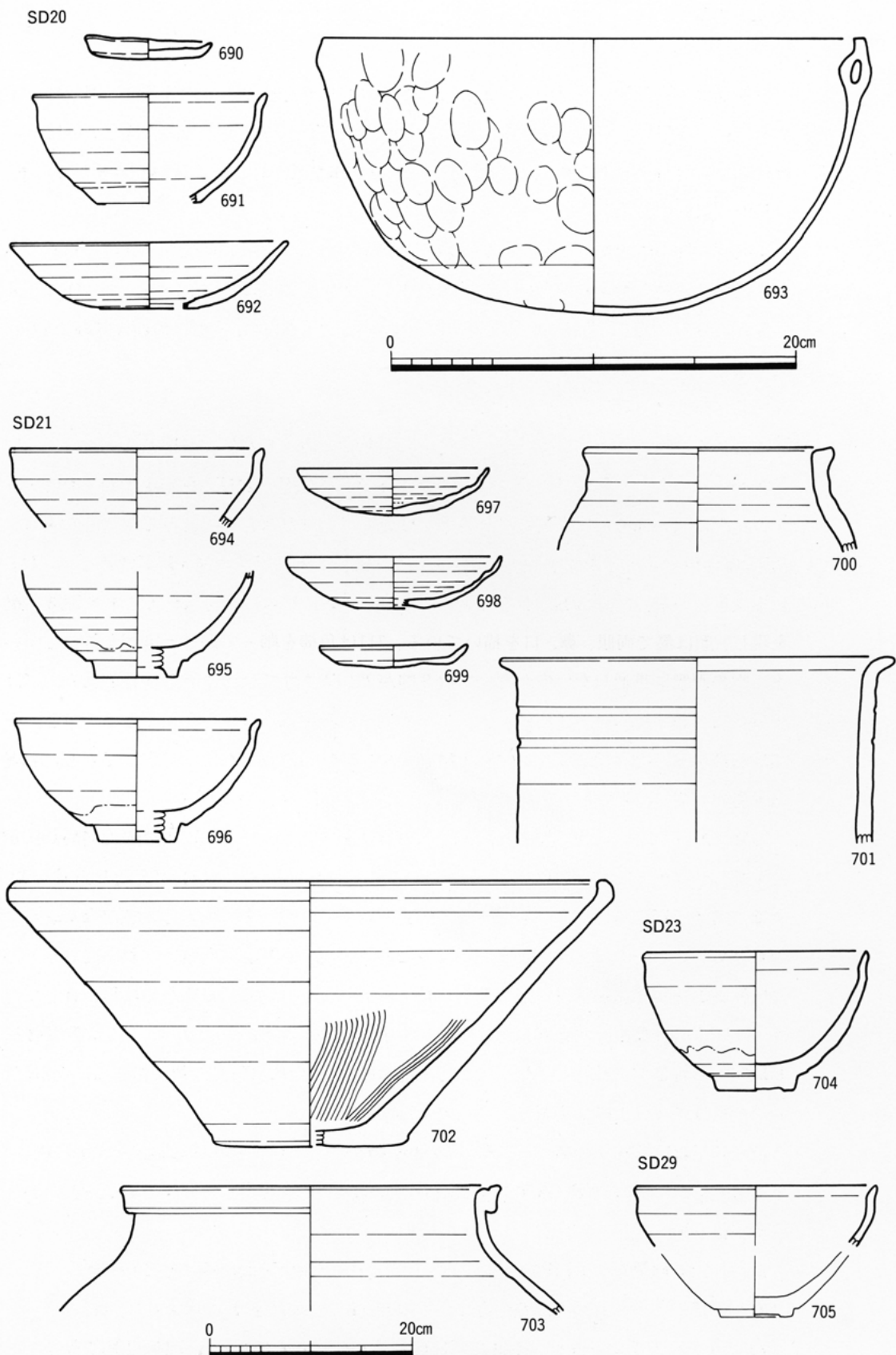
SD09



SD10



第96図 VI期の遺物(11)



第97図 VI期の遺物(12)

(2) 木製品

木製品は、堀や溝、井戸から出土した。とくに本丸内を区画する溝S D03～06からの出土が多い。器種は、漆椀、曲物桶、折敷、箸、篋、茶筌、下駄、竹箕、竹籠などのほかに呪術関係の資料として人形、刀形、獅子頭、呪符木簡など注目される遺物が含まれている。

S D01 (第99図、706・707)

本丸西の外堀の中からは僅かに2点のみ木製品が出土した。706は高さ cmの木彫りの地藏菩薩像で、唇と台座の蓮弁の一部に朱が残る。背中の中央に一孔がある。千体仏の一体と考えられる。707は漆椀。高台が高く、全体に大振り。外面は黒漆、内面は朱漆を塗る。紋様は、蜻蛉と檜扇が朱漆で描かれている。

S D03 (第99図～第102図、708～770)

本丸内の区画を機能として持つこの溝からは非常に多くの木製品が出土した。

708～712は人形と推定できるもの。708は手足はなく頭部と胴部の区別もない。前面のみ平滑に削り頭頂部と下端を削っている。顔は目・鼻・口が傷をつけたところに墨で描く。709は薄い板の頂部と頸部を切れ込みを入れている。手足や顔の表現は確認できない。下端は折損している。710は709よりやや大きな物で薄い板に切れ込みを入れることで頭胸、腰を現し、顔は墨で両眼、鼻、口を描いている。711は角棒を削って頭部と胸部を区別している。胸の両側に貫通しない穴が開いており腕が差し込まれていたことが推定される。脚は表現されていない。削って両眼・鼻・口を表現し、顔を朱に、頭部を黒く塗っている。下端は鋸挽きし、雑な面取りを施す。下端中央の穴に竹の細い棒が折れて残っている。玩具の可能性も高い。712はかなり大型で角材を切っている。顔の表現はない。

713は獅子頭である。頭髪と両眼、鼻の穴を墨で表現している。両耳の位置に斜めに穴があいており、竹ひごの芯を持つ耳が差し込まれていたはずである。顎は頭部とは別造りで、頭部左側から顎の基部の穴に貫通させ、頭部左側まで竹ひごを通すことで顎が動くように作られている。基部の軸穴より僅かに後方に顎の下側から貫通しない穴が開いており、ここに竹ひごを差し込み上下に押すと顎が動く構造になっている。頭部後方は鋸挽きしてあり、この中央には小孔があり、竹ひごが穴の中に残っている。したがって、この獅子頭は頭部後方の竹ひごを保持して使用したと考えられる。714は獅子頭の顎部である。715は朱と黒で虎皮のような紋様を描く。玩具の一部か。

716～718は呪符木簡である。716は途中で折損しているが、いずれも頭部を斜めに削り、下端を丸く削った薄い板に呪句を記したもの。以点の下の梵字が異なるだけで、他は同じ。病氣回復を願う呪句らしい。

719～722も頭部を斜めに削ってある薄い板。719、722は下端が折損しているが、丸くえぐれが確認でき、へらの可能性がある。719の片面には斜格子状の細線が刻まれている。

723は刀形。刃部の一部がなくまた柄部が折損しているので全長は不明。丁寧な作りである。玩具の可能性もある。724～726はへら。724・725は薄手で刃部も薄く削られている。

726は厚手で柄部に上下に貫通する1孔がある。723～732もへら状木製品である。

715～739はほぞや小孔がある小さい部材で鳥籠もしくは虫かごの一部と考えられよう。

740・741は用途不明。742は栓か。

743・744は歯を差し込む形式の、いわゆる露卯下駄。どちらも構造はまったく同じ。

746は漆椀。高台は磨滅。外側は黒漆、内面と鶴と亀の紋様は朱漆。746～748は漆塗りの皿。746は内外面ともに黒漆塗りで、外面に朱漆で亀を描く。748も内外面共に黒漆塗りで、内面に朱漆で紋様を描く。747は内面が朱漆、外面が黒漆塗り。

749は厚手の円盤状で、中心に穴が開く。外縁部と両面に黒漆が塗られる。用途不明。

750はしゃもじ、751・752は箸。753は櫛。754・755は茶筌。756は柄杓。

757は黒漆りの隅切りの大型折敷。758・759は小型の折敷。759には上面に歪んだ円形の圧痕が残る。760も小型の折敷。底板の裏面に大きく細い×印の線が刻まれている。

767は桶の底板。側面に木釘の痕跡が4か所に残る。768は薄い板で、片面にまな板がわりに使用されたとはいえる細い線が刻まれている。蓋もしくは浅い桶の底板か。

769・770は桶の側板。特に769は釘穴が4か所残りその下に大きな穴が穿たれている。桶の内側の穴の上方がかなり磨り減っていることから、把手が取れた後、穴を開け外側から網を通しこれを把手の代わりとして使用したものと推測できよう。

S D04 (第102図、771～777)

溝の埋土はシルト質のため余り滞水性を示さず、木製品は少なかった。

771は鳥形。薄い板を鳩のような鳥の輪郭に切っており。目や翼、足などの表現は見られない。尾羽根が折損している。772は人形。角材を使用し、頭部と胴部とは切り込みを入れて区別している。胴部の両側面に小孔があり、腕がつけられていた跡と推定できる。脚は棒の下端を削って尖らせてただけで何も表現されない。頭頂部は意図的な切り残しかどうか不明であるが、髷状に残り、墨で黒く塗られた痕跡が認められる。顔も部分的に墨痕があるものの、明瞭な顔の表現は確認できない。

775は包丁などの柄であろう。丸棒の片側に刃を差し込んだ穴が残る。777は一木造りの下駄である。遺存状態が良くない。

S D05 (第103図、778～790)

土橋を挟んでS D04の東にのびる溝である。大部分は調査区外になるため、調査できたのはごく一部にすぎない。溝の端であること、通路脇であるなどの理由からか、遺物は多く、呪術関係資料と推定される木製品が目立つ。箸、折敷、曲物、羽子板がある。781は羽子板で片面には墨跡が認められる。両側が破損しているため幅が不明。783は折敷で半分しか残らないが、波のような文様の墨の痕跡が認められる。784はかなり遺存状態が良好な折敷。底板の裏面には3文字が記されている。「天巳酉」カ。巳酉が年号を意味しているならば1489年(延徳2)もしくは1549年(天文18)になる。785はやはり折敷の底板に墨で絵を描いたもの。7頭の馬(牛?)が綱で竹につながれている有様を描いてある。絵馬の類か。786～790は折敷を再利用したもの。折敷の底板を割って、一番は場の広いものにスリ

ットを2本入れ、そこに同様な折敷をわったいたを2枚交差させて差し込み*状に組み合わせている。大小があり、787のように×の組み合わせのものや790のように一枚多く組み合わせたものがある。787の場合、一枚が抜け落ち、790の場合は一枚の差し込んだ板が割れて移動したもので、原則としては3枚の板を組み合わせたものであろう。他に類例を見ないため用途不明。呪術関係の資料か。

S D 06 (第104図、794~801)

これも本丸内部を区画する溝。漆碗、折敷、桶、曲物、下駄などが出土した。

794は漆塗りの皿で、内面を朱漆、外面を黒漆で塗る。高台は無く、体部外面に段がある。795は漆碗。内面を朱、外面を黒漆で塗り、外面に朱漆で扇の紋様を描く。799は折敷の底板で、片面にまな板の代用として使用した痕跡らしい細い線刻が残る。800は小型の曲物容器で珍しく底板も外れずに残っていた。801は刀形と言い得るものか。かなり丁寧に仕上げられたなぎなた形で、刃部の削り方から刀とは異なる。先端が鋭利な刃物で斜めに切断されているが、他の部分とは仕上げが違いため、本来は刃部はさらに長い。796・797は露卯下駄で差し歯を固定するための臍穴の数が異なる。797は歯が一枚残る。

S D 07 (第105図、802)

本丸東側の内堀に推定される溝。木製品はほとんど出土しなかった。802は内外面友に黒漆で塗られた皿である。

S D 18 (第105図、803~807)

この溝も本丸の区画溝と推定される。人形、下駄などが出土した。803・804は薄い花弁状の板でまったく同形・同大である。用途不明。805は人形。体部にまな板のかわりに使用したらしい切り傷が残り、板を横に並べて接合した際の本釘の跡が残る事から、鍋の蓋か折敷の底板を際利用したものであろう。807は一本造りの下駄。

S E 02 (第104図、791~793)

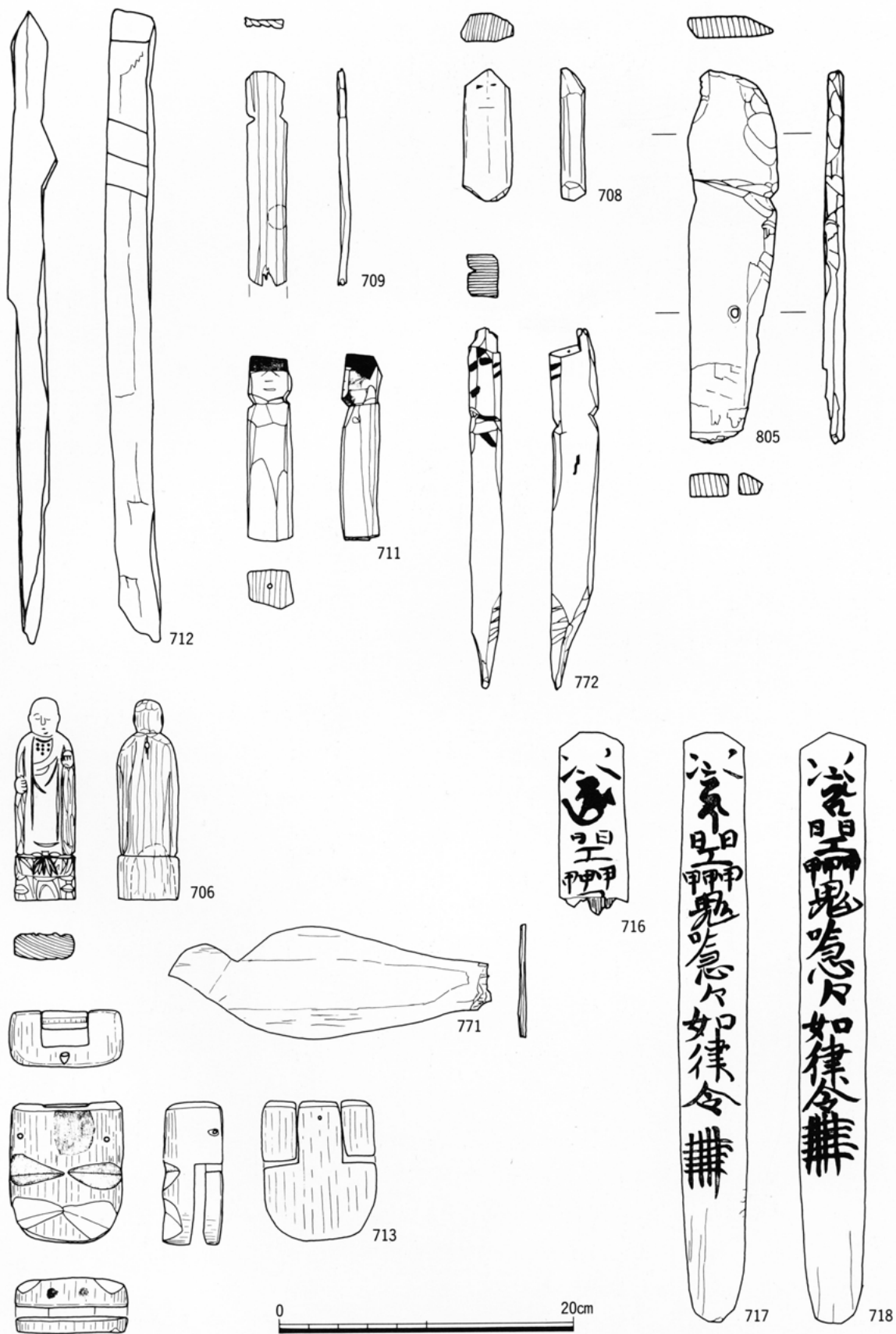
本丸に位置した桶組の井戸で、側板が井戸の廃絶つに際して抜き取られていた。竹のたがとともに791・792の楔や793の曲物の底板が出土した。

(3) 石製品

石製品としては砥石、茶臼、ひき臼、五輪塔などが出土した。808と809は砥石で、明黄灰色の粘板岩製の仕上げ砥石である。809の一面には格子状に線刻が認められる。

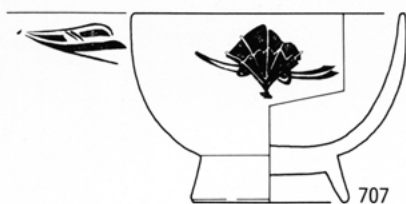
810は茶臼。SD12出土。直径18.6 cm、高さ10.7cm、上面に直径12.0cm、深さ1.2cmの受部があり、中心に貫通する直径2.8cmの孔があく、側面には把手をさし込むための菱形の孔がある。下面には細い挽目がある。811は石臼。花崗岩製。直径32.0cm、高さ6.4cm。上面に直径24.0cm、深さ2.7cmの受部がある。全体に茶臼より粗いつくり。

812は五輪塔の火輪。花崗岩製で、表面は火を受けており、損傷が著しい。

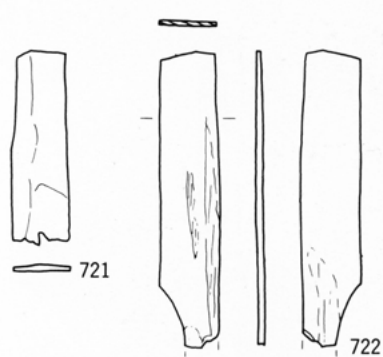
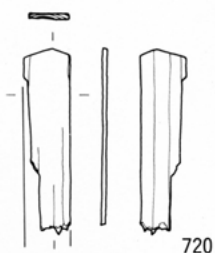
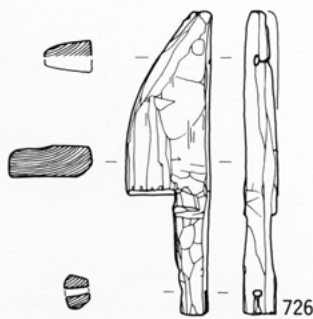
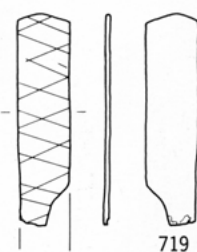
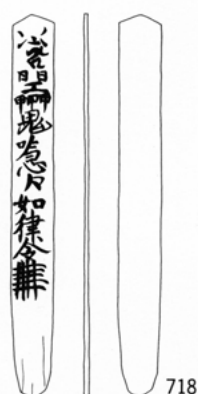
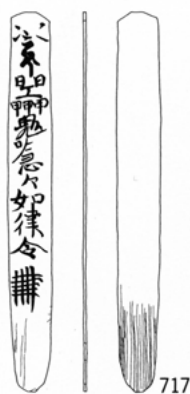
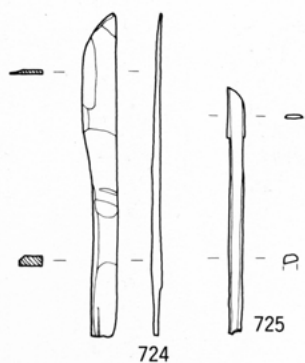
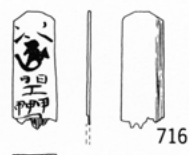
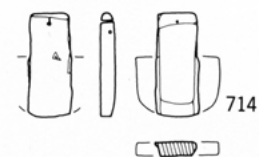
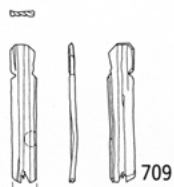


第98図 呪術関係木製品

SD01

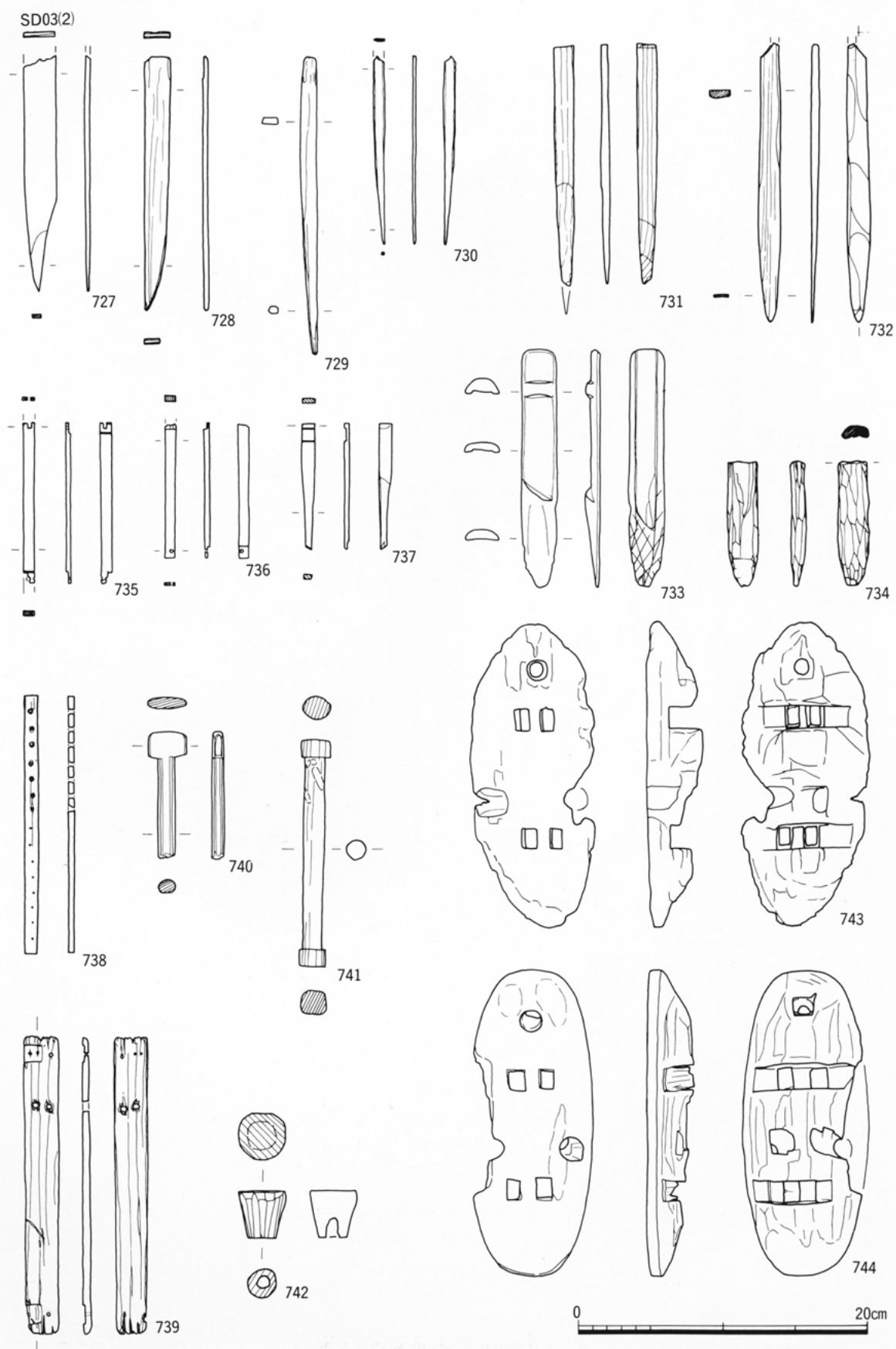


SD03(1)



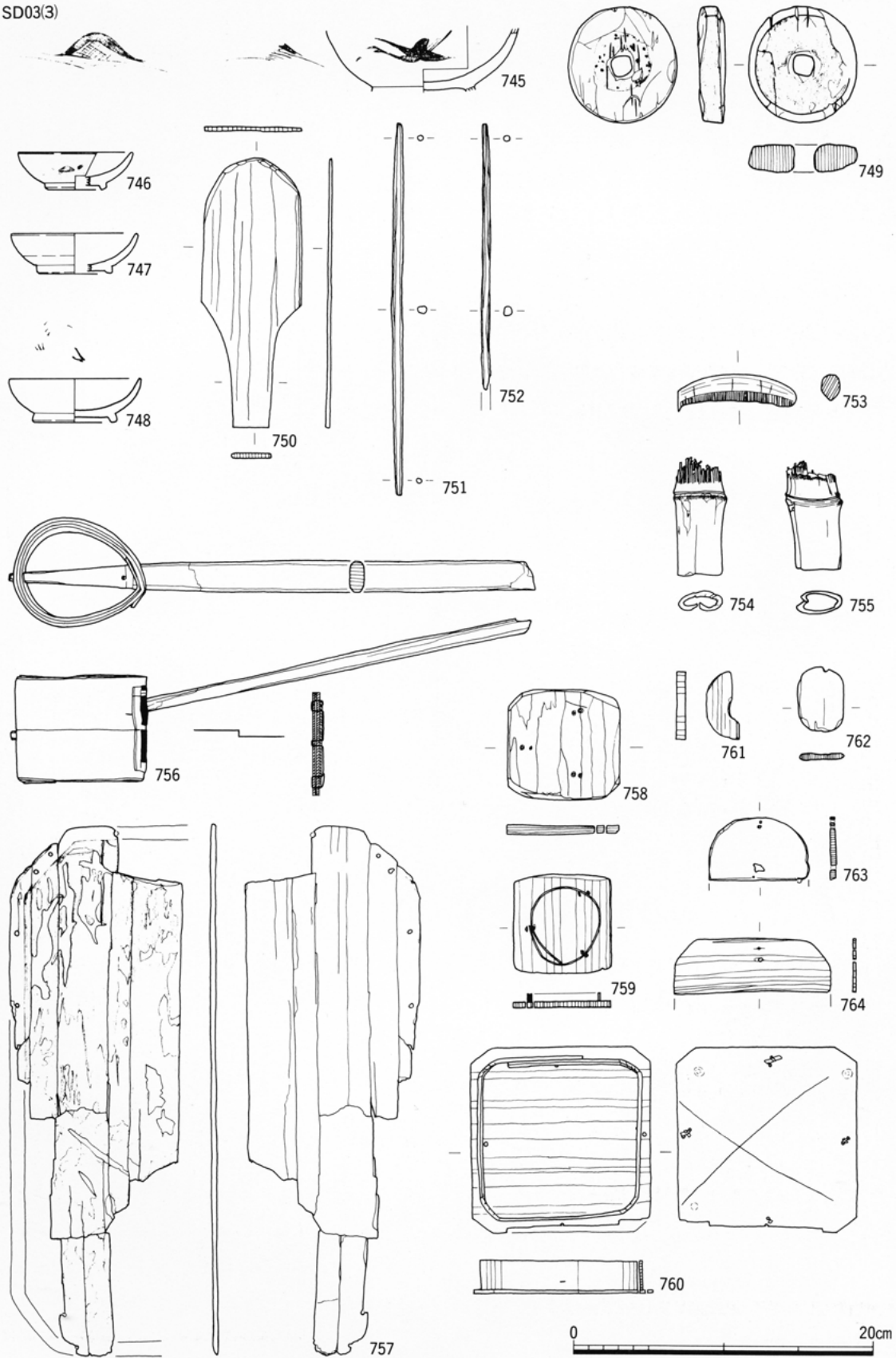
0 20cm

第99図 木製品 (1)



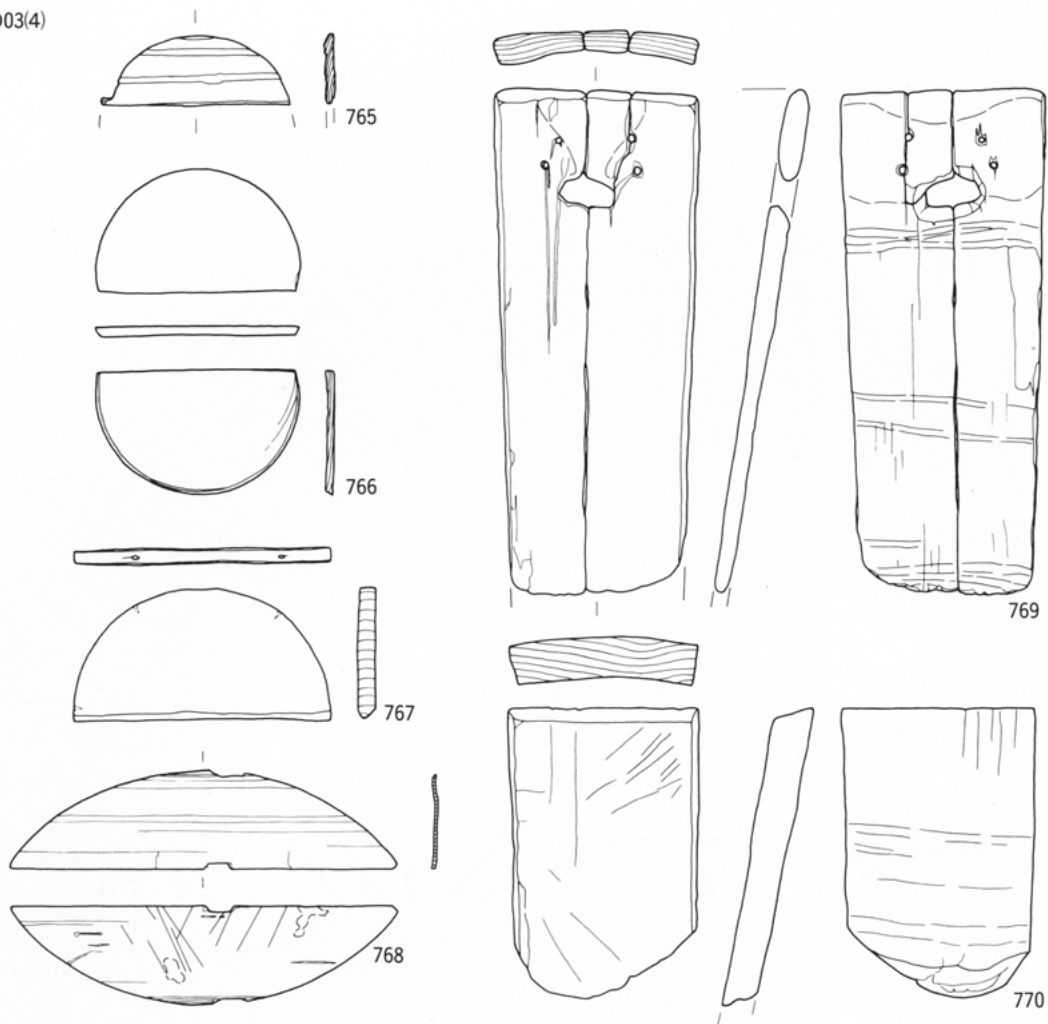
第100図 木製品 (2)

SD03(3)

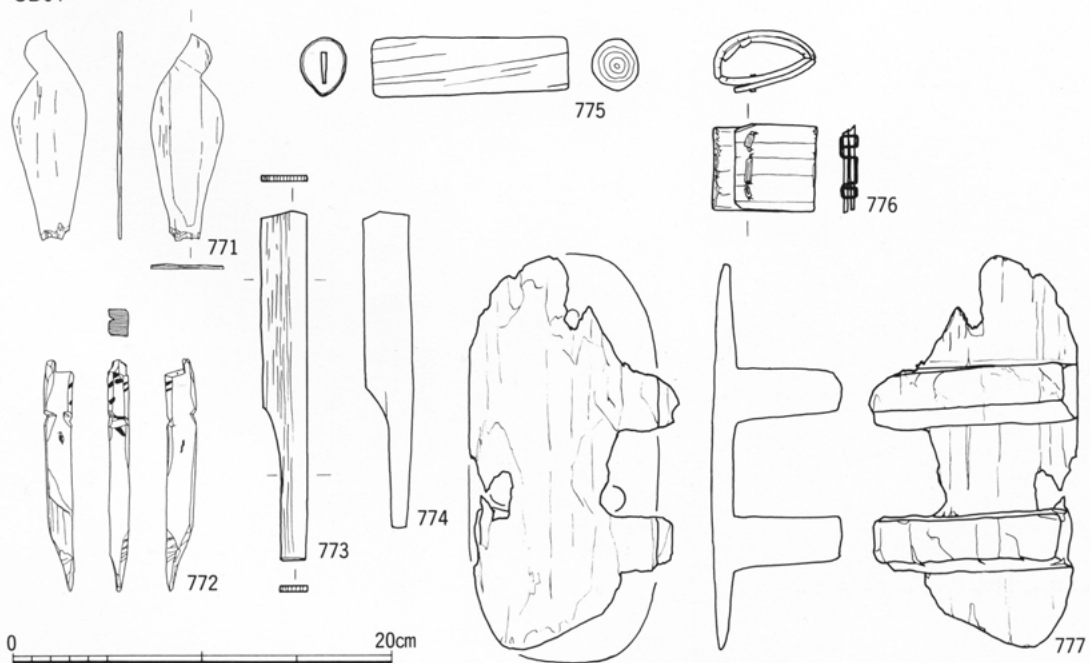


第101図 木製品 (3)

SD03(4)

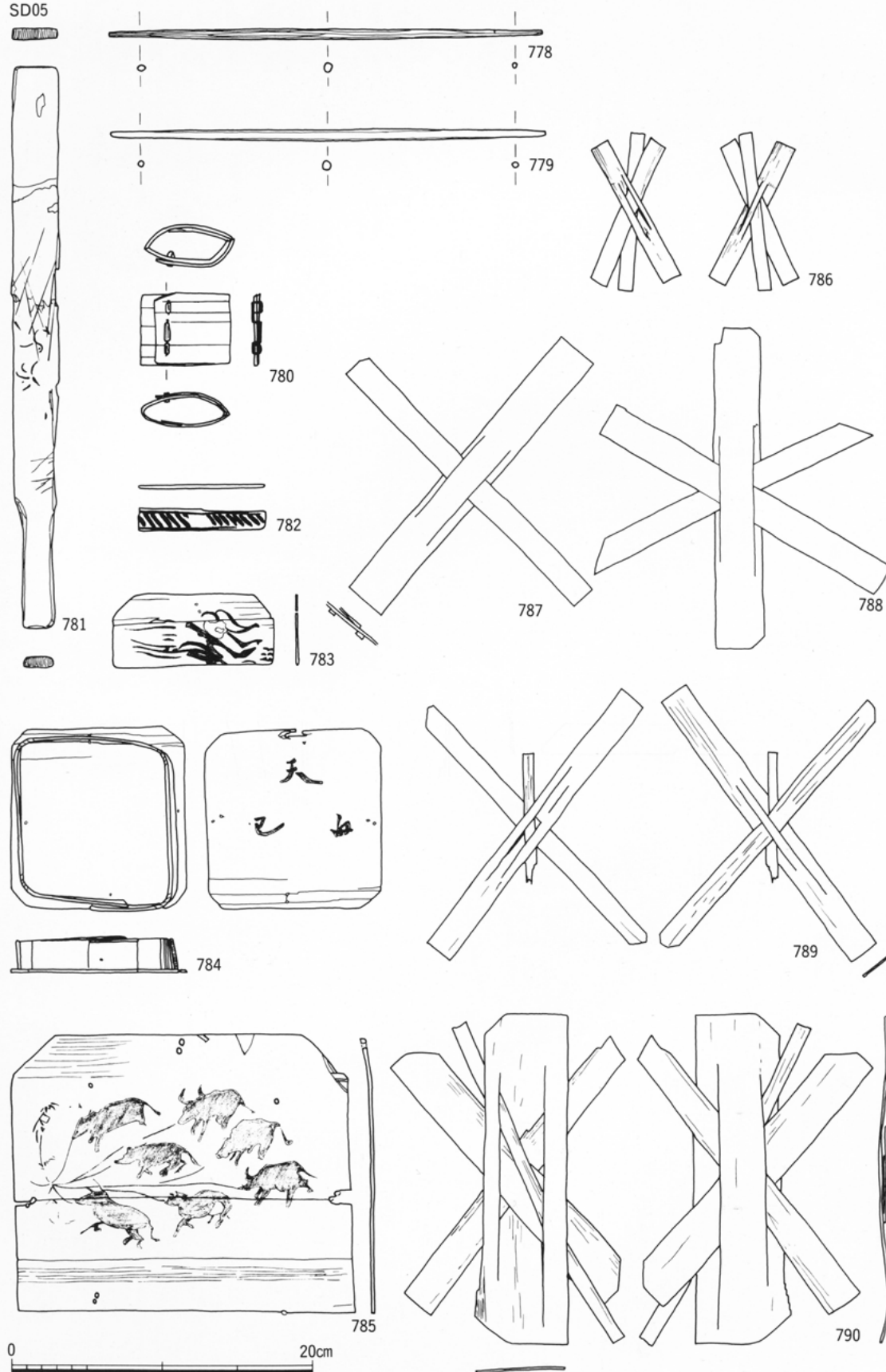


SD04



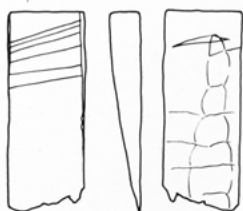
第102図 木製品 (4)

SD05

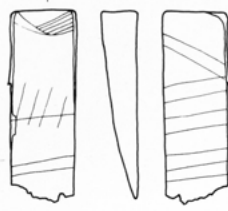


第103図 木製品 (5)

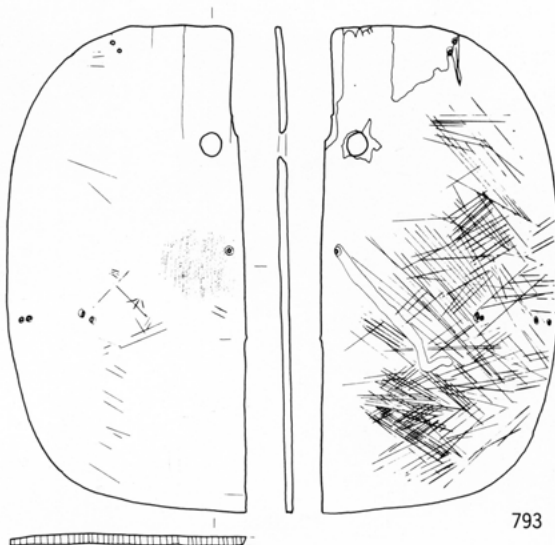
SE02



791



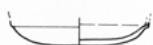
792



793



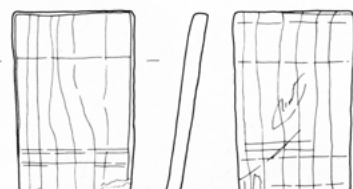
SD06



794



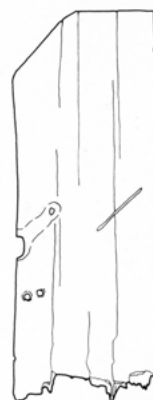
795



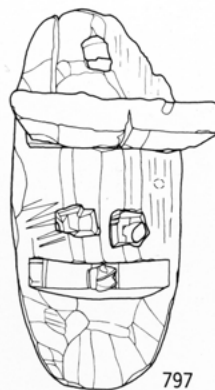
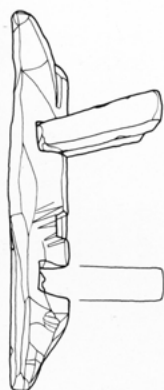
798



796



799



797



800



801



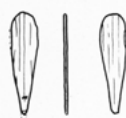
第104図 木製品 (6)

SD07



802

SD18



803



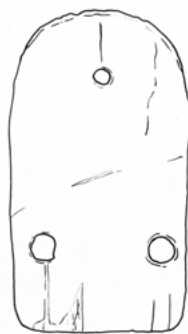
804



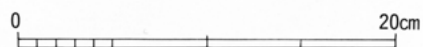
805



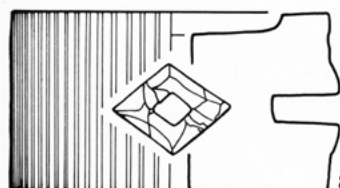
806



807



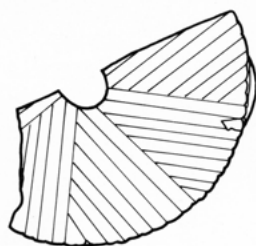
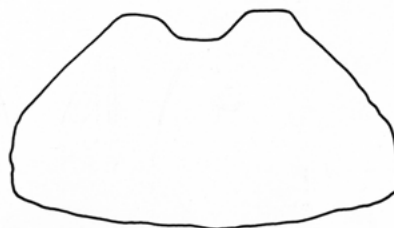
石製品



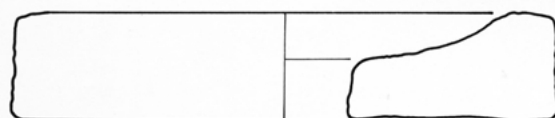
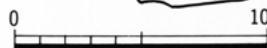
810



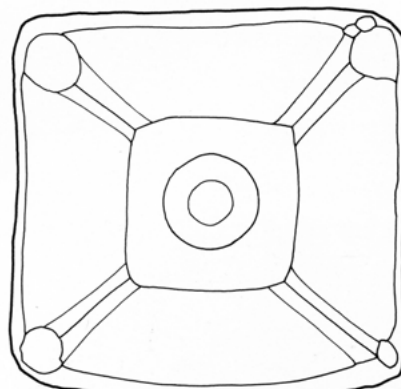
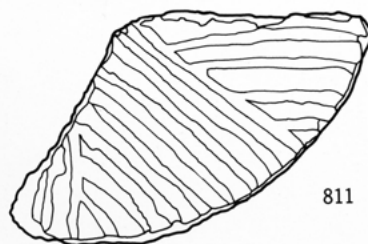
808



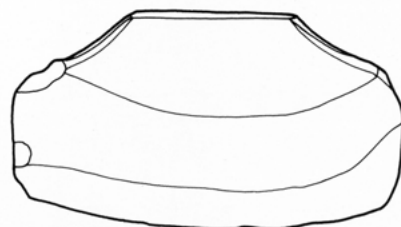
809



811



812



第105図 木製品 (7)、石製品

IV 自然科学的分析

1 珪藻分析によって得られた縄文時代晩期の頃の古環境

岩倉城遺跡90B区の縄文時代晩期における堆積環境を考えるために平面サンプルを採取し、珪藻分析を実施した。

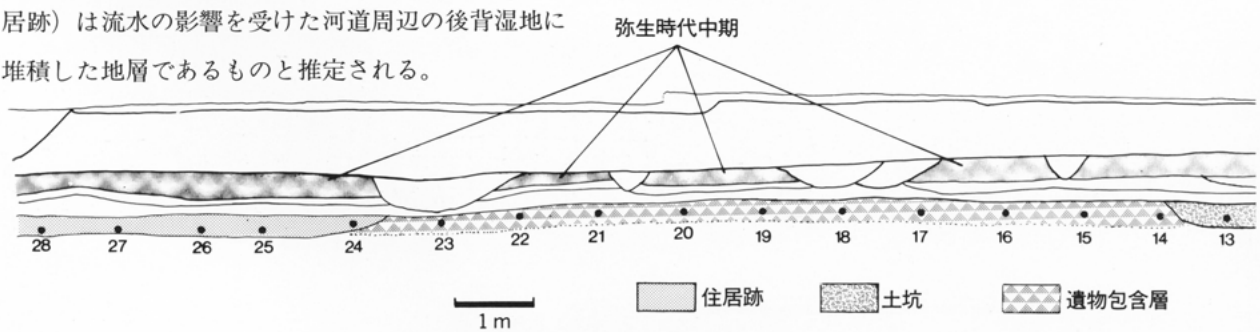
ここでは、住居跡や土坑および遺物包含層などの違いにより出現珪藻がどのように変化するかを調査することを目標に、同時代の地層中から平面的に計28サンプルを採取した。試料5・6は土坑、7～9および24～28は住居跡である。それ以外は縄文時代晩期の遺物包含層である。分析試料の層相はいずれも細砂混じりの黒灰色腐植質シルト層であり、標高は28サンプルともに+7.40m前後であった。サンプルの採取位置は第106図に示したとおりである。分析および検鏡方法は森（1989）によった。

試料7・8をのぞく26サンプルでは、ほとんど珪藻殻が出現しなかった。わずかに見いだされた珪藻は大部分が破損し、他の場所から運び込まれた二次化石であると推定される。試料7～9における主な出現珪藻は第2表のとおりである。出現種数は3試料で計18属29種であった。比較的多くの珪藻殻片が認められた試料7・8においても1プレパラートあたり50個体ほどの出現数であったが、次のような傾向がみられた。

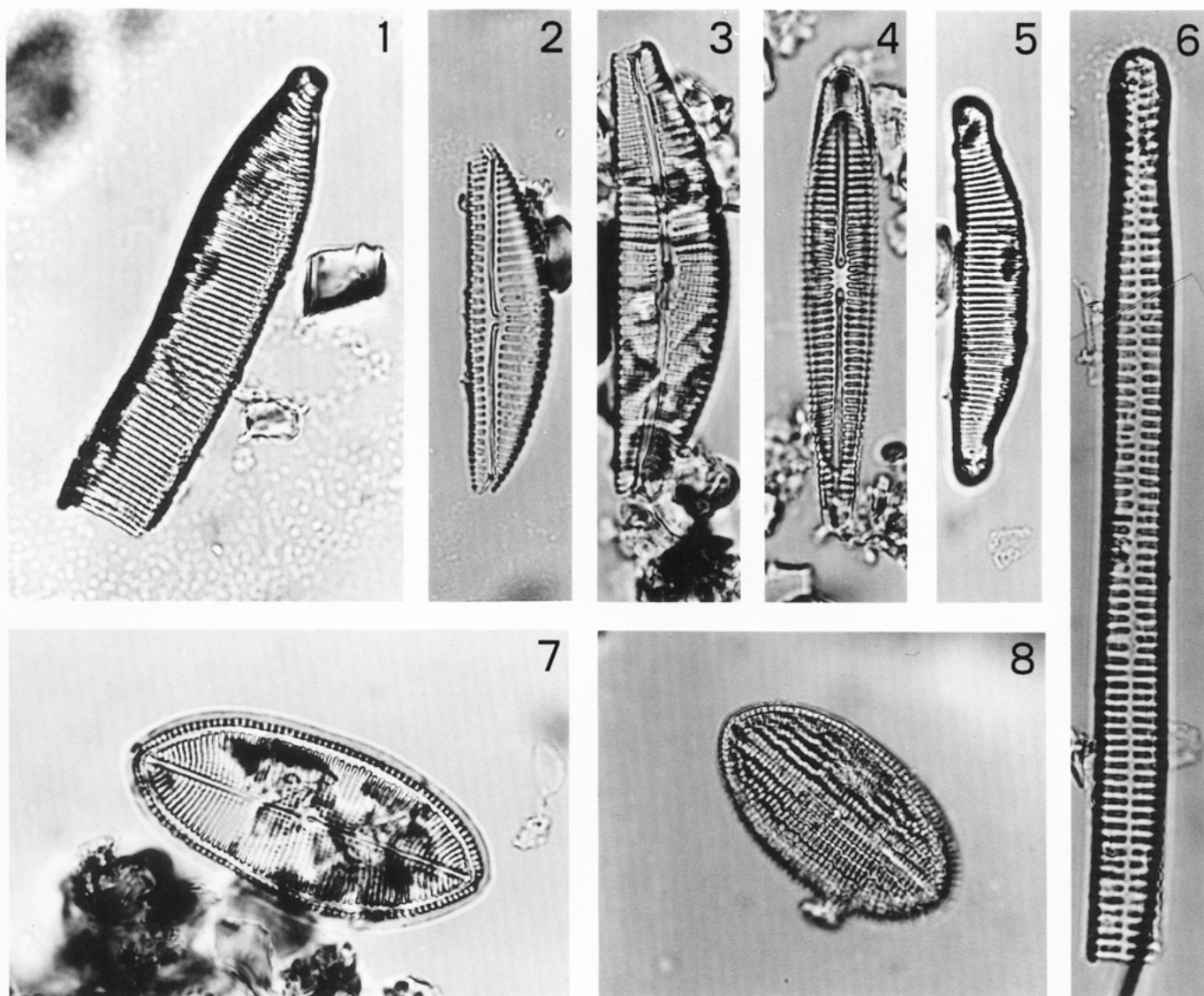
好アルカリ～pH不定性で付着生種の *Cymbella turgidula*、*Synedra ulna*、*Cocconeis placentula* およびその変種の *C. placentula* var. *euglypta* などが比較的多く出現した。これらの珪藻はいずれも河川や池沼などの挺水植物や浮葉植物に付着して生活する好流水性の種群である。分析試料中の珪藻殻は破損しているものも認められたが、他の試料に比べれば珪藻の保存状態は良い。以上のことから試料7～9（住居跡）は流水の影響を受けた河道周辺の後背湿地に堆積した地層であるものと推定される。

Species	7	8	9
<i>Achnanthes linearis</i> W. SMITH	3		
<i>Ceratoneis arcus</i> KÜTZING		2	
<i>Cocconeis placentula</i> EHRENBURG	3		
<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>euglypta</i> (EHR.) CLEVE	1	8	
<i>Cymbella tumida</i> (BREB.) V. HEURCK		1	
<i>Cymbella turgidula</i> GRUNOW	5	16	
<i>Diatoma vulgare</i> BORY	1		
<i>Epithemia zebra</i> (EHR.) KÜTZING	1	1	1
<i>Eunotia flexuosa</i> KÜTZING	1		1
<i>Eunotia formica</i> EHRENBURG	1		
<i>Eunotia pectinalis</i> (KÜTZ.) RABENHORST	4	1	
<i>Fragilaria construens</i> (EHR.) GRUNOW	1		
<i>Fragilaria virescens</i> RALFS	1		
<i>Frustulia rhomboides</i> (EHR.) De TONI		1	
<i>Gomphonema angustatum</i> (EHR.) RABENHORST	1		
<i>Gomphonema clevei</i> FRICKE	7		
<i>Gomphonema intricatum</i> KÜTZING		1	
<i>Gomphonema parvulum</i> (KÜTZ.) KÜTZING	4		
<i>Hantzschia amphioxys</i> (EHR.) GRUNOW		4	
<i>Melosira ambigua</i> (GRUN.) O. MÜLLER	3	4	
<i>Melosira granulata</i> (EHR.) RALFS			1
<i>Navicula goeppertiana</i> (BLEISCH) H. L. SMITH	1		
<i>Opephora martyi</i> HERIBAUD			1
<i>Pinnularia borealis</i> EHRENBURG	1		
<i>Pinnularia hemiptera</i> (KÜTZ.) CLEVE	1		
<i>Rhoicosphenia curvata</i> (KÜTZ.) GRUNOW	3		
<i>Synedra ulna</i> (NITZ.) EHRENBURG	14	5	
<i>Synedra vaucheriae</i> KÜTZING	4		
<i>Tabellaria flocculosa</i> (ROTH) KÜTZING	1		
TOTAL	62	44	4

第2表 岩倉城遺跡90B区における珪藻分析結果



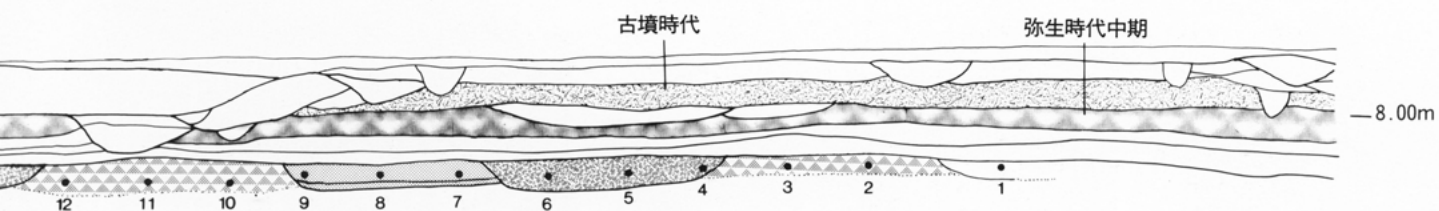
第106図 珪藻分析試料の採取位置図



第107図 岩倉城遺跡産の珪藻遺骸の顕微鏡写真

(森 勇一・前田弘子)

- | | |
|--------------------------------|--|
| 1 <i>Hantzschia amphioxys</i> | 5 <i>Eunotia pectinalis</i> |
| 2 <i>Cymbella minuta</i> | 6 <i>Synedra ulna</i> |
| 3 <i>Cymbella turgidula</i> | 7 <i>Cocconeis placentula</i> |
| 4 <i>Rhoicosphenia curvata</i> | 8 <i>Cocconeis placentula</i> var. <i>euglypta</i> |
- (倍率は約1200倍)



2 岩倉城遺跡出土駿河系土器の胎土分析結果

1 方法

分析の方法は、実体顕微鏡観察と偏光顕微鏡観察である。ただし、今回は同遺跡出土の比較試料がないため、これまでに濃尾平野で得られている結果を基礎データとする。また、考古学的に関連が考えられる静岡県 of 土器胎土との比較は、地質からの推測による。

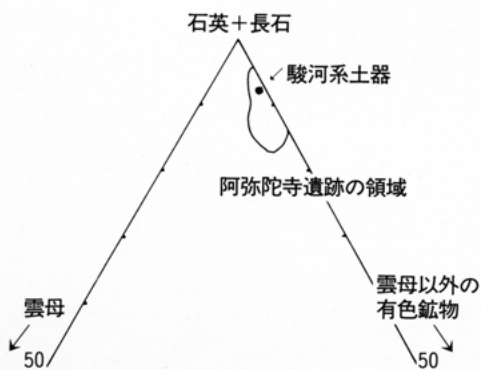
2 分析結果

主要造岩鉱物の三角ダイヤグラムを第108図に示す。この結果を阿弥陀寺遺跡(西春日井郡甚目寺町)の試料から得られた領域(実線)と比較すると、岩倉城遺跡が阿弥陀寺遺跡より上流の、やや東よりに位置するが、ほぼ同じ領域を示した。分析を行った駿河系土器の胎土は、濃尾平野低湿地遺跡の土器胎土と同じ傾向を示すといえる。偏光顕微鏡下での観察においても、主要造岩鉱物に加え、チャート・輝石などが含まれており、濃尾平野西部(阿弥陀寺遺跡・朝日遺跡など)の土器胎土中の砂礫の組合せによく似ている。特に輝石のうち、ピジョン輝石が含まれるものは、阿弥陀寺遺跡の土器にも見られた。長良川最上流部周辺地域に分布する火山岩には、ピジョン輝石が含まれていることが報告されており、これとの関係も考えられる。

静岡県駿河地域では、大井川から阿部川にかけての地域には中生代から新生代古第三紀の堆積物が露出し、富士川以東に富士山による噴出物が分布する。その間を埋めるように新生代新第三紀堆積物が清水平野を形成している。このことを考えればチャート以外の堆積岩や火山岩類の岩片が多く含まれないこの試料の胎土は、静岡県駿河地域との関わりは考えにくい。

以上のことよりこの試料は、形式の点では他地域の影響を受けているものの胎土は濃尾平野産であるものと思われる。ただし、阿弥陀寺・朝日両遺跡の土器に比べると、特に偏光顕微鏡下での輝石の比率が低く、傾向の違いがある。このことは遺跡の位置に関係し、岩倉城遺跡が木曽川の扇状地と庄内川によるそれとのちょうど境界付近にあたることによるものと思われる。ピジョン輝石が含まれることは、河道の変遷により、ある時代には遺跡周辺が長良川による影響を受けたことを示すかもしれない。濃尾平野発達史との検討を要する。

(永草康次)



第108図 主要造岩鉱物三角ダイヤグラム

3 岩倉城遺跡から出土した木製品の樹種

1. 試料

岩倉城遺跡は、岩倉市を流れる五条川右岸の自然堤防上に立地する。遺跡は、戦国時代の岩倉城跡を中心とするが、弥生時代～鎌倉・室町時代の遺構も検出されている。試料は、岩倉城の内堀と思われる溝S D03をはじめ戦国時代のものと思われる各遺構から出土した木製品36点で、中には呪符木簡や地藏菩薩等珍しいものもあった。各木製品の用途は表1に示した。

岩倉城は織田敏広が築城したといわれる戦国時代初期の城で、1559年織田信長によって落城し、以後廃城となった。

2. 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口・柾目・板目の3断面の徒手切片を作製、ガム・クロラールで封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。

3. 結果

同定結果を表1に示す。試料の中には劣化が激しく同定できなかったものや類似種としたものもあるが、35点の試料が7種類に同定された。試料の細胞額的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、一般的な性質については平井（1979～1982）を参考にした。

・スギ (*Cryptomeris japonica*) スギ科

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

スギは、本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では植林面積第一位の重要樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。樹皮は屋根葺用とされ、葉は線香・抹香の原料にもなる。

・ヒノキ属の一種 (*Chamaecyparis sp.*) ヒノキ科

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。今回の調査では以上の特徴が全て観察できない試料があった。そのような試料はヒノキ属類似種として表記した。

ヒノキ属には、ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。

ヒノキは本州（福島県以南）・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内ではスギに次ぐ植林面積を持つ重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きい、強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州（岩手県以南）・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樽や桶にするほか各種の用途がある。

・ブナ属の一種 (*Fagus sp.*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合、横断面では多角形、管壁厚は中庸～薄く、分布密度は高い。道管は単および段階穿孔を有し、段階穿孔の段(bar)数は10前後、壁孔は大型で対列状～階段状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は同性～異性Ⅲ型、単列、数細胞高のものから複合組織まである。柔組織は短接線状および散在状。年輪界は明瞭～やや不明瞭。

ブナ属には、ブナ (*Fagus crenata*) とイヌブナ (*F. japonica*) の2種がある。ブナは北海道南西部（黒松内低地帯以南）・本州・四国・九州に、イヌブナは本州（岩手県以南）・四国・九州の主として太平洋側に分布する。イヌブナのほうがブナより低標高地から生育し、またブナのような大群落をつくることはない。ブナは、日本の冷温帯落葉樹林を代表する樹木で、かつては東日本の山地に広く生育していたが、近年、植林などによって生育地が激減している。材はやや重硬で、強度は大きい加工はそれほど困難ではなく、耐朽性は低い。木地・器具・家具・薪炭材などの用途があったが、最近では各種の用途に用いられている。また種子は食用となり、搾油される。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 (*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris sp.*)

ブナ科

環孔材で孔圈部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形、小道管は管壁は中庸～厚く、横断面では角張った円形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が2年目に熟するグループで、クヌギ (*Quercus acutissima*) とアベマキ (*Q. variabilis*) の2種がある。クヌギは本州（岩手・山形県以南）・四国・九州に、アベマキは本州（山形・静岡県以西）・四国・九州（北部）に分布するが、中国地方に多い。クヌギは樹高1.5mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材・櫓木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。ア

ベマキはクヌギによく似た高木で、樹皮のコルク層が発達して厚くなる。材質はクヌギに似るが、さらに重い。用途もクヌギと同様であるが、樹皮が厚いため薪材にはむかず、炭材としてもクヌギ・コナラより劣るとされる。

・ケヤキ類似種 (cf. *Zelkova serrata*) ニレ科

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独、小道管は管壁厚は中庸～薄く、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～10細胞幅、1～30細胞高である。柔組織は周囲状。年輪界はやや不明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高50mにも達する。材はやや重硬で、強度は大きい、加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途が知られ、国産広葉樹材の中で最良のものの一つに上げられる。

・トチノキ (*Aesulus turbinata*) トチノキ科

散孔材で管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2～3 (5) 個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状～篩状となり、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高で階層状に配列し、肉眼ではリップル・マークとして認められる。柔組織はターミナル状。年輪界はやや不明瞭。

トチノキは北海道 (南西部)・本州・四国・九州の主として谷沿いの肥沃地に生育する落葉高木で、東北地方に多く九州には少ない。材は軽軟で、加工・乾燥が容易で、耐朽性は小さい。器具・家具材や旋作材・木地などに用いられる。種子は澱粉を多く含み食用となるほか、タンニン原料ともなる。

・キリ類似種 (cf. *Paulownia tomentosa*) ゴムノハグサ科

環孔材であるが孔圏部はやや不明瞭、孔圏外で管径を漸減させる。横断面では角張った円形～楕円形、単独または2～3個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は翼状～連合翼状となる。年輪界は明瞭。

キリは中国中部地域原産とされる (九州に自生するという見解もある) 落葉高木で、各地に植栽されるが東北・関東地方北部などで良好に生育する。材は国産有用材中最も軽軟で、加工は容易、狂いや割れが少ない。箆笥をはじめとする家具材・各種器具・建具・建築・下駄材など多様な用途が知られている。

4. 考察

同定した結果は、スギ類似種 2 点、ヒノキ属の一種 26 点（類似種 10 点）、ブナ属の一種 2 点、コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 1 点、ケヤキ類似種 1 点、トチノキ 2 点（類似種 1 点）、キリ類似種 1 点、広葉樹（環孔材） 1 点であった。

表 1 をみると、最も多かったヒノキ属の一種は様々な用途に用いられていることが分かる。この中でも特に曲物や人形、鳥形は島地・伊東（1988）でヒノキ属の利用が最も多いとされている木製品である。また、小原（1972）は日本各地の仏像の樹種を調べているが、この中の愛知県内の仏像の樹種をみると、ヒノキ属が最も多い結果となっている。ヒノキ属が多用されていることについては入手・加工が容易であることが考えられる。

漆器の樹種は、トチノキ 2 点、ブナ属の一種 1 点、ケヤキ類似種 1 点であった。これらの樹種のうち、ケヤキは島地・伊東（1988）で碗の用材として最も多いとされている樹種である。また、ブナ属、トチノキは県内の清洲城下町遺跡で漆器類に多く用いられていた（バリノ・サーヴェイ株式会社、1990）。これらが使用されたのには、ケヤキは木理の美しさ、ブナ属・トチノキは加工が容易であること等が考えられる。

（バリノ・サーヴェイ株式会社）

文献

平井信二（1979～1982）木の事典 第 1 巻～第 17 巻、かなえ書房。

小原二郎（1972）木の文化、鹿島出版会、217p.

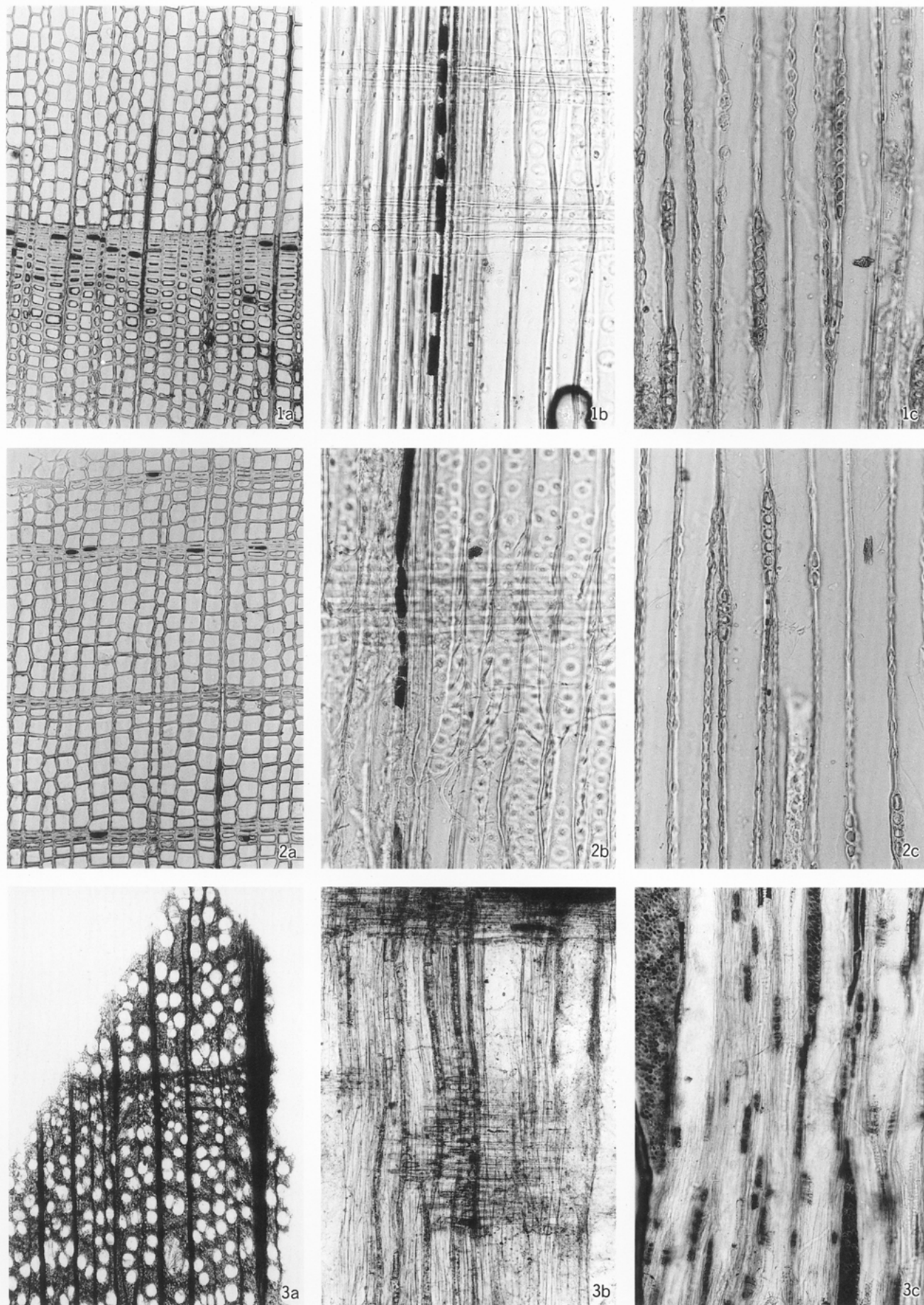
バリノ・サーヴェイ株式会社（1990）材質（樹種）同定、「清洲城下町遺跡」、(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告第 17 集、財団法人愛知県埋蔵文化財センター、p.98-101.

バリノ・サーヴェイ株式会社（1991）江戸時代木製品の材同定、「戸田条里遺跡」、いわき市埋蔵文化財調査報告第 29 冊、福島県いわき農地事務所・福島県いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団、p.178-180.

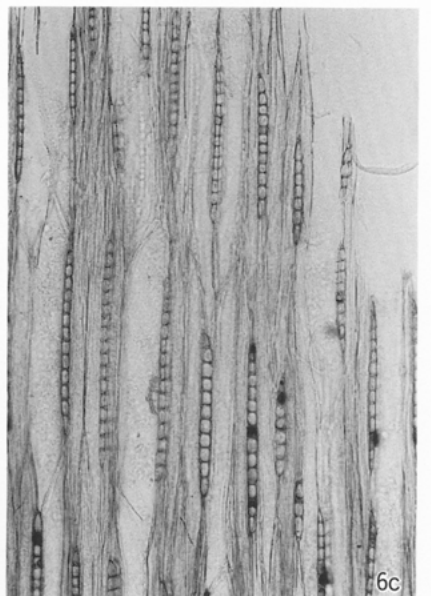
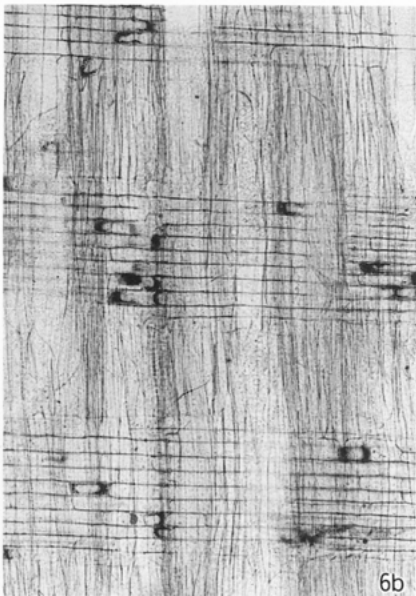
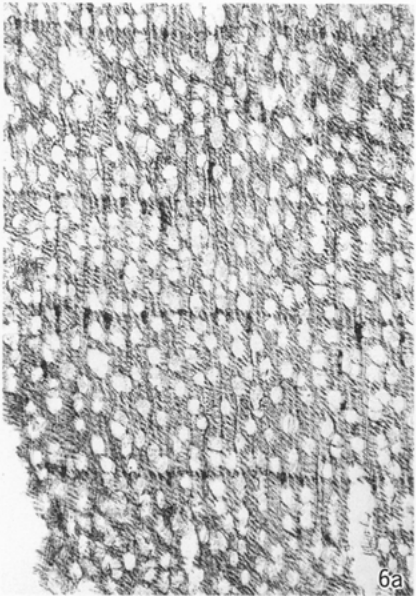
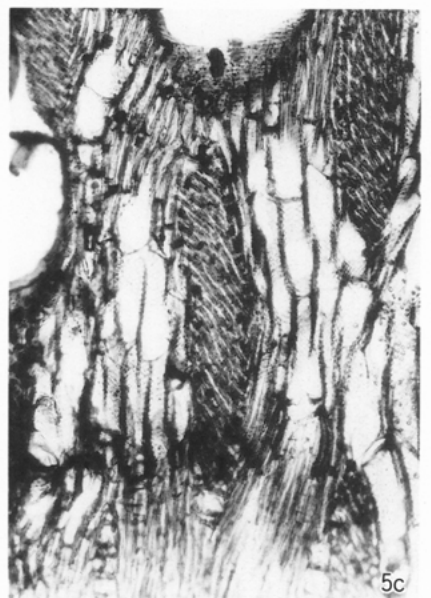
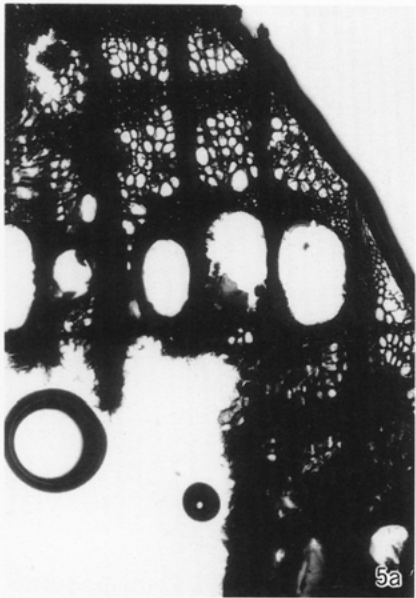
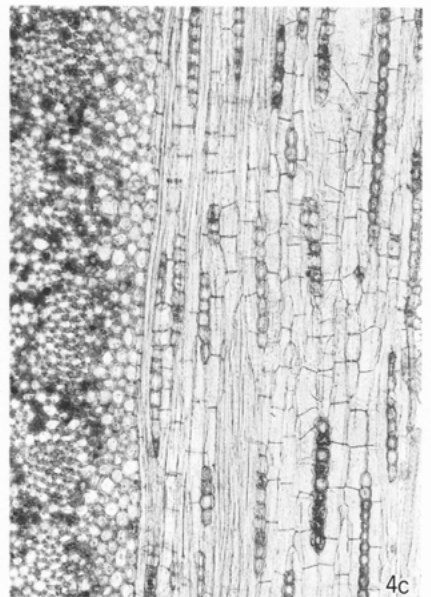
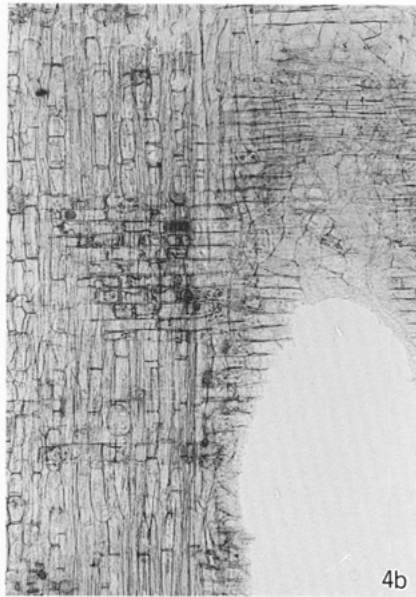
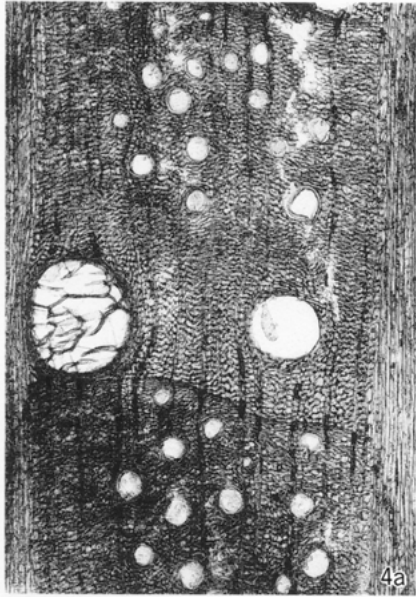
島地 謙・伊東隆夫 編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、259p.

第3表 岩倉城跡から出土した木製品の樹種

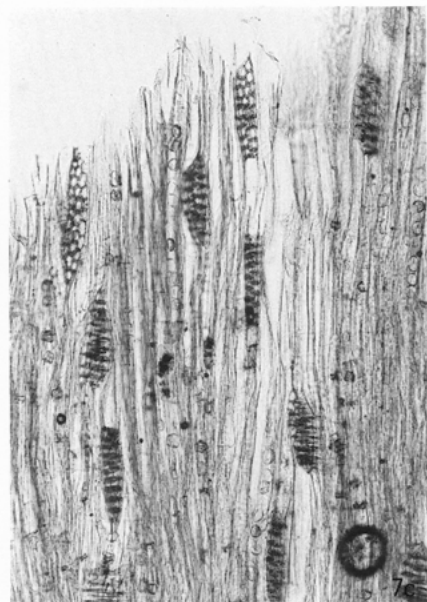
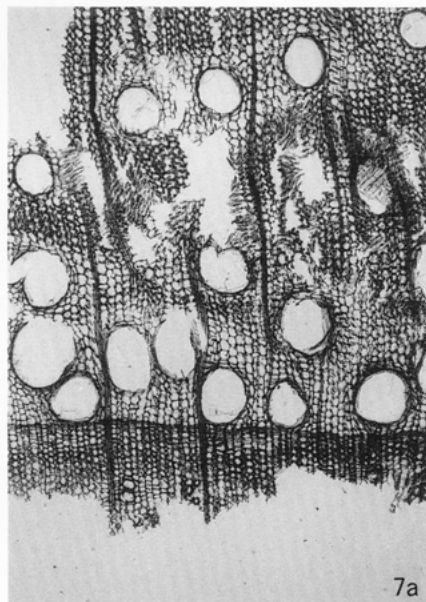
No.	検出遺構など	用途	樹種名
1	63Aa SD01	地藏菩薩	ヒノキ属の一種
2	62A SD03	人形	ヒノキ属類似種
3	62A SD04	鳥形	ヒノキ属類似種
4	62A SD05	絵馬	ヒノキ属の一種
5	62A SD05	へラ	スギ類似種
6	62A SD05	割折敷	ヒノキ属の一種
7	62A SD05	割折敷	ヒノキ属の一種
8	62A SD05	割折敷	ヒノキ属類似種
9	62A SD05	割折敷	ヒノキ属類似種
10	62A SD05	割折敷	ヒノキ属の一種
11	62A SD05	割折敷	ヒノキ属の一種
13	62A SD03	呪符木簡	ヒノキ属の一種
14	62A SD03	人形	ヒノキ属の一種
16	89AB SD07	割折敷	ヒノキ属の一種
17	62A SD03	折敷底板	ヒノキ属の一種
18	62A SD03	折敷（側板）	ヒノキ属の一種
19	62A SD03	折敷（底板）	ヒノキ属類似種
20	62A SD05	曲物	ヒノキ属の一種
21	62A SD03	曲物底板	ヒノキ属の一種
22	62A SD03	柄杓（桶）	ヒノキ属の一種
23	62A SD03	柄杓（柄）	ヒノキ属の一種
24	62A SD03	下駄	ヒノキ属類似種
25a	63Ac SD02上層(明治)	下駄	キリ類似種
25b	63Ac SD02上層(明治)	下駄さし歯	ブナ属の一種
26	62A SD03	桶（側板）	ヒノキ属の一種
27	62A SD05	箸	スギ類似種
28	62A SD03	箸	ヒノキ属類似種
29	62B SB02	礎板	ヒノキ属類似種
30	89F SE04	井戸（側板）	ヒノキ属類似種
31	89F SE04	井戸（柱）	広葉樹（環孔材）
32	62A SD03	漆碗	トチノキ類似種
33	63Aa SD01	漆碗	トチノキ
34	63Ac SD02	漆碗	ブナ属の一種
35	89AB SD06	漆碗	ケヤキ類似種
36	63Ba SD02	倒木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
37	89F SE04	井戸	ヒノキ属類似種



1. スギ類似種 (No5) a (木口) x77, b (柁目) x154, c (板目) x154
 2. ヒノキ属の一種 (No7) a x77, b x154, c x154
 3. ブナ属の一種 (No25b) a x30, b x77, c x77



4. コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 (No.36) a x30, b x77, c x77
 5. ケヤキ類似種 (No.36) a x30, b x77, c x77
 6. トチノキ (No.33) a x30, b x77, c x77



7. キリ類似種 (No25a) a x30, b x77, c x77

ネガ番号	樹 種 名	試料番号	断面	スケール
2	スギ	5	木口	B
3	スギ	5	柂目	C
4	スギ	5	板目	C
5	ヒノキ属の一種	7	木口	B
6	ヒノキ属の一種	7	柂目	C
7	ヒノキ属の一種	7	板目	C
8	ブナ属の一種	25b	木口	A
9	ブナ属の一種	25b	柂目	B
10	ブナ属の一種	25b	板目	B
11	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	36	木口	A
12	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	36	柂目	B
13	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	36	板目	B
14	ケヤキ類似種	35	木口	A
15	ケヤキ類似種	35	柂目	B
16	ケヤキ類似種	35	板目	B
17	トチノキ	33	木口	A
18	トチノキ	33	柂目	B
19	トチノキ	33	板目	B
20	キリ類似種	25a	木口	A
21	キリ類似種	25a	柂目	B
22	キリ類似種	25a	板目	B
26	スケールA			
27	スケールB			
28	スケールC			

第4表 ネガ説明（材の顕微鏡写真のネガ）

・ネガ倍率は、スケールAが×12.5，Bが×32，Cが×64で、写真図版はネガを 2.4倍（横 86mm）に引き伸ばしたものを使用した。

4 岩倉城遺跡より発見された地震痕について

1 はじめに

日本のような地震多発国では、遺跡調査の過程で地震の痕跡が発見されることも多い。寒川ら（1987・1988a・1988b・1990）の努力によって、これまで見過ごされがちだった地震に伴う地変の記録が近年、近畿地方を中心に報告されるようになり、地震の発生時期の推定や地震の規模・その発生の周期など、地震学や防災的な側面のみならず、地震に伴って発生した噴砂（砂脈）の収載な観察によって、地震の新旧関係や考古遺物の編年的な研究に大いに役だっている。（森・鈴木：1989、鈴木：1991）。

1989年度に発掘・調査された岩倉城遺跡（89C区）では、地震性に伴う小断層が観察されたので報告する。

2 地震の痕跡

岩倉城遺跡は、標高10mの五条川の自然堤防上に立地する戦国時代を中心とした遺跡である。ここでは15世紀前半、織田敏広によって築城されたとされる岩倉城に関連した遺構や遺物が多数出土しており、これら考古学的な成果より遺跡基盤層や遺物を包含する地層の堆積年代が詳細に記録されている。本遺跡では、岩倉城落城後の16世紀前半に堆積した砂およびシルト層を切る小断層（正断層）が確認された。断層の落差は約14cm、その推定延長は7.4mで、断層面の走向・傾斜はN10°W、80°Eであった。この断層は上部を16世紀以降、江戸時代前期までの遺物を含む地層によって被覆されていることより、地震の発生時期が少なくとも江戸時代前期（17世紀代）までのものと推定することができる。また、この断層には1.7m隔てた東側に推定延長5.6mの副断層が伴われており、さらに断層を北側へ17.1m延長したところの基盤砂層には、液状化の痕跡が認められた。

3 推定される地震について

「新編日本被害地震総覧」（宇佐見：1987）および「新収日本地震資料」（東京大学地震研究所編：1982・1984）をもとに、この地域の地層に地変をもたらした可能性のある地震を選び出してみると、東南海（1944年：昭和19年）・濃尾（1891年：明治24年）・天正（1586年：天正13年）および明応（1498年：明応7年）の四つの地震が考えられる。ほかに可能性のある地震として、安政東海（1854年：安政元年）・宝永（1707年：宝永4年）の二地震があげられるが、断層によって変位をうけている地層の堆積年代から考えると、17世紀以降の地震である可能性は考えられない。

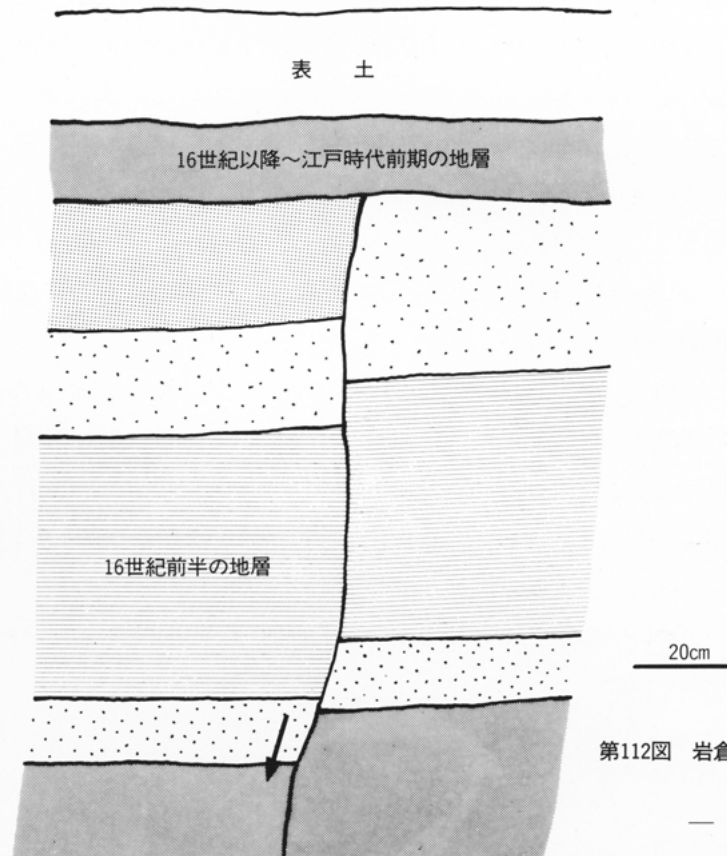
その結果、岩倉城遺跡で観察された地震痕は清洲城下町遺跡（西春日井郡清洲町）に大

規模な地割れや噴砂を発生させたことが知られる（森、1989・1991）、天正地震によってもたらされた可能性が極めて高いものとする。

（森 勇一）

《参考文献》

- 飯田汲事（1979）：明応地震・天正地震・宝永地震・安政地震の震害と震度分布，愛知県防災会議地震部会，109P.
- 森 勇一・鈴木正貴（1989）：愛知県清洲城下町遺跡における地震痕の発見とその意義，活断層研究，7，63—69.
- 森 勇一・鈴木正貴（1990）：清洲城下町遺跡及びその周辺地域から発見された歴史地震の記録，歴史地震，5，33—41.
- 寒川 旭・佃 栄吉・葛原秀男（1987）：滋賀県高島郡今津町の北仰西海道遺跡において認められた地震痕，地質ニュース，390，13—17.
- 寒川 旭・岩松 保・黒坪一樹（1987）：京都府木津川河床遺跡において認められた地震痕，地震，40，575—583.
- 寒川 旭（1988a）：考古学の研究対象に認められる地震の痕跡，古代学研究，116，1—16.
- 寒川 旭（1988b）：地震考古学の提唱，日本文化財科学会会報，16，19—26.
- 寒川 旭（1990）：遺跡で発掘された地震痕，歴史地震，5，15—21.
- 鈴木正貴（1991）：天正地震下層の出土遺物—清洲城下町遺跡90D区出土遺物の検討—，愛知県埋蔵文化財センター年報（平成2年度），111—122.
- 東京大学地震研究所編（1982・1984）：新収日本地震資料（第1巻～5巻），日本電気協会
- 宇佐見龍夫（1987）：新編日本被害地震総覧，東京大学出版会，437P.



第112図 岩倉遺跡89C区における小断層

V まとめ

岩倉城遺跡は、五条川中流域に発達した自然堤防上に展開する遺跡であり、今回の発掘調査は、その自然堤防帯を東西に貫く形で実施されたため、縄文晩期から戦国時代に至るまでの貴重な遺構・遺物を確認することができた。ここでは、とくに遺跡の変遷を簡単にまとめておきたい。

[Ⅰ期] 縄文晩期および弥生時代中期の遺構・遺物を、五条川左岸の遺跡最東端部で確認したが、それらは、遺跡全体へは広がらず、局所的な存在である。

① 縄文晩期の遺構としては、竪穴住居、土坑等を検出した。それらは、東西幅50～60m程度の範囲内に集中し、それ以外の地点では認められず、小規模な集落であったと考えられよう。

② 弥生時代中期の遺構は、貝田町式期を主体とするものであった。遺跡の南方には隣接して弥生時代前期から後期にかけて継続し、中期・貝田町式期に主体をおくと考えられる曾野遺跡があり、発掘調査で確認された遺構・遺物は、それとの関連で捉えなければならぬであろう。

[Ⅱ期] 弥生時代後期から古墳時代初頭にいたって、はじめて遺跡全体に安定したヒトの定着が認められるようになる。

① 五条川右岸の自然堤防上に居住城を、対岸の微高地上に墓域を設定した一般的な集落構造をつかむことができた。また、旧河道へ落ち込んでいく傾斜変換地点で、遺構は希薄ながら多量の遺物を出土する空間を検出した。

② 遺構・包含層中より多量の土器が出土した。これらの詳細な分析は時間的な余裕がなく実施することはできなかった。しかし、S B1204・1206、S X1201より出土した一括資料は、当地方の弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年を考える上で貴重な資料と言えよう。

[Ⅲ期] Ⅲ期の遺構は、古墳・集石墓群といった「墓」に限定できる遺構のみであり、遺跡は広く墓域として機能していたと考えられる。

① 検出された古墳は、すべて方形状に周溝を巡らすものであり、尾張地方の当該期の古墳に一般的にみられる形状を呈していた。

② 7世紀中葉前後に築造された集石墓群は、全国的にも類例のみられない極めて珍しい墓制であった。東海地方においては、6世紀末から7世紀にかけて、追葬・多葬が可能な横穴式石室墳を中心とする墓制から単葬を目的とした墓制に変化する傾向がみられはじめる。集石墓群も、そういった時代的な動きのなかで誕生した古墳時代終末期の墓制といえるであろう。

[Ⅳ期] 五条川の両岸で、遺構・遺物が認められた。しかし、それらは散在的にみられたのみで、

遺構の性格等を判断するまでにはいたらなかった。

[V期] V期の遺構は五条川の両岸で確認できた。右岸では掘立柱建物と溝が、左岸では井戸や溝が在り、人々の居住域であったと考えられる。

① 右岸で検出した掘立柱建物はいずれも礎板の上に柱を建てる構造である。柱の方向は内堀などと直行もしくは平行する。溝も内堀と直行することから、これらの遺構は城に発展する前身的な建物であった可能性もある。

② 左岸で検出した井戸や溝からはかなり纏まった量の遺物が出土し、道の存在を推定させる平行する2条の溝(SD27・28)も見つかり、右岸よりも多くの人々の生活を想像できる。

[VI期] VI期の遺構は発掘調査前には五条川右岸のみに埋没すると推定されていたが、五条川左岸にも広がり、予想を上回る規模の城であったことが確認できた。『武功夜話』の内容を実証するかのごとく、尾張を分割統治する人物が住むに相応しい規模の城であり、計画的に配置された武家屋敷や城下町を有していた可能性が高い。

① 右岸では10mほどの外堀と23mにもなる規模の内堀を検出した。本丸は西半分が後世の削平をうけ確認できなかったが、東の内堀のすぐ内側は一番高くなり、この部分では織田信長によって攻められたときと推定される焼土の広がり確認できなかったことから、ここはかなり大規模な土塁が存在したことは推定するに難くない。西側の内堀も同じ規模であることや文献の記述から、西側に大規模な土塁が存在したこともまず間違いないものと考えられよう。

なお瓦はまったく出土しなかったため檜皮葺きの類の屋根であったらしい。

② 左岸では10mほどの規模の堀を3条確認し、城の付属施設がこちらにも広がっていたことが確認できた。ここにどんな性格の施設が存在したかは定かではないが、五条川から約250m東に位置する堀は総堀で、このすぐ内側には城下町の一部が展開していたらしい。

発掘調査の成果と地籍図をもとにした岩倉城の復元案は、すでに金子健一によって試みられている(金子 1990)。現時点では調査担当者の意見は大略では、金子案に一致を見る。よって、岩倉城の復元については金子論文を参照されたい。

金子健一 1990「戦国城下町岩倉の復元的考察」『年報 平成2年度』118頁～130頁。

付 表

1. 遺構表

I 期(縄文晩期)

遺構番号	調査区	旧遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考
SB1001	90B	SB101	—	—	0.05	
SB1002	90B	SB102	(0.4)	3.2	0.03	
SB1003	90B	SB103	—	4.3	0.10	
SK1001	90B	SK101	2.5	—	0.11	
SK1002	90B	SK104	2.5	1.3	0.10	
SK1003	90B	SB104	—	—	0.15	

I 期(弥生中期)

遺構番号	調査区	旧遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考
SB1101	90B	SB01	—	(4.7)	0.10	
SB1102	90B	SB02	—	4.6	0.20	
SD1101	90B	SD53	—	2.7	0.33	
SD1102	90B	SD54	—	1.2	0.21	
SD1103	90B	SD57	—	1.5	0.45	
SD1104	90A	SD102	—	2.2	0.32	
SD1105	90Ca	SD01	—	1.7	0.51	

II期

遺構番号	調査区	旧遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考
SB1201	89AB	SB01	(5.6)	5.6	0.30	
SB1202	89AB	SB02	—	—	0.30	
SB1203	89AB	SB03	—	—	0.12	
SB1204	89AB	SB04	(7.0)	—	0.30	
SB1205	89AB	SB05	6.4	—	0.18	
SB1206	89AB	SB06	(7.0)	6.6	0.15	
SB1207	89AB	SB07	—	—	0.15	
SB1208	89AB	SB08	—	—	0.11	
SB1209	63Ad	SB01	—	—	0.05	
SB1210	63Ad	SB02	—	—	0.05	
SK1201	63Ad	P3	0.4	0.4	0.10	
SK1202	63Bc	SK02	(1.0)	—	0.12	
SK1203	63Ba	SK01	1.0	(1.0)	0.15	
SK1204	89Ea	SE01	(1.5)	1.5	(0.70)	
SZ1201	89F	SZ01	—	—	0.60	
SX1201	89Ea	SX01	—	—	—	凹地状の堆積
SX1202	89C	SX01	—	—	—	集石
SX1203	89C	SX02	—	—	—	集石
SD1201	89AB	SD504	—	0.8	0.15	

III期

遺構番号	調査区	旧遺構番号	規模(m)	周溝幅(m)	深さ(m)	備考
SZ1301	62B・63Ad	SD04・SD02	(26.0)	4.0	0.15	
SZ1302	89Ga・90A	SD01・SD08	(17.0)	6.0	0.60	
SZ1303	89Gb・90A	SD07・SD04	(13.0)	1.2~2.0	0.60	
SZ1304	90B	SD51	(18.0)	5.5	0.20	

IV期

遺構番号	調査区	旧遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考
SD1401	63BC	SD04	—	1.7	0.30	
SD1501	89F	SD07	—	0.5	0.20	
SD1502	89F	SD08	—	0.5	0.20	
SK1401	89F	SK03	—	1.5	0.70	
SX1501	90B	SX01	4.5	4	1.30	

V期(中世)

遺構番号	調査区	旧遺構番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	備考
SB01	62B	SB01	4間	3間	—	掘立柱建物
SB02	62B	SB02	4間	3間以上	—	掘立柱建物
SE03	89F	SE02	(掘形直径)	—	2	
SE04	89F	SE01	3.7	—	2.5	
SE05	89F	SE03	1.7	—	1.0	
SD16	89A・B	SD503	—	(幅) 0.5~1.8	0.3	
SD17	89A・B	SD502	—	0.8~1.7	0.5	
SD26	90A	SD03	—	1~1.8	1.1	
SD27	90Ba	SD03	—	0.5	0.05	
SD28	90Ba	SD04	—	0.7	0.05	

IV期(戦国)

遺構番号	調査区	旧遺構番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	備考
SD01	63Aa・63C	外堀	—	(幅) 約1.0	2	
SD02	63Ac・63Ba	外堀	—	約23	3以上	
SD03	62A・62B	SD03	—	5	2	
SD04	62A	SD01'	—	2.7	0.9	
SD05	62A	SD01	—	3	1	
SD06	89A・B	SD03	—	3	1.7	
SD07	89A・B	SD01	—	20	7	
SD08	89C	SD01	—	12	3.5	
SD09	89Ea	SD23	—	8~9	2.5	
SD10	89F	SD05	—	8~9	2.5~3	
SD11	90Bb	SD01	—	10	3	
SD12	63Bb	SD01	—	2	1	
SD13	62A	SD04	—	0.6~0.9	0.2	
SD14	62A	SD05	—	0.7	0.3	
SD15	89A・B	SD11	—	0.5~1.5	0.4	
SD18	89A・B	SD501	12	4	?	
SD19	89A・B	SD02	—	5	0.4	
SD20	89Eb	SD18	—	2.5	0.8	
SD21	89F	SD10	—	1.5~2	1	
SD22	89Gb	SD03	—	1.5~2.5	0.2	
SD23	89Gb	SD01	—	—	0.5	
SD24	90Ba	SD07	—	1.5	0.4	
SD25	90A	SD01	—	1	0.4	
SD29	90Ba	SD09	—	—	0.6	
SE01	63Bd	SE02	(掘形直径) 2	—	—	桶組
SE02	63Bd	SE03	—	—	—	桶組
SE06	90A	SE01	2	—	2	桶組
SK01	63Bb	SK01	(直径) —	(短径) 2.5	0.5	
SK02	62A	SD02	—	2.7	0.5	
SK03	62A	SK05	2	1.5	0.75	
SK04	62A	SK06	—	1.8	0.5	
SK05	62A	SK01	—	1.6	0.15	
SX01	62B	焼土層	約 8	3.2	(層) 0.07	

2. 遺物表

I 期 1 縄文

遺物番号	登録番号	遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
1	90B-E-1034	SB1002	—	—	—	
2	90B-E-1005	SB1002	—	—	—	
3	90B-E-1004	SB1002	—	—	—	
4	90B-E-1003	SB1002	—	—	—	
5	90B-E-1012	SB1003	—	—	—	
6	90B-E-1013	SB1003	—	—	—	
7	90B-E-1014	SB1003	—	—	—	
8	90B-E-1009	SB1003	—	—	—	
9	90B-E-1010	SB1003	—	—	—	
10	90B-E-1008	SB1003	—	—	—	
11	90B-E-1007	SB1003	—	—	—	
12	90B-E-1015	SB1003	—	—	—	
13	90B-E-1039	SK1004	—	—	—	
14	90B-E-1040	SK1004	—	—	—	
15	90B-E-1055	包含層	—	—	—	
16	90B-E-1060	包含層	—	—	—	
17	90B-E-1056	包含層	—	—	—	
18	90B-E-1057	包含層	—	—	—	
19	90B-E-1058	包含層	—	—	—	

I 期 2 縄文

遺物番号	登録番号	遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
20	90B-E-1024	SD1101	23.1	—	—	
21	90B-E-1025	SD1101	10.8	—	—	
22	90B-E-1021	SD1101	—	—	—	
23	90B-E-1023	SD1101	—	—	—	
24	90B-E-1020	SD1101	—	—	—	
25	90B-E-1022	SD1101	—	—	—	
26	90B-E-1027	SD1102	30.2	—	—	
27	90B-E-1028	SD1102	—	—	—	
28	90B-E-1029	SD1102	—	—	—	
29	90B-E-1032	SD1102	20.8	—	—	
30	90B-E-1025	SD1104	10.4	—	—	
31	90B-E-1001	SD1104	—	6.2	—	
32	90Ca-E-1009	SD1105	—	—	—	
33	90Ca-E-1005	SD1105	—	—	—	
34	90Ca-E-1006	SD1105	—	—	—	
35	90Ca-E-1007	SD1105	—	—	—	
36	90Ca-E-1008	SD1105	—	—	—	
37	90Ca-E-1010	SD1105	—	—	—	
38	90Ca-E-1003	SD1105	—	—	—	
39	90Ca-E-1002	SD1105	—	—	—	
40	90Ca-E-1004	SD1105	—	—	—	
41	90Ca-E-1017	SD1105	33.6	—	—	
42	90Ca-E-1012	SD1104	—	5.4	—	
43	90Ca-E-1013	SD1104	—	4.4	—	
44	90A-E-1023	包含層	—	—	—	
45	90B-E-1017	包含層	—	—	—	
46	90A-E-1022	包含層	—	—	—	
47	90A-E-1014	包含層	—	—	—	
48	90A-E-1008	包含層	—	—	—	
49	90A-E-1003	包含層	—	—	—	
50	90A-E-1009	包含層	—	—	—	
51	90A-E-1010	包含層	—	—	—	
52	90A-E-1004	包含層	—	—	—	
53	90B-E-1052	包含層	—	—	—	
54	90A-E-1027	包含層	—	—	—	
55	90A-E-1016	包含層	—	—	—	
56	90A-E-1015	包含層	—	—	—	
57	90B-S-1003	包含層	—	—	—	

Ⅱ期 弥生時代後期～古墳時代

遺物番号	登録番号	遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
58	89AB-E-1001	SB1201	—	—	—	
59	89AB-E-1002	SB1201	—	—	—	
60	89AB-E-1004	SB1201	—	—	—	
61	89AB-E-1005	SB1201	—	—	—	
62	89AB-E-1006	SB1201	—	—	—	
63	89AB-E-1007	SB1201	—	—	—	
64	89AB-E-1004	SB1201	—	—	—	
65	89AB-E-1009	SB1201	—	—	—	
66	89AB-E-1008	SB1201	—	—	—	
67	89AB-E-1012	SB1201	—	—	—	
68	89AB-E-1011	SB1201	—	—	—	
69	89AB-E-1010	SB1201	—	—	—	
70	89AB-E-1033	SB1204	—	—	—	
71	89AB-E-1020	SB1204	13.2	—	—	
72	89AB-E-1014	SB1204	23.2	—	—	
73	89AB-E-1032	SB1204	16.2	—	—	
74	89AB-E-1030	SB1204	14.8	—	—	
75	89AB-E-1029	SB1204	13.8	—	—	
76	89AB-E-1031	SB1204	—	4.2	—	
77	89AB-E-1025	SB1204	19.2	—	—	
78	89AB-E-1023	SB1204	17.4	—	9.4	
79	89AB-E-1027	SB1204	17.6	—	—	
80	89AB-E-1028	SB1204	17.2	—	—	
81	89AB-E-1021	SB1204	16.8	—	—	
82	89AB-E-1024	SB1204	17.8	—	—	
83	89AB-E-1013	SB1204	17.2	—	—	
84	89AB-E-1019	SB1204	27.8	—	—	
85	89AB-E-1018	SB1204	23.8	—	—	
86	89AB-E-1017	SB1204	25.4	14.4	21.8	
87	89AB-E-1017	SB1204	25.4	14.4	21.8	
88	89AB-E-1016	SB1204	22.4	14.4	21.8	
89	89AB-E-1015	SB1204	21.2	14.8	17.4	
90	89AB-E-1045	SB1206	24.4	—	—	
91	89AB-E-1046	SB1206	18.2	14.8	15.1	
92	89AB-E-1041	SB1206	—	15.6	—	
93	89AB-E-1048	SB1206	—	—	—	
94	89AB-E-1041	SB1206	18.2	—	9.8	
95	89AB-E-1040	SB1206	16.8	—	10.4	
96	89AB-E-1038	SB1206	—	8.2	—	
97	89AB-E-1044	SB1206	23.2	—	—	
98	89AB-E-1042	SB1206	17.8	—	—	
99	89AB-E-1039	SB1206	21.2	11.2	25.8	
100	89AB-E-1035	SB1206	—	—	—	
101	89AB-E-1036	SB1206	—	—	—	
102	89AB-E-1034	SB1206	15.1	5.6	26.1	
103	63Ad-E-1008	SB1209	—	4.6	—	
104	63Bc-E-1001	SK1202	10.8	4.1	12.8	
105	63Ad-E-1004	SK1201	12.8	4.4	19.8	
106	89AB-E-1049	SD1201	—	5.2	—	
107	89AB-E-1050	SD1201	—	6.8	—	
108	89Ea-E-1011	SX1201	9.8	—	7.6	
109	89Ea-E-1007	SX1201	12.8	—	6.4	
110	89Ea-E-1008	SX1201	15.0	—	5.2	
111	89Ea-E-1024	SX1201	18.4	—	6.4	
112	89Ea-E-1016	SX1201	8.4	12.3	8.9	
113	89Ea-E-1017	SX1201	8.1	11.0	8.7	
114	89Ea-E-1018	SX1201	10.4	11.1	10.2	
115	89Ea-E-1015	SX1201	8.4	11.3	9.2	
116	89Ea-E-1019	SX1201	8.4	13.6	9.7	
117	89Ea-E-1010	SX1201	14.0	—	—	
118	89Ea-E-1021	SX1201	—	—	—	
119	89Ea-E-1009	SX1201	—	2.4	—	
120	89Ea-E-1020	SX1201	14.6	—	—	

遺物番号	登録番号	遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
121	89Ea-E-1013	SX1201	21.4	—	—	
122	89Ea-E-1014	SX1201	15.4	6.0	26.9	
123	89Ea-E-1023	SX1201	13.4	—	—	
124	89Ea-E-1012	SX1201	14.2	9.4	25.2	
125	89Ea-E-1022	SX1201	—	7.4	—	
126	89Ea-E-1002	SK1204	16.6	—	4.8	
127	89Ea-E-1003	SK1204	19.2	—	—	
128	89Ea-E-1001	SK1204	19.0	12.8	11.5	
129	89Ea-E-1004	SK1204	12.4	—	—	
130	89Ea-E-1005	SK1204	13.3	9.3	22.8	
131	89Ea-E-1006	SK1204	18.4	10.6	30.0	
132	89F-E-1004	SZ1201	10.6	2.8	17.4	
133	89F-E-1002	SZ1201	15.8	5.4	28.8	
134	89F-E-1001	SZ1201	—	13.2	—	
135	89F-E-1003	SZ1201	23.2	15.2	23.2	
136	89AB-E-1062	包含層	24.8	—	—	
137	89AB-E-1058	包含層	—	—	—	
138	63Ad-E-1006	包含層	—	—	—	
139	63Ad-E-1005	包含層	—	15.6	—	
140	89AB-E-1065	包含層	—	—	—	
141	89AB-E-1052	包含層	—	—	—	
142	89AB-E-1060	包含層	—	22	—	
143	89AB-E-1064	包含層	—	—	—	
144	63BC-E-1005	包含層	—	10.8	—	
145	89AB-E-1061	包含層	—	13.8	—	
146	89AB-E-66	包含層	—	—	—	
147	63Ad-E-1002	包含層	20.2	—	—	
148	89AB-E-1054	包含層	14.8	—	—	
149	89AB-E-1059	包含層	14.8	7.4	20.8	
150	89AB-E-1056	包含層	19.6	—	—	
151	89AB-E-1055	包含層	21.2	—	—	
152	89AB-E-1057	包含層	21.8	—	—	
153	63Ad-E-1003	包含層	—	9.8	—	
154	63Ad-E-1003	包含層	—	9.6	—	
155	63Ad-E-1001	包含層	—	9.4	—	
156	89AB-E-1063	包含層	—	8.2	—	
157	89C-E-1028	包含層	20.6	—	—	
158	89C-E-1009	包含層	17.2	—	—	
159	89C-E-1043	包含層	—	—	—	
160	89C-E-1041	包含層	—	—	—	
161	89C-E-1046	包含層	—	15.4	—	
162	89C-E-1045	包含層	—	3.6	—	
163	89C-E-1047	包含層	12.2	—	—	
164	89C-E-1033	包含層	—	4.8	—	
165	89C-E-1004	包含層	—	3.4	—	
166	89C-E-1022	包含層	19.6	—	—	
167	89C-E-1031	包含層	19.2	—	—	
168	89C-E-1005	包含層	21.6	—	—	
169	89C-E-1030	包含層	—	5.6	—	
170	89C-E-1009	包含層	16.6	—	—	
171	89C-E-1022	包含層	20.6	—	—	
172	89C-E-1035	包含層	21.2	—	—	
173	89C-E-1047	包含層	18.2	—	—	
174	89C-E-1034	包含層	17.2	—	—	
175	89C-E-1027	包含層	18.6	—	—	
176	89C-E-1025	包含層	—	—	—	
177	89C-E-1036	包含層	—	8.8	—	
178	89C-E-1002	包含層	—	6.6	—	
179	89C-E-1049	包含層	—	5.8	—	
180	89C-E-1042	包含層	—	6.8	—	
181	89C-E-1006	包含層	8.6	7.6	4.8	
182	89C-E-1003	包含層	—	4.4	—	
183	89C-E-1010	包含層	18.6	—	—	
184	89C-E-1017	包含層	24.8	—	—	
185	89C-E-1018	包含層	24.8	—	—	

遺物番号	登録番号	遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
186	89C-E-1021	包含層	—	13.4	—	
187	89C-E-1007	包含層	23.8	—	—	
188	89C-E-1039	包含層	—	—	—	
189	89C-E-1001	包含層	25.2	14.2	23.6	
190	89C-E-1019	包含層	—	—	—	
191	89C-E-1036	包含層	17.0	—	—	
192	89C-E-1040	包含層	—	—	—	
193	89C-E-1024	包含層	—	—	—	
194	89C-E-1020	包含層	—	—	—	
195	89C-E-1044	包含層	—	14.2	—	
196	89C-E-1008	包含層	—	12.0	—	
197	89Ea-E-1086	包含層	17.6	—	—	
198	89Ea-E-1066	包含層	18.0	—	—	
199	89Ea-E-1124	包含層	—	—	—	
200	89Ea-E-1112	包含層	—	—	—	
201	89Da-E-1001	包含層	12.2	5.0	20.2	
202	89Ea-E-1032	包含層	13.6	—	—	
203	89Ea-E-1059	包含層	16.2	—	—	
204	89Ea-E-1058	包含層	14.4	—	—	
205	89Ea-E-1117	包含層	18.8	—	—	
206	89Ea-E-1068	包含層	16.8	—	—	
207	89Da-E-1010	包含層	18.9	—	—	
208	89Ea-E-1079	包含層	20.8	—	—	
209	89Ea-E-1064	包含層	16.2	—	—	
210	89Ea-E-1057	包含層	14.8	—	—	
211	89Ea-E-1140	包含層	21.2	—	—	
212	89Ea-E-1031	包含層	—	—	—	
213	89Ea-E-1061	包含層	—	6.8	—	
214	89Da-E-1008	包含層	—	—	—	
215	89Ea-E-1084	包含層	—	—	—	
216	89Ea-E-1056	包含層	—	—	—	
217	89Ea-E-1135	包含層	—	8.2	—	
218	89Ea-E-1080	包含層	14.2	—	—	
219	89Ea-E-1142	包含層	14.8	—	—	
220	89Ea-E-1089	包含層	14.0	—	—	
221	試掘TT6	包含層	18.0	—	—	
222	89Ea-E-1081	包含層	13.6	—	—	
223	89Ea-E-1046	包含層	17.2	—	—	
224	89Ea-E-1045	包含層	17.6	—	—	
225	89Ea-E-1038	包含層	11.2	—	—	
226	89Ea-E-1051	包含層	15.2	—	—	
227	89Ea-E-1042	包含層	17.4	—	—	
228	89Ea-E-1041	包含層	12.4	—	—	
229	89Ea-E-1047	包含層	15.4	—	—	
230	89Ea-E-1099	包含層	10.8	—	—	
231	89Ea-E-1116	包含層	14.8	—	—	
232	89Ea-E-1050	包含層	15.2	—	—	
233	89Ea-E-1044	包含層	14.4	—	—	
234	89Ea-E-1138	包含層	10.6	8.0	18.8	
235	89Da-E-1003	包含層	12.8	8.2	24.2	
236	89Ea-E-1088	包含層	14.8	—	—	
237	89Ea-E-1136	包含層	16.8	10.0	28.8	
238	89Da-E-1006	包含層	15.6	—	—	
239	89Ea-E-1077	包含層	11.8	—	—	
240	89Ea-E-1092	包含層	14.6	—	—	
241	89Ea-E-1058	包含層	12.0	—	—	
242	89Ea-E-1091	包含層	13.2	—	—	
243	89Ea-E-1090	包含層	13.4	—	—	
244	89Ea-E-1082	包含層	14.4	—	—	
245	89Ea-E-1034	包含層	12.8	—	—	
246	89Ea-E-1076	包含層	14.8	—	—	
247	89Ea-E-1033	包含層	14.2	—	—	
248	89Ea-E-1043	包含層	15.4	—	—	
249	89Ea-E-1049	包含層	15.2	—	—	
250	89Ea-E-1097	包含層	18.4	—	—	

遺物番号	登録番号	遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
251	89Ea-E-1094	包含層	15.6			
252	89Ea-E-1048	包含層	13.2			
253	89Ea-E-1101	包含層	11.8			
254	89Ea-E-1098	包含層	15.8			
255	89Ea-E-1100	包含層	18.6			
256	89Ea-E-1115	包含層	13.0			
257	89Ea-E-1093	包含層	16.4			
258	89Da-E-1007	包含層	13.6	—	—	
259	89Ea-E-1111	包含層	15.0	—	—	
260	89Ea-E-1083	包含層	16.0	—	—	
261	89Ea-E-1126	包含層	13.4	8.0	24.8	
262	89Ea-E-1052	包含層	12.6	—	—	
263	89Ea-E-1137	包含層	—	10.6	—	
264	89Ea-E-1029	包含層	—	8.0	—	
265	89Ea-E-1108	包含層	—	9.0	—	
266	89Ea-E-1119	包含層	23.2	—	—	
267	89Ea-E-1132	包含層	24.0	—	—	
268	89Ea-E-1025	包含層	16.8	11.8	11.8	
269	89Ea-E-1026	包含層	23.2	11.6	17.4	
270	89Ea-E-1139	包含層	27.6	—	—	
271	89Ea-E-1122	包含層	28.0	—	—	
272	89Ea-E-1110	包含層	25.6	—	—	
273	89Ea-E-1150	包含層	32.6	15.2	20.6	
274	89Ea-E-1120	包含層	17.2	17.8	12.6	
275	89Ea-E-1130	包含層	—	11.0	—	
276	試掘TT6	包含層	—	—	—	
277	89Ea-E-1121	包含層	—	13.6	—	
278	89Ea-E-1143	包含層	—	11.2	—	
279	89Ea-E-1028	包含層	—	8.6	—	
280	89Ea-E-1146	包含層	—	11.8	—	
281	89Ea-E-1069	包含層	11.2	11.8	8.4	
282	89Ea-E-1104	包含層	16.4	—	4.2	
283	89Ea-E-1148	包含層	9.2	—	—	
284	89Ea-E-1069	包含層	11.2	12.0	8.4	
285	89Ea-E-1103	包含層	—	12.0	—	
286	89Ea-E-1105	包含層	5.6	—	6.8	
287	89Ea-E-1106	包含層	10.2	—	6.4	
288	89Ea-E-1074	包含層	11.4	—	5.2	
289	89Ea-E-1067	包含層	12.0	—	7.2	
290	89Ea-E-1071	包含層	14.2	—	6.0	
291	89Ea-E-1070	包含層	16.2	—	5.6	
292	89Ea-E-1104	包含層	16.4	—	4.2	
293	89Ea-E-1053	包含層	16.6	—	5.4	
294	89Ea-E-1144	包含層	—	—	—	
295	89Db-E-1005	包含層	—	—	—	
296	89Db-E-1003	包含層	—	—	—	
297	89F-E-1005	包含層	18.2	—	—	
298	89Db-E-1004	包含層	—	15.0	—	

Ⅲ期 古墳時代後期

遺物番号	登録番号	遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
299	62B-M-1023	SZ1301	—	—	—	
300	62B-E-1021	SZ1301	—	5.2	—	
301	62B-E-1022	SZ1301	6.4	—	7.4	
302	62B-E-1020	SZ1301	8.8	—	—	
303	62B-E-1003	SZ1301	—	—	—	
304	62B-E-1005	SZ1301	—	—	—	
305	62B-E-1004	SZ1301	—	—	—	
306	62B-E-1006	SZ1301	—	—	—	
307	62B-E-1010	SZ1301	—	—	—	
308	62B-E-1009	SZ1301	—	—	—	
309	62B-E-1008	SZ1301	—	—	—	
310	62B-E-1007	SZ1301	—	—	—	
311	62B-E-1017	SZ1301	—	—	—	
312	62B-E-1018	SZ1301	11.0	8.4	12.0	
313	62B-E-1019	SZ1301	11.0	8.4	12.0	

遺物番号	登録番号	遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
314	62B-E-1012	SZ1301	—	—	—	
315	62B-E-1015	SZ1301	—	—	—	
316	62B-E-1013	SZ1301	—	—	—	
317	62B-E-1014	SZ1301	—	—	—	
318	62B-E-1017	SZ1301	—	—	—	
319	62B-E-1016	SZ1301	—	—	—	
320	89Ga-E-1002	SX1308	7.6	—	27.2	集石墓群出土
321	89Ga-E-1012	SZ1302	—	15.4	—	
322	89Ga-E-1008	SZ1302	—	11.8	—	
323	89Ga-E-1007	SZ1302	12.0	—	—	
324	89Ga-E-1009	SZ1302	—	12.0	—	
325	89Ga-E-1006	SZ1302	3.2	4.6	11.8	
326	89Ga-E-1005	SZ1302	11.6	9.2	7.8	
327	89Ga-E-1004	SZ1302	11.0	9.6	8.4	
328	89Ga-E-1010	SZ1302	—	8.4	—	
329	89Ga-E-1011	SZ1302	—	10.1	—	
330	89Ga-E-1013	SZ1302	—	9.6	—	
331	89Ga-E-1003	SZ1302	15.0	16.2	7.2	
332	89Ga-E-1001	SZ1302	11.0	21.1	4.0	
333	89Gb-E-1003	SZ1303	—	11.1	3.8	
334	89Gb-E-1012	SZ1303	—	13.8	3.8	
335	89Gb-E-1002	SZ1303	—	13.2	4.4	
336	89Gb-E-1011	SZ1303	—	13.6	3.6	
337	89Gb-E-1004	SZ1303	10.6	—	4.2	
338	89Gb-E-1005	SZ1303	10.4	—	4.2	
339	89Gb-E-1006	SZ1303	11.6	—	4.4	
340	89Gb-E-1001	SZ1303	—	—	—	
341	89Gb-E-1009	SZ1303	16.2	—	—	
342	89Gb-E-1010	SZ1303	18.6	—	—	
343	89Gb-E-1008	SZ1303	21.2	—	—	
344	89Gb-E-1007	SZ1303	25.2	—	39.2	
345	90B-E-1019	SZ1304	—	8.4	—	
346	90B-E-1018	SZ1304	11.4	6.0	17.2	
347	89Eb-E-1010	包含層	14.2	—	—	
348	89Eb-E-1009	包含層	13.8	—	—	
349	89Eb-E-1016	包含層	17.6	9.4	33.6	
350	89F-E-1015	包含層	—	10.8	4.2	
351	89F-E-1016	包含層	—	12.1	4.6	
352	89F-E-1014	包含層	—	12.6	3.8	
353	89F-E-1007	包含層	—	10.6	4.2	
354	89Eb-E-1011	包含層	—	10.8	4.6	
355	89Eb-E-1001	包含層	—	13.2	3.4	
356	89F-E-1008	包含層	—	14.4	—	
357	89Eb-E-1002	包含層	—	3.6	15.0	
358	89F-E-1012	包含層	—	11.8	5.6	
359	89Eb-E-1005	包含層	11.4	—	4.8	
360	89F-E-1013	包含層	13.0	—	3.8	
361	89Eb-E-1007	包含層	8.2	—	—	
362	89F-E-1017	包含層	—	—	—	
363	89Eb-E-1006	包含層	—	11.6	—	
364	89Eb-E-1004	包含層	—	14.2	—	
365	89Eb-E-1003	包含層	—	11.8	—	
366	89F-E-1019	包含層	—	—	—	
367	89F-E-1018	包含層	—	—	—	
368	89F-E-1011	包含層	30.6	—	—	
369	89F-E-1021	包含層	20.8	—	—	
370	89F-E-1020	包含層	18.6	—	—	
371	89F-E-1022	包含層	19.2	—	—	
372	89Eb-S-1001	包含層	—	—	—	
373	89F-S-1001	包含層	—	—	—	

Ⅳ期 古代

遺物番号	登録番号	遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
374	63Bc-E-1002	SD1401	11.6	3.2	6.2	
375	89F-E-1032	SK1401	—	13.0	—	
376	89F-E-1030	SK1401	—	14.3	—	
377	89F-E-1029	SK1401	—	17.2	—	
378	89F-E-1033	SK1401	7.6	9.2	11.8	
379	89F-E-1039	SK1401	13.0	8.9	2.4	
380	90B-E-1043	SX1501	15.0	7.2	5.8	
381	90B-E-1044	SX1501	16.6	6.6	6.4	
382	89F-E-1027	SD1501	11.6	6.2	2.2	
383	89F-E-1026	SD1501	12.4	6.4	3.9	
384	62B-E-1001	包含層	12.4	5.6	5.6	
385	62B-E-1002	包含層	13.2	6.4	4.2	
386	63B-E-1002	包含層	12.6	4.4	4.8	
387	63B-E-1001	包含層	12.8	6.2	4.6	
388	89F-E-1025	包含層	—	10.4	—	

Ⅴ期 中世

遺物番号	登録番号	遺構	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
389	89F-E-47	SE04	皿A1	7.6	4.5	1.5	
390	89F-E-72	SE04	皿A1	7.8	4.2	1.6	
391	89F-E-2	SE04	皿A1	7.9	4.6	2.4	
392	89F-E-3	SE04	皿A1	7.6	3.7	1.7	
393	89F-E-71	SE04	皿A1	7.5	4.5	1.5	
394	89F-E-4	SE04	皿A1	7.7	4.8	1.7	
395	89F-E-6	SE04	碗A1	12.4	—	—	
396	89F-E-5	SE04	碗A1	15.4	—	—	
397	89F-E-7	SE04	碗A1	15.0	—	—	
398	89F-E-10	SE04	碗A1	14.0	6.6	5.4	
399	89F-E-48	SE04	碗A1	15.1	7.6	5.5	
400	89F-E-8	SE04	碗A1	14.4	5.8	5.2	
401	89F-E-9	SE04	碗A1	13.8	7.0	5.9	片口
402	89F-E-1	SE04	土師質鍋	24.9	—	—	伊勢型鍋
403	90A-E-10	SD26	皿A2	7.5	5.1	8.5	
404	90A-E-9	SD26	皿A1	7.6	3.7	1.6	
405	90A-E-8	SD26	皿A1	8.0	4.5	1.5	
406	90A-E-1	SD26	碗A1	12.3	6.8	5.3	
407	90A-E-5	SD26	碗A1	13.2	6.2	5.4	
408	90A-E-4	SD26	碗	9.8	5.9	4.5	高い台がつく
409	90A-E-3	SD26	水注	7.9	—	—	
410	90A-E-6	SD26	壺	13.6	—	—	
411	90A-E-11	SD26	甕	36.6	—	—	常滑
412	90A-E-7	SD26	土師質鍋	28.1	—	—	伊勢型鍋
413	89F-E-14	SE03	碗A2	11.9	3.8	4.9	
414	89F-E-22	SE03	碗A2	13.1	4.4	5.8	
415	89F-E-24	SE03	碗A2	13.6	4.3	5.8	
416	89F-E-23	SE03	碗A2	13.9	4.6	6.0	
417	90A-E-4	SD25	皿A2	7.6	4.0	1.1	
418	90A-E-5	SD25	皿A1	8.4	4.2	1.9	
419	90A-E-3	SD25	縁釉皿	9.6	5.4	19.5	灰釉
420	90A-E-6	SD25	碗A2	12.0	4.0	4.2	
421	90A-E-1	SD25	碗A1	13.6	4.8	5.4	
422	90A-E-7	SD25	壺	13.6	—	—	
423	90A-E-2	SD25	甕	42.6	—	—	常滑
424	90A-E-6	SE06	皿A2	7.2	3.8	1.4	
425	90A-E-5	SE06	皿A2	8.8	3.8	1.8	
426	90A-E-2	SE06	碗A2	11.8	3.0	3.4	
427	90A-E-4	SE06	碗A2	11.8	3.8	3.7	
428	90A-E-1	SE06	碗A2	11.8	—	—	
429	90A-E-7	SE06	壺	19.6	—	—	

VI期 戦国

遺物番号	登録番号	遺構	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
430	62B-E-10	SX01	碗B1	11.8	—	—	
431	62B-E-11	SX01	碗B1	12.8	—	—	
432	62B-E-8	SX01	土師質皿B3	11.4	5.2	1.8	
433	62B-E-9	SX01	土師質皿B7	17.0	8.4	3.1	
434	62B-E-15	SX01	鉢D2	—	—	—	
435	63Bc-E-25	SX01	鉢D3	—	—	—	
436	62B-E-14	SX01	鉢A1	—	—	—	
437	62B-E-13	SX01	壺	12.9	—	—	信楽
438	62B-E-12	SX01	壺	—	8.6	—	
439	62B-E-16	SX01	皿	9.8	—	—	青花
440	62B-E-17	SX01	皿	8.7	4.9	1.9	青花
441	62B-E-18	SX01	皿	9.8	5.4	2.2	青花
442	63Bc-E-23	SX01	皿	10.2	5.6	1.9	青花
443	62B-E-22	SX01	皿	—	9.0	—	青花
444	62B-E-20	SX01	皿	13.8	9.0	3.0	青花
445	62B-E-21	SX01	碗	14.2	—	—	青花
446	62B-E-19	SX01	碗	14.0	—	—	青花
447	63Bc-E-24	SX01	大皿	21.2	—	—	青花
448	62B-E-23	SX01	大皿	28.5	17.1	4.2	青花
449	62B-E-25	SX01	碗?	19.4	—	—	朝鮮製
450	62B-E-24	SX01	碗	22.7	—	—	白磁
451	62B-E-27	SX01	蓋	16.8	—	—	青磁
452	62B-E-26	SX01	碗	14.0	—	—	青磁
453	62B-E-29	SX01	鉢	—	—	—	青磁
454	62B-E-28	SX01	鉢	—	—	—	青磁
455	63Aa-E-4	SD01	土師質皿A1	4.5	3.0	0.9	
456	63Aa-E-5	SD01	土師質皿	10.3	4.1	2.3	
457	63Aa-E-8	SD01	土師質皿	10.9	—	—	
458	63Aa-E-6	SD01	土師質皿B4	12.0	6.8	2.1	
459	63Aa-E-7	SD01	土師質皿B4	12.1	6.4	2.1	
460	63Aa-E-9	SD01	皿D	10.8	3.9	2.5	
461	63Aa-E-1	SD01	皿B	10.4	5.2	3.2	
462	63Aa-E-3	SD01	碗C1	11.3	—	—	
463	63Aa-E-2	SD01	碗B1	11.0	—	—	
464	63Ac-E-14	SD02	鍋C	13.4	—	—	
465	63Ac-E-13	SD02	鍋C	14.5	—	—	
466	63Ac-E-10	SD02	碗	—	4.9	—	青花
467	63Ac-E-27	SD02	皿D	9.9	4.5	2.2	
468	63Ac-E-11	SD02	鉢D4	31.0	10.1	11.6	
469	63Ac-E-12	SD02	鍋B	39.0	—	—	
470	62A-E-19	SD03	土師質皿A2	6.2	2.3	1.0	
471	62A-E-20	SD03	土師質皿A2	6.4	2.1	1.2	
472	62A-E-29	SD03	土師質皿A2	6.4	2.4	1.2	
473	62A-E-32	SD03	土師質皿A2	6.4	2.1	1.3	
474	62A-E-33	SD03	土師質皿A2	6.2	1.2	1.2	
475	62A-E-35	SD03	土師質皿A2	6.4	2.4	1.1	
476	62A-E-36	SD03	土師質皿A2	6.4	2.6	1.1	
477	62A-E-37	SD03	土師質皿A2	6.4	2.3	1.4	
478	62A-E-40	SD03	土師質皿A2	6.6	2.1	1.1	
479	62A-E-148	SD03	土師質皿A2	6.6	5.8	1.2	
480	62A-E-27	SD03	土師質皿B1	8.0	3.1	2.0	
481	62A-E-45	SD03	土師質皿B1	7.6	4.2	1.5	
482	62A-E-149	SD03	土師質皿B1	8.0	4.4	1.6	
483	62A-E-21	SD03	土師質皿B1	7.8	4.0	1.8	
484	62A-E-119	SD03	土師質皿B1	8.1	4.6	1.6	
485	62A-E-16	SD03	土師質皿B3	10.6	5.8	2.2	
486	62A-E-126	SD03	土師質皿B3	10.7	5.9	2.1	
487	62A-E-102	SD03	土師質皿B3	10.8	5.5	2.0	
488	62A-E-28	SD03	土師質皿B3	10.6	6.1	2.1	
489	62A-E-22	SD03	土師質皿B3	11.2	5.8	2.2	
490	62A-E-118	SD03	土師質皿B3	11.1	6.0	2.2	
491	62A-E-54	SD03	土師質皿B3	11.2	5.3	2.2	
492	62A-E-123	SD03	土師質皿B3	11.1	5.5	2.3	

遺物番号	登録番号	遺構	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
493	62A-E-130	SD03	土師質皿B3	11.3	6.4	2.0	
494	62A-E-113	SD03	土師質皿B3	11.2	4.8	2.0	
495	62A-E-121	SD03	土師質皿B3	12.1	6.6	2.3	
496	62A-E-124	SD03	土師質皿B3	11.6	6.5	2.3	
497	62A-E-48	SD03	土師質皿B3	12.3	5.6	2.8	
498	62A-E-49	SD03	土師質皿B3	11.8	5.4	2.5	
499	62A-E-25	SD03	土師質皿B3	11.0	5.6	2.6	
500	62A-E-112	SD03	土師質皿B3	11.6	5.0	2.0	
501	62A-E-51	SD03	土師質皿B3	11.4	5.8	1.9	
502	62A-E-17	SD03	土師質皿B4	12.4	5.7	2.6	
503	62A-E-46	SD03	土師質皿B4	12.4	6.5	2.5	
504	62A-E-147	SD03	土師質皿B4	12.3	5.2	2.6	
505	62A-E-13	SD03	土師質皿B4	12.4	3.3	2.3	
506	62A-E-8	SD03	土師質皿B4	12.4	6.8	2.7	
507	62A-E-55	SD03	土師質皿B4	12.2	6.6	2.7	
508	62A-E-50	SD03	土師質皿B4	12.4	5.8	2.4	
509	62A-E-158	SD03	土師質皿B5	14.6	6.8	3.0	
510	62A-E-43	SD03	土師質皿B5	14.0	7.5	2.8	
511	62A-E-42	SD03	土師質皿B5	14.6	7.9	2.7	
512	62A-E-24	SD03	土師質皿B5	14.4	6.5	2.8	
513	62A-E-108	SD03	土師質皿B5	14.1	7.5	2.6	
514	62A-E-44	SD03	土師質皿B6	15.5	7.8	3.2	
515	62A-E-41	SD03	土師質皿B6	15.5	7.5	3.5	
516	62A-E-99	SD03	土師質皿B5	14.8	8.2	2.5	
517	62A-E-105	SD03	土師質皿B5	14.3	9.2	2.2	
518	62A-E-157	SD03	土師質皿B5	13.9	6.3	2.5	
519	62A-E-98	SD03	土師質皿B5	14.4	6.9	2.5	
520	62A-E-96	SD03	土師質皿B5	14.0	6.4	2.4	
521	62A-E-146	SD03	土師質皿B5	14.0	7.4	2.9	
522	62A-E-52	SD03	土師質皿B7	16.9	8.2	3.0	
523	62A-E-57	SD03	土師質皿B7	16.6	8.0	3.5	
524	62A-E-150	SD03	碗B1	12.4	—	—	
525	63Bc-E-3	SD03	碗B1	11.8	—	—	
526	63Bc-E-11	SD03	碗B1	11.5	—	—	
527	63Bc-E-20	SD03	碗B1	11.9	—	—	
528	63Bc-E-12	SD03	碗B1	11.7	—	—	
529	63Bc-E-4	SD03	碗B1	10.8	4.4	6.3	
530	63Bc-E-21	SD03	碗B1	12.4	—	—	
531	62A-E-61	SD03	碗B1	11.8	4.3	5.4	
532	63Bc-E-19	SD03	碗B1	11.1	4.1	6.0	
533	63Bc-E-14	SD03	碗C3	13.8	7.0	3.5	
534	62A-E-154	SD03	碗C5	12.5	—	—	
535	62A-E-5	SD03	碗C2	13.5	—	—	
536	62A-E-153	SD03	碗C2	14.8	—	—	
537	63Bc-E-13	SD03	鉢C1	8.1	6.2	5.0	香炉
538	63Bc-E-5	SD03	壺E	4.2	4.4	7.0	茶入
539	63Bc-E-8	SD03	壺D	4.1	4.6	7.0	水注
540	63Bc-E-9	SD03	壺D	4.8	4.5	6.9	水注
541	62A-E-56	SD03	壺B	9.4	9.6	19.3	
542	63Bc-E-7	SD03	壺B	10.5	9.2	17.7	
543	63Bc-E-15	SD03	碗	13.4	4.4	7.0	青磁
544	62A-E-156	SD03	鉢	—	—	—	青磁
545	62A-E-2	SD03	鉢A2	31.0	13.0	11.7	
546	63Bc-E-17	SD03	鉢A2	39.4	—	—	
547	62A-E-9	SD03	鉢A3	—	11.0	—	
548	62A-E-152	SD03	鉢D2	—	—	—	
549	62A-E-155	SD03	鉢D3	—	—	—	
550	62A-E-90	SD03	鉢D3	31.1	—	—	
551	62A-E-3	SD03	鍋A	21.2	—	—	
552	63Bc-E-6	SD03	鍋C	11.2	5.3	16.0	
553	63Bc-E-1	SD03	鈴	—	—	2.5	
554	63Bc-E-2	SD03	鈴	—	—	4.6	
555	62A-E-6	SD03	鈴	—	—	4.5	
556	62A-E-144	SD04	土師質皿B4	12.8	6.8	2.4	
557	62A-E-145	SD04	壺	—	16.0	—	青磁

遺物番号	登録番号	遺構	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
558	62A-E-137	SD05	土師質皿A2	6.6	5.4	1.1	
559	62A-E-138	SD05	土師質皿B1	8.4	4.4	1.9	
560	62A-E-139	SD05	土師質皿B5	14.4	7.1	2.9	
561	62A-E-12	SD05	土師質皿B5	14.2	6.4	2.9	
562	62A-E-141	SD05	鉢A3	36.0	—	—	
563	62A-E-58	SD05	鉢C2	10.0	5.8	5.0	
564	62A-E-60	SD05	壺D	—	4.6	—	
565	62A-E-140	SD05	皿C3	—	6.2	—	灰釉
566	62A-E-142	SD05	碗	13.0	—	—	青花
567	62A-E-143	SD05	碗	—	—	—	青花
568	62A-E-59	SK03	鉢C3	5.4	4.0	3.6	
569	62A-E-67	SK03	土師質皿A2	6.9	1.1	1.7	
570	62A-E-87	SK03	土師質皿A2	7.6	3.5	1.5	
571	62A-E-78	SK03	土師質皿A2	7.8	4.5	1.4	
572	62A-E-89	SK03	土師質皿A2	7.6	4.0	1.5	
573	62A-E-84	SK03	土師質皿A2	8.2	4.9	1.5	
574	62A-E-86	SK03	土師質皿B3	10.6	5.0	2.3	
575	62A-E-76	SK03	土師質皿B3	10.6	4.0	2.15	
576	62A-E-64	SK03	土師質皿B3	10.9	5.0	2.2	
577	62A-E-66	SK03	土師質皿B3	11.0	5.4	2.3	
578	62A-E-63	SK03	土師質皿B3	11.7	5.1	2.2	
579	62A-E-79	SK03	土師質皿B3	11.0	5.5	2.2	
580	62A-E-80	SK03	土師質皿B3	11.4	5.0	2.2	
581	62A-E-68	SK03	土師質皿B4	13.1	6.6	2.8	
582	62A-E-74	SK03	土師質皿B4	13.4	6.5	2.5	
583	62A-E-65	SK03	土師質皿B5	14.6	4.2	3.0	
584	62A-E-81	SK03	土師質皿B6	15.8	7.6	3.0	
585	62A-E-82	SK03	土師質皿B7	17.0	9.1	3.0	
586	62A-E-77	SK03	土師質皿B8	21.8	11.6	3.0	
587	89AB-E-47	SD06	土師質皿B1	7.8	3.6	1.5	
588	89AB-E-46	SD06	土師質皿B2	9.0	4.4	1.6	
589	89AB-E-48	SD06	土師質皿B3	11.8	4.4	2.3	
590	89AB-E-1	SD06	土師質皿B3	11.0	6.0	2.1	
591	89AB-E-45	SD06	土師質皿B5	13.6	6.6	2.1	
592	89AB-E-16	SD06	土師質皿B5	14.0	6.7	3.0	
593	89AB-E-44	SD06	土師質皿B6	16.0	8.0	2.9	
594	89AB-E-56	SD06	土師質皿A2	7.6	3.1	1.5	
595	89AB-E-55	SD06	土師質皿B1	7.6	5.0	1.9	
596	89AB-E-54	SD06	土師質皿B2	9.0	5.0	1.6	
597	89AB-E-53	SD06	土師質皿B3	11.2	4.6	2.3	
598	89AB-E-50	SD06	土師質皿B4	12.3	6.8	2.1	
599	89AB-E-15	SD06	土師質皿B4	12.6	6.4	2.8	
600	89AB-E-52	SD06	土師質皿B6	15.4	8.0	2.7	
601	89AB-E-9	SD06	土師質皿B1	8.0	3.8	1.8	
602	89AB-E-10	SD06	土師質皿B1	7.8	4.2	1.9	
603	89AB-E-13	SD06	土師質皿B3	11.0	6.8	1.8	
604	89AB-E-63	SD06	土師質皿B3	11.2	5.8	2.1	
605	89AB-E-66	SD06	土師質皿B5	13.8	5.6	2.9	
606	89AB-E-65	SD06	土師質皿B5	13.8	7.3	3.0	
607	89AB-E-49	SD06	土師質皿B6	15.2	7.6	3.0	
608	89AB-E-43	SD06	土師質皿B4	13.0	7.0	2.7	
609	89AB-E-42	SD06	土師質皿B6	15.2	7.4	2.8	
610	89AB-E-41	SD06	土師質皿B6	15.3	8.2	2.8	
611	89AB-E-7	SD06	土師質皿A2	6.0	2.9	1.3	
612	89AB-E-8	SD06	土師質皿B1	7.6	3.8	1.8	
613	89AB-E-12	SD06	土師質皿B1	8.2	4.0	1.8	
614	89AB-E-71	SD06	土師質皿B2	9.5	3.6	2.4	
615	89AB-E-37	SD06	土師質皿B3	10.8	6.0	1.9	
616	89AB-E-28	SD06	土師質皿B3	10.8	5.0	2.3	
617	89AB-E-70	SD06	土師質皿B6	15.2	7.3	2.9	
618	89AB-E-31	SD06	土師質皿B6	15.1	8.2	2.8	
619	89AB-E-79	SD06	碗B1	11.2	—	—	
620	89AB-E-75	SD06	碗B1	12.8	—	—	
621	89AB-E-84	SD06	碗B1	12.7	—	—	
622	89AB-E-4	SD06	碗B3	—	4.4	—	

遺物番号	登録番号	遺構	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
623	89AB-E-76	SD06	碗C1	16.8	—	—	
624	89AB-E-77	SD06	皿B	12.2	—	—	
625	89AB-E-99	SD06	皿B	12.7	5.4	2.8	
626	89AB-E-85	SD06	碗C2	14.9	—	—	
627	89AB-E-82	SD06	皿	12.1	—	—	青磁
628	89AB-E-78	SD06	碗	20.6	—	—	青磁
629	89AB-E-23	SD06	鉢A3	27.4	11.8	8.9	
630	89AB-E-73	SD06	鉢D2	29.0	—	—	
631	89AB-E-74	SD06	鉢D3	29.8	9.8	12.0	
632	89AB-E-87	SD06	鉢D4	26.8	—	—	
633	89AB-E-88	SD06	鈴	—	—	4.3	
634	89AB-E-80	SD06	?	—	—	—	
635	89AB-E-93	SD07	土師質皿B1	7.3	4.2	1.7	
636	89AB-E-92	SD07	土師質皿B2	9.8	3.6	2.8	
637	89AB-E-90	SD07	皿D	9.9	4.6	2.5	
638	89AB-E-94	SD07	皿C3	10.2	3.6	1.9	
639	89AB-E-97	SD07	碗	16.0	—	—	青磁
640	89AB-E-101	SD19	碗B1	11.8	—	—	
641	89AB-E-102	SD19	碗B1	12.1	—	—	
642	89AB-E-104	SD19	碗C4	16.0	3.0	5.3	
643	89AB-E-107	SD19	鉢D2	22.4	—	—	
644	89AB-E-106	SD19	鉢D3	26.6	—	—	
645	89AB-E-103	SD19	壺4	12.8	—	—	
646	89AB-E-72	SD15	鍋A	24.5	4.3	13.9	
647	89AB-E-24	SD15	鉢D1	20.4	10.2	11.8	
648	89AB-E-25	SD15	鉢	13.8	14.4	7.5	瓦質、火鉢か
649	89AB-E-26	SD15	鉢	28.3	31.8	17.0	瓦質、火鉢
650	89C-E-14	SD08	土師質皿A2	6.2	4.6	0.9	
651	89C-E-12	SD08	土師質皿A2	5.4	—	1.2	
652	89C-E-4	SD08	土師質皿A2	6.2	—	1.2	
653	89C-E-13	SD08	土師質皿A2	5.8	5.0	1.0	
654	89C-E-8	SD08	土師質皿B2	9.0	3.6	2.0	
655	89C-E-26	SD08	碗B1	12.0	—	—	
656	89C-E-25	SD08	碗B1	12.0	—	—	
657	89C-E-24	SD08	碗B1	11.4	4.4	—	
658	89C-E-23	SD08	碗B1	12.6	—	—	
659	89C-E-29	SD08	碗B1	—	4.8	—	
660	89C-E-27	SD08	碗B2	—	4.8	—	
661	89C-E-28	SD08	碗B2	—	4.4	—	
662	89C-E-30	SD08	碗D1	—	5.4	—	
663	89C-E-16	SD08	皿D	10.1	4.1	—	
664	89C-E-1	SD08	皿D	10.2	4.8	2.7	
665	89C-E-17	SD08	皿D	9.9	5.1	2.5	
666	89C-E-18	SD08	皿C1	10.6	5.8	2.5	
667	89C-E-22	SD08	皿C4	12.1	5.5	2.5	
668	89C-E-20	SD08	皿C2	—	5.9	—	
669	89C-E-21	SD08	皿C2	—	9.1	—	
670	89C-E-36	SD08	壺A	—	15.2	—	
671	89C-E-6	SD08	皿	21.6	—	—	白磁
672	89C-E-5	SD08	皿	—	7.8	—	白磁
673	89C-E-2	SD08	壺C	16.6	—	—	
674	89C-E-34	SD08	鉢D2	27.4	—	—	
675	89C-E-35	SD08	鉢D	—	8.8	—	
676	89C-E-10	SD08	碗	—	5.4	—	青花
677	89C-E-9	SD08	皿	—	2.8	—	青花
678	89C-E-32	SD08	瓶	—	14.0	—	
679	89Ea-E-4	SD09	皿C1	—	5.1	—	灰釉
680	89Ea-E-1	SD09	碗	—	4.8	—	青磁
681	89Ea-E-5	SD09	瓶	—	10.4	—	
682	89F-E-63	SD10	碗B1	12.4	—	—	
683	89F-E-16	SD10	碗B1	12.0	3.9	6.7	
684	89F-E-61	SD10	皿B	8.8	—	—	
685	89F-E-36	SD10	皿C3	—	6.5	—	
686	89F-E-62	SD10	壺E	4.8	—	—	
687	89F-E-35	SD10	碗D2	—	4.4	—	

遺物番号	登録番号	遺構	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
688	89F-E-15	SD10	甕	47.4	—	—	常滑
689	89F-E-64	SD10	鉢D3	32.4	—	—	
690	89F-E-54	SD20	土師質皿A2	6.2	5.4	1.1	
691	89Eb-E-2	SD20	碗B1	11.4	—	—	
692	89F-E-70	SD20	土師質皿B5	14.0	4.8	—	
693	T.T.1	SD20	鍋A				
694	89F-E-28	SD21	碗B3	12.4	—	—	
695	89F-E-66	SD21	碗B3	—	4.0	—	
696	89F-E-27	SD21	碗B3	11.8	3.9	—	
697	89F-E-65	SD21	皿D	9.4	2.0	—	
698	89F-E-32	SD21	皿D	10.5	3.2	—	
699	89F-E-26	SD21	土師質皿A2	7.6	—	—	
700	89F-E-30	SD21	壺C	13.0	—	—	
701	89F-E-29	SD21	鉢B	19.2	—	—	
702	89F-E-46	SD21	鉢D2	28.8	6.5	13.2	
703	89F-E-33	SD21	甕	37.0	—	—	常滑
704	89Gb-E-1	SD23	碗B1	11.0	3.8	6.9	
705	90B-E-1	SD29	碗B1	11.8	—	—	

木製品

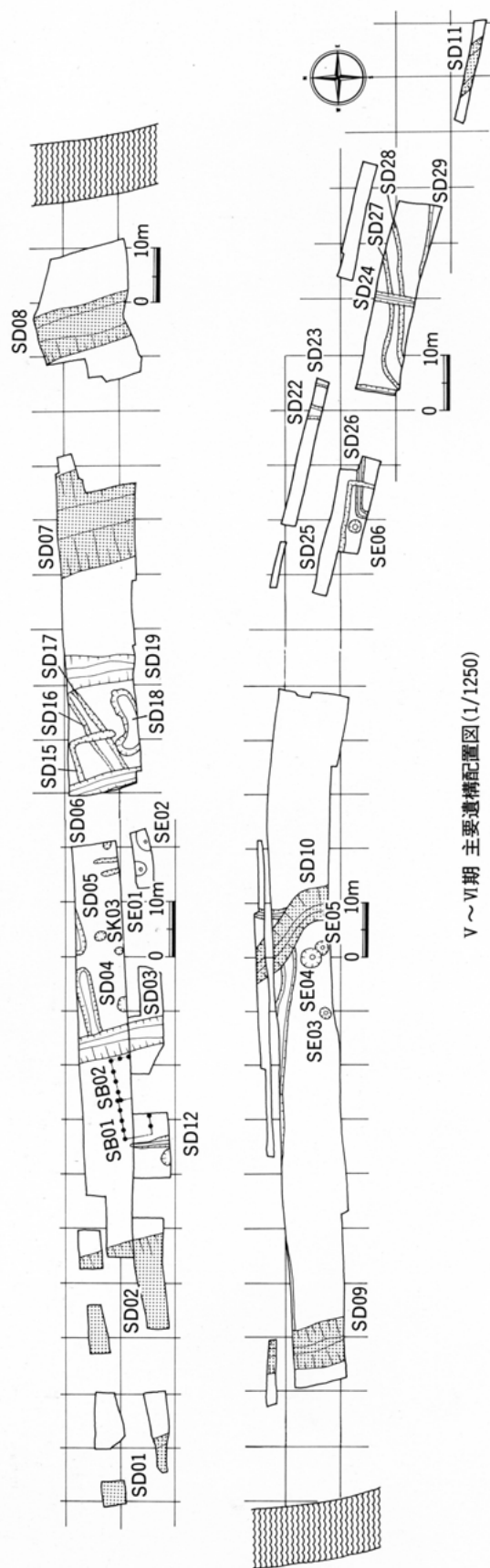
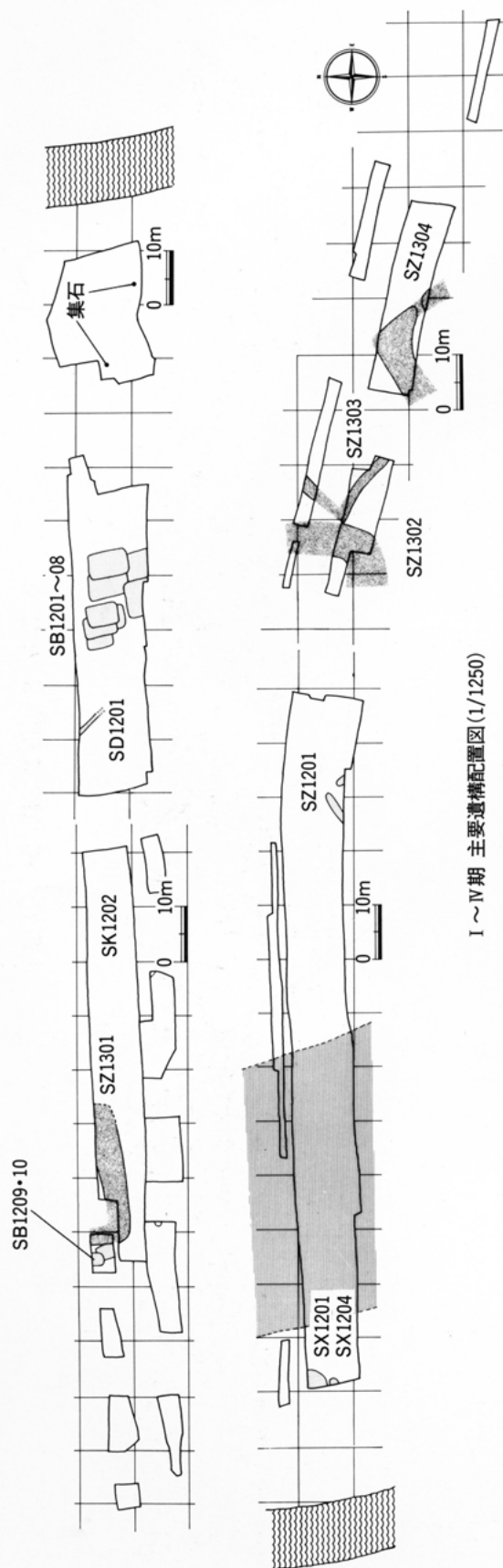
遺物番号	登録番号	遺構	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
706	63Aa-W-1	SD01	地藏菩薩像	6.8	2.1	0.9	
707	63Aa-W-2	SD01	碗	14.6	8.2	10.0	
708	62A-W-22	SD03	人形	4.6	1.6	1.0	
709	63Bc-W-1	SD03	人形	7.4	1.4	0.2	
710	62A-W-24	SD03	人形	7.0	2.0	0.35	
711	62A-W-23	SD03	人形	6.3	1.5	1.3	
712	62B-W-1	SD03	人形	21.6	1.5	1.5	
713	63Bc-W-2	SD03	獅子頭	4.8	3.8	2.0	
714	63Bc-W-3	SD03	獅子頭	5.5	4.4	0.8	
715	62A-W-29	SD03	?	3.8	1.9	1.4	
716	62A-W-25	SD03	呪符木簡	6.2	2.3	1.0	
717	63Bc-W-4	SD03	呪簡木簡	22.2	2.4	1.0	
718	62A-W-26	SD03	呪符木簡	20.3	2.2	0.3	
719	63Bc-W-6	SD03	へら	11.2	2.8	0.3	
720	63Bc-W-5	SD03	へら	9.7	2.4	0.25	
721	62A-W-27	SD03	へら	10.3	3.0	0.3	
722	62A-W-28	SD03	へら	15.8	3.2	0.3	
723	62A-W-32	SD03	刀形	—	2.2	1.55	
724	63Bc-W-9	SD03	へら	17.1	1.9	0.5	
725	63Bc-W-8	SD03	へら	13.0	0.9	0.5	
726	63Bc-W-10	SD03	へら	16.0	4.4	1.8	
727	63Bc-W-7	SD03	へら	16.1	2.2	0.3	
728	63Bc-W-15	SD03	へら	11.3	1.25	0.3	
729	63Bc-W-12	SD03	へら	20.3	1.1	0.5	
730	63Bc-W-14	SD03	へら	12.8	0.7	0.2	
731	63Bc-W-13	SD03	へら	16.3	1.4	0.5	
732	63Bc-W-11	SD03	へら	19.0	1.5	0.4	
733	63Bc-W-16	SD03	?	16.2	2.5	1.0	
734	62A-W-30	SD03	?	8.6	2.2	1.0	
735	63Bc-W-32	SD03	鳥籠?	10.9	0.65	0.3	
736	63Bc-W-31	SD03	鳥籠?	9.2	0.65	0.35	
737	63Bc-W-33	SD03	鳥籠?	8.6	0.9	0.3	
738	63Bc-W-34	SD03	鳥籠?	17.6	0.8	0.4	
739	63Bc-W-35	SD03	鳥籠?	20.5	2.3	0.5	
740	63Bc-W-17	SD03	?	8.6	2.7	0.9	
741	63Bc-W-18	SD03	?	15.5	1.9	1.7	
742	62A-W-46	SD03	栓	3.2	3.4	2.1	
743	62B-W-4	SD03	下駄	20.8	8.6	3.9	露卯下駄
744	62A-W-50	SD03	下駄	21.0	8.2	3.3	露卯下駄
745	62A-W-37	SD03	碗	—	—	—	鶴亀文
746	63Bc-W-20	SD03	碗	7.5	4.0	2.5	
747	62A-W-36	SD03	碗	8.5	5.0	2.7	
748	63Bc-W-21	SD03	碗	8.8	5.5	2.9	
749	63Bc-W-22	SD03	?	7.7	7.2	1.8	黒漆塗り

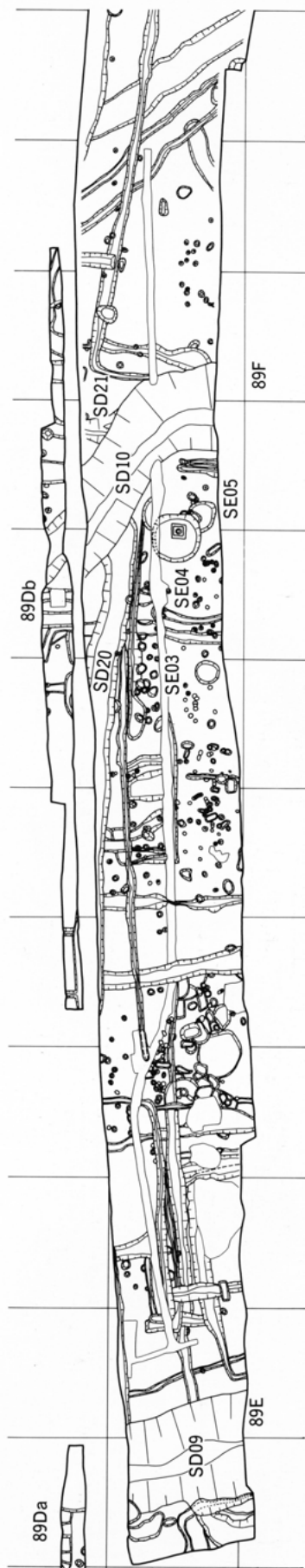
遺物番号	登録番号	遺構	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
750	62A-W-33	SD03	しゃもじ	18.0	6.5	0.3	
751	62A-W-34	SD03	箸	24.8	0.6	0.45	
752	62A-W-35	SD03	箸	17.7	0.5	0.5	
753	62A-W-49	SD03	櫛	7.8	1.7	1.2	
754	62A-W-41	SD03	茶筌	7.8	3.5	1.3	
755	62A-W-2	SD03	茶筌	7.3	3.7	1.5	
756	62A-W-43	SD03	柄杓	34.7	1.0	7.2	
757	62A-W-40	SD03	折敷	35.4	11.2	0.3	
758	62A-W-39	SD03	折敷	7.4	7.4	0.6	
759	63Bc-W-25	SD03	折敷	6.5	6.5	0.5	
760	62A-W-31	SD03	折敷	12.3	12.0	2.15	
761	62A-W-42	SD03	曲物底板	4.5	2.1	0.6	
762	63Bc-W-26	SD03	曲物底板	4.2	3.0	0.4	
763	63Bc-W-27	SD03	折敷	6.6	4.1	0.5	
764	62A-W-38	SD03	折敷	3.6	10.5	0.15	
765	62A-W-44	SD03	底杯	10.0	3.6	0.5	
766	63Bc-W-28	SD03	底杯	10.7	6.6	0.45	
767	62A-W-45	SD03	底板	13.6	6.8	0.8	
768	63Bc-W-29	SD03	底板	20.4	5.3	0.2	
769	63Bc-W-30	SD03	桶側板	26.5	10.5	1.2	
770	62A-W-48	SD03	桶側板	15.0	10.3	1.9	
771	62A-W-16	SD04	鳥形	11.0	3.8	0.2	
772	62A-W-15	SD04	人形	12.2	1.0	1.4	
773	62A-W-17	SD04	へら	18.6	2.4	0.3	
774	62A-W-18	SD04	へら	16.5	2.6	0.2	
775	62A-W-20	SD04	柄	10.4	3.1	2.4	
776	62A-W-19	SD04	曲物	5.5	3.1	4.5	
777	62A-W-21	SD04	下駄	20.7	11.1	6.8	
778	62A-W-11	SD05	箸	29.0	0.8	0.6	
779	62A-W-12	SD05	箸	29.0	0.8	0.6	
780	62A-W-14	SD05	曲物	6.0	2.8	4.8	
781	62A-W-9	SD05	羽子板	37.5	3.0	0.8	
782	62A-W-10	SD05	?	8.4	1.5	0.2	
783	62A-W-6	SD05	折敷	4.85	10.7	0.1	
784	62A-W-7	SD05	折敷	11.5	12.0	0.2	
785	62A-W-8	SD05	絵馬	22.5	18.5	0.2	
786	62A-W-1	SD05	?	10.5	—	—	10.5cm角折敷を利用
787	62A-W-3	SD05	?	21.7	—	—	21.7cm角折敷を利用
788	62A-W-4	SD05	?	21.2	—	—	1.2cm角折敷を利用
789	62A-W-2	SD05	?	21.2	—	—	21.2cm角折敷を利用
790	62A-W-5	SD05	?	21.8	—	—	21.8cm角折敷を利用
791	63Bd-W-36	SE02	楔	10.5	4.0	1.7	
792	63Bd-W-37	SE02	楔	10.2	3.5	2.0	
793	63Bd-W-38	SE02	底板	25.8	12.5	0.5	
794	89A・B-W-2	SD06	漆碗	—	—	—	
795	89A・B-W-3	SD06	漆碗	—	—	—	
796	89A・B-W-7	SD06	下駄	21.1	8.6	3.2	
797	89A・B-W-8	SD06	下駄	20.0	9.0	3.0	歯1枚残存
798	89A・B-W-6	SD06	桶側板	9.6	6.5	0.8	
799	89A・B-W-5	SD06	折敷	21.4	7.6	0.3	
800	89A・B-W-4	SD06	曲物	4.1	3.4	4.7	
801	89A・B-W-1	SD06	刀形	20.5	2.0	0.6	
802	89C-W-1	SD08	漆皿	—	4.8	—	
803	89AB-W-11	SD18	?	5.3	1.3	0.1	
804	89AB-W-12	SD18	?	5.1	1.3	0.1	
805	89AB-W-9	SD18	人形	12.7	3.1	0.7	
806	89AB-W-10	SD18	?	12.1	1.4	0.1	
807	89AB-W-13	SD18	下駄	17.0	9.5	3.7	

石製品

遺物番号	登録番号	遺構	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
808	89Ea-S-1	SD09	砥石	4.8	4.7	2.0	
809	89C-S-1	SD08	砥石	4.0	4.8	1.2	
810	63Bb-S-1	SD12	茶臼	19.2	18.6	10.7	直径18.6cm
811	89F-S-1	SD10	挽臼	32.0	32.0	6.4	直径32cm
812	89F-S-2	SD10	五輪塔	23.0	22.7	12.8	

版 圖





上面(V·VI期)主要部遺構配置図(1/500)

1 縄文晩期の遺構全景
(西から)



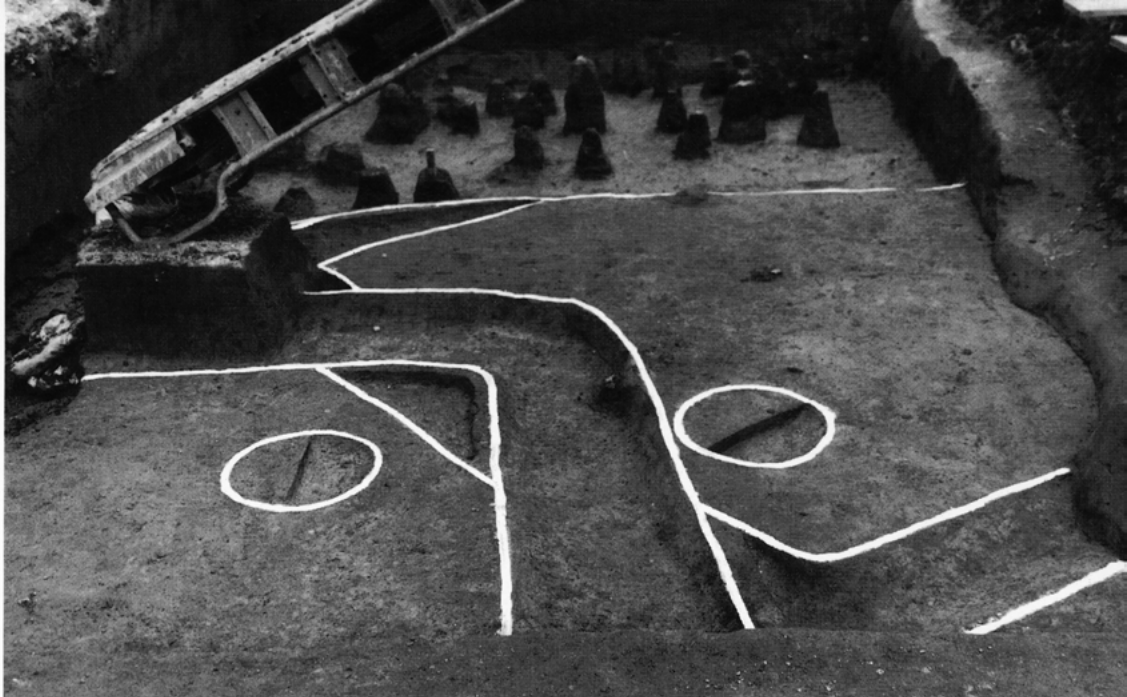
2 弥生中期の遺構全景
(東から)



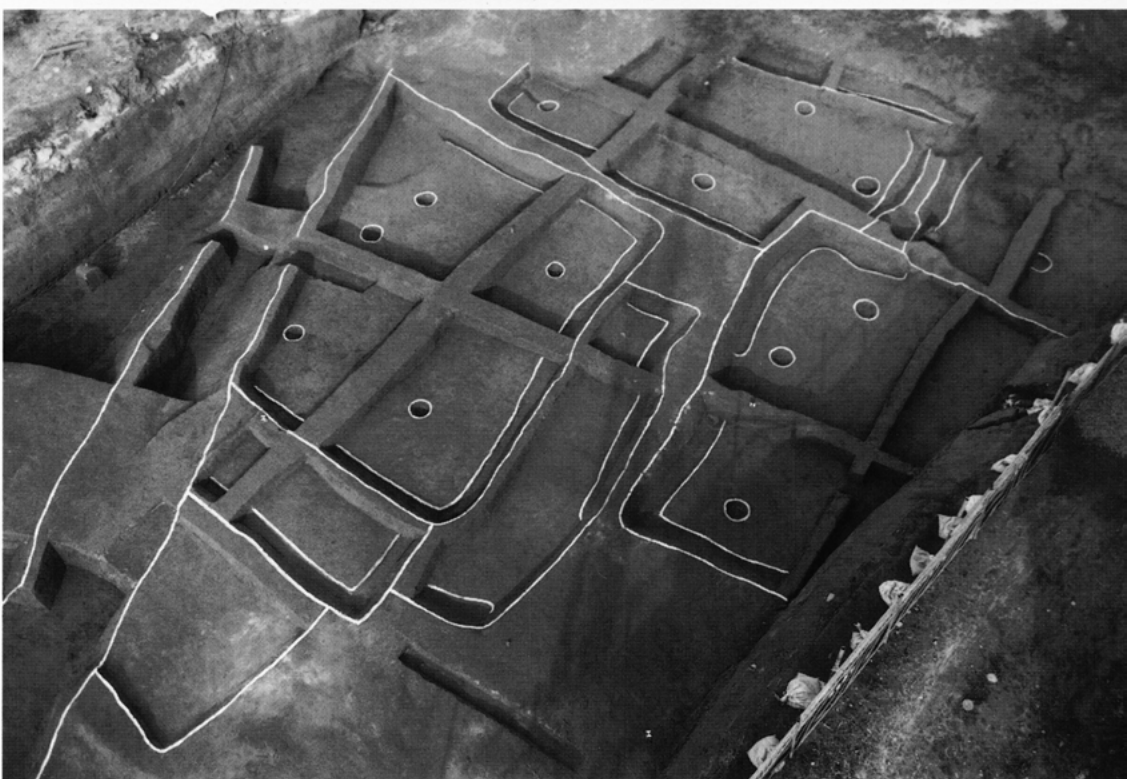
3 SB1101・1102
(東から)



1 SB1209・1210
(西から)



2 SB1201～1208全景
(南西から)



3 SB1204遺物出土状況
(南から)



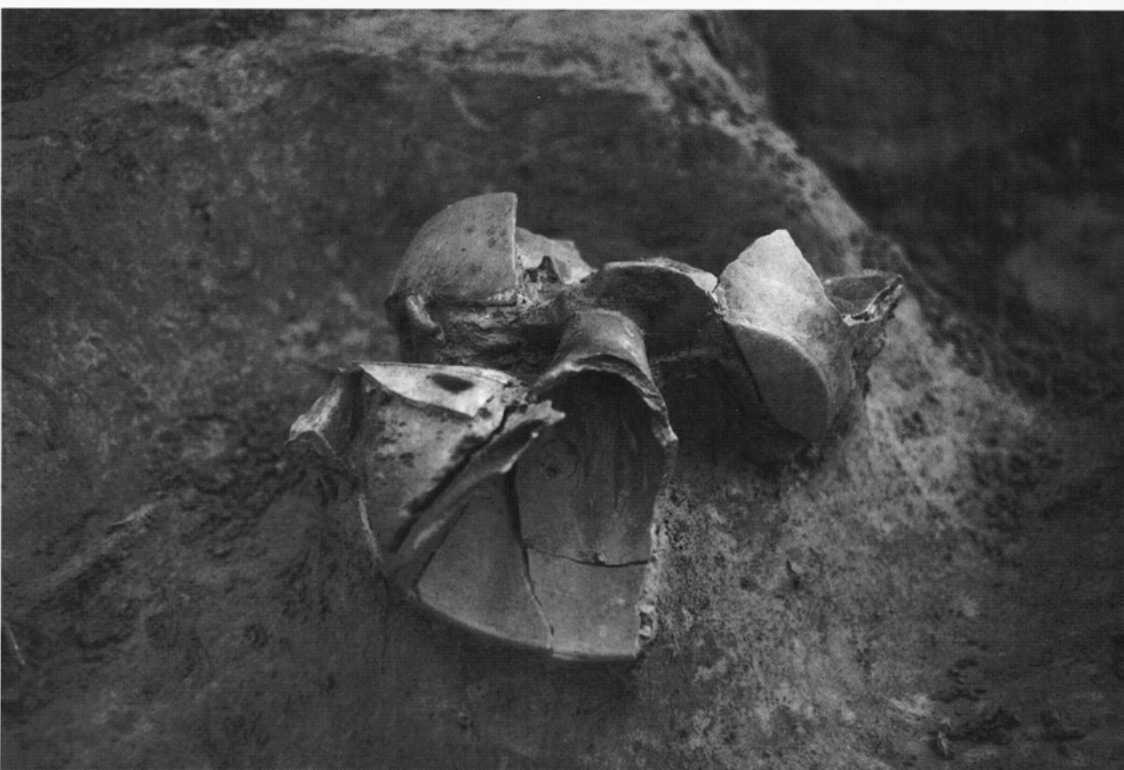
1 89C区集石遺構
(南から)



2 SZ1201
(北から)



9 SZ1201遺物出土状況
(西から)



1 SX1201・SK1204全景
(西から)



2 SX1201遺物出土状態
(南から)



3 SX1201遺物出土状態
(南から)



1 SX1201遺物出土状態
(西から)



2 SK1204 S字甕出土状態
(西から)



3 S字甕出土状況
(南から)



1 SZ1301
(西から)



2 SZ1301埴輪出土状況
(南から)



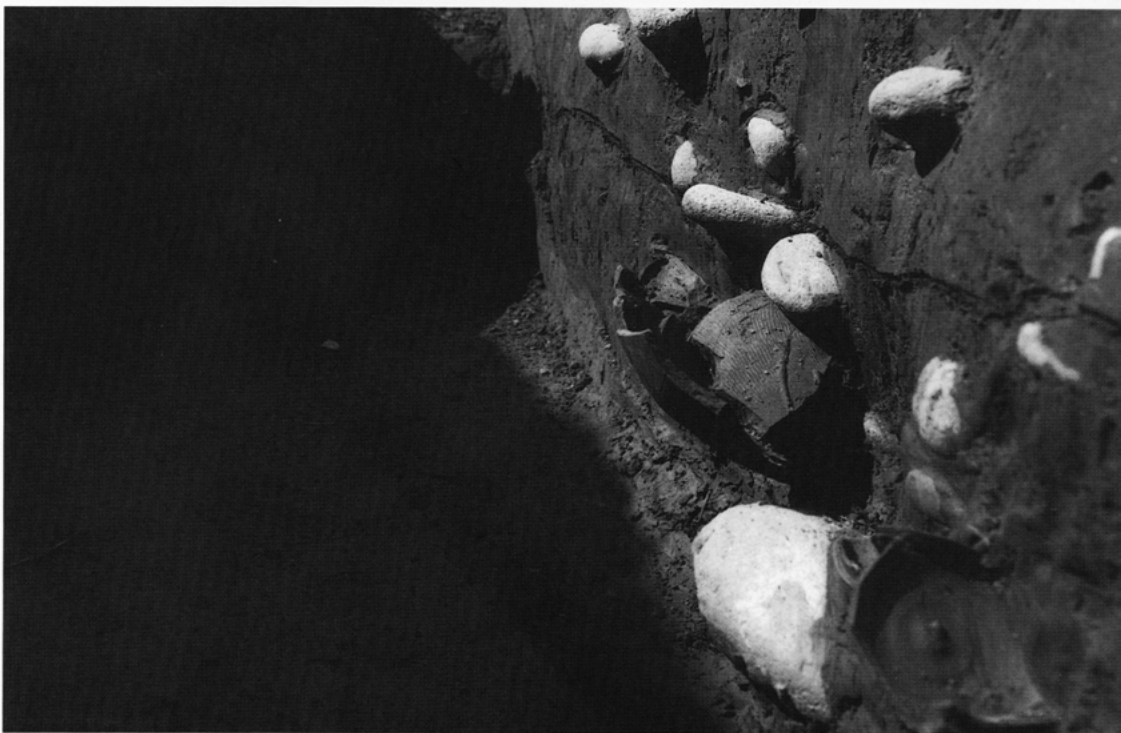
3 SZ1301金環出土状況
(西から)



1 SZ1302
(西から)



2 SZ1302遺物出土状況
(東から)



3 SZ1302遺物出針状況
(西から)



1 SZ1303
(南から)



2 SZ1303遺物出土状況
(北から)



3 SZ1304
(西から)

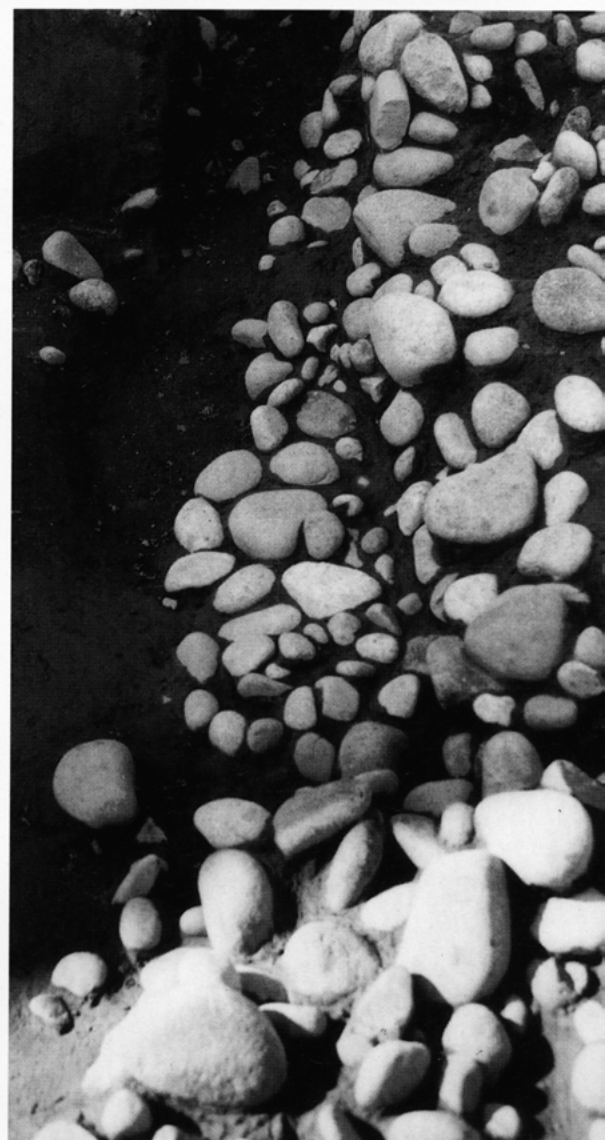




1 集石墓群全景
(西から)

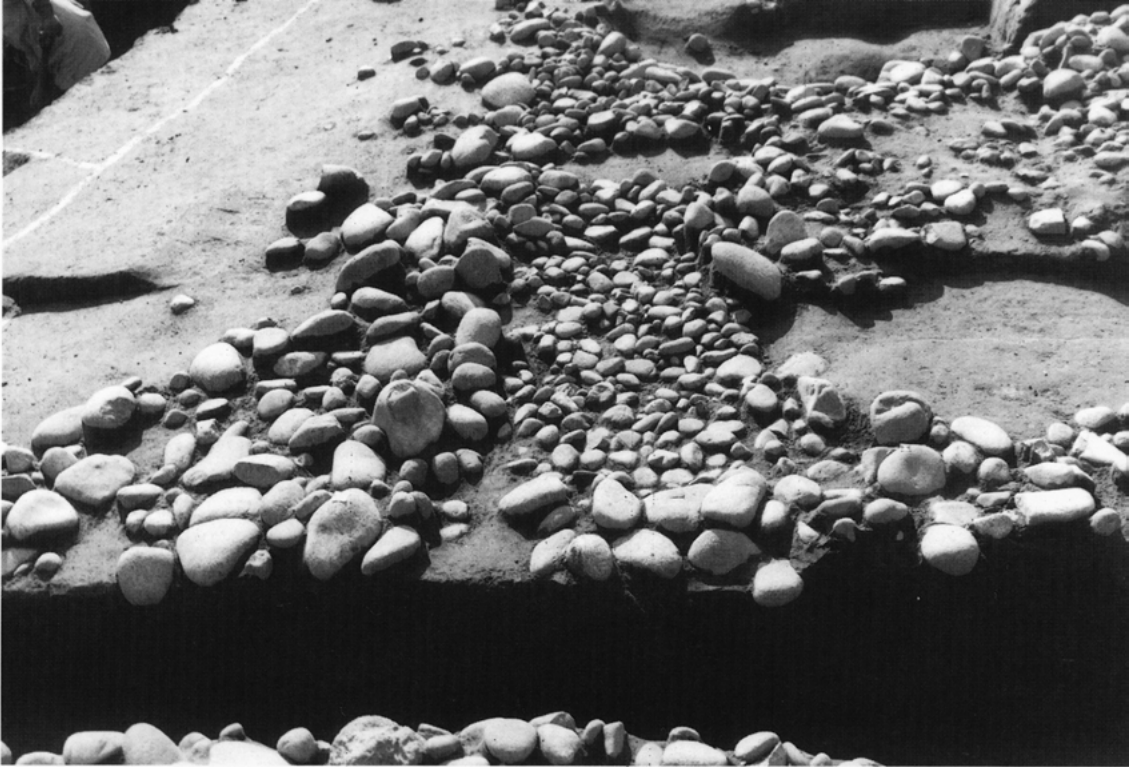


2 左 SX1302
(東から)



3 右 SX1305
(東から)

1 SX1304
(北から)



2 SX1304
(西から)



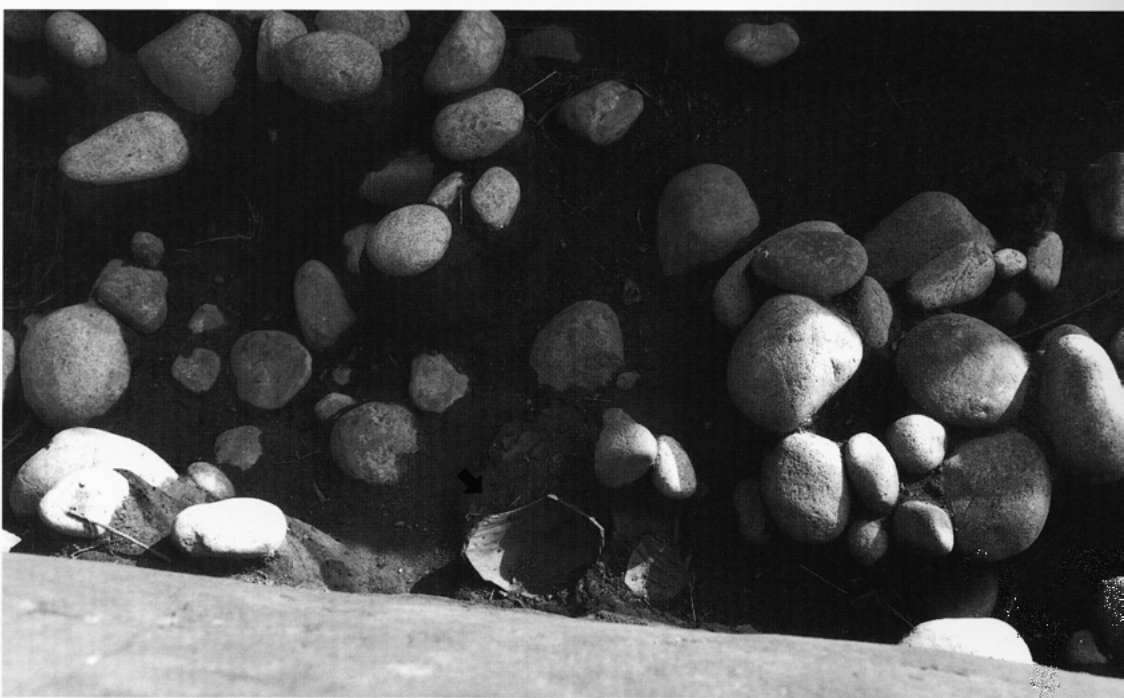
3 SX1303
(北から)



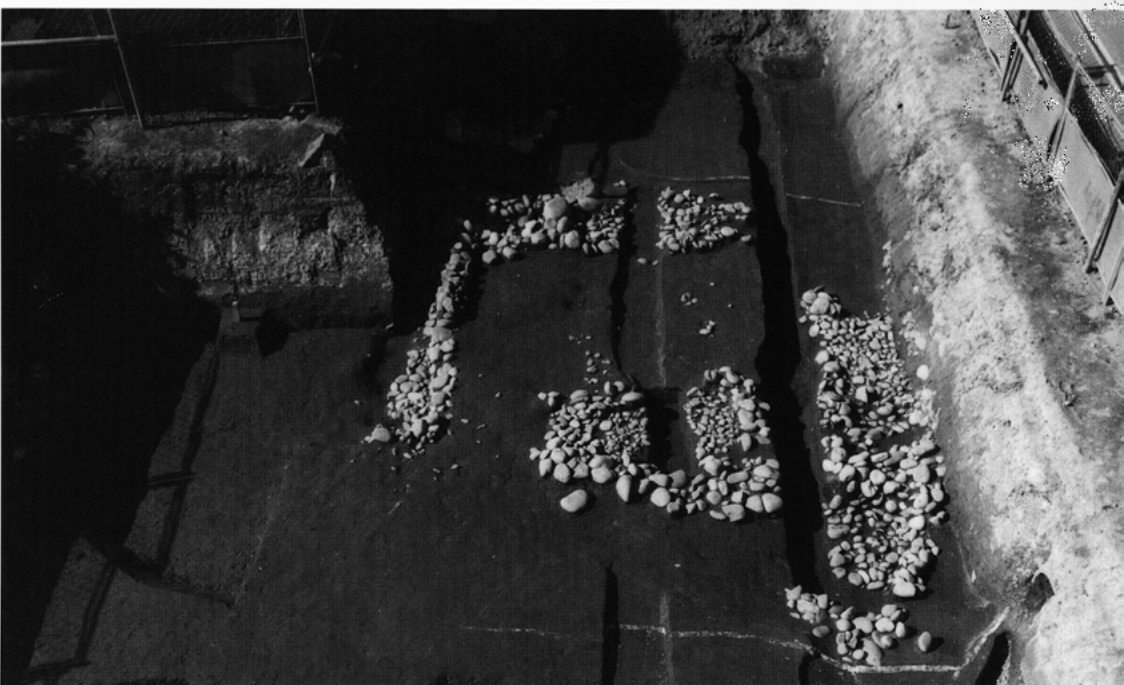
1 SX1308
(西から)



2 SX1308遺物出土状態
(北から)



3 集石墓群完掘状態
(東から)



1 SX1501全景
(東から)



2 SX1501断面図
(東から)



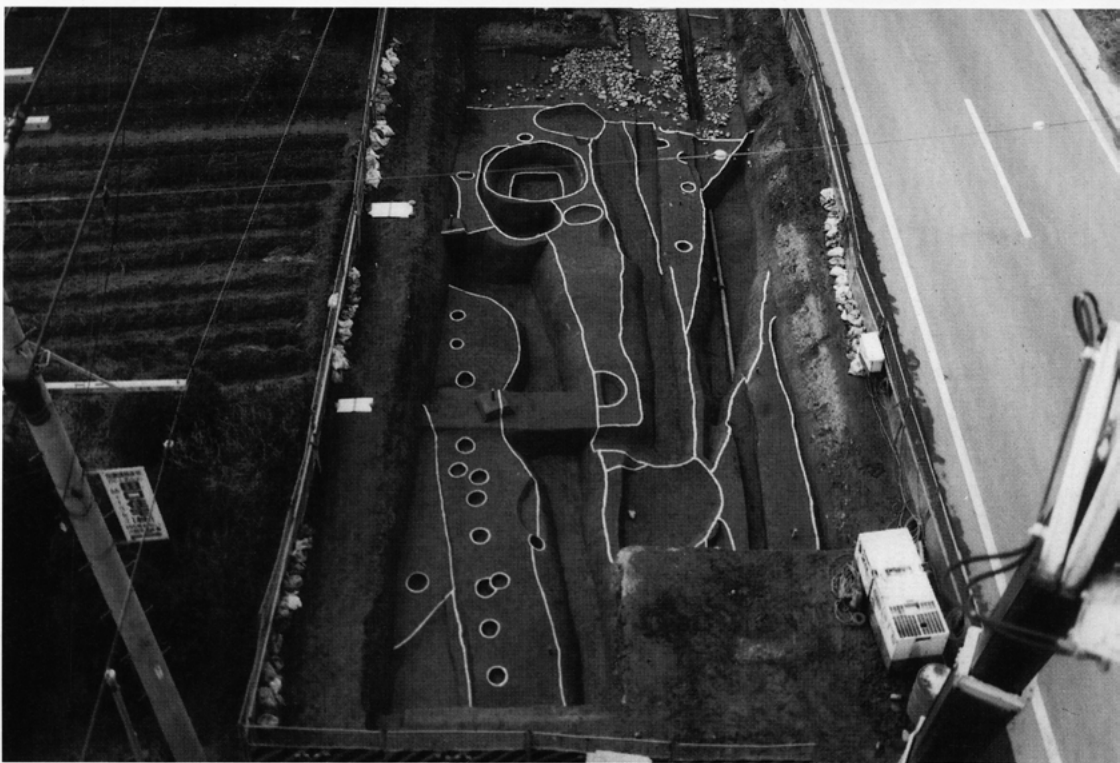
3 SX1501遺物出土状況
(東から)



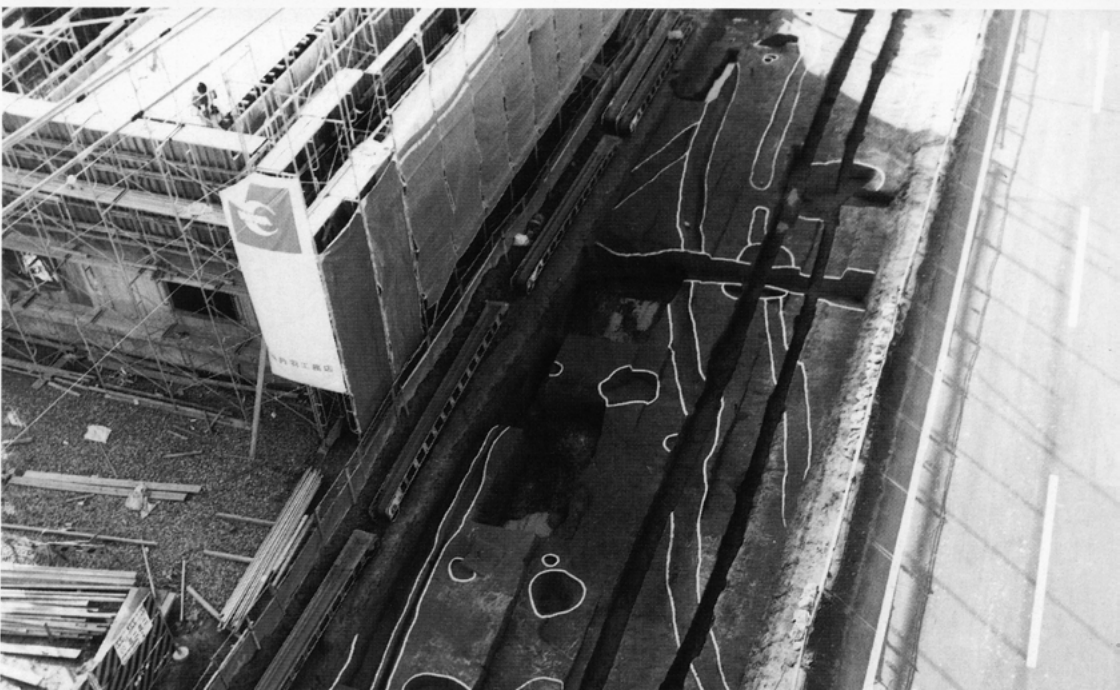
1 SB01・02
(西から)



2 SD26
(東から)



3 SD27・28
(東から)



1 SE04
(北から)



2 SE04
(西から)



3 SE04
(西から)



1 SE05
(北から)



2 SE03
(南から)



3 SE06
(北から)



1 63A区
(東から)



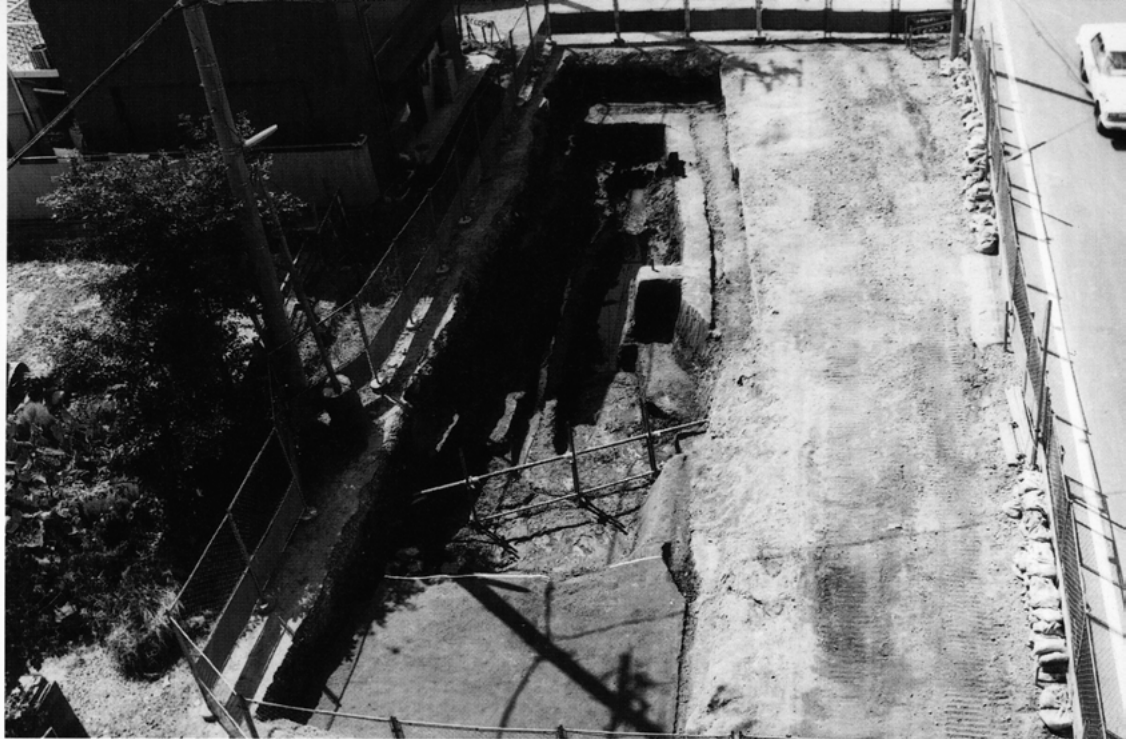
2 SD01
(西から)



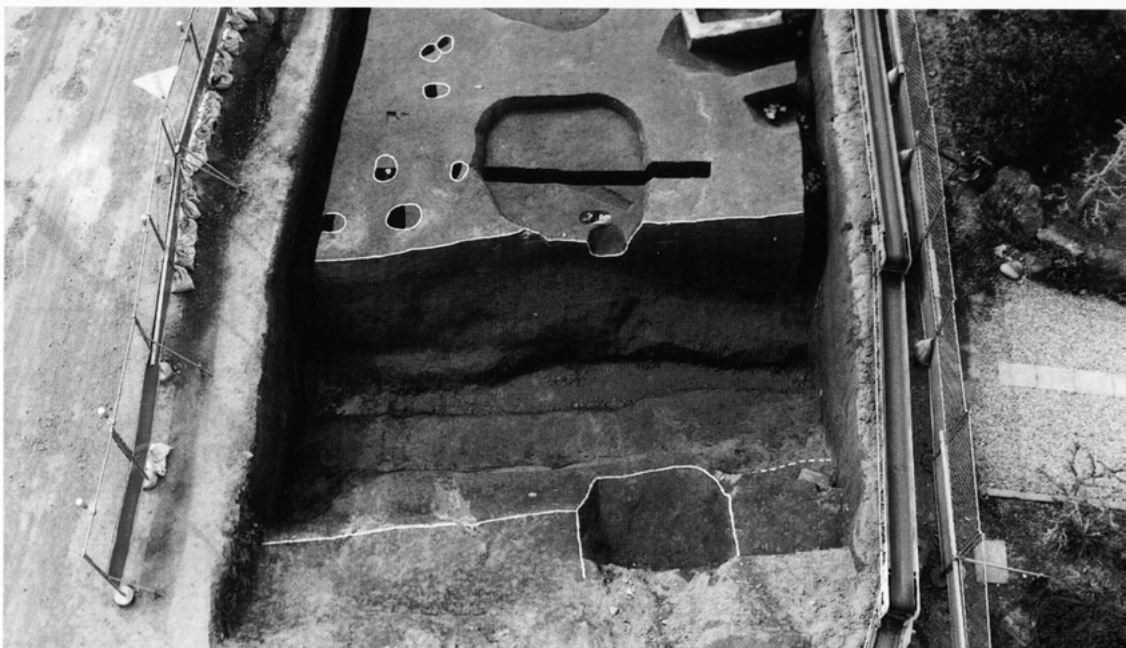
3 SD01断面
(北から)



1 SD02
(東から)



2 SD03
(東から)



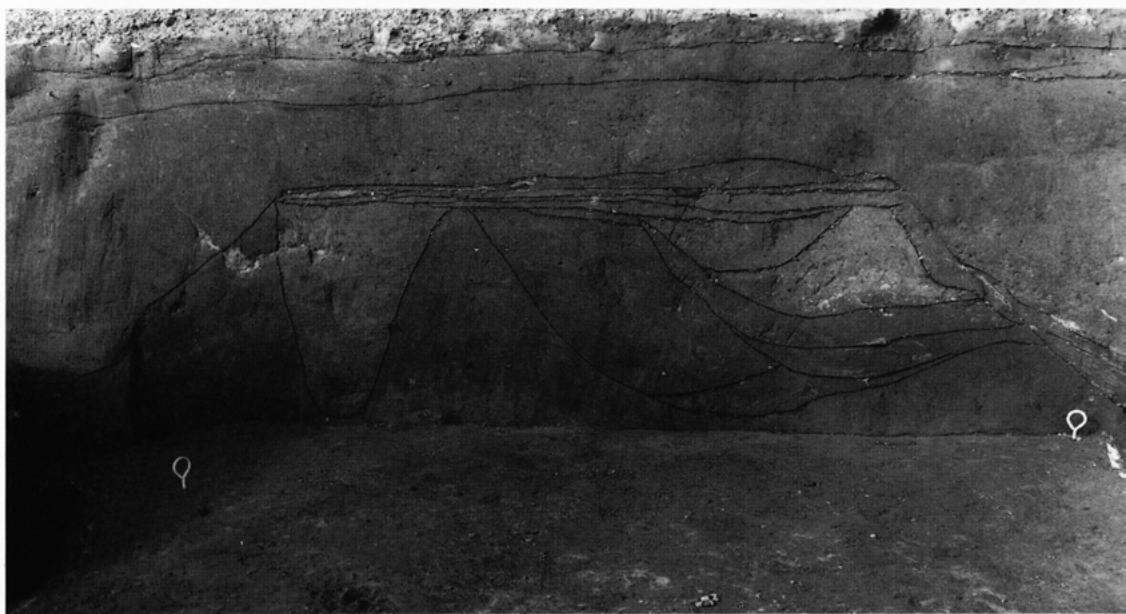
3 SD03断面
(北から)



1 62A区全景
(西から)



2 土橋断面
(南から)



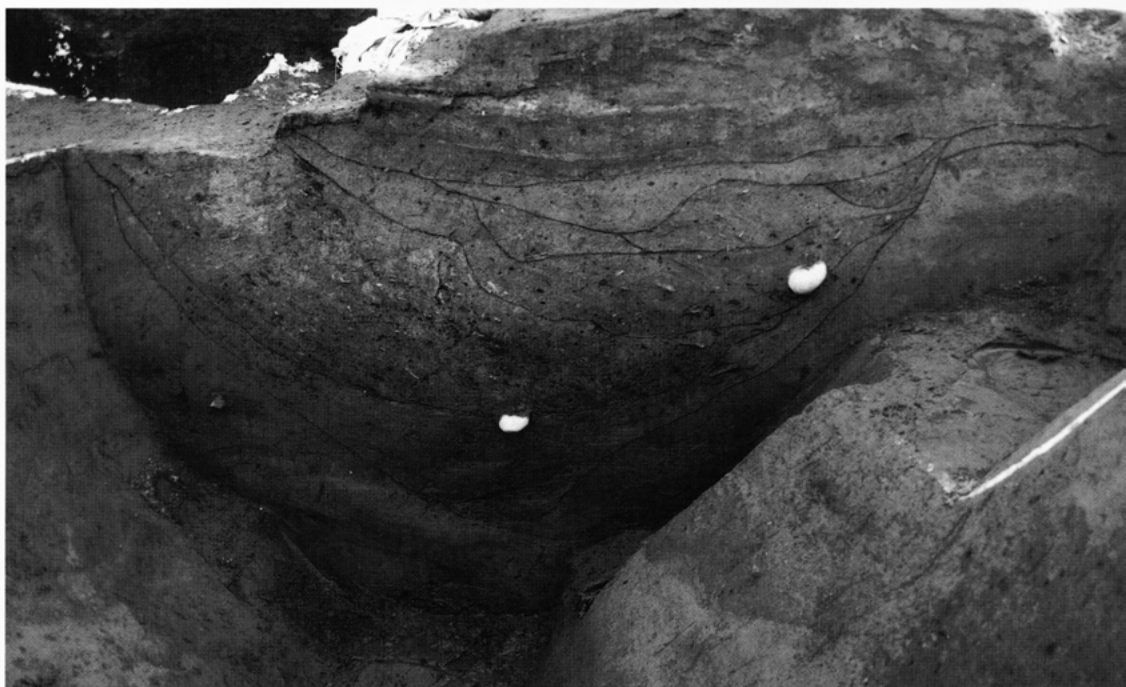
3 89A・B区全景
(上から)



1 SD06
(南から)



2 SD06断面
(北から)



3 SD07
(西から)



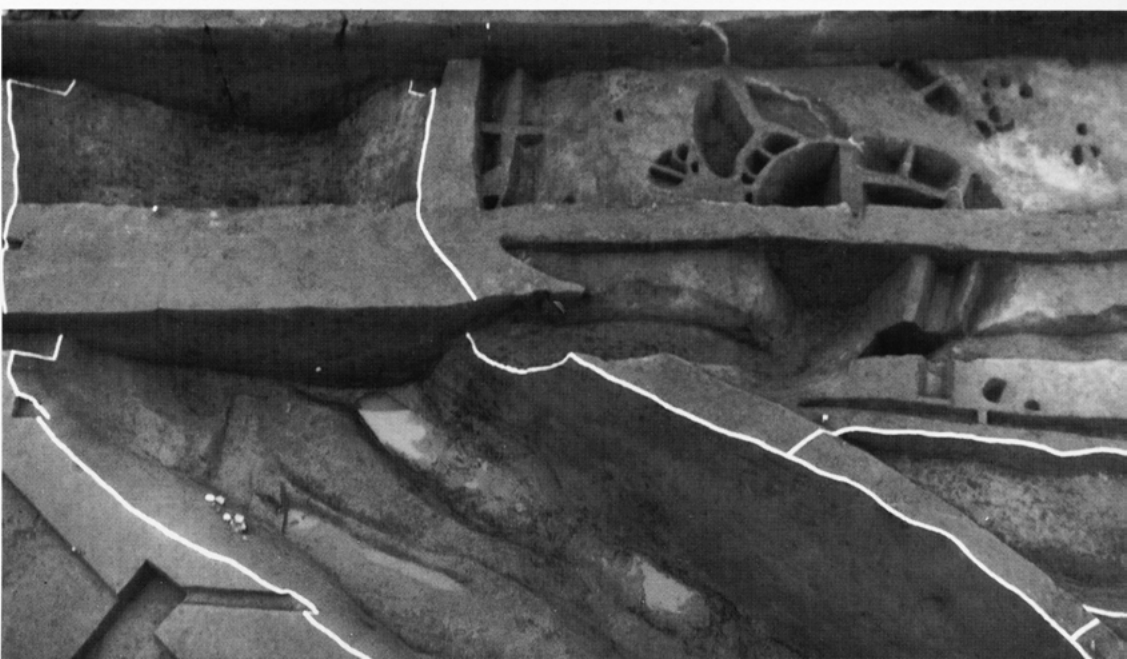
1 SD08
(南から)



2 SD09
(西から)



3 SD10
(北から)



1 SD03遺物出土状態
(獅子頭、西から)



2 SD03遺物出土状態
(壺・皿、西から)



3 SD03遺物出土状態
(土師質皿、東から)



1 SD04遺物出土状態
(竹籠、北から)



2 SD05遺物出土状態
(西から)



3 SD05遺物出土状態
(南から)



1 SD05遺物出土状態
(南から)



2 SD06遺物出土状態
(東から)



3 SK03遺物出土状態
(北から)





132



95



135



83



89



86-87



88



113



112



108



115



114



109



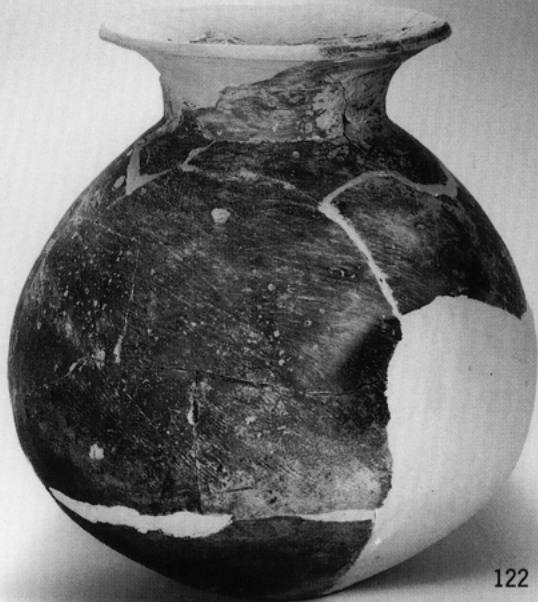
110



128



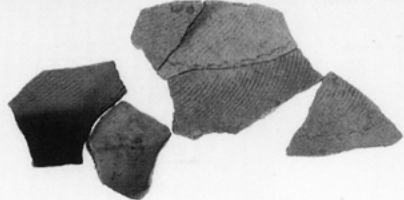
117

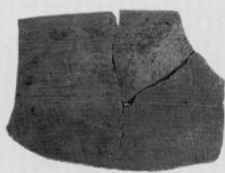


122



124





305



308



312



313



311



299



325



340



327



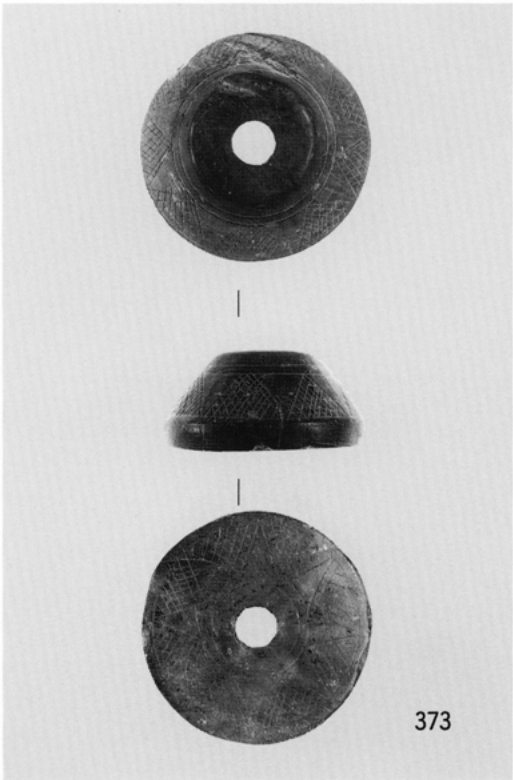
339



332(1 : 4)



344(1 : 4)





398



401



408



413

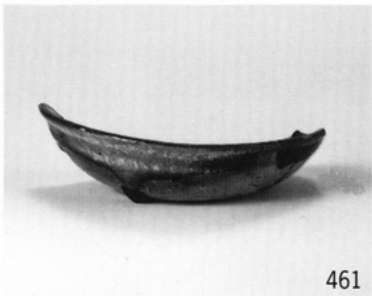


415

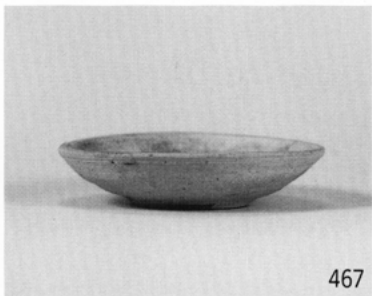


416

VI 期の遺物(1)



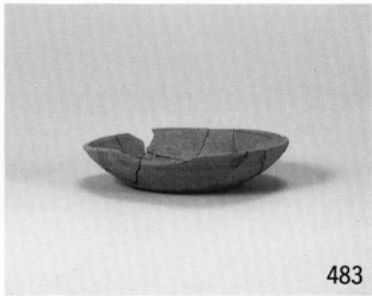
461



467



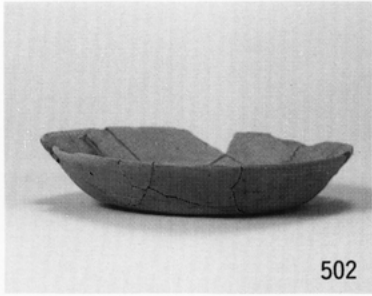
471



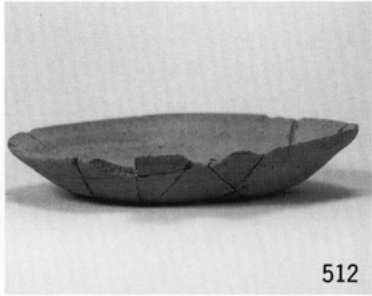
483



485



502



512



(SD03出土)



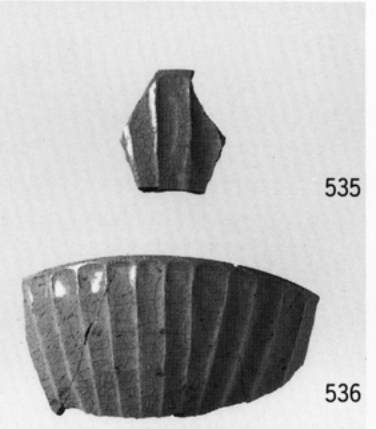
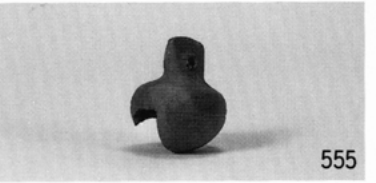
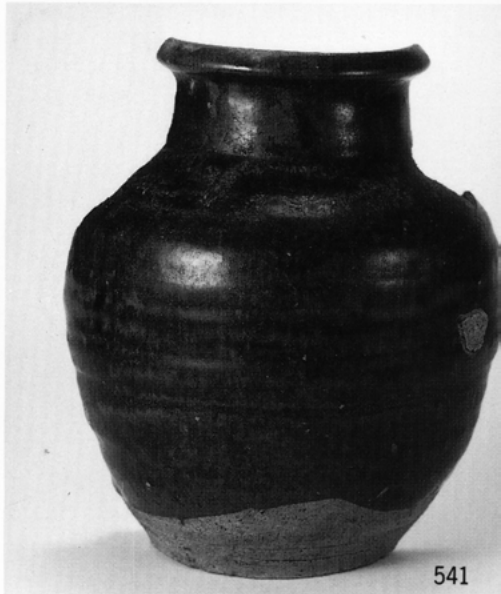
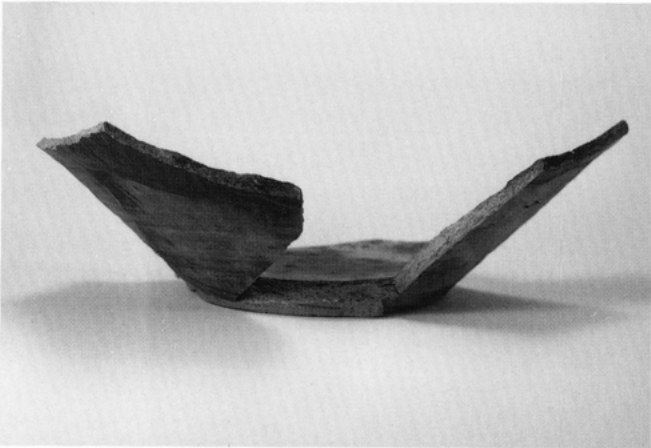
531

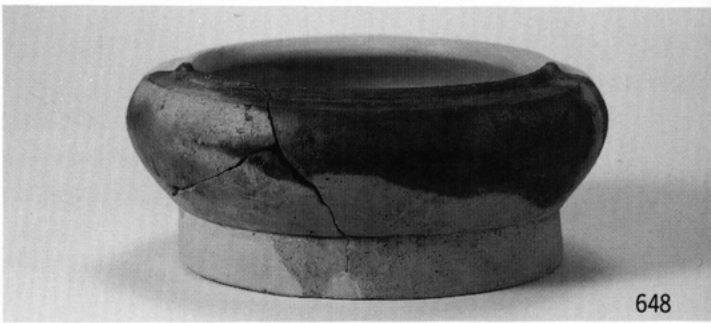
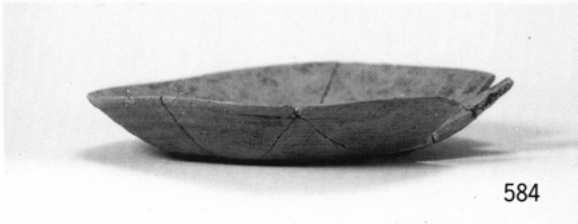


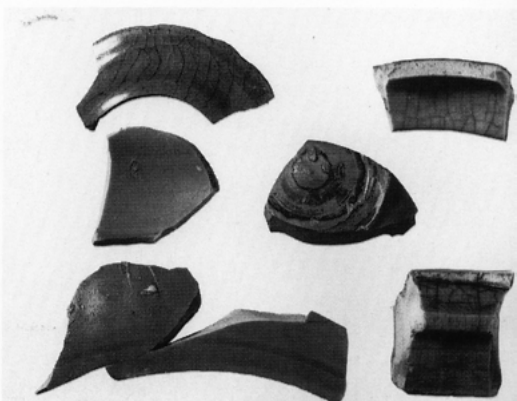
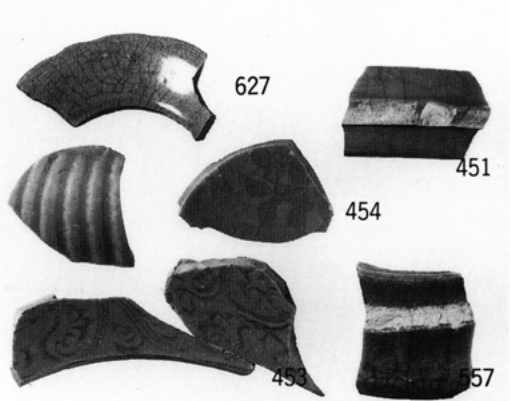
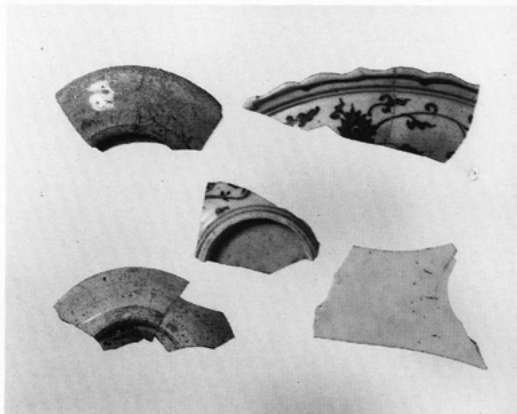
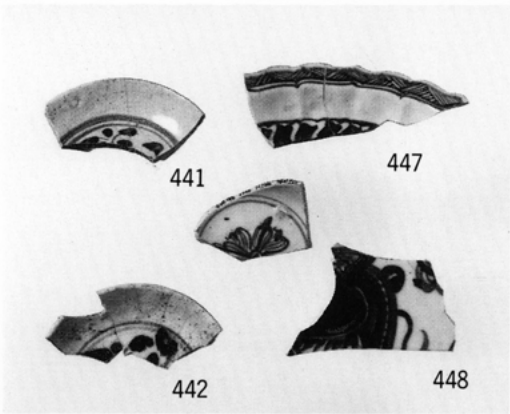
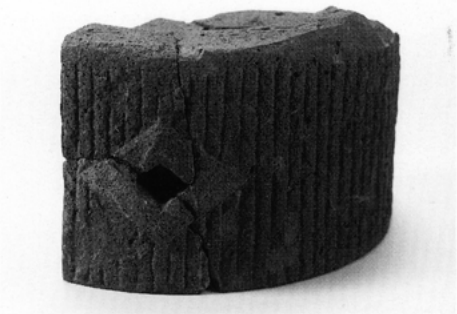
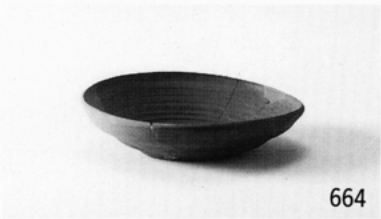
529



533









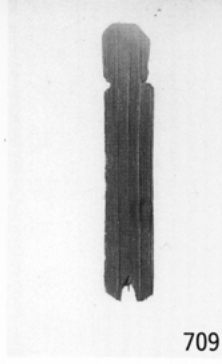
706



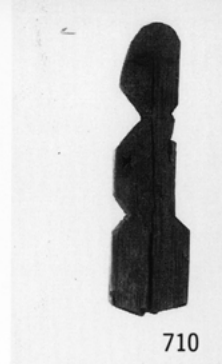
708



711



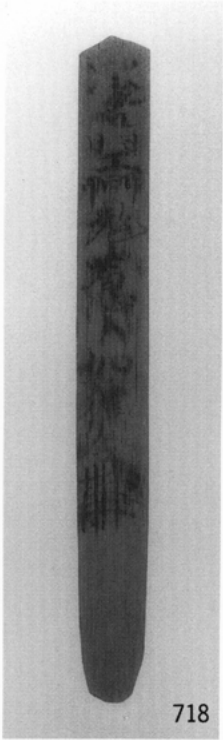
709



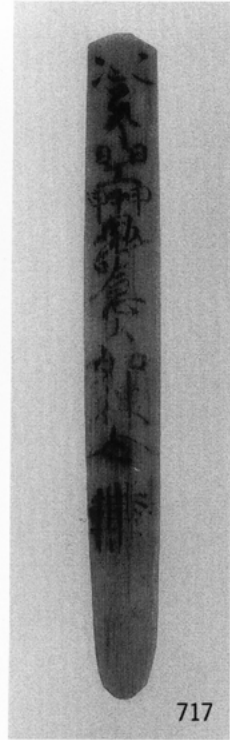
710



723



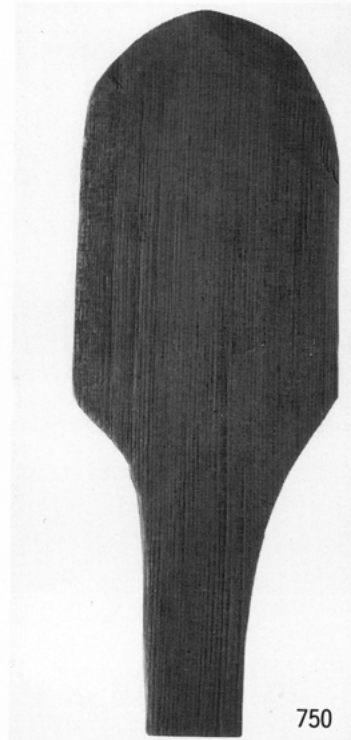
718



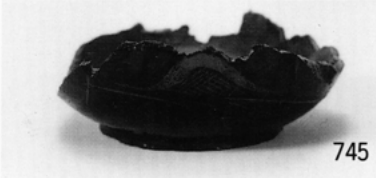
717



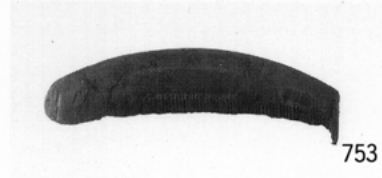
724



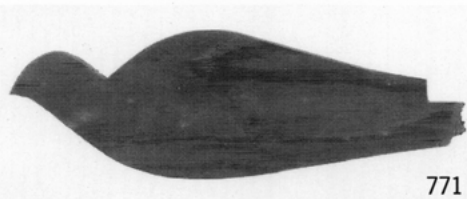
750



745



753



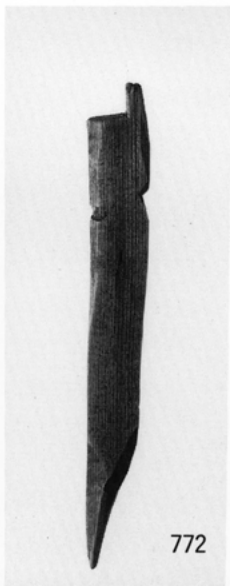
771



744

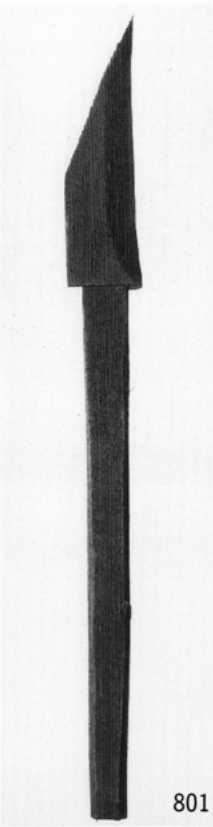
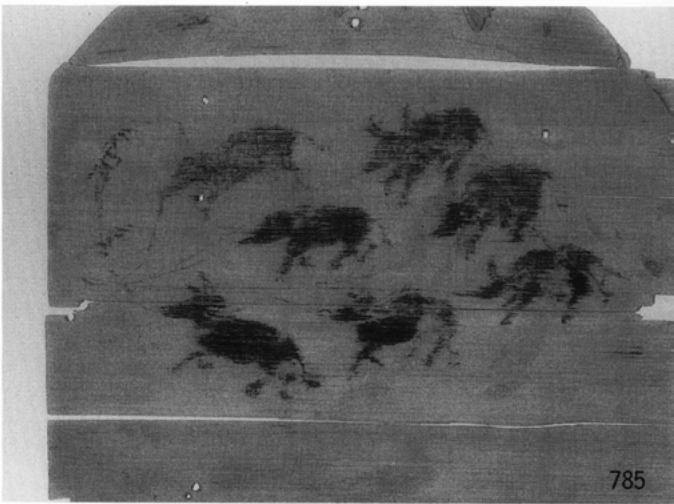
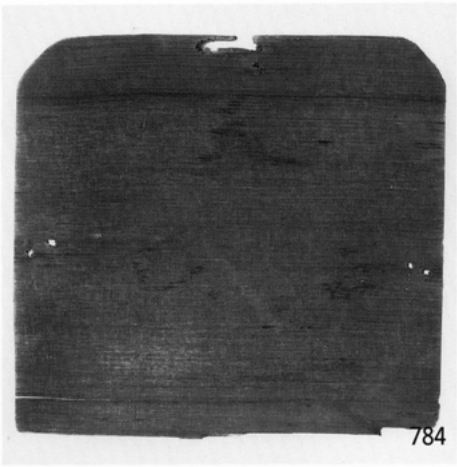
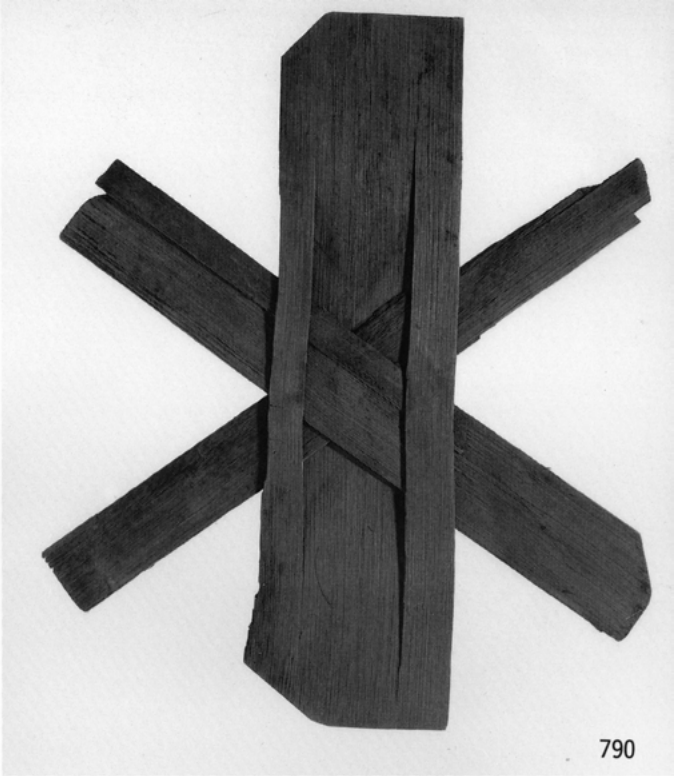
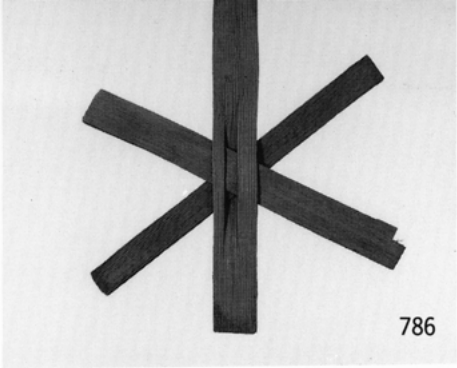


772



777

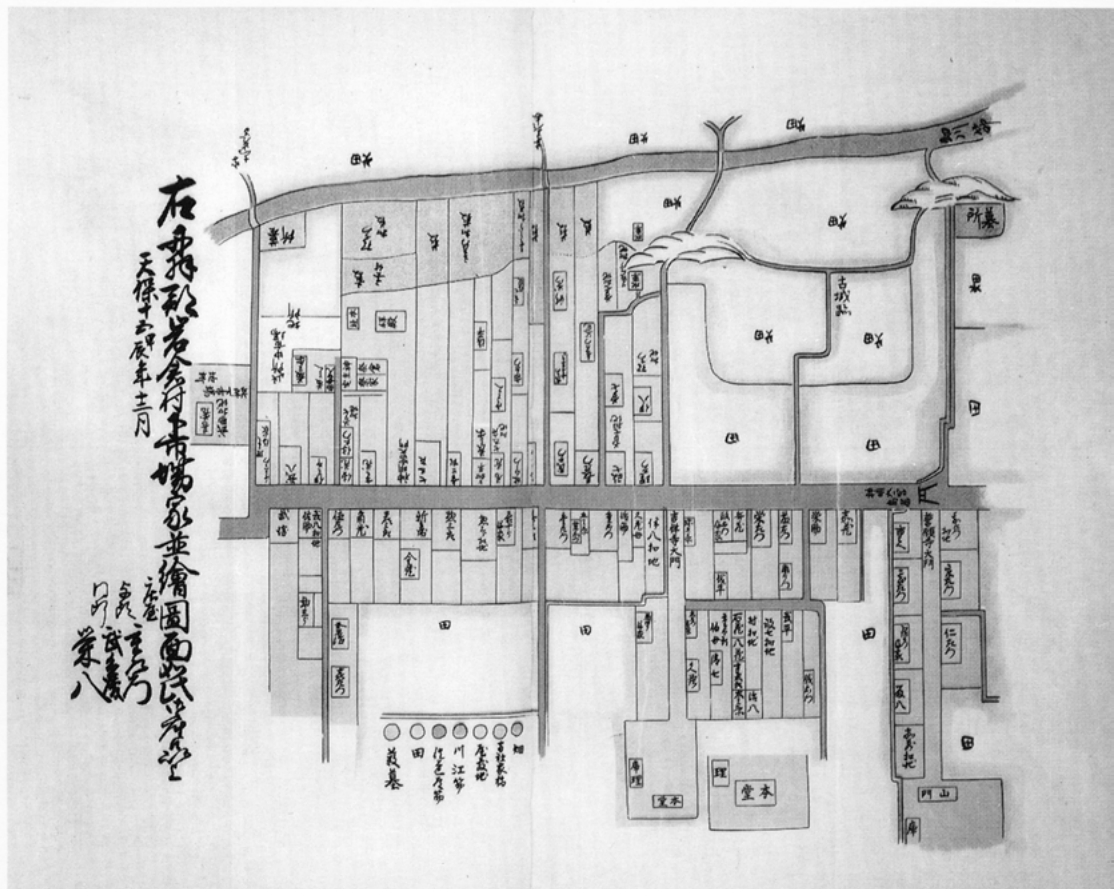




図版37 岩倉城跡関係絵図

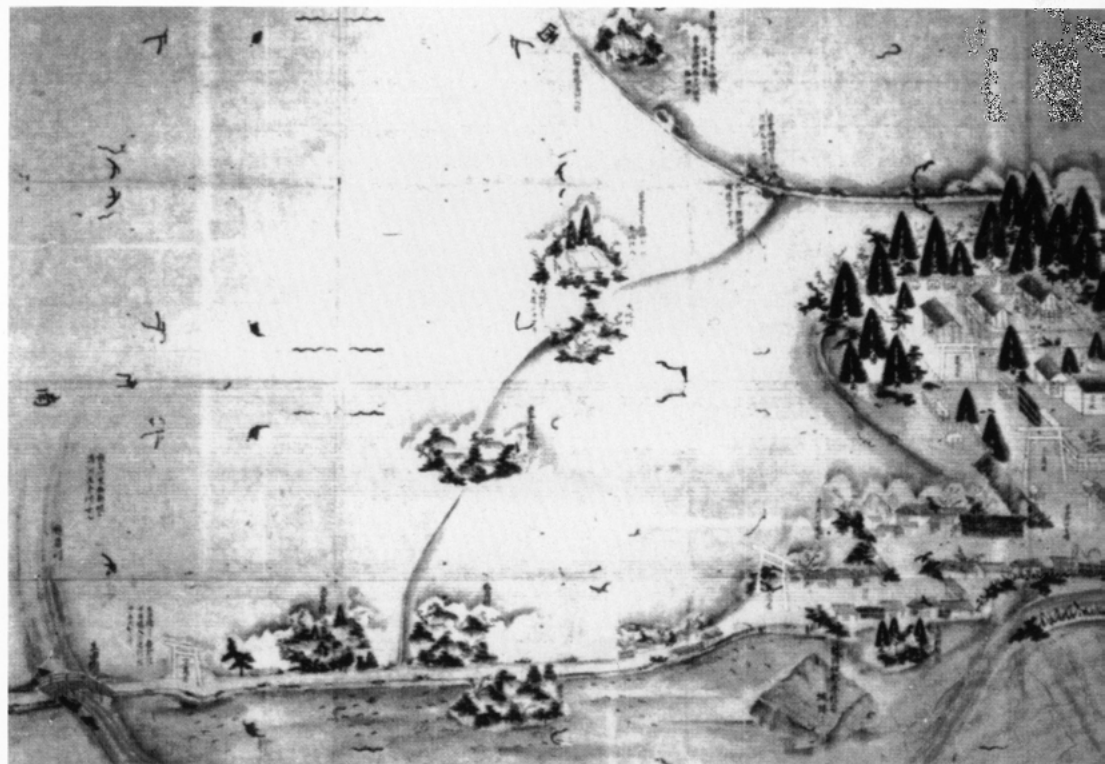


神明太一宮鳥瞰図 1792年（『岩倉市史 資料1』より）

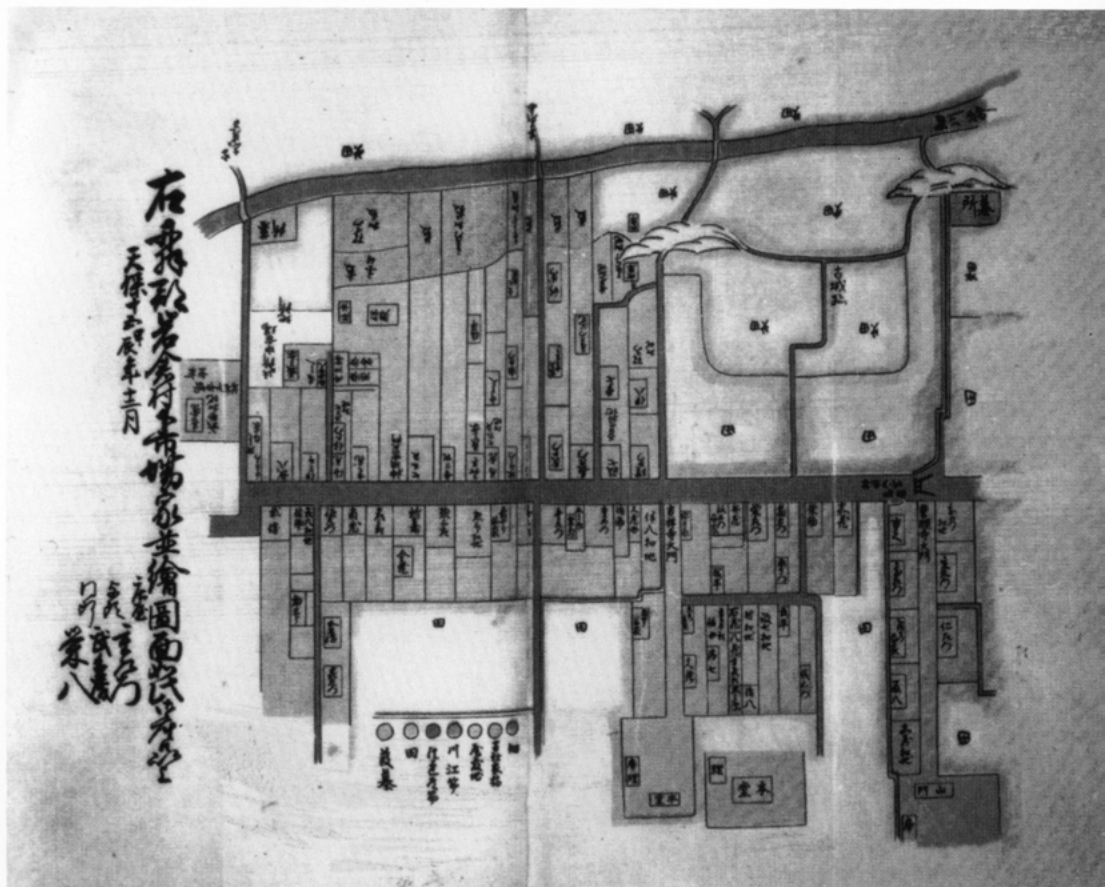


村木屋敷絵図 1844年（『岩倉市史 資料1』より）

図版37 岩倉城跡関係絵図



神明太一宮鳥瞰図 1792年（『岩倉市史 資料1』より）



村村屋敷絵図 1844年（『岩倉市史 資料1』より）

(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第38集

岩 倉 城 遺 跡

1992年3月31日

編集・発行 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 日本印刷株式会社
